

---

# 魔法少女リリカルなのは ANGEL'S OF DARKNESS

エクセル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ANGEL'S OF DARKNESS

### 【Nコード】

N6860W

### 【作者名】

エクセル

### 【あらすじ】

第二次P・T事件から半年あまり再びミッドを救った機動六課の隊員達は、元の部隊に戻り活躍していた。

そんなある日の夜、管理外世界にいたエクセルに新たな敵が襲うそれが始まりだとも知らずに

## プロローグ

第二次P・T事件から半年あまり  
再びミッドを救った機動六課の隊員達は、元の部隊に戻り活躍して  
いた。

そんなある日の夜、管理外世界にいたエクセルに新たな敵が襲う  
それが本当の始まりだとも知らずに

運命にぶつかったとき、信じるのは自分が、それとも仲間との絆か  
見つめよう・・・世界の命運を

狭間の世界で、はじまりの日を・・・

さあ、扉を開けよう

真実という名の扉を・・・

開けるのは・・・あなただ

衝撃の展開にご期待ください

## プロローグ（後書き）

全てが懐かしい

なぜ、俺はここにいる

あいつは俺を殺した

憎いな・・・

## プロローグ？（前書き）

第二次P・T事件から半年

ミッドチルダを救った機動六課は解散

執務官、次元航行部隊に復帰したエクセル・アーシュライトは現在  
管理外世界にいた。

## プロローグ？

―第118 管理外世界―

文化レベル B

魔法文化なし

なのは達の世界と同等と思ってくれていい。

俺は、エクセル・アーシユライトはその世界にいた。

現在いる場所のは都市。

詳しく説明すると、都心部の酒屋にいた。

エクセル「……うまいな、ここの酒は」

黒い執務官服に身を包んだエクセルは、グラスを置いた。

中身は酒だが、そんなに酔うほどではない。

店員「お客さん、お仕事はなにを？公務員ですか？」

エクセル「ええ……そんな所です。」

魔法文化のない世界で、魔導士と言っても笑われるだけだ。

すると、エクセルの隣に若い青年が立った。

ソラ「失礼します、アーシュライト執務官」

この、いかにも青年ですと言ってくれという顔の名前は、ソラ・カミナ。

年齢は17歳。もちろん立派な青年だ

透き通る青い瞳とこの顔で自分と同年と言ったら誰もが疑うだろう。

2ヶ月前から俺の補佐官として配属された

エクセル「来たかソラ。マスター、こいつにアルコールなしのカクテルを…」

ソラがエクセルの隣に座り、店員から出されたグラスを見た。

ソラ「執務官…」

エクセル「アルコールはなしと言ったる。安心しろ」

ソラがグラスを取って、赤いカクテルを飲み干す

ソラ「……エドが目標を見つけたそうです。」

エクセル「……了解。マスター、お金はここに」

テーブルにこの世界のお金を置く

店員「お仕事ですか？目標って言ってましたけど」

エクセル「・・・ええ、なんせ“化け物”ですから」

店員は怖くなったのか、ブルツと震えた。

ー公園ー

閉鎖領域に囲まれた空間にそいつはいた

黒い獣だ。人の二人分ほどだ

それに立ち向かう青年

エドワード・ミナ。通称エド

量産された魔導杖を構えた熱血漢を漂わせる青年が、堂々と黒い野獣の前に立った。

エド「俺様が相手だ！！」

相手の赤い目が、エドの目を見た。

エクセル「待て、エド・・・！！」

閉鎖領域に入って、エドの後ろに降り立つエクセルとソラ



エド「待ちませんよ!!」

エドが駆けた。相手に突っ込みながら、杖から魔力弾を撃つ

黒い獣「グルルルル!!」

敵が吠えた。同時に、黒い小さな矢がエドに放たれた。

エド「遅い!!」

ジャンプして、黒い獣の背中に乗った。

魔導杖を獣の頭に、向ける

エド「くたばりやがれ!!」

魔力弾を放とうとした、がその前に獣が動いた。

黒い獣「グオオオオ!!」

獣が暴れ、エドが落ちた。

エド「うおっ!!」

エドが倒れると、黒い獣がエドに牙を向けた。

エド「うわああ!!」

すると、エドへ飛び掛かろうとした獣の体を白い矢が、いくつも貫い

た。

黒い獣「グルルルアアアア!!」

黒い獣が白い矢が飛んできた方へ向いた。

エクセル「お前の相手は俺だ……」

執務官風な黒いバリアジャケットについた白いマントが風で揺れた。

エクセルの執務官時のバリアジャケットだ

黒い獣がエドからエクセルに標的を変えて、突進してきた。

エクセル「離れてろ……」

ソラがエクセルから離れる。黒い獣がエクセルに飛び掛かってきた

エクセルは懐にあった剣に手をかける。

黒い獣が、エクセルに触れようとした瞬間

エクセルの剣が抜かれ、獣の顔から胴体を両断した。

両断された獣の胴体は、エクセルの後ろに落ちる。

エクセルは剣。自分のデバイスであるブランド・ティータを鞘に納めた。

エクセル「ソラ、処理を頼む。」

ソラ「了解！」

エクセルがエドに近寄り、手を差し伸べた。

エド「すみません執務官。またやっつけてしまいました」

エクセル「その癖をどうにかしろ。それでも俺の部下か」

エクセルは呆れたように手を掴んだエドを引っ張り、立ち上がらせる。

この短髪で、俺より4センチ高い身長175はあるエドは、突撃思考が絶えないのだ。

逆にソラは、自分と同じ身長でスレンダーで、髪は普通で冷静沈着だが自分が危機に陥ると、自分でも厄介になる男だ。

この二人、俺の補佐官なのにまだまだヒヨツ子だ

エクセル「ソラ、処理は終わったか？」

ソラ「はい。2分後に転送ポートで、回収班が来ます」

エクセル「そうか。じゃあ、それが終わったら…3人でこの世界の飯でも食い行くか」

そう言うと、二人の顔が明るくなった。

エクセル「だが、回収班が来るまで警戒は怠るな」

二人「了解!!」

―時空管理局―

あれから2日が経ち、管理局に戻ってきたエクセル達3人。

????「あつ……………」

エクセル達の目の前に、金髪の女性と鉢合わせした。

女性の服装は執務官服

エクセル達3人と女性が互いに敬礼した。

エクセル「じゃあ後で、俺の部屋だソラ、エド。」

ソラとエドが、女性の横を通り過ぎ角を曲がっていった。

????「……………」

エクセル「……………」

????「もう、いいんじゃないかな?」

エクセル「そうだな…周りに誰もいないみたいだし」

二人は近づくなり抱き合った。

????「久しぶり、エクセル……………」

エクセル「ああ、久しぶりフェイト」

お互い離す。この女性の名前は、フェイト・T・ハラオウン。

エクセルと同じ執務官であり、管理局で名前を知らない者はいない。

クロノ提督の義妹であり、機動六課の元メンバーで

エクセルとは恋人関係にある。

執務官に復帰したとはいえ、俺と彼女は3ヶ月も会えなかった。

それほど、今はお互いに忙しいということだ

フェイト「あの二人は補佐官？」

エクセル「そう。突撃思考たっぷりの補佐官達（笑）」

フェイト「フッフ、大きかった方の人は正にそんな様に見えたよ（笑）」

歩きながら、会えなかった3ヶ月間の話をしていた。

エクセル「同期のあの二人を見ると、スバルとティアナに見えてくるよ」

フェイト「六課が最初に出来た時は、まったくその通りだったよ」

―食堂―

フェイト「じゃあ、管理外世界にも……」

エクセル「……ここ最近、出現範囲が広まってる。最初はミッド、第2管理内世界、そして第3、第4と……」

画面に出現範囲を表示する。

フェイト「はやくにも依頼が来てるみたいだけど、今の仕事が手間取ってるみたいで」

エクセルはふつとある女性の名前を口にした。

エクセル「そういえば、なのははどうしてる？」

フェイト「ヴィヴィオの話じゃ、今度休暇を取って、故郷に帰るって……」

なのはの故郷

管理外世界出身の彼女の家は、極東の小さな島国だとか

エクセル「へえ、俺も行ってみたいな」

フェイト「いい所だよ 友達も紹介したいし（笑）」

そんな世間話をしていると、時間になったので

俺達2人は、互いの仕事に戻っていく。

この1週間後、戦いが始まるとは知らずに

プロローグ？（後書き）

ああ

苦しいな

体を切り裂かれたこの苦しみ

ねえ、はやく出してよ

暴りたいのよ

この爪もつづいてるの



第1話 始まりは異世界で（前書き）

この体・・・

この気持ち・・・

本当に快感だわ・・・

あら、出してくれるのね

## 第1話 始まりは異世界で

「無限書庫」

ヴィヴィオ「」

ユーノ「……………」

ヴィヴィオが明るい表情で、出口に向かっていく

ユーノは、ヴィヴィオの荷物になる分厚い本を2冊ほど運んでいる。

ユーノ「ヴィヴィオ、こんな分厚いのを持って行くと……」

ヴィヴィオ「大丈夫ですよ」

出口を出ると、ユーノが持っていた本を大きなバックに入れるヴィヴィオ

ヴィヴィオ「向こうに行ったら、皆さんに見せるものですから」

ユーノ「無限書庫のものを管理外世界に持っていくのは、かなり大きな許可がいるんだけど、その辺を通してのことだよね？」

ユーノが言うと、ヴィヴィオは笑顔になり、こう言った。

ヴィヴィオ「本を貸してくださいって言ったら、許可してくれませんでした」(笑)

ヴィヴィオが許可書を見せた。

ユーノ「恐ろしい笑みだな〜（汗）」

???「ユーノくん ヴィヴィオ〜」

通路の奥から、サイドアップに髪を結んだ女性が走ってきた。

ヴィヴィオ「あっ、ママ〜」

ヴィヴィオが手を振るう。

???「支度出来た？」

ヴィヴィオ「うん いつでも行けるよ〜」

ユーノ「なのは、皆によろしくね」

女性の名前は、高町なのは

管理局の中で、フェイトと並ぶエリートであり有名な教導官でもあり空戦魔導士

魔導士の憧れでもある彼女は、エースオブエースという呼び名で呼ばれるほどだ。

なのは「うん じゃあ、行ってくるねユーノくん（笑）」

ヴィヴィオ「行ってきます、ユーノ先生」

「エクセルの部屋」

ピピピピピ

エクセル「……………」

報告書を書いていたエクセル。

ピピピ

エクセル「よし、報告書は終わりつと……………」

エクセルが椅子から立ち上がると突然、通信画面が開いた。

??? ヤッホー

画面に青い髪の女性が映った。いや、このテンション高い奴を女性と言ったらいいのか区別が出来ない。

エクセル「どうしたスバル？」

スバル・ナカジマ。ミッドチルダ湾岸特別救助隊の防災士長であり、六課のFW陣の一人だった。

スバル あのを、ティアと連絡がつかないんだけどさ、知らない？

エクセル「ティアナか？うーとティアナは確か」

―第2管理世界―

ティアナ「……………なによ」

―エクセルの部屋―

エクセル「忙しいんだよティアナは」

スバル「だよね」

なにが言いたいんだ。

スバル「じゃあ、また連絡するね」

通信画面が閉じた。

エクセル「なんだったんだ？」

すると、今度はドアが開いた。

ソラ「失礼します。執務官、時間ですので・・・」

エクセル「ソラ、悪いな・・・通信が入ってたから行けなかった」

エクセルは、ソラと一緒に部屋を出た。

ソラ「これが、アンノオンの出現予想された世界です」

廊下を歩きながら、ソラから資料を渡された。

あの黒い獣は、アンノオン扱いになっていた。

なにせ、獣の種類は様々で正体不明なのだから

残骸を回収してはみたものの、残骸は3日足らずで自然消滅してしまっただから。

エクセル「管理外世界がやはり多いな・・・ここも・・・うん・・・えっ？」

エクセルは、ある管理外世界のリストを見た。

エクセル「なんで・・・」

エクセルが立ち止まるとソラが近寄って、リストを見た。

ソラ「第97管理外世界……この世界がなにか？」

エクセル「ソラ、俺達が管理外世界から帰ってきたのは？」

資料に目が釘付け状態のエクセルが言った。

ソラ「はい？……1週間は前ですが」

慌てた表情でエクセルは資料をソラに押し付ける

エクセル「ソラ！艦に行つて、出航準備だ！！」

ソラ「えっ！？今ですか！！」

エクセル「ああ、エドを連れて一時間以内に出航準備だ！！」

ソラ「ええ！？」

エクセルは走りだし、急いで自室に戻って行った。

第97管理外世界

現惑星名称「地球」

出現場所「極東島国 日本」

出現率

現段階 80.91%

資料にはそう記されていた。

なのはの世界

管理外世界では行動は厳しく、リミッター制限が激しい。特に今、  
なのはのリミッター制限はAランク扱いなのだ

そんな状態で大群に襲われたら

いくらエースオブエースといえど

エクセルは最悪の場合を考えてしまった

―その頃 海鳴市―

なのは「海風が心地いいね」

ヴィヴィオ「うん」

高町親子は現在、海岸沿いを歩きながら、なのはの実家へ向かって  
いた

なのは「家に着いたら、荷物を置いてお出かけだね」

ヴィヴィオ「皆さんに会えるの楽しみだな」

ウキウキしたヴィヴィオを見たなのはは笑って、立ち止まった。



ヴィヴィオ「なのはママ？」

なのは「この奥が、フェイトママと初めて名前を呼び合った場所だよ（笑）」

なのはが指差す。ヴィヴィオは、その方向を見た。

ヴィヴィオ「そうなんだ」

なのは「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そっか。もう10何年も前になっちゃうんだ

なのはもその方向を向いた。

この場所で、フェイトちゃんと名前を呼び合って、別れて……あの頃から、変わってないな

懐かしく感じた場所は、久しぶり。なのははそう思いながら、ヴィヴィオとまた歩き出した。

その光景を遥か海の彼方で見つめていた黒い人影は

「見つけた」

ニヤリと笑った人影は、霧のように消え去った。

―高町家―

ガラガラ

なのは「ただいま」

なのはが入ると、中から

????「なのはー!!」

ヒュンヒュンヒュン!!

なのはに向かって回転した何かが飛んできた。

なのは「ふえっ!?!」

なのはは、咄嗟にしゃがんで避ける。

カランカラン!!

飛んできたものは、地面を跳ねて地面を転がった。

それは……………

なのは「木刀……………?」

転がったのは、木刀だった。

なのはは、家の中を見た。そこには

???「遅いわよ、なのは!」

短髪の女性が、なのはに怒鳴った。

その女性の後ろにもう一人、ロングヘアの女性がいた。

なのはは、その2人を見て

なのは「アリサちゃん!!すずかちゃん!!」

その2人は、なのはの親友であるアリサ・バニングスと月村すずかだった。

なのはが靴を脱いで、アリサ達に駆け寄った。

なのは「久しぶり〜!!元気だった!!」

アリサ「アンタね〜なんで……………なんで連絡しないのよ〜!!」

アリサがなのはの胸ぐらを掴んでぐらぐら揺らす。

すずか「アリサちゃん、落ち着いて!？」

なのは「ふえふえ〜〜」

なのはは既に、目を回し、持っていたバックを床に落としていた。

―五分後―

なのは「もう〜お姉ちゃん、余計なことしないでよ〜」

みゆき「私はてっきり、アリサちゃん達は知ってるものかと思ったんだよ〜」

アリサ達がここにいたのは、なのはの姉であるみゆきが2人に知らせたからであった。

前に帰ってきた時、2人を呼ばなかったことにアリサは怒っていたのだ。

すずか「ヴィヴィオちゃん、この本って異世界の歴史書なの？」

すずかが、ヴィヴィオの持ってきた本を持つ

ヴィヴィオ「はい。ミッドチルダだけじゃなくて、管理世界全部の歴史が載ってるんです」

アリサ「でも……………」

アリスがページをめくっていく。

アリス「私達、向こうの文字は・・・ねえ（汗）」

ヴィヴィオ「あつ、大丈夫ですよ（笑）」

アリス・すずか「えっ？」

すつとんきよな返事をする2人がヴィヴィオを見る。

すると、ヴィヴィオがなのはからレイジングハートを借りてきて

ヴィヴィオ「レイジングハート、翻訳文にして（笑）」

レイジングハート《はい。少々お待ちを……………》

レイジングハートが本をスキャンした。

アリス「毎度毎度思っけどさ、この・・・レイジングハートだっけ？」

アリスがレイジングハートを指差す。

なのは「うん。」

すずか「水晶なのに凄いわよね。小学生の時なんか、ただの水晶で首からぶら下げてたのに、今じゃあふわふわ羽生えて浮いてるし…」

なのは「にやはは（笑）あれから、色々な機能入れちゃったから」

「すずか「壊れないの？」」

「なのは「月に一度、整備してもらってるから平気だよ（笑）」

「レイジングハート《その通りです》」

「レイジングハートが答えた。」

すると、アリサとすずかの前に翻訳文した文面が表示される。

「アリサ「おお〜！」」

「すずか「わかりやすい……………」」

その後、なのは、アリサ、すずか、ヴィヴィオはアリサの家に向かった。

ーアリサの家ー

庭でお茶をしながら、お互いあれから何があったのかを話していた。

「アリサ「すずかだったら、五人に告白されたのに、全部断ったのよ〜」

「すずか「ア、アリサちゃん！？／＼／＼／＼／＼」

「すずかは頬を赤くした。」

アリサ「なによ〜あんな男達興味ないって言ったのは誰よ〜」

すずか「そんな事言ってるよ〜／＼／＼／＼」

手を振りながら、言っていないという仕草をするすずか。

ヴィヴィオ「だったら、なのはママも負けてないよね〜」

ヴィヴィオの言葉に、アリサ達が反応した。特にアリサの反応は目にも止まらぬものだった

アリサ「なになにヴィヴィオ!?!なのはが何!?!」

ヴィヴィオ「それは〜」

なのは「なななな、なんでもないよ〜!!あ、あはははは／＼／＼／＼」

顔を赤らめるなのはにすずかは、なんで赤くなってるの?と聞く

代わりにヴィヴィオが写真を見せる。

ヴィヴィオ「この男の人とママはキスしたんだよ〜」

ヴィヴィオが写真に写ったエクセルを指差すと、2人は

アリサ・すずか「キス〜!!／＼／＼／＼」

なのは「あははは(汗)」





すると、すずかがある写真を見つけた。

すずか「ねえ、この写真・・・なんでみんなボロボロなの？」

すずかが見たのは、エクセルをはじめ主力メンバーがバリアジャケットを装着してボロボロになった状態だった

なのは「これはね、解散する時にエクセルくん一人VS私達での全力全開バトル。」

アリサは写真を見て、

アリサ「一人ってかなりつらいわよね〜全員ボロボロってのはどういう事よ?。」

なのは「あはは(汗)ちょっと勢いがありすぎちゃってね」

アリサ「ふ〜ん・・・あれ?このフェイトに似てる女の子は誰?。」

アリサがヴィヴィオの隣にいたフェイト似の女の子を指差した。

なのは「あっ、その子はフェイトちゃんのお姉さんだよ」

アリサ& amp; すずか「へえ〜お姉さんか・・・ええー!?!?!?。」

アリサとすずかの驚きに、なのははビクツとした

アリサ「なっ、なんでこんな小さな子が!!?」

アリサが聞くと、なのはは一度躊躇したが洗いざらい2人に話した。

アリシアのこと、フェイトのことも全部

ー10分後ー

ヴィヴィオ「なのはママ、そろそろ、ストライクアーツの練習したいよ」

ヴィヴィオが立ち上がる。

なのは「ああ、そうだね。じゃあ庭でアリサちゃん達に見てもらおうか」

ヴィヴィオ「うん」

全員が庭へ移動すると、アリサがなのはに尋ねた。

アリサ「ストライクアーツってなんなの?」

なのは「こっちで言うところと格闘技だね。」

すずか「ヴィヴィオちゃんが格闘技?ちょっと意外かも」

なのは「それでも中々やるんだよ〜うちの娘は」

エッヘンっ と胸を張るなのは

レイジングハート《準備が出来たようです》

ヴィヴィオが練習着に着替えてきた。ヴィヴィオは手には、ウサギのぬいぐるみが握られていた。

なのは「じゃあレイジングハート、仮想敵を2体。」

レイジングハート《はい。では、難易度はBへ設定します》

ヴィヴィオの周りに、黒い格好した人間が現れる。

すずか「本当に大丈夫？」

心配するすずかが、ヴィヴィオを見た。

ヴィヴィオ「じゃあ行くよ、クリス！服装は練習着のままです」

握られていたウサギのぬいぐるみが、ビシッと手を上げた。

アリサとすずかはビックリするが、この後の出来事にさらに驚くこととなる

ヴィヴィオがぬいぐるみを掲げる。

ヴィヴィオ「セイグリッド・ハート、セーット アップ！！」

ヴィヴィオの体が煌めいた。体が成長していき髪はサイドアップ、身長はなのはを越し服装は練習着のまま

この姿は、ゆりかごで見せたヴィヴィオの聖王の姿だ

自称 聖王モード

またの名を大人モードである。

ヴィヴィオ「……………んッ！」

グローブを再度確認し、身構えるヴィヴィオ

アリサ「ヴィ……ヴィヴィオが」

すずか「成長しちゃった……」

なのは「あれがヴィヴィオの特殊な体質 フェイトちゃんなんか腰抜かしちゃったけどね（笑）」

苦笑する2人。

ヴィヴィオ「よし……！」

ヴィヴィオがステップをとりながら、仮想敵へ仕掛けた。

その速さは、スバルやノーヴェでも驚くほどだ。

ドン！

ヴィヴィオの拳が仮想敵の胴体に食い込む

ヴィヴィオが仮想敵へさらに拳を叩きつけ、横から仕掛けてきた2体の内の一体へ突っ込んで回し蹴りする

そして一体の敵の攻撃を流しながら魔力のこもった一撃を食らわせる。これが彼女の得意スタイル、カウンターヒッターだ

《COMPLETE》

レイジングハートが言うと、アリサとすずかがパチパチと拍手した。

アリサ「ヴィヴィオやるう〜」

ヴィヴィオ「ありがとうございます」

一夜

なのは「遅くまでゴメンね」

あれから、ヴィヴィオの魔法の練習となのはの教え方に驚きを隠せない二人、そして時間はいつの間にか18時を過ぎていた

アリサ「大丈夫よ 車で送って行くかうか？」

なのは「あつ、じゃあお願いしようかな」

すずか「明日はみんなでお買い物しようね（笑）」

ヴィヴィオ「そうですね。あつ、クリスはお留守番かな（笑）」

ヴィヴィオの肩に乗っていたセイグリッド・ハート、愛称クリスは焦った仕草をした

ヴィヴィオ「冗談だよ」

ヴィヴィオが言うと、クリスは良かったという仕草をした。

車に乗り込んだ4人は、談笑しながら家を出ていった。

なのは「レイジングハート……」

なのはは、念話でレイジングハートに声をかけた。

レイジングハート「なんですか？」

なのは「私達は、この世界から離れて暮らしてたけど、故郷に戻って久々に友達と会うと懐かしい感じがする……」

レイジングハート「小学生の時ですか？」

なのは「うん。今でもたまに思うよ、魔導士を続けなかったらどうなってたかなって」

レイジングハート』きつと、後悔してたと思います。』

なのは『後悔？』

レイジングハート』はい。あの雪の日の出来事も含め、ヴィヴィオ達との出会い・・・これがもし全て、フェイトさんになっていたら・・・マスターはきつと後悔してました』

もし逆にフェイトが、あの雪の日の出来事で負傷して、その痛みをずっと引きずって

ヴィヴィオや六課メンバーとの出会いが全て無かったことになる。

なのは『そうだね・・・今の私がいるから、ヴィヴィオやみんながいるんだよね。ありがとう、レイジングハート』

レイジングハート』いえいえ・・・』

なのは「ねえ、ちよつと遠回りしない？」

なのはがアリサに言った。

アリサ「遠回りって、どこを通って？」

なのは「みんなで通った学校」

すずか「うん、いいかもね」

たまにはねつと、すずかが言つとアリサはため息をつき

アリサ「そうよ、たまには思い出の場所に行くのもね。よし、じゃ

あここを曲がつーっ！！！」

アリサが急にハンドルをきった。車はガードレールにぶつかりそうになったが、間一髪免れた。

すずかは頭を抱えながら、起き上がった。

すずか「アリサちゃん？急にどうしたの！？」

アリサ「へっ、変な人がいきなり出てきたから、おもいつきりハンドルを…」

なのは「変な人？」

アリサが後ろを指さした。

確かに、ロングヘアで変な服装をした女性が道路の真ん中にいた。

幸い、道路に車もいなかったからいいものの

アリサ「ちょっとアンタ！危ないでしょう！！」

アリサが車から降りて、文句を言いながらその女性に近づいていく

すずかやなのはとヴィヴィオも車から降りた。

なのは「あれ・・・？」

なのはは、周りを見て違和感を感じた。



ヴィヴィオ「なのはママ、どうしたの？」

なのは「うん、人が居なすぎるって」

そう言われたヴィヴィオも辺りを見渡した。確かに、人は愚か、車すら走っていない。

アリサ「ちょっとアンタ聞ってるの!？」

すずか「ちよつとアリサちゃん!」

アリサを止めようと、すずかがアリサの後ろに立った。

すると、女性がアリサ達へ振り返った。

?????「.....」

なのはとヴィヴィオが少しだけ明かりに照らされた女性の顔を見た瞬間、体と口が反応しアリサ達に警告を発した。

なのは「二人とも、離れて!!!」

レイジングハート《特定。この場所から1キロ先まで封鎖領域です》

アリサ& amp ;すずか「えっ?」

二人が振り返った。なのはが走る前に、女性の方が素早く動いた。

?????「遅いわ」

女性の両腕がアリサとすずかのみぞに強烈な一撃を与え、二人を気絶させた。

ヴィヴィオ「アリサさん、すずかさん!!」

女性の姿がはつきり見えてきた。光に照らされ、今度はちゃんと服装と顔が見えた。

なのはは、身構えた。

女性の格好は、忘れることが出来ない。

青いスーツに?という番号が印されていた。

なのは「戦闘機人NO.2・・・ドゥーエ」

その女性は、J・S事件の時にたった一人死亡した戦闘機人名前は、ドゥーエ

でも、どういう事なの

彼女は既に死んでいるのに・・・

ドゥーエ「ごきげんよう、高町なのはさん。妹達がお世話になります」

笑いかけてきたドゥーエを見たなのはは、レイジングハートを持つ。

ドゥーエ「動いたら・・・」

ドゥーエが、手に装備していた爪をアリサの首へ向ける

ドゥーエ「この威勢がいい子を殺すわよ」

なのは「ぐっ……目的はなに!!」

ドゥーエ「目的なんかないわ……そうね、あるとしたらそれは……  
貴女の抹殺」

なのはは息を飲んだ。何故自分なのだろうと考えながら、アリサと  
すずかの救出の方法を考えていた。

ドゥーエ「でも、それだけじゃつまらないから、この子達をかけて  
勝負しない？」

楽しんでる……この人は、楽しんでる

ドゥーエ「場所は、学校にしましょうか……この先にある」

ドゥーエが指さす方向を見たなのはは悟った。自分が通っていた小  
学校だ

なのは「………受けてたつわ!!」

返答を聞いたドゥーエは、アリサとすずかを抱え

ドゥーエ「じゃあ、30分後にお会いしましょう」

すると、ドゥーエは黒い霧のようなものに包まれて消えた。

封鎖領域が消え、周りに人や車などが戻っていた。

ヴィヴィオ「なのはママ」

なのは「・・・ヴィヴィオ」

なのはがヴィヴィオの手を引いて、車に乗り込む。

ヴィヴィオ「ママ・・・その・・・気持ちはわかるけど」

ヴィヴィオが話かけるなか、なのはは無言で車を走らせた。学校とは正反対の方向へ

なのは「ヴィヴィオ・・・ママの話をちゃんと聞いてー！ー！ー」

ー学校ー

アリサ「ん・・・ここ・・・って！！きゃああッ・・・！！」

アリサが目覚めるとそこは、学校の屋上だった

しかも、吊されていた。

アリサ「なっ、なっ！・・・なによこれー！ー！ー」

アリサが叫ぶと、隣でも同じく吊されていたすずかも目を覚ました。

すずか「ええ！！なっ、なにー！！？」

二人が吊されているのは、屋上の柵の外である淵。三階なので、ロ  
ープが切れたらただじゃすまない。

ドゥーエ「あら、お目覚め・・・？」

淵の近くに座っていたドゥーエが二人を見下ろす。

アリサ「アンタは！！」

ドゥーエ「はあ、うるさい子ね」

すずか「お願いします！助けてください！！」

すずかがドゥーエに言うと、ドゥーエはニコツと笑い

ドゥーエ「い・や・よ」

ウフフと笑った。

それを聞いたアリサは頭に血がのぼり、ドゥーエへ怒鳴る

アリサ「ふざけんじじゃないわよ！！早く助けなさいよ！！」

アリサが暴れると、吊されていたロープがブラブラ揺れる。

シャキン

ドゥーエは装備していた爪をアリサの顔へ向けた。

アリサ& a m p・すずか「ーッ！！！」

ドゥーエ「いい加減黙らないと、可愛い顔が傷つくわよ……」

アリサはドゥーエを睨んだ。すずかは怯えながら、アリサを見た。

アリサ「わかったわよ……」

すると、ドゥーエは校門の方へ向いた。

ドゥーエ「ーッー来たわね」

ドゥーエの一言に、二人は校門の方を向いた。

暗くてよく見えない。ドゥーエが立ち上がると

ドゥーエ「貴女達の怖いお友達が」

月明かりで、校門の辺りが照らされた。

そこには、なのはが立っていた。

アリサ& a m p・すずか「なのは（ちゃん）！！」

二人の顔が明るくなった。だが、顔を伏せていてよく表情が見えない

ドゥーエ「よく見ておきなさい……あの子の本性を」

ドゥーエが屋上から飛び降り、グラウンドへ膝をついて着地した。

ドゥーエ「よく来たわね」

なのは「……私が勝つたら、二人は返してもらおうわ」

まだ顔を伏せていたなのはの声は恐々しい。

ドゥーエ「ええ、いいわよ」

すると、なのはが顔を上げた。その顔は、今まで誰にも見せたことのない表情だ。

なのは「レイジングハート……」

ドゥーエが身構えた。

なのはがバリアジャケットを装着した。

ドゥーエが先に動いた。なのはへ爪を繰り出す

スン！

刃が風を切り、なのはの顔へ

だが、なのはは首を傾げるだけで爪を避けた。

ドゥーエ「ッ!?!」

驚くドゥーエだが、さらに爪を繰り出す

だが、なのはは避けるだけだった

なのは「今度は……」

なのはの腕にピンクの円が巻き

なのは「デイバイン……バスター」

至近距離での砲撃にドゥーエは防ぐことが出来ず、吹き飛ばされた。

ドオーーン!!!

ドゥーエは、体育館の壁へ叩きつけられ気絶した。

ドゥーエ「……………」

アリサ「やった!!!」

すずか「なのはちゃん!!!」

なのはが二人に向き直り、微笑んだ。

なのは「今降ろすから!」

なのはが一步踏み出した次の瞬間

ドゥーエ「……………」

突如、ドゥーエが立ち上がった。なのはがドゥーエへ振り返った。

なのは「うそ……至近距離でデイバインバスターを受けて、立て



るなんて」

ドゥーエ「まだ・・・足りないわ。私は、誰も・・・コロシテナイ」  
ベキッ！バキッ！

ドゥーエの腕、手、胴体から異形なモノが飛び出した。それは、武器でもあり腐った腕でもある

なのは「ーーーーッ！！」

なのはが後退りした。

ドゥーエ「・・・シニナサイ」

彼女が消えた。いや、次の時には目の前にいたのだ

なのは「なっ!?!」

ドゥーエの腕に付いた刃物が横に振られた。

レイジングハート《しゃがんで下さい!》

レイジングハートの声で、なのははしゃがみ  
その場からはねのけた。

ドゥーエ「オソイオソイオソイ・・・!!」

まただ、またドゥーエの動きが見えなかった。

なのは「速い!!」

なんなの!?!この速さ!!!

なのははレイジングハートを構え、魔力を収束させる。

なのは「シューーッット!!」

魔力弾5発ほど放ち、動きを操作した。

ドゥーエは魔力弾を避け、狙われないように辺りを移動していた。

なのは「……………」

集中して、動きに惑わされず正確に撃ち込む…

魔力を光に乗せて…

なのは「……そこ!!」

ドゥーエを捉えて、瞬速の魔力弾を撃ち込んだ。

ドスツ、ドスツ!!

ドゥーエが弾かれ、宙を舞った。彼女は空中で体制を整え、着地する

ドゥーエ「へエ……コノジョウタイノワタシニアテルナント……

」

声が変わったドゥーエが装備した爪をペロリと舐めた。



なのは「アリサちゃん!!すずかちゃん!!」

なのはが叫ぶが間に合うはずがない。

アリサ&amp;mp・すずか「きゃああっ……!!」

叫び声が響いた。ドゥーエがニヤリと嗤うが

???《ソニック・ムーブ》

閃光が、上空から斜めに走った。地面に誰かが着地した。

なのは「えっ……」

???「どうやら間に合った様だな」

ロープに縛られたアリサとすずかの二人を降ろした。

アリサ「あ、あんたは……」

すずか「写真で見た……」

その人物は、エクセルだ。

エクセル「大丈夫か？」

アリサ「えっ、ええ……」

「良かった」と言ったエクセルは立ち上がり、ドゥーエへブランド・テイータを向ける。

エクセル「時空管理局執務官のエクセル・アーシュライトだ。NO・  
2ドゥーエ、殺人未遂の容疑で逮捕する!!!」

ドゥーエ「タイホダト？ワラワセルナ・・・!!!」

ドゥーエがエクセルへ突っ込み、腕についた刃を振るう。

キンッ！！

ドゥーエ「!？」

ドゥーエは自分の目を疑う。エクセルがブランド・ティータの切っ  
先で受けとめたのだ。

エクセル「その程度か・・・」

ブランド・ティータの形態が変化し大剣へとなる。

ドゥーエが後ろへ跳ね退けると、青いバインドがドゥーエを拘束し  
た。

ドゥーエ「ナッ!？」

エクセルが大剣を振り上げた。

エクセル「ライトザンバー!!!」

エクセルがドゥーエへ大剣を振り下ろし、ドゥーエを高く宙へ飛ば  
した。

ドゥーエ「ガッ!!」

エクセル「なのは、今だ!!」

エクセルがなのはに叫ぶと、なのははレイジングハートを構え

なのは「ダイバインバスター!!」

ピンクの砲撃が放たれ、ドゥーエへ直撃した。

ドゥーエ「ガアア!!」

ドゥーエが地面に落ちた。すると、ドゥーエから黒い影現れ拡散した。

エクセル& amp・なのは「!!!?!」

拡散した黒い影は、黒い鳥型の獣の姿へ変化した。

なのは「あれって・・・」

エクセル「ああ、最近騒がれてるやつらだ・・・」

二人は、建物三階建てを余裕で越えている黒い鳥を見た。

アリサ& amp・すずか「なのは(ちゃん)!!」

アリサとすずかが走ってきた。

なのは「二人とも大丈夫!？」

なのはが二人を見て言った。

すずか「大丈夫だけど・・・」

アリサ「どうするのよアレ!? 気持ち悪いの!」

アリサが黒い鳥を指差した。なのはは「大丈夫」と言った。

なのは「あんなのちよろいよ(笑)」

エクセル「とりあえず、二人には避難をしてもらおう」

なのは「そうだね。でも何処へ？」

すると、エクセルの横に通信画面が表示された。

ソラ 執務官、転送準備完了です

エクセル「了解。」

エクセルはアリサとすずかを見た。

エクセル「二人には、船に避難してもらおう」

なのは「ちょっと待って! 二人を船へ避難させるの!？」

エクセル「そうだけど…結界の外よりマシだろ?」

アリスとすずかの足元に転送陣が現れる。

すずか「二人とも、気をつけて」

アリス「やられたらお仕置きよ!!」

キーン!

二人が転送された。エクセルはなのはへ向き直り

エクセル「さて、終わらせるか(笑)」

なのは「だけど・・・リミッターがあって召喚がー」

エクセルはニコツと笑い、コンソールをいじりボタンを押した。すると、なのはの体が光った

なのは「えっ!リミッター・・・解除!??」

エクセル「クロノ提督から、許可はもらった。ヴィヴィオが連絡をくれたおかげで(笑)」

なのははヴィヴィオに、エクセルがフェイトを呼んでくれとは言ったが、リミッターのことは一言も言っていない。きっと、ヴィヴィオなりの気づかいだろう。

なのは「もう・・・じゃあ、下がってて私が終わらせるから」

エクセルは、小学校から離れて黒い鳥を見つめた。



ソラ データは取っています。

エクセル「ああ・・・」

なのはがレイジングハートを地面につけ

なのは「やるよ、レイジングハート!!」

レイジングハート《はい、マスター》

足元に白い陣が形成され、体に白い魔力色を纏う。

なのは「星屑を統べる龍よ、流星になりて来たれ、高町なのはの名のもとに・・・召喚！スターダスト!!」

パリン！

足元の空間が割れ、ヴォルテールに似た白い巨大な龍が現れる。これは、なのはがある試練を達成し、契約した神龍 スターダストである

黒い鳥は、スターダストを見るなり突撃してきた。

なのは「弾いて!!」

スターダストの目が光り、黒い鳥を殴り飛ばした。

黒い鳥「キシヤアア!!」

エクセル「なのは！倒さず封印だ!!」

なのは「了解!!」

スターダストが、黒い鳥を素早い動きで掴んだ。

なのは「リリカルマジカル！封印!!」

レイジングハートからピンクの砲撃が走り、黒い鳥に直撃した。

黒い鳥が咆哮を上げ、球体へと姿を変えレイジングハートへ吸収された。

なのは「封印完了……」

エクセル「よくやった……（笑）」

「軌道上 次元航行艦」

この船は、エクセルが指揮をとる次元艦“プロメテウス”だ

エクセル「悪かった、急に船に連れてきたりして」

エクセルは、アリサとすずかに頭を下げた。

アリサ「ふんっ、とんだ迷惑だわ!」

すずか「まあまあアリサちゃん。でも、助かりました（笑）」

エクセル「なら、いいが……」

教導服に着替えてきたなのはがブリッジへ入ってきた。

なのは「失礼します。教導隊所属、高町なのは一等空尉、これよりそちらの指揮下に入ります」

ブリッジにいた局員全員が立ち上がり、なのはへ敬礼した。

アリサ「うわあ〜」

アリサは、その光景を見て驚いた。

すずか「なのはちゃんってかなり偉い人なんだ・・・」

ブリッジを出た4人は、食堂へ向かった。

アリサ「有名人ってのは聞いてたけど・・・まさか、これほどとはね〜」

4人がここまで来るまで、通りかかった局員がなのはを見るなり敬礼していた。

エクセル「なのはは若者達の憧れだもんな」

なのは「エクセルくん、もしかしてこの船にいるのってほとんど新人なの？」

なのはが聞いてきた。それもそうだ  
通りかかった局員のほとんど、いや肝心なところ以外は新人がほとんどなのだから

エクセル「ブリッジメンバー以外のほとんどは・・・」

すずか「エクセル・・・さん、私達はいつ帰れるの？」

エクセルがすずか達を見た。本当なら、一般人を管理局の船へ乗せるのは禁じられている。

エクセル「うーん・・・本当なら直ぐ帰せるんだけど、目撃者として局に来てもらう」

なのは「二人を局へ？」

エクセル「そう。クロノ提督に許可をいただいて、帰せるのはそれから」

アリサとすずかは訳がわからぬまま、管理局へ向かうことが決定した

エクセル「そういえば、なのは」

なのは「ん？」

エクセル「封印するとき・・・リリカルなんとかって聞こえたんだが」

その単語を聞いた途端、なのはは真っ赤になり

なのは「そっ、そそそそれは・・・もっ、もう・・・エクセルくんの意地悪  
く／／／／／／」

― 医務室 ―

ソラ「はい、体の方には異常はみられません。」

ソラが通信しているのは、片目を眼帯で隠している少女だ。

??? そうか…局に着いたら、私が立ち合おう

通信画面が消えた。医務室のベットには、ドゥーエが寝かされていた。

その後、ドゥーエの体に変化はなく眠り続けていた。

ソラ「こうして見ると…ただの美人なんだけどな」

コンソールをいじるソラ。次の瞬間、ドゥーエの手がソラの腕を掴んだ。

ソラ「!？」

ドゥーエ「今…私のこと、綺麗って言った？（笑）」

ドゥーエが目をあけ、ソラへ微笑んだ。

## 第1話 始まりは異世界で（後書き）

ー次回予告ー

アリサ「なんで私達が連れていかれなくちゃならないのよー!」

すずか「まあまあアリサちゃん!落ち着いて!」

アリサ「管理局に連れて来られた私とすずか、久しぶりにあったフ  
イトやユーノ達なんだけど…」

すずか「これってIDカード?それに私達の顔写真」

アリサ「一般人の私達がなんでこんな目に…!」

すずか「次回 リリカルなのは第2話」

アリサ「入局」

アリサ&amp;mp;すずか「TAKEOFF!」

## 第2話 入局

ー医務室ー

ソラ「起きてたのか…」

ソラはドゥーエの手を振り払い、身構えた。

ドゥーエ「んゝはぁー」

ドゥーエは起き上がって、体を伸ばした。

ドゥーエ「ええ…あなたが通信してる辺りから」

ソラ「…逃げるのか」

ドゥーエはソラを見てクスリと笑った。

ドゥーエ「いいえ、逃げないわよ…（笑）」

ソラ「…そうか」

ドゥーエの顔を見ていたソラは、感情が揺らいだ。

ドゥーエ「ねえ、私はどうなるのかしら？」

ソラ「局に着いて早々、拘置所行き…」

なんだろ…この気持ち…この人を見てると

ドゥーエ「そう……」

ただの女性に見えてくる……

―管理局 部屋―

すずか「話で聞いてたより大きいのね、管理局って」

アリサ「中に街があるのが一番の驚きよ」

二人がいる部屋は、とある人の部屋だ。室内には現在、エクセルとアリサ、すずかしかない。

エクセル「管理局は、次元の中に浮かぶ要塞ともいえる場所だからな」

すると、部屋のドアが開き一人の女性が入ってきた

フェイト「アリサ、すずか（笑）」

フェイトだった。久しぶりにあった幼なじみに微笑むフェイトに対して、アリサとすずかが近寄り、わぁーわぁーと騒いでいた。

????「えと、そろそろいいかい……?」



フェイトの後ろで、頬をかいている男性が二人に言った。

アリサ& amp ;:「はい」

男性がエクセルに向き直った。エクセルは男性に敬礼し

エクセル「お久しぶりです、クロノ提督」

その男性、クロノ・ハラオウンはフェイトの義兄にして管理局提督である。

クロノ「ああ、久しぶりだ。」

クロノがエクセルに微笑み、部屋の中央にあったソファーに腰掛けた。アリサとすずかも腰掛けた。

クロノ「さて、君達の現状なんだが、残念ながら今の状態で帰したらまた襲われる可能性が高いため、管理局で保護する形になった。」

アリサ「保護って…つまり、危ないからここにいろと？」

クロノ「そういうことになる」

アリサとすずかが顔を見合せた。

クロノ「返事はすぐには言わない。ゆっくり考えてくれ」

クロノは立ち上がり、部屋を出て行った。

「フェイトの執務室」

アリサ「変なことになったわね」

すずか「うん」

エクセルとフェイトは二人を見て、頭を悩ませていた。

フェイト「はあ、本当についてない」

はあとため息をついた。

エクセル「まあ、過ぎたことはしょうがない」

すると、エクセルの横に通信画面が表示された

エクセル「ん……ソラ？」

相手はソラだった。

ソラ「執務官、ドゥーエが目を覚ましました」

エクセル「そうか、じゃあ……」

んっとエクセルは奇妙な発言に気が付いた。

エクセル「おいソラ、今ドゥーエのことを名前で呼んだか？」

ソラ「そうですが…?」

ソラは平然とした表情で、エクセルを見た。

エクセル「いや…なんでもない。すぐに行くからその場で待機してくれ」

通信画面を閉じ、今度はエクセルがため息をついてしまった。

フェイト「どうしたの?」

エクセル「ソラがドゥーエの名前を普通に口にした。」

フェイト「普通だと思うけど?」

エクセル「あいつの場合は、普通じゃないんだよ……………」

― 医務室 ―

ドゥーエ「ありがとうソラ(笑)」

ソラが差し出したコーヒーを笑って受け取るドゥーエ

ソラ「礼なんてしなくていいよ」

コーヒーを飲むソラとドゥーエ  
さっきから一言も喋らない二人。

ドゥーエ「なにか喋ったら…?」

ソラ「話すことはないよ……」

ドゥーエ「さっきからそればかりよ」

ソラ「……すまない、君みたいな美人と話すのは初めてで」

美人という言葉にドゥーエは頬を赤くした。

ドゥーエ「そっ、そっ……／＼／＼／」

ソラから顔を背け、コーヒーを飲み尽くす。

ドゥーエ「ごちそうさま／＼／＼／」

ー廊下ー

フェイト「バーサーカー……？」

エクセル「2ヶ月前に起こった大量殺人の件は知ってるか？」

エクセルが話しているのは、2ヶ月前に起こった管理世界で起こった大量殺人事件だ。

フェイト「うん。確か、エクセルが担当した事件だよね？」

エクセル「その事件の首謀者がバーサーカー、またの名を狂戦士と呼ばれていた男だった。ただの犯罪者と思ってたけど、実際は――」

―2ヶ月前 管理世界―

その頃はちょうど、ソラとエドが配属されたばかりの頃だった。

大量殺人の集団がビルを占拠し、管理局へ金の請求をした。

その首謀者は、バーサーカーと呼ばれており以前から手配されていた。

その事件の緊急の担当者がエクセルだった。その男がロストロギアの強奪の疑いもあったからだ

エクセルとソラ、エドがビルへ突入し集団のほとんどを制圧し、残るは首謀者のみだった。だが、バーサーカーと呼ばれた男をあまくみていた。

バーサーカー「てめえみたいな野郎に俺様が捕まるか!!」

エクセル「諦める…チェックメイトだ」

バーサーカー「ふははははは!! チェックメイトだと、この俺様が…負けるわけがない!!!!!!」

男の目が白目になり、目の前から消えた。

エクセル「なっ!?!」

バーサーカー「死ねえええー!!!」

バーサーカーが刀を振り下ろした。

エクセル「ちっ!」

キンツ!!

エクセルがブランド・ティータを抜く前に、白いバリアジャケットが現れ刀を双剣で受けとめた。

それはー!ー!ー

エクセル「...!?!」

バーサーカー「貴様!ー!!!」

ソラ「ハッ!!!」

ソラが刀を弾き返し、バーサーカーへ斬り掛かった。その速さはバーサーカーと同等だった。

バーサーカー「その力は!?!」

翻弄される男の懐から紫色の1つの宝石が落ちた。途端に男の動きが鈍くなり、白目が元に戻った。

ソラ「もらった!!!」

ソラの持った片方の双剣が宝石を砕き、そのまま男の腹を貫いた。

グシュツッ！

エクセル「なっ！！」

ソラが双剣を引き抜き、エクセルの方を見た。

穏やかな顔が振り返り血を浴び、まるで殺人鬼を思わせるものになっていた。そして――。

エクセル「――お前」

ソラ「……はい」

エクセルはソラの間を見た途端に全てを悟った。青い瞳は真つ暗な紫へと転じていて、あの男と同等か、それ以上かはわからないがこの青年 ソラは、得体の知れないモノを秘めているのかもしれないその時の俺は、少なくともそう思っていた。

そして2日後、ソラから事情を聞くことにした

ソラ「自分の家系は、生まれて直ぐある儀式をするんです」

エクセル「儀式…？」

ソラ「はい。自分の家系の先祖は元々、ベルカ王朝の騎士であって“狂戦士団”という騎士団を率いていました。」

エクセル「狂戦士団」…？」

ソラがコクリと頷いた。その後聞いたのは、自分の血にはその狂戦士の血が濃く残っていて、その血を覚醒させるための儀式とソラのデバイスである双剣“ニルヴァーナ”の授与。それ以上の詮索はしなかった

ソラのあの強さが狂戦士の力だとすれば、彼には戦ってほしくない。

エクセル「ソラ、エド……お前達に役割を傳達する」

その後、エドを呼んで二人の役割を与えた

エクセル「エド、お前には現場での戦闘専門…そして、ソラには俺の補佐役だ」

ソラ「その役割、慎んでお受けします」

フェイト「そうだったの」

エクセル「それ以来、ソラは自分のデバイスを見せない……けど」

フェイト「けど…？」



エクセル「いずれ、ソラの力が必要な時がくる…そんな感じがする」

―医務室―

医務室でドゥーエへの事情聴取をすることになった。

エクセル「じゃあ、質問いいかな？」

ドゥーエ「どうぞ。」

エクセルとフェイトが順々に、ドゥーエへの事情聴取が始まった。  
まずは、ドゥーエ本人かの確認

これは彼女の髪を検査したことで本人と判明

そして、彼女の経歴

次元犯罪者 ジェイル・スカリエッティの元で誕生

聖王教会、ミッドチルダ地上本部への潜入

同地上本部でのレジラス中将の殺害

とそこまでの経歴は良いとして

エクセル「君が宿していたあの黒いのは、何なのか知ってるか…？」

ドゥーエ「さあね、気づいたら生きてたし…あの黒いのは――  
――知らないわ」

フェイト「知らない…？」

ドゥーエ「わからないのよ…体の中で、いつの間にか大きくなって  
乗っ取られてた。」

なるほど…あの力は、そういうのだったのか

だとすれば、感染と考えるか取り憑いたと考えるか

プシユ―

????「失礼する。」

小柄な銀髪の少女が、医務室に入ってきた。

ドゥーエ「あら お懐かしい顔…」

????「ドゥーエ姉様、お久しぶりです」

その少女の名はチンク・ナカジマ。元ナンバーズで、ドゥーエの妹  
にあたる

ドゥーエとチンクが喋っているなか

エクセル『なあ、フェイト…』

フェイト『ん…?』

エクセルとフェイトが思念通話で話しかけある提案をした

エクセル『じゃあ、決定だな』

フェイト『うん』

エクセル「なあ、ドゥーエ。今のお前に聞きたい」

ドゥーエ「えっ………?」

エクセル「今のお前が罪を認めるなら、チンク達と暮らす気はないか?」

ドゥーエ、チンク「!?!」

ソラ「しっ、執務官!?!何を言ってる……」

ドゥーエ「本当にいいの?」

ソラの口をドゥーエが抑えた

エクセル「ああ、君が罪を認めるならな。それが俺とフェイトでの最終決定だ」

ドゥーエ「……いいわ(笑)」

それから3日間、ドゥーエに対する裁判と短期間教育プログラムが行われ、名前をドゥーエ・ナカジマへ改名した。

そして――――。

「フェイトの執務室」

フェイト「これがIDとミッド語の読み方の本」

フェイトが机の上に2つのIDカードと一冊の本が置かれた。

このIDが誰のかつて？

もちろん、あの二人に決まってる

フェイト「階級は二人同じ、三等陸士。配属は、一応なのは教導隊かな」

フェイトの前にいるのは陸士制服を着たアリサとすずかが立っていた。

この騒ぎが落ち着くまで、管理局で保護すると同時に管理局への一時入局という形になった。

ミッドに慣れない二人には、なのはのいる教導隊でミッドチルダでの決まり等を習いにいく。もちろん仮配属だけど

アリサ「なかなか慣れない制服ね……」

フエイト「その内慣れるよ（笑）でも良かった。大学の方が研修期間で」

すずか「来年までには落ち着くかな？」

フエイト「それは…わからないけど、どうにかしないと」

ーエクセルの執務室ー

ピッピッピッー

エクセル「……………」

ピッピッピッピッピッピッー

エクセル「出現数が日に日に増えていく一方か…はてさてどうしたものか」

最近の報告書には、特に目立つ所はない

ただ気がかりなのは、この黒い“影”

画面に表示されたのは、異形な形をした影

その形は、人間だったり動物だったりと場所によって姿を変えている

エクセル「こういう時、一番深く考えるのは…アイツしかいないかな」

エクセルは自分のデバイスを取り出し

「もしこれが始まりに過ぎなかったら…俺は…それをただ防ぐ…  
それがこの剣を受け継いだ使命なのかな」

ーミッドチルダ海上ー

調査隊旗艦 ヴォルフラム

同 司令部

「????」……………」

肩までセミロングヘアの女性は、司令室中に表示された画面を見  
渡していた。

すると、司令室のドアが開いた。

入ってきたのは銀髪の女性、目の色は真っ赤

その女性は、持っていた資料を片手で持ちながら  
画面を見渡していた女性に声をかけた

「????」失礼します司令。記者会見のお時間なので、お支度をー  
ーー」

「????」うん。わかってるよ、ちょうど見終わったところや」

画面を消し、ヴォルフラムの司令で元機動六課部隊長である 八神  
はやては、入ってきた女性に振り返った。

コートを着て、一緒に司令室を出る

はやて「やっぱり秘書官にピッタリやなリインフォース（笑）」

リインフォース「ありがとうございます。司令…いえ、我が主」

廊下を歩きながら、何気ない会話をしていた

はやては、今騒がせている事件に関して

心の中で、ひそかに計画を練っていた

## 第2話 入局（後書き）

―次回予告―

なのは「アリサちゃん達がミッドに暮らしはじめて3日。大変な毎日だけど、しょうがないよね（笑）」  
さて、黒い獣を追い求めて管理世界を行き来するエクセル達、やっぱり簡単にはいかないみたいだね

次回 敵？

TAKEOFF!!」



### 第3話 敵？

―第2管理世界―

燃え盛る港で、少女は一生懸命走っていた。

少女「ハア、ハア、ハア！！」

その後ろから数匹の黒い獣が少女を追い掛けていた。  
少女は倉庫を曲がり、裏へ入っていく

黒い獣「シヤアアア！！」

黒い獣が倉庫の屋根を飛び、少女の前へ回り込んだ。

少女は、立ち止まり来た道を戻ろうとした。

だが、後ろからきた黒い獣に挟まれてしまった。

少女「い、いやぁ……」

黒い獣が少女を追い詰めていき、少女は壁に背中をつけた。

黒い獣が少女へ襲い掛かろうとした瞬間

タタタッ！！

倉庫の屋根から誰かが飛び降りてきた。手に持っていた銃から魔力弾が放たれ、襲い掛かろうとした獣に数発撃ち込んだ。

撃たれた獣は地面にめり込み、降りてきた人物はその近くにいたもう一匹の頭を踏んで着地した。

黒い獣「キシヤーー!!」

???「遅いッ…!!」

その人物の声は女性のものであった。声は辺りに響きわたり、走ってきた一匹にオレンジ色の魔力弾を食らわせ、後ろからきたもう一匹にも撃ち込み、その場にいた黒い獣は全滅した。

???「ふう…」

女性は少女へ近寄り、手を差し出した。

???「もう大丈夫よ。さあ、一緒に避難しよう」

少女は差し出された手を握ろうとした

瞬間—————

黒い獣「シヤアアア!!」

一番最初に倒した黒い獣が女性へ飛び掛かった。

だが、それより速く女性の体が反応し

銃がナイフへと変形し、黒い獣の胴体を斬り裂いた。

「???」大人しく寝てなさい…」

少女を抱き抱え、女性は通信画面を開いた

「???」こちらランスター執務官、少女一名を救出しました」

医療班 了解。2分で救護へりを回します

2分後、救護へりに少女を乗せた。

少女「ありがとう、お姉ちゃん（笑）」

「???」うん（笑）もう大丈夫だから、安心して」

少女「うん！」

へりが上昇していく。

残った女性は風で揺れたオレンジ色のロングヘアを抑えた。

彼女の名前は、ティアナ・ランスター。

元機動六課のFWメンバーであり、脱獄したジェイル・スカリエツ  
ティを逮捕したことで一流の執務官になった彼女もあの黒い影を追  
っていた。

ティアナ「ここもボスみたいな奴はいないみたいね…エクセルから  
報告があつた黒い影は人に取り憑くみたいなさ…本当なのかしら」

ー翌日 ミッドチルダー

同 高町家

キャスター 第2世界で起こった火災の原因は、未だわかっておらず管理局調査部の方では「――」

朝のニュースを見ていたヴィヴィオは、パンをかじる。

なのは「ヴィヴィオ、早くしないと間に合わないよ」

食器を片付けていたなのは。その隣には、アリスとすすかがてきばきと片付けを手伝っていた。

アリスとすすかは、入局の間はなのはの家で暮らすことになっていた。

ヴィヴィオ「はあ〜い。モグモグ――」

記者A では、調査隊司令の八神はやて一佐にお話を伺いたいと思います

はやて、という名前に反応した一同はテレビを見た。

はやて 調査隊司令の八神はやてです。

はやての隣には、リンフォースが座っていた。

記者A 最近こういう事件が多発していますが、司令としてのお考えは…？

はやて そのことに関しては、まだ何とも言えません。日が経つに

つれ、数が増えていく一方でこちらとしても、現地局員との連携が必要なのです

はやての冷静な眼差しが、カメラを射ぬいていた。

記者B では、これからの対策は

はやて 私としての考えはありますが、まだ時期ではないと言っておきます。

記者C 時期とは？

リンフォース これ以上のお話は、口外出来ません。

アリサ「はやても大変ね〜」

なのは「しょうがないよ、司令なんだから」

全員が家を出て、それぞれの場所へ向かう。

ヴィヴィオは学校

なのは、アリサ、すずかは部隊へ

なのは「じゃあ、ヴィヴィオー〜」

ヴィヴィオ「うん」

分かれ道で親子二人はお互いの手を叩き、別れた。

学校へ向かうヴィヴィオの後ろを同世代と思わせる格好をした人が

走って行った。

1 St. (ザンクト) ヒルデ魔法学院

初等科・中等科棟

学生達が校舎へ歩いて行く中にヴィヴィオの姿があった。

ヴィヴィオ「あつ、アインハルトさあくん」

ヴィヴィオが声をかけたのはツインテールでエメラルドグリーンの髪をした少女のアインハルト・ストラトス。

アインハルト「ヴィヴィオさん……………」

アインハルトが振り返った。一年前、ヴィヴィオとアインハルトはとあることがきっかけで知り合った少女だ。

実は彼女とヴィヴィオには断ち切れない因縁がある。よく見れば、アインハルトはヴィヴィオと同じく両目の色が違うのだ

ヴィヴィオ「おはようございます」

アインハルト「おはよう。皆さんは元気…?」

ヴィヴィオ「はい、ママ達は忙しいんですが元気です（笑）」

ヴィヴィオがにこやかに微笑んだ。アインハルトは薄く笑い、二人で校舎へ入って行く

半年前の事件にアインハルトが出てこなかったのは、別世界へ行っていたからだ。

アインハルト「では、また放課後に」

ヴィヴィオ「はい」

小中違う校舎の為、別れる二人

????「聖王と霸王が一緒にいるなんて、笑える光景ー」

ー教室ー

ヴィヴィオ「おはよう。リオ、コロナ」

教室に入ったヴィヴィオは、親友である二人に挨拶した。

リオ「おはようー！」

コロナ「ごきげんようヴィヴィオ」

ツインテールの髪型がコロナ、短髪の子がリオ

この3人は、幼い頃のなのはやアリサとすずかを思わせるほどの仲だ。

先生「転校生を紹介します。」

教室に金髪のセミロングヘアの少女が入ってきた。

サラ「サラ・ミスズです。よろしくお願いします」

先生「サラさんは、病弱ですので皆さん、いたわってください」

とりあえず、自己紹介を終えヴィヴィオを先頭にサラへ詰め寄った。

ヴィヴィオ「サラさん、高町ヴィヴィオです！友達になりましょう  
！！」

サラの慌てふためく姿を見て楽しかったのか、ぐいぐい詰め寄ってきてサラの手を握ったヴィヴィオ

赤くなりながら、サラとヴィヴィオの目が合った。

ツキンッ！

サラ「……………」

ヴィヴィオ「……………!？」

ヴィヴィオは手を離れた。次のクラスメートが話し掛けた



ヴィヴィオは横からサラを見た。胸元を触るヴィヴィオを見たりオとコロナは

リオ「どうしたの…？」

ヴィヴィオ「……………」

コロナ「ヴィヴィオ…？」

ヴィヴィオは胸元を抑えたままだった。

ヴィヴィオは、胸の中で締め付ける痛みを気にしていた。

―魔法学院 校門―

……………昼頃

エクセル「ここが…ヴィヴィオのいる学校か」

私服のエクセルは校門をくぐり、校舎へ入っていく

先生「すみませんが、どちら様ですか？」

職員室で先生に素性を聞かれ、エクセルは執務官カードを見せて

エクセル「時空管理局執務官のエクセル・アーシュライトです。高町ヴィヴィオさんにお会いしたいのですが」

―数分後―

ヴィヴィオ「ごきげんよう、エクセルさん」

エクセル「ごきげんようヴィヴィオ。」

ヴィヴィオの後ろにリオとコロナがいた。

リオ&amp;mp;コロナ「こんにちは〜（笑）」

エクセル「こんにちは（笑）」

場所を移動して、図書室へ

エクセル「ヴィヴィオの権利で無限書庫のデータを俺の端末へ送ってほしいんだ」

ヴィヴィオ「構いませんが、何のデータを……」

エクセル「古代ベルカ時代を含め悪霊、憑依の事件と記録辺りかな」

その二つの単語を聞いた3人は一瞬だけ後退りした

エクセル「あつ、いや、決して変な意味はないからな」

ヴィヴィオ「はっ、はい……」

ヴィヴィオが端末を開いて文字を打っていく

ヴィヴィオ「司書名、高町ヴィヴィオ。認識コード8781、検索ワードーーーーー」

エクセル「おっ、きたきた。ありがとうヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「いえいえ」

ー放課後ー

放課後までいたエクセルは、ヴィヴィオ達を車に乗せた。

アインハルト「すみません、私まで」

助手席に乗ったアインハルト。

エクセル「構わないよ。通り道だし…君とも話してみたかったから、ヴィヴィオが大好きな友達のことをさ」

ヴィヴィオ「え、エクセルさん!!」

赤くなるヴィヴィオを笑いながらエンジンをかけ、車を走らせ学校から離れていく

エクセル「ヴィヴィオ…本当にここでいいのか？」

リオとコロナを送った後、残るヴィヴィオとアインハルトを送るだけなのだったのだから、ヴィヴィオは用事があるだとかで途中で降ろ

すことになった

ヴィヴィオ「大丈夫です。家も近いですし、大した用事じゃないですから」

ヴィヴィオがドアを閉め、アインハルトを見た

ヴィヴィオ「じゃあアインハルトさん、また明日」

アインハルト「また明日……」

車がヴィヴィオから離れていく

ヴィヴィオ「さて……………」

ースポーツ公園ー

ヴィヴィオ「ふう……」

大人モードで魔法の練習していたヴィヴィオ

ヴィヴィオ「ねえ、クリス…収束系の練習してみようか」

ピシッと手を上げたクリス。ヴィヴィオが砲撃陣を展開し目を閉じる。

収束魔法…なのはママと戦った時に無意識に使ったけど、今はどうなんだろう

ヴィヴィオ「ハアアアア……………!!」

虹色の魔力光が収束していく

すると突然――

??? 「古代ベルカ聖王オリヴィエの末裔、高町ヴィヴィオとお見受けします。」

ヴィヴィオ「!!!?」

虹色の魔力光が消え、ヴィヴィオは振り返った。

電柱の上にバリアジャケットを装着し、バイザーをかけた女性が立っていた。

ヴィヴィオ「誰ですか…?」

??? 「倒される人には名乗らないのが私の主義です…」

するといきなり、女性が消えヴィヴィオの懐に現れた。

ヴィヴィオ「あッ――!!」

女性の拳がヴィヴィオに向かっていく

ガシッ!

ヴィヴィオは女性の拳を弾き、ステップを取りながら後方へ下がった。

ヴィヴィオ「いきなり何をー」

シュツ

また相手が一瞬で間合いに入ってきた。さすがに今度はヴィヴィオも反撃が出来た。自分が得意なカウンターだ

ヴィヴィオ「リボルバースパイク!!」

ヴィヴィオの上段回し蹴りが相手の顔を捉えバイザーを弾いた。

????「ッ…!」

相手の驚くのがわかった。ヴィヴィオは距離を離し、バリアジャケットを装着した。

バイザーが外れ、素顔が見えた。月の光に照らされた相手の顔は、どこかのお嬢様を思わせる顔立ちで髪は金、目は自分と同じドットアイ。

????「……………許さない」

女性は傷がついた左頬を撫でると、周りの雰囲気が一変した。

黒い影が地面をおおい、五体の黒いピエロが片足に、片腕に剣をつけて現れた。

ヴィヴィオ「!?!」

????「私の顔に傷をつけたことを後悔させてやる!?!」

女性の怒号で、黒いピエロがヴィヴィオへ斬り掛かった。

ドンー!!

ヴィヴィオはそれを避け、後ろから来たピエロを殴り飛ばす。

黒いピエロ「キエエエエ!!」

ピエロが吹き飛び、ヴィヴィオは別のピエロと対峙した。

ヴィヴィオ「アアアアア……ッ!!」

避けたピエロの剣を掴み、他のピエロを弾き飛ばし掴んでいたピエロを投げる。

ヴィヴィオ「残ったのは……」

ヴィヴィオは後ろにいた女性へ振り返り、身構えた。

「……やっぱり、雑魚がいくら掛かっても無駄なことね」

女性は懐を探り、銀色の何かを取り出した。

「……「リーヴォルフ」」

そう女性が口にすると、黒い光が女性を包み手足に銀色の鉄鋼のパーツを装備した。

ヴィヴィオは目を疑いづつも、構えを解かなかった。

「このヴォルフは、ビルをも砕く……………」

女性が腕をくねらせた。ヴィヴィオにはその動きが攻撃の合図と悟り、両腕に魔力を込めた。

「遅い!!」

女性の動きが先程より遙かに速かった。

驚愕したヴィヴィオの下から突然、拳が現れ顎に食らった。

ヴィヴィオ「ガッ……!!!!?」

体が宙を飛び、とてもない痛みがヴィヴィオを襲った。宙を舞ったヴィヴィオの上に女性が跳躍し右腕を振り上げた。

「……獄王流」

右腕に装備された鉄鋼のパーツが黒く輝き、ヴィヴィオへ振り下ろされた

「……獄門拳」

振り下ろされた拳がヴィヴィオの胴体へ食い込み、そのまま地面へ物凄い勢いで叩きつけられた。

「ダアアアアーン!!」

地面に薄いクレーターが出来た。ヴィヴィオは頭と口から血を流し、



クレーターの中心で横たわっていた。

女性は、装備していた銀色のパーツを消し、ヴィヴィオに背を向けて公園を出ていった。

ーアインハルトの家ー

時間帯は19時を回っていた。

サアアアアア

シャワーを浴びていたアインハルト。

アインハルト「ふう……………」

浴室から出て、タオルを取ったアインハルトへ

ズキツン！！

アインハルト「…ッ!？」

急に襲った胸の痛み、アインハルトは膝をついた。

アインハルト「な…にッ……………」

ふらふらと立ち上がり、タオルで体をふいた。そんな彼女に近寄る小さなぬいぐるみ（猫みたいな豹）のデバイス、アステイオン。愛称 テイオは鳴きながらアインハルトに近づく

ベッドの近くまで来ると、胸の痛みの理由がわかった。

アインハルト「通信……？」

発信者はヴィヴィオだった。アインハルトは嫌な予感と感じながら通話のボタンを押した

画面が表示され、ヴィヴィオが映った。

アインハルト「ヴィヴィオさん……！？」

アインハルトは大人モードのヴィヴィオの顔を見て驚いた。それもそうだが、映し出された顔は口と頭から血が出ていたのだから

ヴィヴィオ すみ……ませ……ん。急いで……スポー……ツ……公園まで……来てくれ……ますか

かすれかすれの声で、アインハルトに場所と状態を伝えた。

アインハルトは急いで服を着替え、ティオと一緒に家を飛び出した

ースポーツ公園ー

アインハルト「ハア……ハア……ハア……！！」

ここまで全力疾走してきたせいか、息継ぎがづらい

公園に入り、辺りを見渡すとティオが小さな穴クレーターを見つけた。

中心には、大人モードが解けていたヴィヴィオがいた。

アインハルト「ヴィヴィオさん…！」

ヴィヴィオを背負って、ベンチに横たわせる。

アインハルト「ひどい……………」

顎、腹部への強力な打撃とクレーターができるほどの強い破壊力。  
アインハルトは聞かされたことを総合して考えながら、ヴィヴィオを見て救急車を呼んだ。

―病院―

治療室で治療中のヴィヴィオ。部屋の前には、なのは、アインハルト、エクセルがいた。

エクセル「すまない、俺があの時……………」

なのは「ううん。気にしないで……………」

アインハルト「……………」

アインハルトは考え事をしていた。

ヴィヴィオのバリアジャケットを貫通するのは、自分はもちろん母親のなのも簡単には出来ない。そもそも、自分の武装化とヴィヴィオのバリアジャケットは大いに違う所がある

ヴィヴィオのバリアジャケットは、今は失われた古代ベルカの聖王オリヴィエが使用していた防御特有スキル『聖王の鎧』と現代の技術を融合して作ったもの

それを無視して、ヴィヴィオの体へダメージを与える。

アインハルト「……そんなことって」

――1時間後――

ヴィヴィオ「ママ、本当に……ごめんなさい」

治療室から出て、移動用のベッドに横になっていたヴィヴィオは頭に包帯を巻かれたヴィヴィオはなのはに謝った。医師によると、顎へのダメージはそれほどでもないのだが、体へのダメージは歩けないまでに達していて、集中して治療すれば全治1週間だそうだ。

なのは「ヴィヴィオが無事なら、許してあげるよ（笑）」

――病室――

エクセル「ヴィヴィオ、襲ってきた相手はどんな奴だった？」

ヴィヴィオは頬に指をあて

ヴィヴィオ「えっと……女の人で私の大人モードくらいの身長で、髪の色は金髪、顔立ちはお嬢様みたいでした」

ふむふむつと顎に手をあてるエクセル。

エクセル「他にあるか…？変わった様子とか」

ヴィヴィオ「私のこと良く知ってたみたいだし、なんか黒い影からピエロが出てきたり……」

エクセル& amp;：なのは「!？」

エクセル『なのは…』

なのは『うん…』

二人は部屋を出て、屋上で通信をしていた。

はやて ヴィヴィオが接触した人物は、事件の関係者と考えるのが妥当やろうね

エクセル「あれが人の仕業……か」

なのは「そうだね。」

はやて ……じゃあ、そろそろ奇跡の部隊カードが必要な時かな  
（笑）

エクセル「奇跡の部隊カード？……はやて、まさか……」

はやて 人の仕業とわかれば、管理局側が手を打つやろうけど、まだ謎が多い敵とまともに戦えるのはウチらだけや…なのはちゃん、エクセルくん…新しい戦いの火種にならんよう、頑張っていこう！



### 第3話 敵？（後書き）

ー次回予告ー

はやて「さあさあ、次回予告いっくよ」

はやて「ヴィヴィオが襲われて三日。場所は変わって、边境世界へエリオ、キャロがいる部隊へフェイトちゃんが赴いてー！ー！すると、そこに変な男の人がー！ー！」

作者「変な次回予告するなー！ー！！」

次回 森林の誘惑者」

はやて「誘惑者やて！？まさかエクセルくんか！ー！」

エクセル「そんなわけあるかー！ー！ー！」

#### 第4話 森林の誘惑者（前書き）

エクセル「まだ全員を集めるには無理だ。まずは隊長陣を集めた方が手っ取り早い」

エクセルの言葉で、はやてから奇跡の部隊カード

「六課」のカードが上げられた。

再び、機動六課の出番がやってきた

最強で奇跡の部隊である「機動六課」改め特務部隊「特務六課」の新設立

時はまだ――――



## 第4話 森林の誘惑者

ーミッドチルダ市街地ー

午前8時

スバルの住むマンション

ピンポーン

部屋の前で、呼び鈴を鳴らしていたティアナ

ピンポーンピンポーン

だが、何度鳴らしても彼女の声が聞こえない

ティアナ「いないのかしら…」

クロスミラージュ《いえ、マツハキャリバーが室内で反応してくれました。鍵は空いています》

ガチャツッ!

ティアナはドアを開けた。

ティアナ「スバル… 入るわよ?」

ヒールを脱ぎ、部屋へ踏み出した瞬間

シュルツ

ティアナは何かを踏んで、足を滑らせた。

ティアナ「ふあつとと！…なに、これ？」

ティアナは踏んだものを拾った。それは薄い布だった

ティアナ「……って下着じゃない」

室内が暗いせえか、ちつとも気づかなかった

ティアナ「スバル…？」

部屋が真っ暗だ、カーテンも開けてない。

ティアナ「カーテンも開けないで、だらしない…」

シュン

カーテンを開け、振り替えると床には

ティアナ「い…いやぁー！…！！」

ティアナの絶叫がマンション中に響き渡った。

それもそうだ。ソファアの近くでスバルが目を開けたまま倒れていたのだから

ティアナ「スツ…スバル？ねえ……嘘でしょ！？」

ティアナがスバルを擦った。もちろん反応がない

ティアナ「スバル！スバル！！起きなさいよスバル！！！」

涙目になったティアナがスバルの耳の近くで叫んだ。すると――

スバル「んう………」

ティアナ「え………？」

スバルが目を擦りながらムクリと起き上がった。

ティアナ「ス……スバル………？」

スバル「あれえ……ティア？……ふあ……はあ……」

スバルが大きなあくびをした。

スバル「ゴメ……ン。2日間連続で働き詰めだったからか、寝てないんだよ……」

スバルは目を擦った。半分しか開いていない瞼が再び閉じようとしていた

ティアナ「……………」

スバル「……………」

ぶるぶる震えていたティアナは、持っていたバックを床に落とし

「脅かすんじゃないわ…よー！ー！！」

バシーーーーン！！

スバルの頬におもいつきり振りかぶった強烈なビンタを食らわせた。

スバル「ふわっ…！！？」

スバルは完全に両目を開け、涙目で赤くなった頬を触れながら「なんで打つの？」という目でティアナを見た。ティアナは我慢出来なかったのか

ティアナ「大体鍵は開いてるわ、下着は脱ぎっぱなし！！」

ベシベシベシベシ！！

さらに多くの往復ビンタで、スバルの頬を叩きまくるティアナ

ティアナ「おまけに目を開けながら寝てればッ…！！」

最後には大きく振りかぶり

ティアナ「誰だつて驚くわよーーーー！！！！」

ベシーーーーン！！

トドメのビンタで、スバルは床に倒れた。

スバル「…ごめんなふぁーい（泣）」

床で泣きながら謝罪するスバルであった。

ティアナから制裁を食らい、完璧に目が覚めたスバルは腫れた頬を氷で冷やししながら、六課のカードが上がったことを聞かされた。

スバル「じゃあ、また隊舎に集合するの…?」

ティアナ「今回ばかりは隊舎は使えないから、主に航行艦がメインね」

スバル「じゃあ私とエリオとキャラロがティアの航行艦に乗るってことだね」

ティアナ「まだわからないけど、今頃フェイトさんが二人を迎えに行ってる所よ」

「その頃、フェイトは」

フェイト「クシュン…!」

草原でくしゃみをしたフェイトは、キャラロとエリオがいる隊の場所へ着く所であった。

フェイト「誰か私の噂してるのかな…?」

と言っている内に、フェイトの体に大きな影が被った。フェイトは空を見上げると、そこには――

????「フェイトさあ〜ん」

大きな飛竜だ。その背中から可愛らしい女の子の声が聞こえた。

フェイトは見知った飛竜と背中に乗っていた声の主に微笑んだ。

フェイト「キャロ」

????「フリード、フェイトさんの所に降りよう」

飛竜がフェイトの所へ降りて行く。翼をはばたかせ、フェイトの前で足をつく飛竜。フリードの背中から、ピンクの髪をした小柄な少女が降りて、フェイトに駆け寄ってきた。

フェイト「キャロ、元気だった？」

この少女の名前はキャロ・ロ・ルシエ。フェイトの大切な家族の一人で、フリードはキャロが使役する飛竜であり、キャロの生れ故郷を守護する飛竜の一頭である。

フェイトに頭を撫でられるキャロは

キャロ「はい！私もロツジにいるエリオくんや皆さんも元気です（笑）」

フェイト「良かった」

ー環境保護隊 ロツジー

エリオ「フェイトさん、そんなに撫でないでください／＼／＼／＼／」

フェイト「あはは（笑）ゴメンね、キャラが妬いちゃうね（笑）」

フェイトがからかると、環境保護隊の面々が笑っていた。

キャラが赤くなりながら、あたふたと

キャラ「やっやっ、妬きませんよー！？／／／／／／／／／／」

フェイト「じゃあ二人共、ヨロシクね」

二人に事情を説明し、二人は直ぐにOKしてくれ、フェイトは少しだけ安堵した。

フェイト「今日は泊まっていく予定だったんだけど、いいかな？」

夕食を一緒に済ませ、キャラが保護隊の隊長に聞いてみると

隊長「別に構いませんよ。ウチのチーム二人が良いって言うなら」

フェイト「すみません。」

その後、三人でティータイムをとっていると

ピーピー！

三人「!?!」

隊長「何者かがセンサーに引つ掛かった」

パットを操作しながら、場所を表示した。

森林の奥深い所だった。

キャロ「エリオくん！」

エリオ「うん！」

二人が外に出て、バリアジャケットを装着する

フェイト「二人共、気をつけて！」

二人「はいッ！」

エリオとキャロが大きくなったフリードに乗って空に上がっていく。月に照らされ、フェイトはバルディッシュを取り出す

隊員（女）「執務官！センサーに複数の反応が!?!」

フェイト「監視サーチャーの映像を私に！二人を手助けします!?!」  
バリアジャケットを装着しバルディッシュを片手に空へ舞い上がった。



「?????」

暗い森林の中で、そいつは歩いていた。

その上空にフリードが到着した。

そいつは、フリードを見上げる。

「????」「アルザスの飛竜……」

声は男の者だった。男は一瞬だけ笑った。

キャロ「止まりなさい！ここは保護区域に指定されています！部外者は立ち去ってください！！」

キャロがフリードから通告すると、男の周りに小さな黒い竜が三体出現する

男「さあー」

男が「襲え」と言おうとすると、森林の中から

エリオ「ハアアアアア！！」

ザシユザシユ！

ストラダを持ったエリオが現れ、瞬時に三体の黒い竜を両断し男に矛先を向けた

男は一瞬だけ驚いた表情をするが直ぐに元の表情に戻る

男「ほお…」

エリオ「保護区域への不法侵入、及び現地保護隊に対する攻撃行為は犯罪です。よって、あなたを逮捕します！」

男「立派なものだな、エリオ・モンディアル」

エリオ「！？（こいつ、なんで僕の名前を…）」

男「なんで、僕の名前を…か？」

男はエリオの思っていたことを口にした。エリオはさらに警戒した

男「お前はまだ、自分の立場をわかっていないようだな」

エリオ「……どういう」

すると、エリオの周りから先程の黒い竜が六体が現れ、上空のフリードに向かっていく。

エリオ「キャロ…！」

エリオの目線が男からキャロへと移った。

キャロ「フリード…！」

フリードが上昇し、黒い竜から距離を離そうと移動する

エリオ「……お前…！」

エリオが振り返ると、男がエリオに剣を振り下ろそうとしていた。

キンッ！

振り下ろした剣をストラダで受け止める。

男「面白いな…いい反応をしている。だが—————」

男はストラダを弾き、エリオを蹴り飛ばす。

エリオ「あまく…！」

蹴り飛ばされたエリオは後ろにあった木を軸に、ストラダのブースターを使い、再び男に突撃する

エリオ「見るな————！」

カートリッジをロードし、エリオとストラダがさらにスピードを上げる。

エリオ「スピーアアングリフ——！」

ブースターによる突撃攻撃が、男に迫る。だが—————

キンッ——！

エリオ「なっ！？」

男は持っていた剣で、エリオの突撃攻撃を易々と受け止めたのだ。

男「その程度か……」

エリオ「（動かない！？）」

宙に浮いた状態で、エリオは動けなかった。

男「では……終わりにしよう……」

男の左手に突然、槍が現れる。

男「さあ……己の運命に絶望しろ」

男が、エリオに槍を突き刺そうと左手を動かした。

そして、そこへ金色の稲妻が走った。

????「動かないで」

金色の鎌の刃が、男の首筋を捉えていた。

エリオ「フェイトさん……！！」

エリオの足が地面につき、今度は逆に男が動けなかった。

男「……キミかい……フェイト・テストロッサ。まさかこんなに大きくなっていたとは」

男はまるで、フェイトを知っているかのような口調で、後ろにいるフェイトに問う。

フェイト「あなたが何者かは知りません…でも、私の家族に手を出したことは許しません」

男「フフフフ、笑わせてくれるじゃないか…だけど、いいのかな？自分のことは心配しなくて……」

フェイトの後ろに黒い小さな竜が現れ、フェイトを襲おうと牙を向いた

バルディツシュ《ソニックムーブ》

フェイトは竜の後ろに高速移動し、バルディツシュを振るった。

フェイト「ハアッ！」

竜を斬り裂き、地面に着地する。だが、斬り裂いた竜の体がバインドとなり、フェイトの体は近くにあった木へ拘束した。

フェイト「あっ！？」

気づいたら、エリオもバインドで抑えられていた。

男「あつけないな、雷の女神様がこの程度では……」

男はフェイトに近づき、彼女の顎をクイツと手で上げる。その顔はやはり良く見えずにいた。

男「キミはやはり美しい…美貌とその内に宿した力も変化がない。だが、自分の運命を知らない…そんなお前を再びものにしたい」

フェイト「なっ、なにを言って!?!」

男はフェイトの腹の辺りに触れり、擦った。

男「だが、さすがにまだ身籠っていないか……また会おう」

男はフェイトから離れ、足元に転送陣が現れる

男「俺の名前はアルザス……この名前を魂に刻み込んでおけ……そして次はもうないと思え」

男は光に包まれた。

フェイト「アルザス……」

一体何者……?私を知ってたみたいだけど……それに、身籠ってないって

フェイトはお腹に触る

まさか……ね

時を同じくして、ミッドチルダの病院にあるヴィヴィオの部屋では、コロナ、リオ、何故か他の人達がヴィヴィオの見舞いに来ていた。

リオ「これが今日勉強した分のノートのコピーと頼まれてた本……」

リオがヴィヴィオの前にあったテーブルにドサツと紙の山を置いた。  
ヴィヴィオ「うーん…なんか多くないかなあ〜（汗）」

コロナ「大丈夫だよ。はい、本」

あれから起き上がれるようになったヴィヴィオは、リオとコロナに頼んで授業のノートを取ってきてもらったのだ

???「しかし、ヴィヴィオを襲った奴はヴィヴィオの素性を知ってみたいじゃねえーか」

ヴィヴィオのストライクアーツの師匠であり、N2Rのアタッカーであるノーヴェエはヴィヴィオに聞いた

ヴィヴィオ「知ってたというか…なんというか」

ヴィヴィオは渡された本のページをクリスがめくっていく

ヴィヴィオ「不思議な感覚がした。私というより、私の中に眠ってる血…みたいなのが」

ノーヴェエ「なあくに暗い顔してんだよ、友達の前で（笑）」

苦笑したノーヴェエがヴィヴィオの額に軽くデコピンした。

ヴィヴィオ「にゃっ!? もうノーヴェエ!」

すると、クリスがちょこちょこヴィヴィオを突いた。

ヴィヴィオ「ん？クリス、見つけたの？」

クリスがコクンツと頷き、ヴィヴィオとノーヴェ達は本を覗き込んだ。

この本は『王朝 家系書』というタイトルである。これは元々、無限書庫の禁書の棚にあった本なのだが、ヴィヴィオがユーノに無理矢理頼んで特別に借りたのである。

開かれたページには、聖王の名と霸王の名を初めとする様々な王家の王の事や名前や家系図が載っていた。

ヴィヴィオは自分を襲ったメルフィスという人物が聖王と関係していると予想した

ヴィヴィオ「え」と…あつた！…えっーーーーー」

ヴィヴィオは自分の目を疑った。あの女の人がいたメルフィスという名前、それは

メルフィス・ヴァンワール

それがメルフィス家の一代目の女の名前だった

そして、その彼女も王の名を受け継ぐ者だった

その名は『魔王』

ノーヴェ「メルフィス・ヴァンワール…魔王と呼ばれた王か」



ヴィヴィオ「ねえ、リオ、コロナ…アインハルトさんは？」

コロナ「アインハルトさんなら、用事があるからって……」

ヴィヴィオ「!?…ダメツ…アインハルトさんは……」

メルフィスに会っちゃダメと言えなかった。ヴィヴィオは本能的に感じたのだ、アインハルトは自分を倒した相手に会うことを

―その夜―

アインハルトは制服のままスポーツ公園のベンチに座っていた。アインハルトは目を閉じ、バックを横に置いていた。

アインハルト「……」

公園には珍しく人がいる気配なくただ、アインハルトだけが存在を許されているようだった。

噴水の音がアインハルトの耳に響いてきた。

すると突然……

バイザーをかけたメルフィスがいきなり背後から飛び掛かってきたのだ

ズバアアアン！！

メルフィス「なっ!？」

メルフィスは驚いた。ベンチに座っていたアインハルトが、いつの間にか置いていたバツクを片手に、噴水の傍らに立っていた。

アインハルト「あなたですか、メルフィスという人は……」

メルフィス「さすがね霸王。私の気配を感じ取るなんて……」

バイザーを取り、後ろに投げ捨てるメルフィスはゆっくりと構えた。

アインハルト「あなたがヴィヴィオさんを狙った理由……吐いてもらいます」

アインハルトは持っていたバツクを横に放り投げ、足元に魔法陣がひかれる

アインハルト「いきますよティオ！」

ティオ「にゃっ！」

肩になっていたティオが鳴いた

アインハルト「セット・アップ！」

アインハルトが魔力光に包まれる

魔力光が治まると、アインハルトはヴィヴィオと同じ大人モード、本人は元々武装形態と呼んでいるがこれが彼女の大人モードであり霸王の象徴である。デバイスを持っている今では色々変わった

アインハルト「……勝負です」

アインハルトが構えた。二人は見合い、どちらが仕掛けるか待っていた。

二人「……………」

ザアアアツ！

風が吹いた。

メルフィス「……………!!」

アインハルト「……………!!」

二人が同時に動いた。メルフィスの左から来る拳をアインハルトは右腕で弾いた

上手く近付ければ、一撃で、断空拳で仕留める！

スタンツ！

メルフィス「……………!!」

アインハルトの連撃を弾き、彼女もまたメルフィスの拳打を弾いていた。

アインハルト「ハツ…!!」

アインハルトの拳打がメルフィスを吹き飛ばした。

メルフィス「ぐっ……！！」

吹き飛んだメルフィスは、電柱に叩きつけられた

アインハルト「ハア…ハア…私のカイザーアーツにはあなたの拳で勝つのは不可能です」

アインハルトの言葉にメルフィスは、肩を震わせた。メルフィスは立ち上がり

メルフィス「霸王が私に勝つと……なら、これに勝てるかしら」

メルフィスが銀色の武器、ヴォルフを装備した。

アインハルト「これが……」

メルフィス「聖王を破った私の力、受けてみるがいいわ！！」

メルフィスから闘気を感じ、アインハルトは即座に身構えた。

すると、メルフィスはアインハルトの懐に入り込み、銀色の武器を装備した右の拳がアインハルトを噴水までぶっ飛ばした。

アインハルト「ぐっ…かはっ！！」

アインハルトは噴水の内に体を強く打ち付け、口から血を吐いた。

メルフィスはアインハルトの頭上から、隕石のように落下してきた。

アインハルト「……………!!」

空破弾は間に合わない・・・なら!!

アインハルトは拳を水面に薄く沈め

アインハルト「ハッ……………!!」

彼女は水を素早く腕を動かし、水を斬った。

ザバアアアア……………ン!!!!

噴水にあった大量の水が高く浮き上がり、メルフィスに襲い掛かった。

これは水斬りという。普段は自分の拳と速さの力を測るためのものだ。

この場合、アインハルトは目隠しの為に利用したのだ。

メルフィス「悪あがきを!!」

メルフィスは軽々と水の壁を破り、拳に魔力を集中させる。

アインハルト「……………」

打つんじゃないで貫くんだ、それがこの技の力

メルフィス「ハアアアア……………!!!!」

アインハルト「……霸王」

アインハルトは拳に力を込める。

アインハルト「断空拳！」

足先から練り上げた力を源に空を切り打ち出す拳は、まさに断空拳である

メルフィス「なっ!？」

落下してきたメルフィスは空中で弾かれ、数メートル離れた場所に着地した。

アインハルト「ハア…ハア…!!」

地面に両手をつき、バリアジャケットが解けるアインハルト。テイオが近寄って鳴く

メルフィス「……命拾いしたわね」

舌打ちしたメルフィスは銀色の装備を解除し、霧のように消えた。

アインハルト「強い…あれが…魔王の力……」

アインハルトは涙を流した。何故だか自分でもわからない

メルフィスを見ていると、心が痛む。きっと遙か昔に霸王はどこかで魔王に会っているのかもしれない

「?????」

そこは暗い暗い神殿だった。

メルフィス「ただいま戻りました」

?????「ご苦労だったな」

神殿で膝をついたメルフィス。その前では、歪な仮面を被った男が立っていた。

メルフィス「はい……」

アルザス「それにしては随分と体を叩きつけたようだな」

メルフィスは背後に現れたアルザスを見た。アルザスはメルフィスに近寄り、彼女の頬を撫でた。

メルフィス「大丈夫ですわ、アルザス様……」

メルフィスは頬を赤く染めた。

?????「アハハハハハ！」

その横から高笑いと共に、一人の女性が近寄ってきた。メルフィスはその女性を見て、少しだけ気分が悪くなった。なにせこの女は、自分が一番嫌っている女だからだ。

?????「毎度の事ながら笑わせてくれるじゃないかい、メルフィスちゃん」

メルフィス「勝手に笑えばいいわ」

???「あんなちびっこに遅れをとるなんて、アナタも随分と弱くなったものね」

メルフィス「oooooooooo!!!」

???「やめないか、二人とも」

男は神殿の奥で何かを見つめていた。

女性とメルフィスは構えを解いた。

???「まだ我らは目覚めたばかり…それに、覚醒しない羊たちにはそれ相応の魔力が必要になる。」

すると、メルフィスの隣にいた女性はゆっくりと男に近づき膝をついた。

???「ならばその役目、私にお任せを」

???「ほう……」

???「魔力収集に最適な場所がございます…」



#### 第4話 森林の誘惑者（後書き）

―次回予告―

はやて「エクセルくんやなかったか…」

エクセル「当たり前だ…」

フェイト「じゃあ、今私を口説ける？（笑）」

エクセル「フェイトいつの間！？／／／／／」

フェイト「出来ないの？」

エクセル「いやゝあはは…その、なんというか…恥ずかしい／／／／／」

二人「／／／／／／／／／」

はやて「はいはい…じゃあ次回タイトル行くでえゝ

次回 儚き過去の残像」

エクセル「／／／／／／／／／」  
フェイト「／／／／／／／／／」

はせて」「いしまで赤くなるとるんせ……！」

## 第5話 傳き過去の残像（前書き）

ーベルカ戦乱期 ベルカ陣営ー

それはベルカが戦乱の渦の真っ只中だった。陸では数多くの騎士や魔導士が争い、空は戦艦が飛びかい

戦場ではいつも血で満ちていた。それはいつもの事だった

騎士「申しあげます!!」

伝令である騎士が本陣へと入ってきた。女である王の前で騎士は片膝をつき

騎士「敵軍の奇襲を受け、進軍していた卿の部隊は全て…全て全滅しましたッ!!」

女王の表情は次第に険しくなり、傍らにいた銀髪の女性に話しかけた。

女王「いざというときはお前たちが敵軍を殲滅してこい!…悔しいが、この戦は私の負けだ!!」

???「わかりました。将たちに伝えて参ります」

女性はくるりと向き直り、本陣から出ていく

女王「頼んだぞ、闇の書よ…!!」

闇の書。またの名を夜天の書

後にリインフォースと名付けられる彼女の顔は、いつも暗かった。それは悲しんでいるのか、ただ無愛想なだけなのかはわからないが、本人からすれば普通なのだろう。

リインフォース「我が主より、命令が下った」

リインフォースは本陣の外で、仲間に私念通話を送った。

???「そうか。最初から我らヴォルケンリッターを出せばいいものを」

念話の相手は烈火の将であるシグナムだ。

リインフォース「すまぬな将。今回の戦は勝てそうにない…だからなおさら、主は我らを“使う”のだろうな」

シグナム「“使う”…か、確かにそう言えるな。だが、今の主では」

リインフォース「わかっている。その時が来たら、私自らが主を」

すると突然、横から一人の騎士がリインフォースへ小型ナイフを持って突っ込んできた。

リインフォース「……ッ!?」

敵騎士「覚悟……ッ!」

ザシュー！！

鈍い音がした。

敵騎士「なにッ…！？」

騎士は自分の目を疑った。自分の目の前にいた女は、避けようとせずにはただ、素手でナイフを受け止めたのだ。

リインフォースの左手にはナイフが突き刺さっていた。手からは血が流れ、そして刺さっているナイフを持っている男の手首を力強く握った。

リインフォース「暗殺か…さすがに今は驚いたーーーー」

男はリインフォースから離れようともがいていた。

リインフォース「ならば、失敗したとあれば覚悟は出来ているな…」

リインフォースはナイフが刺さった手と逆側の手を男の胸に当てる

リインフォース「“蒐集”」

とリインフォースが呟くと、男の胸に当てていた手に魔力光を纏った球体が握られた。

リンカーコアである。リンカーコアがリインフォースに吸収されると男は絶叫した

リインフォース「ーーーーー」

グシュッ

手に刺さったナイフを無造作に引き抜き、ほおり捨てた。

男の絶叫を聞き付けた騎士達が駆けつけ、倒れた男を連れて行った

シグナム「大丈夫か…？」

リインフォース「問題はない…」

ヴォルケンリッターが出陣し、戦況は大きく変わった。

シグナムを恐れ逃げ出し、ヴィータの攻撃を恐れ自ら命を断つ者もいた。

リインフォース「悲しき戦、悲しき戦い、悲しき我らヴォルケンリッター…一体いつになったら、我らは解放されるのだろうか…」

女王「闇の書、ページは埋まったわね…」

リインフォース「…はい」

リインフォースは闇の書を女王である主に渡した。

女王「これで、私の夢が叶う。この世の全てを手に入れる…」

女王が高笑いし、闇の書を天高く掲げた。近くにいたヴォルケンリッターの面々は、主を見据えていた。

リインフォースは目を閉じ、悲しい表情を浮かべていた。

女王「さあ、闇の書よ！我、アリス・クシャトリアが願いを叶えー  
ー」

ザシュー！！

女王、アリス・クシャトリアの背中を誰かが斬り付けた。

斬り付けたのはリインフォースが操るブラッティーダガーだ。リインフォースは、無表情のまま自分の主を見つめていた。

アリス「なにっ…を！！」

シグナム「黙れ…」

シグナム以外のヴォルケンリッターはもう口すら聞かなかった。

リインフォース「あなたは主に相応しくなかった。ここまで協力してきたのは、闇の書にページを蒐集させるため」

シグナム「今までご苦労だったな…」

アリスは後退りした。

アリス「きつ、貴様、らあゝ！！」

ドクンッ!!

アリスが持っていた闇の書が手の中で脈打った。

アリスは驚き、闇の書を投げ捨てる。すると――

闇の書「炎上」

闇の書が煌めき大きな炎が吹き出す。炎はアリスだけではなく城自体を炎上させた。

アリス「ぎ・・や・ああああ――！！！！ああつ！！あああああつ――！！！！」

アリスは炎に包まれ、焼かれ、悶えながら城の外へ落ちていった。

リインフォース「これで終わった。これで、今回の蒐集は終わった……」

リインフォースは闇の書を片手に持ちヴォルケンリッターを見た。

リインフォース「では行こう。我が闇の書の騎士達よ……次の世代へ――」

闇の書が煌めき、その光がリインフォースを含め全てを飲み込んだ。





「???」「あつ、姉さん、おはようっす」

もう一人は悪魔っ子を印象付ける少女、名前はアギト。ヴォルケンリッターの1人、烈火の将、シグナムをサポートする騎士。またシグナムと同じ魔力性質と私やリイン?と同じスキルである融合フュージョンを用いている。このアギトはベルカ時代に生まれ、永い時の中を生きてきた

その気持ちは、私達は理解出来る。我らが主は本当に恵まれた人だ

リインフォース「主はまだお部屋か?」

アギト「マイスターなら庭でフェイトさん達と通信中ですけど?」

フライパンから焼いたベーコンを皿に分けていくアギト。

リイン「なんでも、アインハルトとフェイトさん達を襲った人物に関して、接点をまとめてみたいですよ?」

(アインハルト…確か、霸王の血を引いていたという人物だったか)

リイン「そろそろ朝食が出来ますので、呼んでくれますか(笑)」

テーブルへ朝食を並べ始めるリイン。

リインフォース「ああ、わかった…」

「庭」

はやて「ヴィヴィオとアインハルトを襲ったのは、メルフィスって

いうベルカ時代の“魔王”と呼ばれた王ちゅうわけで、フェイトちゃんを襲ったのはアルザスって男…」

フェイト《うん…》

エクセル《フェイトの行動を先読みするなんて、どついつ男だよ》

フェイト《顔がよく見えなくて…それに》

はやて「それに？」

フェイト《その男…なんか……ううん、やっぱり何でもない》

しばらく通信が続き、朝食をとった後、調査隊旗艦であるヴォルフラムに向かった。

ーヴォルフラム 会議室ー

リインフォース「第八世界の調査結果は以上です。ご覧の通りに、被害は拡大する一方です」

会議室では、各調査分野の隊長をはじめとするメンバーで対策会議が行われていた。

まずは対策について

出現範囲が広すぎて、調査も含め武装隊の派遣も出来ない。その武装隊に関してもシグナムの隊や知人の隊を動かすにも無理があった。次に、事件発生場所の共通点について

調査班からの報告によると、それぞれの発生場所の共通点は特になし。

リインフォース『イヤな予感がしますね』

リインフォースがはやてに念話を送った。

はやて『そうやね…六課メンバーが動くには船しかないっちゅーのは理解してる。でも、船の手配もままならない……何か手掛かりがあれば…』

その時、ひとつの知らせがあった。

観測班《観測班より八神司令》

観測班から連絡が入ったのだ。

はやて《はやてです。会議中なので、報告は――》

観測班《会議中ならちょうど良い。事件が発生し、敵の体質と現れる原因がわかりました》

はやて『!?!』

はやてを含め、その場にいた全員が息をのんだ。

会議室の中央に研究室の映像が表示された。研究室の台には必死に捕獲した黒い狼型の生き物がいた

観測班「まずは敵の出現場所で事ですが、今までの現場を整理してわかったのですが、どうやら現場は魔力量が高い場所なんです。」  
はやて「魔力量が高い？どういうことや」

すると、事件発生時刻とその前の魔力数値を表す表が表示された。

観測班「これは事件発生現場での魔力数値を表しています。これは発生時刻から一時間前」

表示されている数値は100%となっている

隊長（A）「そんなに高くはないようだが、それが一体どういう関係が・・・」

隊長の一人がボソツと呟いた。確かにこの程度では説明がつかない

観測班「ですが…事件発生の数分前から表していくと」

今度は数分前、先程と変わらない。だが突然、数値が急上昇した。最初はそんなではなかったが、少しすると数値は上昇が止まらず一気に100%へと達した。

隊長（B）「一体なにが起こったのだ!？」

熟年男性の隊長が言った。

観測班《我々も理解不能ですよ…わかるとしたら、誰かが意図的にやったとしか考えられません。もつとも、現代の技術系統では不可能ですが》

リインフォース「……魔力供給弾」

リインフォースが小さく呟いた。それを聞いたはやては……

はやて「リインフォース…？」

リインフォース「古代ベルカに魔力供給弾という物が存在しました」

はやて「魔力供給弾？…魔力を回復出来るってことか？」

念話で会話していた二人に他の隊長たちは気付かない。

リインフォース「はい…私がまだ闇の書と言われていた遙か過去での事です。とある国で私のスキルである蒐集に似せて作り出された大型の弾丸です。それが打ち込まれた地点は魔力供給が自動で行われます」

はやては記憶の中にあるベルカの知識を引き出していた。自分が知っている中で、そんな物は聞いたことがない。

リインフォース「ただ、当時の私のマスターは魔力供給弾の生産をストップさせたのです。その理由は…闇の書が完成したからです」

はやて「あ………」

その後がどうなるかは主であるはやてはよく知っていた。今までリインフォースは闇の書と呼ばれていて、主が変わることに当時のマスターは闇の書の防衛プログラムによる暴走か、あるいは彼女達によるリンカーコアの蒐集による意識不明に陥られたかだ。

リインフォース『もし…この事件に魔力供給弾が使用されているのなら、過去の残りか、あるいは……』

はやて『報告にあった奴らが作っているか』

そして今度は、敵の体質についての説明に入った。

観測班『先程も申し上げたように、魔力量が多い場所にこいつら群がり、吸収するようです。きっとこいつらはそれによって暴れるのでしょう』

魔力を帯びたスフィアを黒い狼に近付けていくと

ギャシユ！

黒い狼が急に暴れ始めた。黒い狼が暴れていると、スフィアが帯びていた魔力を吸い取っていく。

はやて「これは、さすがに危険性は大きな」

観測班『私らからこの敵の名を“ヴァンデビル”と名付けたいと思います』

会議が終わり、はやてはブリッジへ向かっていた。その後ろには秘書官であるリインフォースがついて来ていた

はやて「魔力供給弾の事やヴァンデビルを操っているであろう奴がいるのにも関わらず、地上本部の面々もみんなバカばかりや…！」

はやては魔力供給弾、アルザスなどの事を地上本部に説明していたら、「調査司令なら素早く報告しろ」という事を含め、地上本部の面々に色々と言われたのだ

はやて「ウチだって今朝知ったちゆうに…なあ〜リインフォース？」

リインフォース「えっ！ええ〜確かに…！」

リインフォースはいきなり振られたことに驚き、つい返事をしてしまった。

はやて「今の地上本部に熟年の司令なんかいないし…やっぱりウチらは独断専行やな」

ーベルカ自治領 アルカミナー

ここは元ベルカの国のひとつだった土地。古い建物や建造物が数多く残っていて、この土地はミッドでも有名な観光地だ。



その中心ともなるのがこのアルカミナ城だ。

ベルカ戦争中に突然炎上し、城主も含め多くの兵が死んだとされている。それから復旧後、争いもなく平穏無事な日々が続いていた

そして、ここには――

???「久しぶりに暴れましょう……」

女性はアルカミナ城の中に入り、閉ざされた扉へ入っていく。部屋の中は暗く、今まで誰も入っていないような部屋だった

???「起動できるかしら……」

中央にあつた機械の起動スイッチを押す。すると、画面が表示された

???「ふっ……」

女性は薄く笑い、パットを操作していきスイッチを再度押す

???「さあ…暴れなさい」

―街中―

住民たちが行き来する道の中心に突然、フラスコに似た柱が無数に地面から立ち上がった。

驚いた住民たちは柱に近づくと、柱が青白く輝き大量の魔力を放出する

ヴァンデビル（狼）「オオオオオオオン！！！」

地面から無数のヴァンデビルが現れ、フラスコの近くにいた住民を襲い始めた。

人々は悲鳴を上げ、ヴァンデビルから逃げ惑う。

飛び散る血しぶき、獣の遠声がさらに仲間を呼び集める

その事は直ぐに調査隊旗艦ヴォルフラムのはやてへと伝えられた。

ブリッジ局員（男）「アルカミナで巨大な魔力増大を確認！！！」

ブリッジ局員（女）「さらにヴァンデビルが無数に出現！！今までにない数です！！！」

艦長席に座っていたはやては

はやて「ついに動いたか、リイン、第36空戦魔導士中隊にいるヴィータ教導官と連絡を取って合流!!」

リイン「はいです!!」

はやて「リインフォースは首都防衛隊のシグナム一尉に緊急連絡、それと湾岸救助隊に出動要請!!アーシュライト執務官と高町一尉の通信パットを私へ!!」

リインフォース、局員「了解!!」

―第36空戦魔導士中隊―

???「いいか!!これからアルカミナに向かうわけだが、お前らは地上での避難誘導がメインだ!!」

台の上に立ったオレンジ(?)の髪をし幼さが少しだけ残っている少女は、既に出撃態勢に入った部隊に怒号をかわしていた。

彼女の名前はヴィータ。なのはと同じ教導隊であり、八神家の一人だ。

ヴィータ「空に関しては首都防衛隊と連携して抑える!!相手は得体のしれない奴らだが、あたしが鍛えたためえらなら楽勝だ!!どうだ!？」

部隊員一同「サー、イエッサー!!」

部隊員全員が声を合わせて答える。

ヴィータ「よし、出撃だ!!」

ヴィータの号令と共に部隊員一同が空をかけた。ヴィータの隣にいたリインは

リイン「現場の状態は酷いです…教会の騎士団の人たちも頑張っていますが一…」

リインが悲しそうな表情をしていると

ヴィータ「アルカミナか…」

リイン「ヴィータちゃん？」

ヴィータは一呼吸おき、懐から愛機であり相棒でもあるグラーファイゼンを取り出し走り出す。リインもそれに続き

ヴィータ「リイン！ユニゾン行くぞ!!」

リイン「は、はいですッ!!」

ーベルカ自治領 アルカミナ付近ー

シグナム「アギト、周辺の状況はどうだ…?」

シグナムはアルカミナの上空で愛剣のレヴァンティンを片手に街を見下ろしていた。

アギト「姉御が率いた部隊は後5分、地上は見ての通り…ひでえ有様だ」

シグナムの隣で腕を組んでいたアギト。

シグナム「かつての王国アルカミナ…再び訪れることになるつとは」

アギト「シグナム？ここに来たことあるのか…？」

シグナム「……………昔にな」

空戦に突入し、シグナムと魔導士部隊は乱戦になっていた

シグナム「ハアアアア……………!!」

アギトとユニゾンしていたシグナムは空中にいる様々なヴァンデビルを斬り落としていた。

アギト『これで20体め!!』

シグナム「以前より力強くなっているか……」

カートリッジを装填し、新しい敵を探していた。

魔導士部隊はなんとか敵を抑えている。だが、強力な奴らに襲われ  
たらマズい…早く空を抑えなければ

アギト『シグナム、上だ!!』

シグナム「ッ!?!」

上から来たキメラ型のヴァンデビルがシグナムへ爪を振り下ろす。

シグナム「くっ…!!」

レヴァンティンで弾き返す。ギリギリのところだった、レヴァンティンの強度を強化していなかったら、自分はやられていた

シグナムはヴァンデビルへと仕掛けた。

ーヴォルフラム ブリッジー

局員（女）「第36魔導士部隊、エンゲージ!!」

エクセル《こちらアーシュライト執務官、間もなく現場に到着する  
…!》

局員（男）「了解、城内の制圧を頼みます!!」

リインフォースはくるりとはやての隣から離れ

リインフォース「私も出ます…」

はやて「リインフォース、無茶はアカンで……」

リインフォースに振り返らずにブリッジを出ていった。

はやて「————何を考えとるんや」

「アルカミナ城」

エクセル「ソラ、道のサポートを頼むぞ……」

ソラ《了解です》

城の中をヴァンデビルを斬り倒しながら突き進む。後ろには数人の  
局員が付いてきていた。

ソラ《その先に巨大な魔力が発生しています。恐らく、街中に広が  
っている魔力の中心と推測されます》

エクセル「了解、外の状況はどうだ。」

出来るだけ外の状況を知っておかなければ、いざという時に対応で  
きない。

ソラ《現在、城以外の魔力数値は低下しています。ヴァンデビルへ  
の対応の指揮は高町教導官へと移行しました》

なのはか「…なら、外の事は任せられるな。エクセル達は目的の部屋  
へと突入した」

エクセル「システムか…なら、停止させられる。」

局員達が中心にあったシステムのクラッキングを始める。やがて、システムの動力が停止し城の魔力数値も下がり始めていた。安堵したエクセルはソラへ連絡を取ろうとした。だが――

エクセル「通信が通じない?……ダメか」

通信が通じず、今度は念話を試みるがこれも通じなかった。

その時――

局員「がああッ!!!」

背後から局員の悲鳴が聞こえた。振り返ると一緒にいた局員達がいきなり消えていたのだ。

エクセル「なっ……!?」

俺は咄嗟にデバイスのブランド・ティータに手をかけた。

辺りは誰もいない。あるのは自分の影と黒い点だけだ

ん?…黒い点?

エクセルの目の前にあった黒い点を見た。確か、局員達が立っていた場所……

エクセル「そこかッ?!」

キンッ!!



黒い点へブランド・ティータを振り下ろすと、黒い点から腕が生え、ブランド・ティータを受け止めた。

「正解……」

黒い点から女性が現れた。ブランド・ティータを掴みながら、エクセルへ近づいていく

エクセル「ぐっ……!!」

力負けしているエクセルは

エクセル「お前を争乱の容疑で逮捕する!!」

「余裕なのね……」

女性の回し蹴りがエクセルを襲った。後ろに飛ばされるがうまく受け身を取り、体勢を整える

エクセル「くそっ……!!」

女性の魔力が上がっているのを感じた。

「答えると思って……?」

ケラケラ笑う女性は、エクセルへ近づいてくる。

エクセルは本能的に悟った。こいつには勝てないと

「ふふふ……ッ!？」

ズバンッ!!!

突然、女性のいた横の壁を紫の砲撃が貫いた。  
煙が立ち上がり奥から誰かが入ってくる。

リインフォース「これ以上暴れるのなら、私が相手をする…」

リインフォースだ。だけど、いつもとは感じが違う

???「お前は…!!?」

どうやら女性はリインフォースを知っているようだ。余裕だった女性の顔がみるみる険しくなっていく

リインフォース「やはりアナタでしたか…アリス・クシャトリア」

リインフォースがエクセルの前に立った。リインフォースが女性の名を口にした

アリス「貴様ツ…闇の書!!」

リインフォース「そう呼ぶのは結構…だが、今の私の名前は祝福の風リインフォースだ。」

アリスは笑った。

アリス「祝福の風？笑わせるな！貴様は祝福ではなく破壊の風で充分だっ!!!」

アリスが言い切った瞬間、今度はエクセルの背後から声が聞こえた  
???「それは聞き捨てならへんな……」

エクセルは後ろを振り返った。バリアジャケットを装着したはやて  
だった

アリス「剣十字…そうか、貴様が……」

はやて「うちは最後の夜天の主、八神はやて…アリスって言うたな、  
うちの家族を侮辱したこと…後悔してもらおう」

はやてがシュベルトクロイツを構えた。だがアリスは

アリス「残念だけど、今日は遠慮しとくわ……」

はやて「逃げるんか!!」

アリス「違うわ…正直不利だから引かせてもらっただけ…そちらの黒  
服、そんな物騒な代物をむけないでほしいわ」

エクセルは2本の刀鎌を持っていた。するとアリスは闇に紛れたか  
のように暗い部屋の奥へと消えていった。

エクセル「逃がしたか……」

はやて「あの女、次会ったときは……」

その翌日

機動六課の隊長陣がはやてのいる船、ヴォルフラムへ集まった。

はやて「本日をもって、うちの部隊は特務課に配属となり“特務六課”と名をかえる！！」

はやてがそう宣言した。

ジェイル・スカリエツァイ  
JS事件のような大規模な争乱事件を含め、大災害や一番危険なロストロギアなどを受け持つ特務課、それが俺達の新しい部隊“特務六課”だ

リインフォース「皆には知らせておきたい、今回の首謀者…いや、敵は————」

リインフォースが今から語るの大きな戦いと苦難の始まりを告げるものだ。それは誰もが理解していることだった

リインフォース「恐らく、過去からの復讐者たちだ……」

## 第5話 傳き過去の残像（後書き）

―次回予告―

過去からの復讐者たち。それは想像を超えた。

エクセル「って何か勝手に語りだすと止まらないので、次回予告を  
パツと済ませます。」

次回 地獄の特訓合宿」

なのは「今回は特訓タイム」

全員「ほどほどにお願いします」

## 第6話 地獄の特訓合宿

「エクセルの執務室」

エド「特訓合宿…ですか？」

ソラ「しかも異世界でって、いくら何でも急すぎではないですか…？」

まあ、確かにな

いつ敵が来てもおかしくない状況なのに、特訓なんてな

エクセル「たまには鍛えなおすのも魔導士として、または市民を守る管理局局員として、大切だ。士官学校で習わなかったか？凹凸コンビ……」

嫌なことを口にしてしまった。この二人の戦いからして、凹凸なのはわかりきったこと。突撃思考のエドと冷静沈着のソラと…いかに凹凸ではなかるうと組み合わせは組み合わせだ

エド「わかりました！！俺は行きます！！！」

エクセル「ダメだ」

エド「って即答」

エクセルはソラを見つめていた。ソラは口を開かなかった

エクセル「ソラ、来るのはお前だけだ…」

ソラは目を見開いた。

ソラ「自分は……」

エクセル「命令だ……」

ソラは口籠もった

―高町家 付近―

何故だ…何故なんだ……

なのは「ゴメ〜ン、私この型の免許がなくて〜」

なのはの笑顔にエクセルは運転席のため息をついた。またしてもエクセルは運転手を頼まれてしまったのだ

後ろには、ワイワイ騒いでいる女の子たちがいた。

ヴィヴィオ、コロナ、リオ、アインハルト。ついでに何故かドゥーエが乗っていた。

エクセル「こっちは6人か〜」

ソラ「執務官、お待たせしました。」

黒いのが好きで私服姿のソラが荷物を片手に走ってきた。

ドゥーエ「あら〜／＼／＼／＼」

エクセル「新鮮だな」

ソラが助手席に乗った。ソラの自宅がこの近くな為に本人は直接来たのだ

なのは「じゃあ向こうで（笑）ヴィヴィオたちをお願いね」

エクセル「了解、じゃあ空港でな…」

エクセルは車を走らせた。

パーキングエリア

車を走らせること一時間、空港へはここから二時間ちよつとかかるので全員で昼食タイム…といきたいが

エクセル「デジャビューを感じるな」

エクセルが現在いるのはトイレ、しかも並び待ち

以前にもとある人と一緒だったときも同じ状況だったことがあった。

エクセル「仕方ない…食べてからにしよう」

列を離れて店の中へ、ヴィヴィオたちが席に座ってそれぞれ食事をとっていた

エクセル「さて、俺は何を…ん？」



注文ボタンに気になる文字を見つけた。

麻婆豆腐？……確か、なのは達の世界の料理だったはず……食べてみるか

好奇心でボタンを押し、注文する。

数分後……

目の前に赤い食べ物が置かれた。この中に入ってるのは豆腐かな……でも、この色って

エクセル「パクツ…モグモグ………むぐっ!？」

辛いッ!!なんだこの辛さは………!!

レシートを見てみると“激辛麻婆豆腐”と書いてあった

エクセル「げっ……」

―数時間後 船内―

ここは異世界を行き来する船の中、目的地の世界まで後一時間弱。船内では笑顔で溢れていた

今いるのは八神家、高町家とヴィヴィオの友達、そしてナカジマ姉妹（スバル、ノーヴェ、ドゥーエ）とアリサさんとすずかさん、そして俺とティアナとソラだ。フェイト達は既に目的地へ着いているらしい

楽しいメンバーなんだが……

ガヤガヤ……!!

エクセル「……………眠れん」

一番前という事もあって中々寝れない。苦難していたエクセルに

ソラ「あの執務官……」

エクセル「ん……？」

ソラ「いいんでしょうか、自分なんかに参加して……自分よりエドを……………」

まあ、確かにエドには悪いことをした。けど仕方ないじゃないか……  
……あいつは仕事の書類を片付けてないんだからな（笑）

エクセル「お前も少しは学べ。こんな機会は滅多にないんだからな……それに」

エクセルはソラの胸元にあった十字架のアクセサリーを見た。ソラのインテリ型デバイス、ニルヴァーナの待機状態だ

エクセル「お前がこっそり、ニルヴァーナを整備してたのは知ってたからな……」

ソラ「……………」

エクセル「あと、職場以外で執務官って単語はやめてくれ……エクセ

ルでいい」

「辺境世界」

ここはある家族が住む世界。その家族の住んでいた場所は、これはまた偉くこつた設備なんだな

魔法の練習場もあれば温泉もあり、さらにはロッジまであるはつきり言つてこの場所は既に我が物みたいな感じだ。

エクセル「話に聞いてたより広いな……」

すると、ロッジの方から

????「皆さん、お揃いですね」

紫色の髪をした女の子が走ってきた。

ヴィヴィオ「今回もお世話になります」

彼女の名前はルーテシア・アルピーノ。先の事件や様々な事で協力してくれる頼もしい女の子だ。

なのは「ルーテシアちゃん、お母さんは？」

ルーテシア「ママは今、温泉の整備をしています」

すると、ロッジから女性の声が聞こえてきた。俺にとっては一番聞きたかった声だ

フェイト「みんな」

笑顔でロツジから走ってくる女性がいた、フェイトだ。

でも何故か、止まらないような勢いでエクセルへ飛び付いた。

フェイト「エクセル」

ギユウ

抱きついてきたフェイトの腕がうまくエクセルの首を絞めていた、隣にいたソラは啞然とこちらを見ていた。

シグナム「テストアロツサ、エクセルが苦しそうだぞ…」

フェイトは慌て腕を離した。

エクセル「飛び付くなら今度から体にしてくれ、頼むから…」  
／／／

フェイト「ゴツ、ゴメンなさい／／／／／」

ソラは未だ啞然としたまま、こちらを見ていた。

はやて「はいはい、イチヤイチャするのはそこまでな…」

スパーン！！

どこから出したわからないが、ハリセンで叩かれたエクセルとフェイト。

ソラ「あの…エクセルさんとフェイト執務官って……」

ソラは隣にいたティアナに尋ねた、ティアナは苦笑しながら

ティアナ「ええ、そうよ二人は恋人よ／＼／＼／＼」

何故かを顔赤くするティアナ。かきあげる髪の間隙からイヤリングが見える

ピシッ！

ティアナ「ん？…ソラ？」

ドゥーエ「石化したみたいね……」

―数十分後―

運動着に着替えた前線メンバー達

エクセル「ソラ、ドゥーエ、ノーヴェ、ヴィヴィオ達の事は頼んだぞ」

準備運動をしながら、ノーヴェ達に言った。

ノーヴェ「大丈夫だよ。ドゥーエ姉もいるし、アタッカーの私だっているんだから…相当の事がないかぎりには呼ばないよ……」

ソラ「僕は入ってないんだ……」



なのは『言い忘れたけど、レイジングハートがブラスターを操作して追尾してくるから、気を付けてね』

なのはが念話を送ってきた。エクセルは咄嗟に背後を振り返った

エクセル「げっ…!!」

確かに追ってきた。

しかも物凄い速さで追ってくる。

なのは『捕まったら罰ゲームだよ』

ばっ、罰ゲームだと!?

エクセル「それを早く言えーーーーーッ!!!」

エクセルは再び走った、追いつかれないように全力疾走だ。やがて、走っていたメンバー達が見えてきた

全員（数人）「ハア、ハア、ハア!!!」

ティアナ「ッ!? 追いついてきてる!!!」

ティアナの一言で、全員がスピードを上げた。まるで俺を餌にしたかのように

エクセル「おまえら知ってたな!!!」

―スタート地点―

エクセル「ゼエ、ゼエ、ゼエ……!!」

スタート地点でスバル、なのは、シグナム、ヴィータ以外のメンバ  
―は地面に膝をついていた。あのフェイトでもだ

ヴィータ「おい、大丈夫か……?」

リン「だっ、大丈夫……ですよ」

へとへとになつたリンやアギト達

シグナム「次に行くぞ……それとも、まだ休むか?」

フェイト「だっ……大丈夫だよ、疲れてなんか……ないよ」

―同時刻 川―



ズバァー……ッ！……！

アインハルト「……………」

水斬りをしていたアインハルトは、水しぶきの高さを確かめていた。

メンバー達は水着姿で川へ遊びに来ていた。一人以外は

ドゥーエ「さつきより低い……………」

ドゥーエとソラがアインハルトの鍛練に付き合っていた。完治した体の鈍りを確かめ、水中で拳の威力とスピードを確かめる。

ソラ「……………」

ソラはアインハルトの動きを観察していた。

アインハルト「ハッ……………」

ズバァン！！

アインハルト「ハア、ハア、ハア……………」

息を切らしながら、一旦陸へ上がり水分補給する。

ドゥーエ「ソラ…………ちよつと水斬りやってみて」

ソラ「えっ…………？僕が…………？」

そつよと返事を返してきたドゥーエの顔は真剣だった。仕方なく、

川へ入って腕を水につける。

ソラ「久しぶりに腕を振るうけど……………」

スー……………」

ドゥーエとアインハルトが見守った。

パシャ……………」

ソラ「……………あれ？」

ソラが腕を振るうと、アインハルトみたいに水が斬れなかった。ドゥーエはため息しソラを水から上がらせた

その瞬間だった

ビューーーンズバシュ!!!

水が真っ直ぐに割れ、向こう岸にあった大きな岩が真っ二つに切断された。

全員「……………」

全員がその現象を目撃し、啞然としていた。それをやったソラ本人は、自分の腕を見て拳を強く握りしめた。それを見たドゥーエはちょっとだけ顔をしかめた。

リオ「あっ、あは、あははははは……………」

リオが笑うと、他のメンバーも笑い始めた。

一方その頃――

エクセル「こつ、これをやるのか？」

エクセルの前に石垣の壁がそびえ立つ。その高さはビル四階ほどの高さだ

これをロープで登るのだ、しかも所々に障害がある。

フェイト「執務官にとっては必要な訓練だと思うよ？」

エクセル「それは承知してるけど…なんでこの状態で？」

エクセルとフェイトがしょっているのは重さ3キロほどの荷物バック。

フェイト「もうすぐお昼だから、頑張ろう（笑）」

そしてお昼ご飯を食べて、学生メンバーはお勉強タイムとなり、前線メンバーはそれぞれの訓練に入った。

エクセル「こつやって訓練するのもなんだが懐かしく感じるな……」

バリアジャケットを装着したメンバー。俺と一緒に訓練するのは、

シグナムとアギトだ

シグナム「半年前には教えられなかったが、今回は教えられそうだな。私の技を」

エクセル「そうだな。それでシグナム、訓練内容は？」

シグナム「まずは空へ上がる。」

エクセルとシグナムとアギトは、空へ上がった。けどそれほど高くない、地上から100メートルほどの高さだ

アギト「内容は簡単だ。ただ単に……」

シグナム「全てを見分けて受け流せ……」

エクセル「簡単に言ってくれな……」

シグナムが構えたと同時にエクセルも鞘に納めたまま、ブランド・ティータを構える

シグナム「……紫電」

シグナムが動いた。だが……

エクセル「ッ!?!」

シグナム「一閃ッ!?!」

一瞬間光

まさにその通りだった。離れていたシグナムが一瞬で背後に回り込んで抜刀したからだ

エクセル「あつ、危なかった……」

ギリギリで避けられた。一步間違えれば、俺の体は真横に切断されていたとこだ

シグナム「すまん、ついな……」

ニヤリと笑うシグナム。

エクセル、アギト「気を付けろよ……危ないから」

ーロツジー

あれから一時間弱。

ルーテシア「魔王“メルフィス”の伝記は……あつた」

本棚から持ってきた本の表紙を見たアインハルトとヴィヴィオ。

ルーテシア「私も色々調べてみたけど、魔王が歴史上に出てきた痕跡は少なくてよくわからなかったの。その本の中で、メルフィスが出会った人物のほとんどが記されてるはずだよ」

アインハルト「ありがとうございます。」

ヴィヴィオがページをめくっていくと、気になる2つあった

そこにはこう記されていた。

“魔王の姿は誰しも見ることもかなわず、見た者は虚無に帰り、また見た者は異次元の塵と化す。”

アインハルト「理解しにくいですね……」

ヴィヴィオ「でも、理解しなきゃダメですよ」

ヴィヴィオは気になったもう一方を見た。こちらには、メルフィスの出身のことだ

ルーテシア「メルフィスはオリヴィエ皇女殿下やクラウス陛下と身分も近かったし、戦いの中でも数回戦っただけでそんなに関わりはないとも言い難いけれど……」

ルーテシアはページをめくる。そこにはメルフィスの肖像画が載っていた。

ヴィヴィオ「……あれ？」

ヴィヴィオは肖像画を見た途端、脳裏に映像がよぎった。

そこは焼かれた街並みだった

オリヴィエ「メルフィス、あなたがやっていることは民を犠牲にし

ている。それを見過ごすわけにはいきません!！」

メルフィス『オリヴィエ…毎回毎回思うけど、民を気にかけるようなことは王としては必要のないことだと思わない?』

ふざけた物言いにオリヴィエは、怒りを感じた。

オリヴィエ『私は国を統べる王として、民の声を聴くことを第一に考え、行動している。それとは逆にあなたという人は、その民の声を聴こうとしなかった。だから、このような真似が出来た!！」』

メルフィス『ふんっ!民なんて、屑の集まりよ。』

オリヴィエ『ッ!！」』

二人を炎が取り巻いた

ルーテシア「ヴィヴィオ…?」

ルーテシアがヴィヴィオの肩を揺らした。するとヴィヴィオはアインハルトの方へ向いた

ヴィヴィオ「クラウド…?」

アインハルト、ルーテシア「えっ…?」

ヴィヴィオ「クラウドなの…？」

ヴィヴィオはアインハルトの頬へ手を伸ばした。アインハルトは赤くなり、ヴィヴィオの手に触れた

アインハルト「ヴィヴィオさん…私はクラウドではありません。目を覚ましてください」

アインハルトは持っていた本の表紙をヴィヴィオの頬に触れさせた。

ヴィヴィオ「ひゃっ…!？」

ヴィヴィオは驚いて、椅子から飛び退いた。

ガタツ!

ヴィヴィオ「あっ、とっとなっとなっとなっ!?!」

ガシツ!

ルーテシアが転びそうになったヴィヴィオの手首を掴んだ。

ヴィヴィオ「あれ……」

ルーテシア「ヴィヴィオ、何かあったの？」

ヴィヴィオ「えっと…なんかよく分からないんだけど……記憶の断片かな…オリヴィエ殿下の記憶の断片みたいなのが見えてた」

二人は驚いた。驚くは辺りままだ、霸王直系のアインハルトが霸王



の記憶を見るのはわかるが、直系ではないヴィヴィオが見るのは現実的にはありえない

コンコン！

部屋のドアがノックされ、ヴィヴィオ達の視線がドアに向けられた  
ドワーエ「お嬢様方々　そろそろスターズの模擬戦が始まるわよ」  
「

部屋を出たヴィヴィオ達はリオやソラ達と一緒に訓練場へ向かって  
いた

ズオン！！

突然、ヴィヴィオ達の近くに炎の塊が落ちてきた

ソラ「なっ、なんだ！？」

土煙で前方が見えない。ルーテシアとアインハルトが前に出て身構  
えた。

土煙が晴れると、目の前にはシグナムがいた。

シグナム「————」

所々、バリアジャケットが焦げていた。

アギト「大丈夫かシグナム？」

シグナム「アギト…ユニゾンしろ！！」

アギト「えっ…！？」

シグナム「あいつを叩きのめす…」

アギトは一瞬だけ迷った仕草をしたが、シグナムとユニゾンした。

ユニゾンしたシグナムはレヴァンティンを逆手に持ち、空へ舞った。その先にはエクセルがいた、彼はシグナムから逃げるように上昇していった。啞然として見ていたアインハルトたちは我にかえった

「夕方」

ヴィータ「よおし、じゃあここまで！！」

なのは「お疲れ様」

その一言で疲れが出てきたのか、何人かが膝を折った。当然エクセルもだ

エクセル「しっ、死ぬかと…思った……」

まだシグナムがこちらを睨んでいた。シグナムの攻撃を受け流して



エクセル「……っで！！何で、俺がこんな事を……」

現在エクセルは、入浴中の女性陣の近くにいた。飲み物を配りながらだ

ヴィータ「訓練中にミスした罰ゲームだからだよ」

出来るだけ見ないようにしているけど、ヴィータはやっぱり幼児体  
……

ゴツ！！

エクセル「んがっ！！」

ヴィータ「てめえ、今幼児体型とか考えなかったか……？」

手をバキバキと音を立てながらこちらを向くヴィータ。反論したくても今の状態じゃあ説得力がない。

シャマル「ヴィータちゃん、はしたないわよ！」

ヴィータ「……まったく」

エクセルは別の場所へ

エクセル「そつ、そういえばフェイトとなのはがないんだけど…」

はやて「二人は明日のセッティング中や」

はやてへ飲み物を渡すと

はやて「エクセルくん、半年前のベッドの中での事覚えてるか？  
笑）」

エクセル「//////////////////」

エクセルは顔を真っ赤にした。はやては苦笑しながら、エクセルの下半身をチラ見した。

はやて「あの時はお互いに愛し合ってたけど…今はどうなんやらな  
〜(笑)〜」

さらに真っ赤になったエクセルは素早く飲み物を配り終えて、逃げるように出ていった。

リインフォース「主…あまりいじめない方が」

はやて「なんやリインフォース、エクセルくんを庇うんか？」

リインフォース「そういう訳ではないですが//////////////////」

はやて「さあて〜そろそろ…うりゃ〜」

はやてはリインフォースの胸を力強く握った。

リインフォース「あっ！？主！！？／／／／／／／／」

「厨房」

アリサ「メガーヌさん、スープの方は後3分くらいで完了します」

すずか「炒め物もそれ位には出来そうです」

厨房で手伝いをしていたアリサとすずか。この二人は、今現在風呂場で練り広げられている、はやての暴走を予感して今はこちらの手伝いをしているのだ。

メガーヌ「悪いわね、二人ともお風呂なのに手伝ってもらっちゃって、それにエリオくんも」

エリオはメガーヌの隣で野菜を切っていた

エリオ「女の子たちのお風呂は長いですから、僕はこちらを手伝いをしなきゃ」

するとメガーヌは、エリオの耳元でこう呟いた。

メガーヌ「キャラ口ちゃんと一緒に入ったことあるから？」

楽しそうにエリオの肩を突く。エリオは頬を赤くした

エリオ「いやっ、そのっ、あのっ……／／／／／／／」

メガーヌ「うふふ、エリオくんをからかうのって意外と楽しいわね

」

そして、風呂場から戻ってきたエクセルが厨房の近くで片膝をつく  
アリサ「汗びっしょりだけど……」

エクセル「きつ、気にしないでくれ……」

すると、すずかはエプロンを外してロッジの入り口へ

すずか「なのはちゃん達を呼んでくるね」

ロッジを出ていくすずかを見送り、エクセルはソラがないことに  
気付いた。

エクセル「……あれ？」

すずか「えっと……」

すずかは訓練場に行く道を確認して歩み始めた。歩きながら、すず  
かは星空を見上げた。

すずか「ミッドの星空も綺麗だったけど、こっちの世界の星空はか  
なり綺麗……」

フツと、すずかは歩みを止めた。横にある森の中で、何かがちカチ  
カと光っていた

すずか「なんだろ…?」

森に入れる道があったので、すずかは光っている方へ歩いていくと

すずか「あれって…ソラくん?」

すずかは木の影に隠れ、少し先の方に広く開いた場所にソラが白いバリアジャケットを装着していた。両手には刀身の長い双剣が握られていた

ソラ「ハア…ハア…」

ソラはデバイスである双剣、ニルヴァーナを握り練習用のスフィアと格闘していた。だが、ニルヴァーナの切っ先はスフィアをかすれもしなかった

ソラ「くそっ…!!」

ガサガサ…

ソラ「!?!?…誰だ!?!」

ソラはすずかがいた木の方向を向いて怒鳴った。

すずか「ごっつ、ゴメンね。覗くつもりはなかったんだけど…」

出てきたのがすずかで安心したのか、ソラはすっかり構えていたニルヴァーナを下ろした。





すずかが振るっただけで、スフィアは軽々と四散した

ソラ「すっ、凄い…すずかさん…あなたって一体」

すずかはソラへニルヴァーナを返すと、小さく笑い

すずか「ひ・み・つ」

エクセル「ーーーーーやっぱり、一度試してみるか」

エクセルはソラとすずかのやり取りを木の影で見つ、一言呟くと訓練場の方へ走って行った。

なのは「これで完了だね」

フェイト「うん、明日の試合前にもう一度とチェックして安全確認だね」

バリアジャケットを消し、ロッジへ戻ろうとしていると

エクセル「なのはーーーー！」

エクセルが走ってきた

なのは「エクセルくん？」

エクセルは二人の前で止まり

エクセル「ちよつとお願いがあるんだ」

―翌日―

全員が訓練場へ集まった。何人かは楽しそうに始まるのを待っていた。そして何故かその場にはソラもいた

なのは「じゃあみんな集まった所で、今回の試合のルールを説明します。大人数なので、いくつかのグループに分けたいと思います」

フェイト「メンバーを紹介するね。」

なのはをリーダーとしたチームはヴィヴィオ、ザフィーラ、コロナ、キャロ」

メンバーを紹介した中で、アインハルトはザフィーラを探していた。なのはの方に行ったのは自分の友達と狼が一匹、本人のことを知らないアインハルトはザフィーラが誰かわからないのだ。まさかザフィーラがああ狼だとは知らずに

次はティアナのチーム

アインハルト、リインフォース、シグナム、ルーテシア、リオ

フェイトのチーム

ノーヴェ、スバル、ヴィータ、ソラ、リイン

はやてのチーム

エクセル、アギト、シャマル、エリオ

はやてのチームは一人欠けているが、防御率に関しては最強と言っ

ていい

なのは「ルールは簡単、試合はトーナメント式。各チーム一人一人を公式のライフポイント表で管理、このライフポイントが尽きたら直ぐ訓練場から出てください。ただ、戦い方は色々あるので回復だけ今回もアリとします。後はみんな怪我がないように」

ルールを説明し終わり、対戦相手を決めるためにくじ引きを行う

まずは、はやてのチームとフェイトのチーム

他のメンバーが訓練場から離れる。全員がバリアジャケットを装着した

メガーヌ《それじゃあ正々堂々と…試合開始》

ピッー！

開始の合図が鳴った。

スバル「ウイングロードッ！」  
ノーヴェ「エアライナーッ！」

スバルとノーヴェが空中での足場を作った。

はやて「スバルとノーヴェはウチとエリオが抑える！シャマルは回復に専念。問題はフェイトちゃんとソラくんや、エクセルくんを出来るだけー」

エクセル「その必要ないよ。フェイトとソラは俺が相手をする」

他の場所にメンバーが離れて戦闘をしていた。そんな中、未だ戦闘すらしていないエクセルたち

エクセル「ー」

ソラ「あの…」

エクセル「ソラ、俺と勝負だ…」

エクセルがブランド・ティータを構えた。ソラは戸惑いながらニルヴァーナを構える、その一方でフェイトは2人の戦いを見守っていた

エクセル「ソラ…お前の力を見せてみる」

ソラ「…ッ！」

ソラが掛けた。エクセルへと接近し双剣のニルヴァーナを振るった

キンッ！キンッ！

ソラ「ッ!？」

エクセルはブランド・ティータではなく、どこから出したのか一本の刀でソラの斬撃を腕を動かしただけで弾いたのだ

エクセル「お前の力はそんな物か…」

ヴォン！

刀が消え、今度は大剣だ。これはエクセルの宿したモノがもたらした能力なのだ

ソラ「…ッ！ニルヴァーナ、ガンフォーム！！」

ニルヴァーナ《ガンモード》

ガシユッ！

刀身が長いニルヴァーナの刀身が格納され、逆に今度は銃身が長いガンモードに変わった。

フェイトはそれを見て関心していた。ティアナのクロスミラージュとは設計が若干違うんだと思いつながら、他のメンバーに指示を出していた

ソラ「シヨットッ！！」

ドンドン！！

赤黒い二発の魔力弾が飛んできた。しかも一発一発がやたらと大きいため、それにはエクセルは一瞬だけ戸惑い、持っていた鎌を投げた。

エクセル「固定型なら弾き返せる……」

サツとエクセルは地を掛けた。相手の魔力弾が制御ではなく固定型なら、投げた鎌は魔力弾を弾き返しそのままソラへ斬り込む。そうエクセルは思ったが次に見た光景でその考えは捨てざるを得なかった  
パリンパリン！！

ソラが放った魔力弾は鎌を弾き返すどころか、鎌を破壊しエクセルへと向かってきた

エクセル「うおっ！…と！？」

魔力弾は背後の壁へ直撃し大穴を開けた。

エクセル「……ふんっ、楽しくなってきた」

ソラ「……………」

ソラは顔を伏せた。

なんであんな大きい一発を撃つたんだ

エクセル「よそ見をするな！！」

ソラ「！？」

ソラが顔を上げた時にはエクセルは懐へ入り込み、持っていた剣の刃がソラの顔へと突き付けられた。

フェイト「勝負あり…かな」

降りてきたフェイトがそう告げた。

ソラ「まっ、まだです！！自分はまだーーーー」

エクセル「だったら午後の訓練に参加するんだな」

ソラ「えっ……」

エクセルは剣を地面に差し、ソラへ手を差し伸べる

エクセル「お前がいつまで自分から逃げるかは知らないが、そろそろ…自分の実力を試してみたくなくてきたんじゃないか？」

ソラは自分の手を見た。

エクセル「もし…お前がこれからも自分から逃げ続けるのならば、この手はとらなくていい。けど逆にーーーー」

ソラ「わかりました」

ソラが唐突にそう呟いた。手を伸ばしエクセルの手を掴んだ

フェイト「じゃあ、ソラが特務六課の戦闘メンバーに加わるのが成  
立した所でーーーー」

ガッシュ！



フェイトがバルディッシュを構えた。エクセルはソラの手を離してブランド・ティータを鞘から抜いてソラに下がるよう言った

フェイト「試合だからといって手加減しないよね？」

エクセル「そつちもな…」

2人のライフは2700。同じポジションでの戦い  
フェイトとの試合はこれからはじめてではない。お互いの能力と癖が  
わかりきった上での勝負は格別なものだ

エクセル「じゃあ…」

フェイト「尋常に…」

2人が駆けた。

―その夜―

エクセル「くう…傷にしみるなあ」

温泉につかり、試合と訓練の痛みを癒すエクセルとソラとエリオの  
3人。

エリオ「意外とハードな1日でしたね」

頭にタオルを乗せていたエリオは肩まで湯につけていた。

エクセル「試合の後の訓練が…特にな。なのはもそうだけど、後2  
日も保つのかね」

エリオ「保つんでしょね？」

2人で何気ない会話をしている中、ソラは別の温泉でぼつんと星空を見上げていた。

ソラ「エクセルさんは俺を必要としている…のかな」

試合の時に言われたエクセルの言葉をソラは思い出していた。

ソラ「でも…僕の力は危険なのに…それを知っているのに…  
どうして」

そこへ—————

ドゥーエ「どうして…もないわよ」

と言われソラは驚き、温泉の中で足を滑らせ、溺れそうになってしまった。ソラの手を引っ張り、ソラを助けたドゥーエに対し

ソラ「なっ、何で温泉に…!?!」

ドゥーエ「入りたいからいるんじゃない(笑)」

ソラへ微笑み返すドゥーエ。ちなみにエクセルたちは気づいていない様で、ちゃんとタオルは巻いていた。

ソラ「だっ、だからって男と一緒に————んツ!?!」

ソラの口をドゥーエの唇が無理やり塞いだ。ソラはいきなりの出来事に目を見開き、まだ唇を重ねていたドゥーエを至近距離から見つ

めていた。

唇を離れたドゥーエは、ソラに背を向ける形で湯につかった。

ドゥーエ「変な理屈を言つと、また唇を塞ぐわよ…」

ソラは気づいていないがドゥーエは頬を赤くしていた。温泉のせいではなく、恥ずかしさでのことだ。

ソラ「じっ、ごめん…」

ドゥーエ「今から言つのは独り言だから…」

ソラ「えっ…?」

ソラは背を向けたドゥーエを見た。するとドゥーエは語り始めた

ドゥーエ「あなたが悩んで練習してたからアドバイスしてあげたのに…あなたは何にも聞いてないのね。」

ドゥーエは右手を頬に当てた。ソラはドゥーエの発言に首を傾げたが、実はソラが昨夜訓練していた時にすずかが入ってきたが、そのすずかはドゥーエが能力で変わった姿でありソラはそれをまったく気付かなかつたのだ。

ーミッドチルダ市街地ー

夜中になり、市街地の所々は鎮まりかえっていた。

そんな中、武装局員の男性は一人で自宅への帰り道を歩いていた。

武装局員「すっかり遅くなつたな……」

局員は曲がり角を通ると、目の前を何か横切りいきなり立ち止まった。

武装局員「なんだ…？」

彼は辺りを見渡すが何もいない。

武装局員「気のせいか…」

彼が歩き出すと、その背後で黒い人影が現れ男性に忍び寄っていく。男性は気付くことなく歩いていく。その人影は男性の背中の数メートルまで近づくと、忍ばせていたナイフを出し

武装局員「……………ぐっ!？」

カシュッ!

ドテッ!

人影は男性の首筋をナイフ斬り裂いた。斬り裂いた男性は地面に倒れた

????「……………違う」

―翌日 朝―

ピリピリ

その音が全員が眠るロツジ中に響いた。まだ日も昇っていないので、起きているのはほんの2、3人だった。

鳴っているのはエクセルの通信チャンネルだった。まだ眠っていたエクセルはベットから起き上がり

エクセル「んゝ……」

エクセルは通信チャンネルを開き、相手に呼び掛けた。

エクセル「はい…アーシユライトです」

エド「朝早くすみません執務官、エドです」

通信相手はエドだった。

エクセル「どうした…こっちはまだ日は上がってない、まだ寝てる奴もいるから早急に話せ…」

エド「はい。実はこちらの時刻で今から30分前なんですけど、ミッドチルダ市街地の路上で男性局員の変死体が発見されたんです。」

エクセルはため息をつきたくなった。そういった事件は自分の担当ではないからだ

エクセル「そうか…それで？」

エド「ですが奇妙なんです。その男性は武装局員で襲われるはずも

ないのですが、ただ――――」

エクセル「ただ……？」

エド「体中の血が……その……全部、無くなっているんです」



## 第7話 王の血族たち

―連絡を受けてから六時間後―

合宿の日を早めミッドチルダに戻ったメンバー。特務六課所属の執務官三名は、直ぐ様現場へと向かった。

現場は人集りになっていて、3人が中に入るのも苦労するほどだった。

ティアナ「につ、匂うわね…」

死体を見るために保管してある車内で口元を抑えたティアナが死体の近くに寄った。

フェイト「まあ……ね」

フェイトも同じく口元を抑えた。意外と死体の近くは死臭が酷かった

エクセル「我慢だ…死因は？」

局員「はい、首筋を刃物で切られたものかと。死亡推定時刻は夜中の一時から二時の間かと……」

エクセルは匂いを我慢し、死体の前で。

エクセル「とすると……切られた時点で死んだ可能性は高いか」

エクセルは死体にかげられたシートを少しめくった。処置はしてあ



るから、吐く心配はない

首筋を深々と切られていた。そして問題の“血”は所々しか付着していない

フェイト「なんで血が……………」

局員「目撃者の説明では被害者の近くには誰もおらず、倒れていたから声をかけてみようとしたらそれが死体だったと……………」

ティアナ「そう思わざるを得ないですか…可哀想です」

フェイト「その目撃者は今どこに？」

局員「目撃者なのですが…その、まだ子どもだったので…学校に行かせました」

エクセル「子ども…？」

その言葉にエクセルは反応した。確か発見したのは朝5時過ぎだったはずだとエクセルは思い出していた

局員「はい。一応、身分と学校の名前を確認しました…名前はサラ・ミスズ。Stt.(ザンクト)ヒルデ魔法学院に通う11歳の少女です」

説明を聞いた3人は顔を見合わせた。またかと思いながら、エクセルは

エクセル「じゃあそっちには俺が向かうから、フェイトとティアナ

は周辺の調査といこうか」

フェイト「うん、了解」

ティアナ「この時間だと…急いで登校したヴィヴィオたちに聞いた方が速いわね」

エクセル「了解。じゃあ後で……」

エクセルはその場から急いで退散していった。フェイトとティアナも匂いに耐えきれなくなり、車内から出た。

ティアナ「ヴァンデビルの一件も済んでないのに、忙しくなりそうですね」

フェイト「こういった殺人事件はこれだけで終わったほうがいいんだけど」

どこか不満を隠せないでいるフェイトだった

―その頃―

急な予定だったので、急いで着替えて学校に登校した4人組はとうとうと

ヴィヴィオ「疲れましたね」

アインハルト「はい…それなりに」

コロナ「なのはさんやはやてさんが先生に連絡しておいてくれた助かったよ」

リオ「でも、着いたのが三限目のはじまりでよかったじゃん」

中庭の木の下で4人は昼食を取りながら雑談していると

サラ「あのツ…皆さん」

そこへ弁当箱を持ったサラ・ミスズが来た。

ヴィヴィオ「サラさん どうも」

サラは4人が座っていた所へ腰掛ける（ヴィヴィオとアインハルトの間）

サラ「わっ、私も、ご一緒しても…／／／／／」

ヴィヴィオ「良いですよ（笑） 私たちも食べはじめたばかりなので」

サラは胸を撫で下ろした。直ぐ様、自分の弁当箱を開けて食べ始めた。

アインハルト「えっと…サラさんでしたか？」

アインハルトはサラのことを知らないなので、自己紹介をしようとしていた。サラはアインハルトを見て

サラ「はい。この前転校してきた、サラ・ミスズと申します」

座りながらも礼儀としてお辞儀をするサラ。アインハルトは手を差しだした

アインハルト「中等科のアインハルト・ストラトスです。」

サラとアインハルトが握手した。すると、サラの手を握ったアインハルトは脳裏に一瞬だけ奇妙な映像が流れた。

アインハルト「…ッ!？」

アインハルトはパツと手を離し反射的に身構えてしまった。それに驚いたサラはビクツと体を震わせた

ヴィヴィオ「どうしました?!」

アインハルトは我に返り、慌てて弁当箱をバツクにしまい

アインハルト「おっ、お先に失礼します…!」

アインハルトはその場から走り去った。

コロナ「どうしたんだろ?」

リオ「さあ…?」

ヴィヴィオ「サラさん、大丈夫ですか?」

サラ「はっ、はい……」

アインハルト「ハア…ハア…ハア…!!」

勢い誤って、正門の所まで走ってきてしまった。胸を強く抑えたアインハルトは正門の壁へ寄りかかり、体を落ち着かせていた。

アインハルト「さっきの…あれは……」

すると、下を向いていたアインハルトの前に大きな影が重なった。

エクセル「なにやってるんだ、こんな所で…?」

アインハルトは顔を上げた。そこには執務官服に身を包んでいたエクセルが立っていた

アインハルト「エクセル…さん」

― 駐車場 ―

とりあえず、昼休みが終わる少し前まで俺の車の近くにあったベンチに腰掛けた。

アインハルト「……………」

エクセル「ほらっ……………」

ピタッ

アインハルト「ひゃっ!!!?!」

黄昏ていたアインハルトの頬へ試しに冷たい飲み物を当ててみると、アインハルトはベンチから素早く跳ね退き、こちらに向かって身構えた。

またこれが可愛い反応なのだ

アインハルト「おおおっ…脅かさないで、くくください!!!!」

エクセル「あはは…隙だらけだぞアインハルト（笑）」

赤くなりながら、アインハルトはまたベンチに座って、飲み物を渡した。

エクセル「ヴィヴィオたちはどうだ？」

アインハルト「問題はありません。魔王が襲う隙も私が与えませんか」

エクセル「熱心なのはいいけど、ヴィヴィオに嫌われないようにな」

アインハルト「そっ、そんな事は／＼／＼／＼」

苦笑するエクセル。赤くなりながらジュースを飲むアインハルト

エクセル「さて、俺はそろそろ仕事に入るか……」

アインハルト「そういえば、エクセルさんはなぜここに…?」

校内を歩きながら、エクセルはヴィヴィオたちを探していた。

エクセル「ああ、目撃証言を聞きにな…サラ・ミスズっていうヴィヴィオと同じ年の……」

すると、アインハルトは立ち止まりエクセルへ

アインハルト「サラさんが…目撃?」

―面談室―

エクセル「じゃあよく覚えてないって事だね?」

サラ「はい……突然のことですし、はじめての経験で……それに私、時々おかしくなる体質で」

泣き顔になりながら、少しずつ話を聞いていくエクセルだがこれ以上話を聞くと恐怖のあまりに狂乱する可能性があったので終了した。

エクセル「本人はまったく覚えてない…か」

すると、通信チャンネルのベルが鳴りエクセルは通信チャンネルを開いた。

エクセル「どうした…？」

通信相手は特務六課の通信士だった。相手は少し慌て口調で内容を説明した

エクセル「なに…別の世界で同じ死因が見つかった？」

俺は通信を閉じ室内にいたアインハルトとヴィヴィオに事を説明した。

エクセル「じゃあ俺は行くけど、2人はせめて複数で行動してくれ…後、サラとは一緒にいてやれ」

ヴィヴィオ「アインハルトさん、帰りに聖王教会に行きませんか？」

アインハルト「教会へ？」

2人は廊下を歩きながら帰りのことを話していた。  
ヴィヴィオは教会にいとある人を気にかけているのだ。



―放課後―

ヴィヴィオはいつものメンバーとサラと一緒に聖王教会へ向かっていた。

アインハルト「……………」

アインハルトは歩きながら周囲に気を配っていた。いつ、魔王であるメルフィスが襲ってくるかわからないという考えだ

サラ「あの、アインハルトさん…先程から何をそんなに周りを見渡しているのですか？」

隣にいたサラはアインハルトの仕草に気になって話かけた。

アインハルトは「癖です」と誤魔化した。

―聖王教会―

4人を出迎えたのは、半袖の修道服を着たシスターだった。

????「ヴィヴィオに霸王っ子にお仲間とその友達一名！ようこそ、聖王教会へ！」

シスターの名前はセイン。シスターらしくない口調や態度は別として、彼女はこの教会で保護している人物の世話係を担当していた。ヴィヴィオたちはとある部屋へ案内された

セイン「はい！ヴィヴィオと霸王っ子以外の女の子たち　しばしお待ちを」

セインが扉を開き、まずはヴィヴィオとアインハルトを招き入れた。室内には一つのベッドがあり、そのベッドに一人少女が聴こえるか聴こえないのかわからない静かな寝息を立てながら少女は眠っていた。その周りには心拍や色々ものを計る機器が設置されていた

ヴィヴィオは少女の隣にあった椅子に座り、少女の手を優しく握って優しく語りかけた。

ヴィヴィオ「ごきげんようイクスヴェリア様。」

少女の名前はイクスヴェリア。一年半前に起こったマリアージュ事件の重要人物であり、ヴィヴィオやアインハルトと同じく「冥王」の名を持っているが2人とは違って、彼女はベルカ時代の頃にプログラムが施された眠りに入り、マリアージュ事件に不完全で目覚めた。事件の終結後に再び眠りに入った

早くいえばイクスはベルカ時代から存在する王、その人なのだ。

ヴィヴィオ「今日は報告があります。」

ヴィヴィオは魔王メルフィスのことを淡々と説明していた。その悲しい表情を見ていたアインハルトも心が痛んだ。

しばらくしてから、リオやコロナ、サラを室内に招き入れたしばらくしてから聖王教会を後にした

その帰り道のこと

アインハルト「……………」

アインハルトとサラは帰る方向が一緒だった。無言が続いた、そして最初に口を開いたのらサラだった

サラ「先程の女の子はイクスさんという方のですか…？」

アインハルト「はい…私やヴィヴィオさんの親戚と思ってくれれば……………」

本当は王様の関係なんて言えないので、アインハルトはそう答えた。

サラ「そうですね…」

アインハルト「私が会ったのは本当は去年のことです。最初は信じられませんでした…その、あんな状態だとは」

そんな会話が別れ道まで続いた。アインハルトとサラは別れてそれぞれの道を歩いていた

サラ「……………誰？」

誰もいない場所でサラの前に誰かが仁王立ちしていた。サラは怯え

ながら後退りした

???「……みつけた、わたしの後継者」

その夜、特務六課の駐屯地では会議が行われていた。はやてを含め、エクセルとフェイトはもちろん六課の中にいる各分野の代表だった。

リン「調査の結果を大方まとめても、この変死体の手口や襲い方もヴァンデビルと似てはいますが、血を奪う…なんてことはヴァンデビルはしませんでした。」

リンフォース「少なくとも、これはヴァンデビル以外の何者かの仕業です。より人体の知識と組織があると推測します」

ティアナが立ち上がり画面に今日の時間帯を一时间ごとに表示した。それは各世界での同一の事件だった。

ティアナ「この1日で同一の事件が各世界から報告されています。リンフォース秘書官の言った通り、これには組織が存在する可能性が極めて高いです」

ティアナが座った。次に立ったのは武装隊であるシグナム

シグナム「もし、ヴァンデビル以外の組織が出てきたら武装隊としては大いに結構だが、人数には限りがある。今日1日で民間人を除いてもほとんどが武装隊の局員だ…これは武装した局員の数を減らす敵の策略かもしれない」

はやて「そのことを考えたら、問題がいたる所で発生するもんやでシグナム」

会議室が静まりかえった。

なのは「さてっ…!」

なのはがいきなり両手を鳴らした。全員の視線がなのはに集まった

なのは「私はデバイスルームに行ってきますね」

ヴィータ「ああ、そろそろレイジングハートの改装が終わる時間だな…」

なのはの言葉の意味を理解しているのはヴィータだけのようで、他のメンバーには？マークが上がった。

なのは「そっだフェイトちゃん、ちょっと付き合っ」

フェイト「えっ…? いいけど…」

ーデバイスルームー

フェイト「えっ…!?!?ええええー!?!?!?!?」

デバイスルームに入って、すぐ目の前の光景にフェイトは我を忘れて大絶叫してしまった。

その光景とは――

フェイト「かつ、かつかつ…母さんッ…!!?」

そうなのだ。目の前にいたのはここに居ようはずのないフェイトの母親、プレシア・テストロツサなのだ

プレシア「あらフェイト。悪いんだけど少し静かにしてくれる…」

フェイト「はっ、はい…!」

過去のトラウマなのか、つい緊張して返事をしてしまったフェイト。

プレシアはパットをいじって、水槽に入ったレイジングハートを見つめていた。周りには、シャーリーとマリーがプレシアに指示されながらてきぱきと動いていた。

フェイトはなのはを引っ張って室内の角へサッと移動した。

フェイト「どういふことなのは…なんで母さんがミッドに」

なのは「レイジングハートの改装に手を加えたいって言ったから…」

あはは(汗)

なのはが珍しく目を泳がせた。

フェイト「目が泳いだよ…」

なのは「うっ…（ギクッ）」

フェイトがなのはを問いただそうとしたその時だった。

シャーリー「なっ、なのはさぁ〜ん」

なのは「あっ！シャーリーが呼んでるから行ってくるね（笑）！！」

フェイト「あっ！なのはッ…！！」

逃げたつと心の中で呟いたフェイトだった

―その夜中のこと―

聖王教会

警備の騎士たちがそれぞれの場所を見回っていた。

セイン「今日も月が綺麗だなあ〜」

そんな中、イクスの部屋の窓から夜の月を見上げていたセイン。イクスは星が大好きだとスバルから聞いたセインは、満月の時はこうして真夜中までカーテンを開けて、月明かりを部屋に差し込むようにしているのだ。

セイン「そろそろ月が傾くから今日はもうカーテンは閉めるね…」

ゆっくりとカーテンを閉じて、窓をしっかりと鍵をかけてセインはイクスの周りにあつた機器を再度確認し

セイン「それじゃあまた明日。ごきげんようイクス」

セインは部屋から出て行った。

セインは鍵をきちんとし、ルンルン気分でイクスの部屋を後にした。

騎士「ふわあ…」

見張りをしていた騎士が欠伸をしていると、その後ろを黒い影が通り抜ける。

騎士「ん…?」

欠伸をしていた騎士は不思議そうに背後を振り返る。だがそこには



何もいない。振り返った騎士は首を傾げていると

「????」……………」

騎士「うっ!?!わあ…!」

背後に現れた影が騎士に飛び付き、忍ばせていた小型ブレードをその騎士の首に突き刺した。騎士は何が起きたのかわからぬまま、息絶えた。

「????」……………」

小さな影はそのまま、隣にあった扉へ入っていった。その直後、倒れた騎士を見つけた他の見回りの騎士を見つけ、周りに大きな声で叫んだ。

騎士「侵入者だぁ……………」

その叫びに教会全体が動き出した。眠っていたシスターのデイドやオットーもしくり、巡回をしていたセインがそれに素早く反応した。

「????」ミスった……………」

イクスとカリムの部屋の前に警備の騎士が付き、辺りを警戒していた。

デイド「この部屋だけは何がなんでも守らなければ…」

イクスの部屋の前に、手慣れたデイドもつく。他の2人は手慣れた騎士、これで大抵の侵入者でも対処できる  
少なくとも、デイドはそう思っていた。

騎士「いたぞー！ーッ！！」

遠くで騎士の叫び声が聞こえた、それと一緒に断末魔の叫びも聴こえてきた。それがどんどん近づいてきていた。

ゴクリツと他の2人が唾を飲む音を私は聴き逃さなかった。

デイド「ー！ー！来るッ！！」

デイドはツインブレードを構えたと同時に通路の先にあった扉が吹き飛び侵入者が来る…はずだった。

デイド「………来ない？」

来るはずの侵入者が来ないのだ。デイドはセインに通信を入れ、状況を報告する

セイン《私は一応、潜って教会中を探してくる。2人は警戒を続けて…》

デイド「わかりました、気を付けて…」

イクスの部屋ー

カシャッ………ストッ

小さな影が天井の通気口から降りてきた。どうやら、デイドたちを警戒し天井裏に上がりやり過ごしたようだ

小さな影は足音を消し、イクスへ近づいていく。

???「やつと見つけたわ………冥王さま」

小さく呟いた。その声や体は幼い子供だ、部屋の窓のカーテンの間から月明かりがイクスに照らされた。

???「せつかくの再会だけ………あなたの存在は邪魔なの………」

小さな手がイクスの体へ伸ばした時、あり得ないことが起こった。機器の心拍音が上昇しイクスの瞼が動き、口が動いた

イクス「………やめなさい」

???「…ッ!?!」

小さな影が身動くとイクスの目が開き、その小さな体を起こした。

イクス「久しぶりね」

???「あり得ない………あり得ないことよ………」

イクスが目覚めたことに動揺して、小さな影が後退りした。

イクス「私もそう思ってる。こんな目覚めはあり得ないから…きっと、決められていたのでしょうか」

ベットから立ち上がり、イクスは小さな影を見つめた。

イクス「私を殺すなら、ちゃんと計画を立てて来なさい。でないと――」

イクスの口調はいつもとは違い、まるで“王”の口調だ。

???「そんな脅しは…」

影は懐からナイフを取り出して、投げた。

イクスはかがんで避けた。投げたナイフは窓ガラスを勢いよく割った

カシャーーン!!

その甲高い音がそこらかしこに響き渡った。

音を聴き外にいたデイドが部屋へ駆け込んできた。

???「ちつ…!!」

デイド「待て…!!」

小さな影は割れた窓から飛び出し、逃げ出した。デイドはその小さな体（首）に、王の紋章が刻まれていたのを見逃さなかった。

イクス「彼女も…私たちと同じく王の血を引いた者の一人、決して

争ってはならない血筋……」

デイドはイクスの方へ振り返り、駆け寄った。

デイド「イクス様、お怪我は…？」

デイドが言うと、イクスは先程までの表情とは逆に笑顔へと変わり

イクス「大丈夫です（笑）」

―次の日の朝―

聖王教会の庭で2人は再会した

スバル「……………」

スバルはイクスを見た。

イクス「スバル…その……」

戸惑いながら、スバルを見るイクスはとても可愛く見える。スバルはしゃがみ込み、イクスの手を優しく包んだ

スバル「お久しぶり、イクス（笑）」

戸惑っていたイクスの表情が笑顔へと変わった。それは他人から見れば、姉妹や親子のように見えていた

イクス「はい。久しぶりです（笑）」

スバル「えつとねイクス、あっちにいる2人がお話ししたいって言ってるよ」

スバルが指差した方向には、ヴィヴィオやアインハルトが立っていた。イクスは2人を見つめているだけでスバルが肩を叩かなかつたら、ずっと見つめあっていたかもしれない。スバルがイクスを後ろから押して2人の近くまで行くと

イクス「あつ、あのっ……／＼／＼／＼」

スバルは「私はあっちにいるから」と言っただけでその場所から離れていった。

ヴィヴィオ「イクス、直に会うのはこれが初めてですよね？」

イクスに語り掛けたヴィヴィオ。

イクス「あつ、あの陛下！／＼／＼」

ヴィヴィオ「あはは、陛下はやめてっば〜（笑）」

ヴィヴィオの口調に未だ戸惑いを感じながら、イクスは隣にいたアインハルトを見た。

アインハルト「はじめまして、イクスヴェリア様。アインハルト・ストラトスです」

イクス「ストラトス……？」

イクスは首を傾げた。

アインハルト「イングヴァルト…と言えばお分かりのはずです」

そう言われてイクスはアインハルトの目を見た。ヴィヴィオと同じく虹彩異色にイクスは気づいて、慌てた彼女は足を一步引いて片膝を地面につけ頭を下げた。

イクス「失礼しました！霸王イングヴァルト様の血縁とは知らずにとんだご無礼を…！！」

イクスの口調にアインハルトは目をぱちくりさせた。昔の時代に生きていたとはいえ同じ王だ、いくらなんでも今の時代の自分からすれば、その態度や礼儀作法はあまりにおかしい。アインハルトはイクスの前で膝を折った

アインハルト「顔を上げてください、イクスさん…」

イクス「……はい」

顔を上げてアインハルトを見たイクス。

アインハルト「私はイングヴァルトの血を引いていますが、今の私は王ではありません。だから、そんな顔をしないでください」

イクス「……はい／＼／＼／＼／＼」

ヴィヴィオ「アインハルトさんは照れ屋だけど、とても優しい人なんだ」

ヴィヴィオが立ち上がったばかりのイクスの両肩に手を乗せてアイ

ンハルトをからかった。

アインハルト「ヴィヴィオさん！からかわないでください！／／／  
／」

ヴィヴィオ「本当のことじゃないですか」

アインハルト「もう、怒りますよ！／／／／／／／」

赤くなりながら、ヴィヴィオにからかわれているアインハルト。そんな2人を見ていたイクスは

イクス「クスツ…（笑）」

アインハルト「…？／／／／／／／」

イクスが楽しそうに笑い始めた。口元を押さえて楽しそうに笑っているイクスの顔は幸せが一杯だった

それを遠くから見ていたスバルとは言うところ…もらい泣きしていた。

スバル「うっ！うっ…よかったね…イクス…グスツ！（泣）」



一方、はやてはというとカリムと話し合っていた。

カリム「どう？調査の方は進んでる…？」

紅茶を飲みながら話し合っていた2人。

はやて「いやあくそれが全然進まんから困ってるどころなんや〜あはは…」

紅茶を一口飲んで誤魔化すはやて。

カリム「まあ、仕方ないわね手掛かりが少ないんだもの。」

はやて「ヴァンデビルは膨大な魔力を求めて動き回るってのはわかってるんやけど…最近静かなんや。嵐の前の静けさみたいな感じや」

カリム「本当ね………そういえば、なのはさん達や守護騎士の皆さんは…？」

はやて「なのはちゃんは教導隊に用事があるとかで出かけてる。守護騎士のみんなは駐屯地で訓練三昧、フェイトちゃんとエクセルくんは第2世界に行ってる」

カリム「エクセル？……ああ、あの人ね」

はやて「今の間は忘れとったって事か…？」

カリムは照れるように苦笑した。

カリム「会う機会がないからせいかしら。また会いたいわ（笑）」

― 第2世界 ―

エクセル「くしゅっ！」

エクセルは車の中でくしゃみをした。今、車を運転しているのはフ  
ェイトだから心配はなかった

フェイト「風邪…?」

エクセル「いや、誰かが噂してるんだろ」

エクセルは窓を開けて、車の空気を入れ換える

フェイト「えっと…どっちかな？」

信号機が赤だったので止まっている間に進路を確認する。今2人が  
向かっているのは、武装隊の駐屯地だった

エクセル「この道は左だな…」

地図を確認しながらフェイトに言ったエクセル。信号機が変わった  
ので道を左折した

エクセル「しかし、襲われた武装隊の同員もタフだね。体は重傷をおったのにきちんと証拠画像を残すなんて……」

エクセルは座席の背もたれを倒し両手を首に回した。

フェイト「画像はシャリーに修正してもらってるから、私たちは事情を聞くだけだね」

エクセル「その後は部隊長のはやてに報告して、街を巡回……」

2人で日程を確認しながら駐屯地へ向かった

↓第2世界第119陸部隊駐屯地↓

車から降りると、フェイトだけ部隊の人に案内され部隊長の部屋へ、エクセルは別の場所へ

フェイト「本局執務官、フェイト・T・ハラオウンです。」

フェイトが目の前にいる部隊長に敬礼した。

???「君があ有名な執務官かね……」

フェイトに背を向けていた部隊長が振り返り

???「部隊長のレーチエル・J・エンペラー佐だ。」

エンペラー佐は外形はオヤジだが、これまで数多くの功績を部隊と共に残してきている

フェイト「ではエンペラー一佐、襲われた局員の情報をお願いします」

エンペラー「すまないが部下の情報を公開することはできない。」

フェイト「公開したくないのは理解できます。ですが、公開して襲われた理由を見つけたすのも解決の――」

エンペラー「執務官殿、人には見つけてはならないものもあるのを知っているかね？」

エンペラーがフェイトの言葉を遮ってそう言った。

フェイト「はい、存じています。人には知られたくないことは1つや2つはあるものです」

エンペラー「だがそれが、罪を犯したものであったら……どうするかね？」

エンペラーが窓を開け、葉巻を取り出して火をつけた。

フェイト「私なら本当かどうかを確かめます。」

部屋に葉巻の煙が少しだけ渦巻いた。フェイトにも葉巻の匂いがつたわってきた

エンペラー「ふう〜……」

エンペラーが煙を吐き出した。

エンペラー「もしそれが友人だとしても……か？」

フェイト「……なにを言いたいのです？エンペラー一佐」

フェイトは背を向けていたエンペラーを睨んだ。エンペラーの言い方がまるで、自分や親友のはやての事を言っているようでフェイトは内心腹を立てていた。

エンペラー「私はこう見ても情報収集が得意だね。キミや仲間のこととはよく知っている」

エンペラーが葉巻を灰皿に捨て、フェイトに振り返り近づいてきた。

エンペラー「例えば…闇の書事件の犯人、八神はやて捜査官やその家族構成が元は犯罪者だとか……」

フェイトは拳を握りしめた。

エンペラー「そうそう、お前と一緒に来た男のことをキミは知っているかな？」

フェイトは反応した。何故この男はエクセルのことを知っている？そもそも、エクセルのなにを知っているのか

フェイト「エクセルが…どうしました？」

エンペラー「キミは彼と親しい関係のようだが、知っているのかな？あの男の秘密を……」

その頃のヴィヴィオたちは

イクス「魔王メルフィスが私を殺そうとしたんです。」

イクスが語ったのは、昨夜自分を襲ったのは魔王メルフィスだということだ。だがヴィヴィオは疑問を抱いた

聞いた話では襲ったのは小柄な人影だという。魔王メルフィスが小柄だなんて信じられないのだ

ヴィヴィオ「でも、メルフィスは小柄じゃないですし、体に紋章なんて」

アインハルト「私も紋章なんて見てません」

イクス「紋章といっても必ずしも刺青とは限らないんです。――  
紋章というのは、魂なんです」

―同時刻 特務六課駐屯地―

シャーリー「画像修正完了っつと。これを転送して」

シャーリーが証拠画像を送ろうとしていた時

プレシア「シャーリー、ちょっといいかしら」

プレシアがレイジングハートを持って近寄ってくる。なにやらむず

かしい顔をしていた

シャーリー「なんででしょうか？」

プレシア「レイジングハートの記録メモリーを回覧してほしいんだけれど……」

頷いたシャーリーはレイジングハートを受け取り、パットに接続する。

シャーリー「なぜ記録メモリーを……？」

操作しながらプレシアに尋ねるシャーリー

プレシア「さつき試しに起動させてみたんだけど、変に相性が良くてね……気になって」

シャーリー「ああ……確かに変ですね。大抵のインテリ型は誤作動を起こすはずなのに」

パーツを組み換えたインテリデバイスは大体が誤作動を起こすのだが、まれに相性がいいことがあるのだ。だがそれは、インテリ型でない方の例である

プレシア「バルディッシュユなら設計者がちゃんとしてるからわかるけど……レイジングハートの出所は今だに謎なのよね」

近くにあった椅子に腰掛けるプレシアは額に指を当てた。

シャーリー「レイジングハートさん本人も教えてくれないんですよ

ね……」

すると、記録メモリーが表示された。まずは最近の記録からここ数年の記録を見ていく

プレシア「この辺りのメモリーはいいからもつと前の記録をお願い」

シャーリーはパットを操作し、なのはとの出会いの辺りまでをチェックしていくと

シャーリー「これは…映像データですね。ロックが掛かってるみたいですけど……」

プレシア「大分古いデータみたいね。換わって……」

シャーリーとプレシアが席を交換し、ロックを解除するためにパットの操作を始める

プレシア「固いプロテクトね・・・パスワードが掛かってる。それほどまでにして守りたいものなのね」



## 第8話 明かしてはならない真実

フェイトより早く戻ってきたエクセルは車の運転席に座っていた。

エクセル「……………遅いな」

時計を見て一息。これをもう何回繰り返しただろう

エクセル「あつ……………」

フェイトが戻ってきた。なにやら沈んだ顔だったが、そんなことよりもまずは車のエンジンをかける

フェイトが車の助手席のドアを開け座った。

エクセル「遅かったな」

フェイト「うん。」

エクセル「収穫は？」

フェイト「うん。」

フェイトの返答にエクセルの頭に？マークがうつ。

フェイトの様子がおかしい……………

エクセルはとりあえず、車を走らせた

しばらく海沿いの道が続いた。エクセルは、隣で外を見ながら黄昏  
ているフェイトをチラッと見る

ここまで一言も喋ってない。エクセルは気になって話かけてみた

エクセル「フェイト……何かあったのか？」

フェイト「……なにも」

変わらず短い返事。

ああ、なんか段々気まづくなつて来たな……

フェイト「ねえ……エクセルは私に秘密とかつて話せる？」

エクセル「秘密？……まあ、話せる」

フェイト「じゃあ聞くけど……エクセルは訓練校時代に……相棒の人  
……殺しちゃった？」

キユウウウウウウ……！！

俺はついハンドルをきってしまった。車はガードレールに衝突しそ  
うになり、俺は急いでブレーキを踏み衝突を免れた。運良く、まわ  
りには被害が出ずに済んだ

エクセル「なつ、なにを……言ってるんだ」

フェイト「証拠もある……ライズ・ジエスター。それが相棒だっ  
た人の名前、いきなり行方知れずになつちやっただって……」

胸の鼓動が速くなった。

フエイト「それを隠すために……遺体を埋めたんだよね」

なんで………

エクセル「—————」

フエイト「訓練校の教官も協力したんだよね……もみ消すために」

やめてくれ………

必死に叫ぼうにも、声がうまく出ない。怯えてる？いや……違う

フエイト「なんで………」

なんで…隠してたの？そう言いたいのか

フエイト「なんで…エクセルはなんで………」

エクセル「違う！あれは事故だった！！」

知られたくないことは隠していたかった。

フエイトには知られたくなかった。嫌われたくないから、ただそれだけなのだ。

エクセルはハンドルに頭を二回叩きつけた。けじめの為だ

エクセル「助けてやれたのに…なのに…俺は…相棒を見殺したん

だ」

語られるのは、違う話

エクセル「フェイトは……俺のこと嫌いになつたか？」

フェイトは戸惑いながらも、エクセルの顔を見つめて

フェイト「ううん……エクセルが罪を犯していても、私は嫌いにならない。だって、エクセルは私の……私の大好きな人だから」

エクセルは赤くなりながら、再び車を走らせた。

エクセル「真剣な顔で言われると……恥ずかしい」

フェイトがクスリと笑った。

エクセル「……にしてもフェイト、そんな情報どこから……」

フェイト「あつ、うん。さっき行った部隊の隊長のエンペラー一佐から……」

エンペラーの名前を聞いてエクセルは顔をしかめた

エクセル「エンペラー……確か、陸海空の局員からかなり信用されていて次期准将候補、彼自身や部下もかなりの実力者と聞いているけど……でもなんでそんな人が俺の過去を」

―駐屯地―

エンペラー「協力に感謝するよアルザスくん…」

エンペラーは隊長室にあるソファ―に座っている男、アルザスに言った。アルザスの格好は怪しまれないように、スーツに身を包んでいた。だが顔を知られたくないのか顔にバイザーをかけていた。エクセルの情報やその他もろもろのことをエンペラーに教えたのは彼なのだ

アルザス「いや、礼などいらない。我々の組織のボスはその連中を排除したいと言っている…だが私は、あの女を…フェイトを消すために生まれて来たようなものだ」

エンペラーはゾクツと体を震わせた。最後に言ったときのアルザスの表情にだ

バイザーをつけていても殺気というものは感じるものだ

アルザス「我々としてはキミの野望…いや、計画には協力する。」

エンペラー「ありがたいことだな…一度、キミのボスに会ってみたものだ」

アルザス「直ぐに会えるさ…時がくればな。では、私は失礼する」

アルザスは立ち上がり、エンペラーに背を向けた。

エンペラー「4日後のことはよろしく頼む。キミのいる組織のボスにも伝えておいてほしい」

アルザス「承知した。あなたに運命の導きがあることを……」

そう言つてアルザスは霧のように消えた。消えたあとエンペラーはエンペラー「運命…か。私が望むことに運命は協力してくれるのやら……まあ、それは4日後にわかることか。私の能力を存分に生かすでしょう」

エンペラーは高らかに笑つた。全ての歯車が4日後、彼の思い通りに運ぶことを願いながら

夜中のこと

ヴィヴィオは夢を見ていた。

そこは戦で焼かれている街並みを騎士甲冑を身につけた一人の女性が一人だけで歩いていた。彼女の名前はオリヴィエ

オリヴィエ「クラウドス…ゴメンなさい。私がもう少し素直な人で良かった」

立ち止まったオリヴィエの体が虹色に輝き始めた。彼女は体中の魔力を一気に解放しようとしていた。

その理由は目の前にある。一人の女性が目の前に立っていたからだ。オリヴィエ「クラウドスとの決着はつけました。後はあなただけです、メルフィス………」

メルフィス「私…だけねえ…私は単身でここまで来た、それなりの覚悟をしてね」

メルフィスの体が透き通った魔力色で輝いた。伸ばしていた金髪を短く切り、残してきた

メルフィス「オリヴィエ、私はあなたを殺すのよ。怖くない？」

オリヴィエ「怖いですよ…でも私は死ぬつもりはありません。まだ一つだけ、役目がありますから………」

二人の最後の戦いは始まった。互いの拳が相手を傷つけては体力が保たず、魔力を使っても回復が間に合わない。それを無視してでの、本気の拳での戦い

どちらかが倒れるまで、戦いは続いた。

そして勝利を収めたのは、オリヴィエだった

メルフィス「まだッ！…まだ私は負けては…ッ！…」

地面で倒れていたメルフィスは無理に起き上がるうとしていた。

オリヴィエ「メルフィス…もう終わったのよ。あなたの拳と気持ち  
は充分受け取りました」

メルフィス「綺麗ごとをツ！！私を侮辱するな、また逃げるのか…  
…いつもそうだ！！あなたは何でも特別扱いされてきた。弱虫だっ  
たくせに私より強くなってツ！！…兄さんまで虜にして……なんで…  
私は…」

メルフィスが勢いよく立ち上がった。だがそこにはオリヴィエの姿  
はなかった

メルフィス「オリヴィエツ！？オリヴィエ！！…くっ、ううっ！あな  
たは最後までツ…私を小馬鹿にして…」

メルフィスの周りの炎が大きく揺らめいた。

そこで、ヴィヴィオは目を覚ました。

ヴィヴィオ「………夢」

ヴィヴィオは自分の部屋にあつた時計を見た。

午前5:30

いつもより少しだけ早い時間帯だった。二度寝したいところだが、  
眠れなくなってしまった。



ヴィヴィオ「今の夢って……………」

ヴィヴィオは部屋にあった鏡の前に立って、胸に手を当てた。

ヴィヴィオ「私の……………オリヴィエの記憶なのかな。アインハルトさんと同じ……………でも………」

すると、ヴィヴィオの肩にクリスの小さな手が触れた。クリスが困った顔をしながら、窓口へ指差した。

ヴィヴィオ「どうしたのクリス？」

ヴィヴィオは窓の外を見た。外は少しずつ明るくなっていった。

ヴィヴィオ「あっ……！」

ヴィヴィオは慌てて服をスポーツウェアに着替え、外に出た。

ヴィヴィオ「アインハルトさん……………」

アインハルト「ランニングで近くまで来たので」

ヴィヴィオ「私も一緒に……………」

二人でランニングを始めて30分たった頃、ヴィヴィオが立ち止ま

った。

アインハルト「どうしました…?」

アインハルトは膝を上げながら、後ろのヴィヴィオを見た。ヴィヴィオの表情がいつもより暗かった

ヴィヴィオ「ちょっと……お話があるんです」

ヴィヴィオは休憩を兼ねて、夢のことをアインハルトに全て話した。

ヴィヴィオ「メルフィスが聖王を恨む理由……なんとなくわかっちゃったんです。……アインハルトさん、クラウド陛下も関わっているんです」

アインハルト「えっ…?」

ヴィヴィオ「メルフィスは、クラウド陛下と同じでオリヴィエに勝ちたかったんです。最後の戦い……オリヴィエはクラウド陛下と別れた後にメルフィスとも戦っていたんです。」

アインハルトは驚いた。さすがにそれは知らなかった

今、ヴィヴィオの夢の話聞いて理解は出来る。ヴィヴィオ自身は自覚があまりないものの、クローンである彼女にはオリヴィエの記憶が残留思念に似た感じで受け継がれているのだ。

ヴィヴィオ「結果はオリヴィエの勝利に終わりました。でも、メルフィスはオリヴィエを許しませんでした。特別扱いにされてきたオリヴィエと義兄であった人と愛してしまったクラウド陛下を奪われて……」

ヴィヴィオ「ヴィヴィオは……オリヴィエじゃないですが、オリヴィエの生涯の悲しみやメルフィスに対する気持ちを伝えられなかったことが……」

ヴィヴィオの体がぶるぶる震え、涙が溢れていた。オリヴィエの思いや悲しみがヴィヴィオにのしかかって押し潰そうとしていた

ヴィヴィオ「アインハルトさん……私はどうすればいいんですかッ！？ どうやったら、彼女を……」

アインハルトはヴィヴィオをそっと抱き締めた。

ギユウツ……

アインハルト「大丈夫ですよ、ヴィヴィオさん。」

ヴィヴィオ「アインハルト……さん／＼／＼／」

アインハルト「私も同じです。私の中の霸王は、オリヴィエを守りたい一心でした。だからそんな思いを二度としないために私はアナタを……大事な友達を守ります。私自身の意志で……」

―六課 駐屯地―

局員「魔力数値、一定位置をキープしています」

シャーリー「了解。なのはさん、このままフェイズ2へ移行しますので待機しててください。」

実験室でなのはOKのサインを出した。

プレシア「改良したレイジングハートとの相性も抜群ね……」

シャーリー「はい……」

プレシア「やっぱり……あの映像を見るかぎり、事実なのかしら。」

シャーリーの表情が一気に暗くなった。先日、レイジングハートに保存されていた古い映像は度肝を抜いた。

あれこそまさに開けてはならないパンドラの箱だった

局長「教導官、今から新装備のテストを行います」

なのは「了解。……じゃあレイジングハート、よろうか」

レイジングハート「はい、マスター。コード解除、トリガーを起動します」

エクシードを基本のバリアジャケットに変更したなのは。手には新しいレイジングハートが握られていた

青と白の色をした特殊素材でエクセリオンの砲身と強度を強化、使用者への負担を軽くする拡散AMF装置を装備。そして、プレシアが発案した収束砲と砲撃専用ツールの「アトミックトリガー」を装備このトリガーを使えば、放つまでに掛かる5秒を2・19秒まで短縮される

なのは「レイジングハート、トリガーのカウントをお願いね…」

なのはがレイジングハートに付いたトリガーに手をかける。

まずは砲撃のカウントテスト、レイジングハートがカウントをしていく

出力も良好…後はトリガーを引くだー…

なのはがトリガーを引こうとした瞬間、事は起こった

### 警報

その文字と警戒音が研究室を支配した。モニター画面一杯に表示された

プレシア「どうしたの!？」

局員「教導官の身体に異常発生ッ!! 魔力量増大! とんでもない数値です!! 計器が吹っ切れますッ!!」

シャーリー「なのはさん!?! なのはさん!! 返事をしてください」

通信で必死に呼び掛けるシャーリー、プレシアは魔力量を見て絶句する

プレシア「この魔力量増大は彼女のものじゃない……」

すると、研究室の窓に巨大な蒼白い拳が現れ、自分たちに向かって振り下ろされた。

プレシア「マズい!!」

ピカーーン

ズバーン!!!!

駐屯地から離れていた研究所が大爆発を起こした。

時間帯がまだ午前中だった為に駐屯地の全員の目が釘付けとなった崩れた研究所から現れたのは蒼白い人型の龍だった。

エクセル「あれは…!!」

部隊長室にいたエクセルとフェイトとはやてはその龍が何なのかは理解した。それは自分たちも宿しているモノと同類なのだ

はやて「まさか、なのはちゃんが……」

はやてが呟いていると、龍…スターダストは翼を広げ空へ舞い上がって行った

エクセル「追い掛けるぞ!!」

エクセルがドアへ急ぐ前に、はやての手が止めた

はやて「その前に救助が優勢！フェイトちゃん、スバルたちと協力して救助の指揮を」

フェイト「了解！」

フェイトは部隊長室から出ていった。

はやて「エクセルくんは、なのはちゃんの進路を予測しー」

はやてが指示を出す前に、エクセルはスターダストが映った映像を見ていた。

エクセル「はやて……最悪の展開だ。」

はやてが映像を見るため近寄ってきた。映像にはスターダストを追う空戦魔導士の中隊の姿があった

はやて「……本当に最悪や。でもいくらなんでも速すぎや」

エクセル「俺がいく…後は任せた」

外へ出たエクセルは途中で、ソラたちと出会った。

エクセル「ソラ、エド！フェイト執務官から指示をもらって救助の支援をしてやれ」

ソラ「了解しました。執務官はどこへ!？」

エクセルはデバイスを取り出し、足元に召喚の魔法陣が展開する

エクセル「ちよつとばかり彼女を連れ戻してくる!！」

エクセルの体が浮き、自身の龍を呼ぶ

エクセル「召喚、ジャスティスエターナルッ!！」

エクセルの足元からスターダストとは違い、人らしい人型の龍が召喚される。顔はエクセルに似ていて、背中には天使に似た翼が生え、手甲には剣が仕込まれていた。

ソラ「えっ!?!？」

召喚魔法にビックリするソラとエドはジャスティスエターナルから後退り

エド「すっ、すげえ!?!?!」

ソラ「これが…龍」

ジャスティスエターナルは一瞬で地面から離れて、スターダストの後を追った。

市街地上空では、スターダストが暴れ狂っていた。追尾していた空戦魔導士たちを瞬殺していき、やたらと暴れ回っていた



エクセル「なのはッ……!!」

エクセルが到着したのは、そんな時だった。スターダストは振り返るなり射撃をしてきた。

エクセルはジャステイスエターナルと一体になっていることで易々と避けられるが、もし神龍を召喚していなかったら瞬殺されるところだ

なのはもスターダストと一体になっている。なら話せるはずだ

エクセル「なのは!なぜ暴れる、理由を話せ!!」

思念体になってスターダストへ言い放つエクセル。だが、何の返答もない

代わりにスターダストが突っ込んできた。スターダストの繰り出した拳をジャステイスエターナルが掴み、二体は離れなくなった。

なのは「理由なんて……ないよ」

思念体なのはが出てきた。彼女は泣いている

エクセル「理由がないなら、なんで暴れる!？」

なのは「……見ちゃったから」

見た?彼女はなにを言っているんだ

なのは「私、わからなくなっちゃった……なにを信じればいいのか」

エクセル「意味がわからない！簡潔に話してくれ！！」

はつきり言って、なのはの説明はわからない。

なのは「わからなくていいよー！ー！ー」

エクセル「なっ！？」

思念体のなのはの顔は、もはや彼女のいつもの表情ではなかった。狂っている人の表情だ

見開いた目、情もなにもない顔。俺は似たような人を何人か見たことがある、薬をやっている人も含め

精神に異常をきたした人達だ。なのはは今まさにその状態なのだ

なのは「もう世界は…終わりに近づいてるんだから！！」

その瞬間、なのはの思念体が消えスターダストが動いた。両手の平からピンク色のチェーンが伸びた

エクセル「防御捕獲！？」

ジャスティスエターナルの両手は捕獲され、掴んでいたスターダストの手を離してしまった。上昇した

なのは「！ー！ー！！」

スターダストの片手にピンクの魔力が収束していく。スターライトだ、確信した

収束していく魔力は散らばった魔力ではなく、なのは自身の魔力だ

ということ。それにいつもより巨大だということに

エクセル「やめろ、なのは！！そんな無理やり魔力を収束させたら死ぬぞ！！」

なのは「死んだっていい！世界は終わりなんだからもういつそのことー！ー！ー」

???「なら死ぬがいい」

誰かが呟いた瞬間、一筋の光がスターダストの胴体を貫いた。

スターダストとなのはが悲鳴を上げた。スターダストは粉々に吹き飛び、レイジングハートを持ったなのはが、こちらまで飛ばされてきた

エクセル「なのはッ…！！」

一体化したジャステイスエターナルから飛び出したエクセルは、空中で彼女を受けとめた。衝撃の弾みか分からないが、なのはは気絶していた。

???「急所は外した。感謝するんだな」

エクセルの前に一人の男が降りてきた。バイザーを付け、漆黒のマントに身を包んだアルザスだった

エクセル「誰だッ!?」

アルザス「俺はアルザス。フェイトは元気かな？」

エクセルはアルザスを睨んだ。

エクセル「お前がアルザスか…目的はなんだ！ヴァンデビルを使って魔力を集めて、一体どうするつもりだ！！？」

エクセルの質問にアルザスは嘲笑った。

アルザス「我々が組織だっていることを把握しているとは、さすがは運命の管理者だ。」

エクセル「…！？」

アルザス「だが、目的を教えるのはまだ早い。しかし、何の収穫もないのはつまらんだろうから、俺の目的だけを教えてやる…お前とフェイト・テスロツサの存在を消すことだ！！」

アルザスが憎々しい声音で言った。その言葉だけで闇の矢のようにズシリと体を貫かれたような衝撃を食らった

この男は、俺とフェイトを憎んでいるのか…なら、俺達関わった誰かの筈だ……

エクセル「お前は誰だッ…！？俺と彼女を恨むなら、俺達と関わりのあった人物だというのはわかってる！」

アルザス「ああ…そうだ。だが俺はお前達全員と関わりを持っていない。」

俺達全員だ！？余計に分からない。こいつは一体誰だ

アルザス「お前は、愛する人に裏切られたことはあるか？ないだろうな。お前はまだ知らなくていい……いずれわかることだ」

アルザスが離れていく。

エクセル「待てッ！！」

エクセルが言うとジャステイスエターナルがアルザスを掴もうと拳を繰り出す。

キン！

アルザスに触れようとした瞬間、拳が止まった。まるで見えない壁に阻まれたように

アルザスはジャステイスエターナルの顔の方を見て、笑って言った  
アルザス「久しぶりだなジャステイスエターナル。その内に秘めた感情がうずくか……」

ジャステイスエターナルが雄叫びを上げた。何度も拳をぶつけた

アルザス「……だが、弱点を理解しておくんだな」

アルザスが肩から何かを取る動作をすると、空間が割れた。そこから一本の大きな銃剣が現れ、アルザスはそれを引き抜いた。

エクセル「なっ……!?!？」

アルザス「ブラックシエル…！」

赤黒い砲撃が放たれた。エクセルは防ぐ間もなく、赤黒い砲撃に飲まれた。ジャステイスエターナルは砕け、エクセルと抱えていたなのは地上に落ちていく

その時の六課 駐屯地

プレシア「うっ……ここは…」

フェイト「治療室ですよ……」

プレシアは治療室のベットで目が覚めた。近くにいたフェイトはプレシアの手を握った

フェイト「母さんが咄嗟に電気の防御フィールドを張ってくれたおかげで研究所の人やシャーリー達は大怪我を免れたの…」

プレシア「そう……それで、彼女は？」

フェイトはエクセルがなのはを追っていったのをプレシアに説明した。

プレシア「彼が……」

フェイトがプレシアの看病をしていると、エクセルとなのはが運ばれてきた。

フェイト「エクセル、なのは!？」

シャマル「200メートルもの高さからの落下をエリオとキャロがギリギリ受け止めたのよ。早く治療が出来てよかったわ」

シャマルがベットに2人を寝かすと治療を始めた。

それから一時間もしないうちに治療は終わり、2人はすぐ目覚めた。

エクセル「まったく……」

なのはが「ごめんなさい」と頷くと、会議室にいた面々が薄く笑った

なのは「私は…レイジングハートの中にあつたメモリーを見たの。世界が終わる記録を」

スバル「世界の終わりですか？」

なのはの一言に会議室にいた面々は顔を見合わせた。

ティアナ「いきなり大きな話で理解ができません。」

なのははレイジングハートを置いた。すると、プレシアがレイジングハートを借りて中央の画面にアクセスさせる。

すると、一つの映像が保存されていた。

なのは「見る前に…みんな、覚悟しておいて……これは本当に危険なものなの。きっとショックを受けると思うよ」

プレシアが再生ボタンを押した。そして映像が流れた





## 第9話 絶望と痛みと悲しみを

映し出されたのは、ミッドチルダの全体。その上空や地上にはヴァンデビルが群がり、人を襲っていた。

そしてその上に次元が割れ、ミッドチルダを飲み込んで消滅させるその映像の中には六課のメンバーが数人だけが映っていた。

エリオ「これって僕たちですよね？」

エリオが映像を見て呟いた。確かにエリオやキャロやスバルやティアナがいる、年齢も今くらい。他にはチンクたちや色々なメンバーが映っている

ヴィータ「でもおかしくねえか？」

スバル「どこがですか？」

ヴィータ「わからねえのかスバル？この映像はレイジングハートの中で一番古いやつだぞ、一番古い映像になんでお前らや私達が映ってるかってことだ」

全員が息を飲んだ。

プレシア「レイジングハートは何も知らないそうよ。ただー」

フェイト「ただ…？」

プレシア「この世界に行けてメッセージが出るわ」

プレシアが表示したのは、どこかの世界の名前と写真だ。

エクセル「あーーーーー」

はやて「どうしたんやエクセルくん？まるで知ってるかのような言い方をして？」

エクセル「知ってるもなにも……俺はこの世界でブランド・テイータを見つけたんだよ」

それは一年半前

ちょうどフェイトと会う2日くらい前、俺は上層部の命令でロストロギア回収の為に無人世界「ロストプラネット」にある隠された遺跡へ訪れていた。

そこには侵入者を妨害する罠がいくつもあった。だが俺はその罠の配置を利用してロストロギアであるブランド・テイータを見つけた。その帰り道、航行中に艦船は破壊され、漂流していたところをフェイトに助けられた。

はやて「なら、エクセルくんが行くのが得策やな」

エクセル「何故だ？」

はやて「ちょうど3日後に地上本部で特別会議が開かれることになって、私はそれに呼ばれてるんや」

ああ…そうだったな。なら、俺の船を使って行った方が得策なんだな

エクセル「編成は俺とフェイト、ソラ、エド、エリオ、キャロで行

くとしよう。出発は一時間後にしよう」

解散して、なのはを医務室に送り届けて、すぐに支度をはじめてフェイトと合流した

エクセル「謎はあの世界にありか……まったく、またあの遺跡に行くのか」

フェイト「でも、なんで私をメンバーに加えたの？」

フェイトのいきなりの質問に

エクセル「……フェイトには近くにおいてほしいから」

フェイトが立ち止まって、頬を赤くしながら震えていた。

エクセル「いや、これ本音だぞ？」

フェイト「そつ、それは嬉しいんだけど……いつ、いきなり大胆な……  
／／／／／／」

なんか本人は誤解してるし、自分の世界に入っちゃったみたいだし……引きずつていくか？

プレシア「ちょっと待ちなさい2人とも……」

船へ向かう途中で、アタッシュケースを持ったプレシアが声をかけた。

フェイト「母さん？どうしたんですか、そんなに慌てて」

プレシア「2人にこれを渡しておこうと思ってね」

プレシアがアタツシケースを開くと、何かの装置が2つ入っていた。

エクセル「これは…？」

プレシア「急いで開発した魔力供給エナジーよ。これを腕につけていれば消費した魔力を急速回復できるはずよ」

こんな装置…急いで作ったのか

装置は腕に通して装着するタイプ。装着には特に目立った所はないが、丸いアタツシメントが埋め込まれていた。

プレシア「まだ試作品だけど、2人なら使いこなせそうだから。」

ブリッジで俺は指揮を取った

エクセル「目的地をロストプラネットに設定、各クルーは所定の位置につけ！」

ブリッジクルーが復唱した。

とここでフェイトはあることに気付く、それはブリッジクルーの中にいるはずのない2人を見つけた。

フエイト「何でアリサたちがいるの!？」

アリサ「そりゃあ、はやてに2人を見張っとけって言われてたし…」

すずか「私達も少しは役に立ちたいから(笑)」

エクセル「ええっと…気を取り直して、発進準備！」

咳払いをして2人に指示を出すエクセル。

アリサ「了解!誘導ビーム、送信確認！」

船が地上をゆっくり浮上し、離れていく。雲を抜けて、空の一部が暗かった所で

すずか「艦内重力制御システム作動確認、発進準備完了です(笑)」

笑顔でこちらを向いたすずか。

エクセル「操舵長、艦首を上げる！」

艦首が斜め上を向いたところで俺は号令を出した

エクセル「特務六課 X V艦プロメテウス、発進!!」

出発して早二日が経った。そろそろ到着するはずだ

フエイト「ここまででは順調だね。問題は…」

エクセル「降りてからだ」

それから惑星に降りて、目的の遺跡に向かっていているプロメテウス。

エクセル「よし、着水しろ！」

海に着水したプロメテウス。

ソラ「あれが遺跡ですか？」

遺跡は海の上にあった。見た目は島と違っていい。その上に石造りの建造物がある、それが遺跡なのだ

フェイト「エド、エリオ、キャラは船で待機してね。ヴァンデビルが襲ってくるかもしれないから」

キャラ「了解です、フェイトさん」

エリオ「お任せください」

エド「なんで俺だけいつも…」

エドが角で念仏のように言っていた

エクセル「あの遺跡に…後先見ずに進むお前を連れていったら、その筋肉質の体が細切れになったら困るからな」

―遺跡―

カシャッ！

入り口の前で左腕に魔力供給エナジーを装着してから中に入った。

エクセル「この先、罾が無数にあるから足元にも気をつけてな……」

フェイト「…了解」

ソラ「はい、了解しー……」

ガクンッ！

ソラ「ん…？」

ソラは足元を見た。石造りの床の一部が沈んでいた、そして遠くで何か落ちる音がして地響きが鳴った

エクセル「って言うてるそばから…！」

3人が身構えると、出口のあった方向から巨大な石の球体が早く転がってきた

エクセル「走れッ…！！」

エクセルが言うと、走り出した。球体の速さは勢いを増した

フェイト「ハーケンセイバー…！」

振り返ってバルディッシュを勢いよく振ると、金色のハーケンが放たれた。

だが、ハーケンが球体に当たると

カキンッ！

ハーケンが砕けた。フェイトは目をぱちくりさせ立ち止まってしまった

フェイト「あれ…？」

きよんとしているフェイトに対して

エクセル「あれじゃない！走れ！！」

フェイトは走り出した。

エクセル「ここじゃあ魔力は全て意味がなくなる！！」

フェイト「それを早く言ってよ！」

そう言っているうちに、目の前に扉が見えてきた。エクセルが先に先行し、扉を開ける。

エクセル「早くッ！！」

フェイトとソラが扉に入ると、エクセルは勢いよく扉を蹴って閉めた。

フェイト「エクセル！攻撃が効かないって初めから言っただけだ！」

エクセル「悪い悪い…忘れてた」



苦笑したエクセルにフェイトはバルディッシュを振りかぶる

エクセル「ストップだフェイト！足元足元！！」

フェイトはバルディッシュを振るうのを止めて、自分の足元を見た。  
床の一部が少しだけ浮いていた

ソラ「危なかったですね」

フェイト「そっ、そうだね。危ない危ない……ふう……」

とフェイトが壁に寄りかかると、今度は壁が押し込まれた。

フェイト「えっ………！？」

ガバツ！

床が抜けた。いや、落ちたと言っていい

エクセル「うおわーーーー！！！！」

フェイト「きゃあーーーー！！！！」

ソラ「わああーーーー！！」

3人の叫びが遺跡に響いた。

バシャーーン！！

3人が落ちたのは、小さな島があるほどに広くて底が深い湖だった。

エクセル「ぷはっ！着いた！！」

エクセルが湖から上がった。続けてフェイトとソラ

フェイト「着いたって…ここが？」

髪とバリアジャケットから水を絞った。バリアジャケットが体に張りついているけど、そのうち乾くだろう

エクセル「これだ……」

エクセルが指を差すと、そこには神殿のような場所があった。エクセルが階段を上がった

エクセル「ここにブランド・ティータが突き刺さっていたんだ。」

神殿の中心に何かを入れる筒のようなものがあった。

エクセル「ここに、もう一度刺したら何かが起こる。」

エクセルがブランド・ティータを抜いた。

エクセル「やるぞ？」

フェイト& amp; ソラ「うん（はい）……」

2人が返してきた。エクセルは逆手に持ったブランド・ティータを筒に刺し込んだ

その瞬間、ブランド・ティータからエクセルへ反動が起きた。

持っていた方の手を離れたエクセル。同時に頭の中で何かがフラッシュバックする

エクセル「ぐっ……！！？」

そして、壁一面に色々な絵が投影させた。

フェイト「なに…これ!？」

フェイトの第一声で俺は我に帰った。俺は絵を見渡した  
そしていくつか気になる絵を見つけた

フェイトだ。フェイトが誰かと戦っている絵だ  
髪形からして、今くらいの年齢の彼女だ。そして次に、なのは、は  
やても同様だった

エクセル「何なんだ…これは……」

『良く来たな。運命の選択者たちよ』

エクセル「!？」

誰かが語りかけてきた。他の2人は気付いてない…これは…念話か  
…？

エクセル『誰だ!？』

『私かわからぬということは、まだ覚醒してはおらぬのか……』

覚醒？なにを言っているんだ…

エクセル「覚醒とはなんだ？それに、レイジングハートは何故この場所を知っている？」

『レイジングハートとは観察者のことか？』

観察者：？レイジングハートが観察？

エクセル「やっぱり知っているんだな。教えてくれ、世界の終わりとは何なんだ？」

しばらく間があいた。まだ2人は絵に夢中になっている、こちらにはまだ気付いていない

『世界の終わりとは、次元空間を含めた全ての世界が消滅し無に帰ることだ。』

俺はそれを聞いて度肝を抜かれました。消滅するだって？全部が？

エクセル「何故だ……」

試しに聞いてみた。

『それを聞くのか？運命の選択者よ。よく考えてみる、お前達は今戦っている者達や仲間たちを恨んでいる者のことを…』

エクセル「まさか…俺の仲間を疑えというのか！？」

『そこまでは言っていない。だが、急いだ方が良いかもしれないぞ……。そろそろ時が動き、世界が狂い始める。それを選ぶのは選択者であるお前とそこにいる二人の役目だ：エクセル・アーシユライト。それと、自分を見失うなよ』

エクセル「待て！！まだ聞きたいことが――」

声が聞こえなくなった。俺の声に驚いたフェイトとソラがこちらを向いた

フェイト「どうしたの？」

ソラ「誰かいたんですか？」

2人の反応からして、やっぱり2人には聞こえなかったんだな

エクセル「何でもない。でも、収穫はあった、そろそろ戻らないと――」

エクセルはブランド・ティータを引き抜いた。投影されていた絵が消えた

フェイト「うん、そうだね。でもどうやってここから出るの？」

フェイトが周りを見ると、出口になるような穴や入り口はない。落ちてきた天井もすっかり塞がっていた

ソラ「砲撃で撃ち抜きますか？」

フェイト「なのはじゃないんだから、簡単に言わないですよ……」

2人の言い合いにエクセルはため息をついた。

エクセル「しょうがない。プロメテウスに連絡して、キャロに召喚魔法でー」

その時だった。

水面から何かが飛び出した。それは魚人のような姿のヴァンデビルだった

背中の背鰭は、刀のように鋭くて擦っただけでも斬れそうだ

3人が散開した。

エクセル「ヴァンデビル!? . . . . .ここなら攻撃も出来る!思い切りやってくれ!」

フェイト&ソラ「了解!」

直ぐ終わると思った。

だけど、あのヴァンデビルは意外とすばしっこくて、倒すことが出来なかった。

フェイト「ハア...ハア...」

エクセル「すばしっこい!」

神殿でソラが構えていた。

ソラ「このッー!!」

ガンモードのニルヴァーナでヴァンデビルに撃つも潜って弾かれる。

ソラ「潜って弾かれるなら直接斬る…!!」

ソードモードに換えたニルヴァーナを構えた。すると、ソラの背後から一匹のヴァンデビルが現れた。

エクセル「ソラッー!!」

エクセルが声をかけたことでソラは気付いていたが、ソラが防御に間に合わない

ソラ「ッー!?!」

ソラは「やられる」と思った。だがその瞬間、ソラの中で何かが弾け散った

ズバツシュー!!

生々しい音がした。エクセルは目を見開いた

ソラが一瞬、高速魔法で移動したように見えてしまった。背後から来たヴァンデビルの避けられない攻撃を、ソラは高速スローモーシヨンのように見えるほどの動きで避け、ヴァンデビルの体をニルヴァーナで細切れにしたのだ

フェイト「ソラ……」

続けて残り二体のヴァンデビルが一斉に襲い掛かろうとするも

ソラ「うおおおおー！！！！」

ソラがまたもやスローモーションのように、二体の真上に現れ一撃のような速さで相殺した。

プロメテウスに戻って、早速はやて達に連絡をしようとブリッジにいた。だがー

アリサ「おつかしいわね、通信が繋がらないわ」

すずか「こっちも……」

通信を試みるも、うまく繋がらない。

フェイト「電波障害にしてもミッドから距離はあるし、もっと近づいてみないと」

フェイトの言う通りだ。俺はしょうがなく、指示を出し戻ることにした。

エクセル「嫌な予感がする……」

それから2日経ち、ミッドの近くに来てても通信は回復しなかった。

フェイト「本局にも繋がらないなんて」

フェイトは腕を組んだ。

エクセル「空間全域に通信障害なんて、考えたくもないな」



フエイト「じゃあ、意図的な妨害ってこと？」

口には出さなかったが、考えているのは正にそれだった。誰かが意図的に通信を妨害しているとしたら考えられない

エクセル「とりあえず空間を出よう。全クルーへ、警戒体制レベルを厳に移行する……武装局員はB装備で待機」

予感が外れていればいいが……

船が空間から出た。

アリサ「なっ、なにこれ!？」

アリサが通信を繋いだ瞬間、画面に一人の男が映し出された。

フエイト「エンペラー―佐!？」

フエイトが言った。画面に映っていたエンペラー―佐の階級が中将に変わっていたことに俺は気付いた

エンペラー 私は中将の権限をもって、海（本局）の奴らに…宣戦布告する!!海の中は、犯罪者を管理局全体に忍ばせている。これはあつてはならない行為である!!そもそも――

エンペラーの演説が船全体に響き渡った。エンペラーの周りに証拠らしき文書が出ていたが読み取ることができない。この放送の中で大勢の局員たちが雄叫びを上げていた

この放送は2日前から出されていることが確認出来た。

だが、なぜ誰も反発しない？それに何故エンペラーが中將の座に……

思索していると、通信の音がブリッジに響き渡った。どうやら他の奴らまで啞然としていたらしい

アリサ「これは……はやてから!？」

はやてからの通信で俺は六課は無事だと確信した

はやて 驚いた気持ちはわかる。私たちも同じやったから

はやてからの通信はどうやら六課からではなかった

エクセル「いない間にミッドで何があったんだ？」

はやて 会議の内容で次の地上本部の司令は誰がするのかって案が出たんや。その話になった途端、私と他数名を除いて、会議に参加してたお偉いさん達全員がエンペラーを地上本部の司令に任命したんや。そして数時間後に演説があつて、地上部隊や空戦部隊が全て呼び出されて……思い出すだけでも腹が立つ!!

通信越しで、はやてが机を叩いた。

はやて 彼はロストログアの違反保有者、裏の犯罪者だったんや!!

エクセル「なっ!?!？」

はやて それを使って陸空局員のほとんどを掌握したんや!!他に

も、市民の10%ほどを……

はやての怒りがだんだんわかってきた。だから反発する人がいないんだ

歯向かえばロストロギアで洗脳するか……笑わせてくれるな

エクセル「はやて達は大丈夫だったのか」

はやて エンペラーは、邪魔なうちの情報や履歴を公表したんや。なのはちゃんに関してはこの前の件で令状がかかっているみたいや……あの時いた魔導士隊はエンペラーの部下ちゆうことや。なのはちゃんは部屋に閉じこもってしもうた、大事な教え子たちと戦ったのが相当シヨックを……

フェイト「待つてはやて！六課が襲撃されたの!？」

はやては暗い顔をしてしまった。

はやて ミッドや他世界の魔導士部隊が集まって駐屯地はタコ殴り、あつという間に火の海で犠牲者も数人。今隠れてるのはカリムの所やけど、いつ見つかるか

カリムさんがいる場所といえは聖王教会か……

エクセル「俺たちも直ぐ降りる。だから待つていてくれ、はやて」

通信を切る前に、はやては泣き顔で笑った。

フェイト「エクセル……はやく合流しよう。転送ならバレないし……」

パンツ！！

エクセル「わかってる……」

エクセルが目の前の卓に、何度も握り締めた手を叩きつけた。

エクセル「これが急がなかった結果なのか……」

ぶるぶる震えた体を抑え、手を最後に思い切り卓に叩きつけた。

ー聖王教会ー

転送してきて、直ぐ目に入ったのは怪我人たちだった。庭のほとんどが怪我人で一杯だったのだ

エクセル「酷いな……」

教会の中を歩きながら、はやて達を探していると、デイドとドウーエに会った。

デイド「エクセルさん…来てらしたんですね」

俺を見るなり、髪形を気にかけてるデイド。

エクセル「今来たんだ。はやて達は？」

デイド「本堂の方で、陛下やお嬢さま達と一緒です。」

エクセル「そうか、ありがとうデイド」

エクセルとフェイトはディードの隣を通り過ぎ、本堂に向かった。

ドゥーエ「ねえねえソラ……」

ソラ「ん…?」

ディード「エクセルさん…何かあったんですか?」

ソラは遺跡や着いた時のことを話した。

ドゥーエ「そうなの…まあ、仕方ない反応よね」

ソラ「俺も驚いたよ」

ドゥーエがため息をした。

ディード「とりあえず他の皆さんの所へ、エリオやキャロたちも心配してるみたいです」

ソラは後ろで暗い顔をしていた2人を見た

ソラ「じゃあ案内して、俺も気になってたから」

ドゥーエ「……………あらら?」

ニヤニヤしながらソラの顔を見たドゥーエ。どうやら気付いたようだ

ソラ「なっ、なんだよ……………」

ドゥーエ「僕…じゃなくて、俺に変えたんだ」

ソラ「あっ…！／／／／／／／／／／／／／／／／」

真っ赤になりながら、口元を押さえる。

ドゥーエ「あははは、可愛い〜（笑）」

デイドは2人を見た。デイドからすれば、微笑ましく見えた

ー礼拝堂ー

はやて「来てくれたんやな……」

はやての顔は予想より酷かった。隣では、リインフォースやヴィータがいた

ヴィヴィオ達は、十字架の前で祈っていた。

フェイト「4人はなにを？」

ヴィータ「まあ、色々あってな……」

リインフォース「2人の友達だったサラ・ミスズはご存知ですよね」

リインフォースが念話で説明してくれた。

エクセル「あの子がどうしたんだ？」

リインフォース「事が起こったのは駐屯地が襲撃された同じ時間帯で、彼女たちは下校途中だったそうです。街中で、メルフィスが襲ってきたと」

エクセル「それで、ここまで？」

リインフォース「問題はここからです。メルフィスの姿をとったのがサラだったと」

エクセルは驚いた。あの弱気な子がメルフィスだって？

リインフォース「どうやら彼女は教会に忍び込んでイクスヴェリアを殺そうとしたアサシンだったそうです。」

エクセル「待てよ…じゃああの子も王族なのか」

リインフォースがコクリと頷いた。

リインフォース「どうやらメルフィスの子孫だったようです。虹彩異色はなかったものの、身体能力とバリアジャケットはあったそうです」

エクセルは額に手を当てた。

フェイト「ヴィータ、はやて…その、なのはは？」

ヴィータとはやては表情を暗くした。この後、部屋を見てくると、なのはは廃人同然だったがフェイトの説得でなんとか持ち直した。

カリム「では、お話を聞かせてください。私の令言とあなたが聞いた声が語ったことを」

2人だけの部屋でエクセルはカリムに全てを話した。世界の終わりの意味や起こり方も全部話した

カリム「私のとは異なりますね。私が見たのは今の現状と、世界を救う選択者が現れると……」

また選択者か……

カリム「私の読みが正しかったら、選択者は貴方かもしれませんよエクセルさん。」

エクセル「……運命の選択者」

カリム「えっ……?」

エクセル「自分は、運命の選択者だと言われました。その意味がなんなのか……」

はっきり言つて、自分がなんなのかわからなくなってきた。運命の選択者だとか、わけのわからないことばかりいつもこうだ…前回は、その前も

キイイイイン!

脳内で何かがフラッシュバックした。



エクセル「ッ!？」

強烈な頭痛が襲ってきた。俺は頭を押さえてその場にしゃがみ込んだ。

カリム「エクセルさん!？どうしました!！」

カリムの声がかすれて聞こえてくる。体から力が抜けていく、魔力も抜けていくのもわかった

俺はさつき…なんか気になることを思っただけ…前回っでなんだ。まるで同じことが前にもあったみたいない方じゃないか……

さらに頭痛が激しくなった。意識が遠退いていく

そっだ…魔力回復エナジーを使え…ば……

俺は痛みを堪えながら、未だ左腕に装着していた装置に手をかけた。どうやって使えばいいかわからなかったから、思い切り力を入れてみた

キュイイイイ……ン!

静かな音がした。左腕から魔力が体中に流れ込んできた

エクセル「はあ…はあ…はあ…!!！」

頭痛も治まった。魔力も元に戻ったから体も軽くなった

カリム「大丈夫ですか？」

エクセル「はい……でも、何か……重要なことを、忘れてる気がする」

エクセルは立ち上がった。すると今度は

キーン！

エクセル「！？……来る！！」

そう言った瞬間、地面が大きく揺れた。

外に出てみると、飛行型のヴァンデビルが空を覆っていた。

エクセル「怪我人たちを中へ！！」

カリム「はい……！」

カリムが走っていく。俺はもう一度空を見た

既にフェイトやシグナムたちが戦っていたのがわかった。ブランド・テイータを取り出すと、また脳内で何かフラッシュバックした

エクセル「！？……なんだ、この場面……どこかで見たことが……いや、考えてる暇はない！！」

バリアジャケットを装着し、空へ上がった。

追い詰められていた。ヴァンデビルの多さは普通ではない

教会の前ではスバルやソラ達が奮戦しているが、突破されるのも時間の問題だ。

なのは「エクセリオン！バスター……ッ！！」

なのはがアトミックトリガーを引いた。引くとエクセリオンバスターが放たれ、ヴァンデビルの集団の一部が広がるが直ぐにふさがってしまった

なのは「このままじゃ、押し切られる！！」

マガジンを交換していると、数匹のヴァンデビルがなのはへ迫った

なのは「アクセルシューター、前方に集中！シュー……トッ！！」

フェイト「ファランクスシフト！！」

フェイトがランサーを放ち続けた。

フェイト「これで……！！」

隣にいたシグナムがレヴァンティンに鞘を接続し、矢をつがえる。

シグナム「30だ!!」

シュツルムファルケンを放つ。だが黒い渦に吸い込まれていく矢は、横から来た赤黒い矢にはまばれてしまった。

アルザス「やあ、シグナムにフェイト。苦戦中のようだな」

乱入してきたアルザスは弓に次の矢をつがえシグナムたちに向けた。

フェイト「アルザスッ!!」

シグナム「貴様がアルザスか…私の技を打ち消すとは、中々の男だ」

シグナムはレヴァンティンを鞘に納めた。アルザスはバイザー越しに笑った

アルザス「ありがとうシグナム。だけど…もうすぐ扉が開く。キミやフェイトには大人しくしてもらわないとな…」

弓と矢を捨て両手に剣を出現させる

フェイトとは別の場所で、エクセルは頭痛に悩まされながら戦っていた。

エクセル「このッ…!!」

これで何体目だ？頭痛が酷くて集中できない

エクセル「ライトランサー…ッ!!」

エクセルがランサーを展開する。

「???」おやおや、お疲れのようだな」

ヴァンデビルが下がっていく。変わって顔は見えないが王の冠みたいなものと全身が真っ黒なマントで包んだ男が現れた

エクセル「誰だ…!?!」

奴を見た瞬間、体が怯えだした。

「???」私がわからないのか、エクセル?」

エクセル「なに…!?!」

その時、辺りが暗くなった。

「???」時は来た。」

皆既日食だ。太陽が3つの月のひとつにおおわれた。だが、いつもの月の配置じゃなかった

「???」「キミたちを我ら『メセサリウス』の世界に招待しよう」

男の後ろにヴァンデビルに捕われたメンバー達がいた。

なのは、フェイト、はやて、ヴォルケンリッター、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、ソラ、ドゥーエ、ヴィヴィオ、アインハルトにリオやコロナまでいた。全員がボロボロだ

エクセル「目的はなんだ!?!」

???「混沌だよ。この世界や全ての世界を混沌に包み込むのが、我がメセサリウスの目的だ」

エクセル「ふざけるな…顔を見せろ！もし混沌を望むなら俺に顔を見せろ！！」

ダメだ。奴の顔を見たら…

男が俺の前に近づいて来た。男は顔の辺りが明るくなった

ダメだ！見るな！！

頭がそう叫んでも俺の体が許さなかった

そして、俺は男の顔を見た。だが俺は恐怖することしか出来なかった

エクセル「嘘だ……そんなはず……」

俺は男の顔に見覚えがあった。その顔は死んだ相棒のライズ・ジエスターの顔だった

エクセル「ライ……お前が」

怯えた、俺が怯えていた。気付けばヴァンデビルに拘束されていた

ライ「驚いたかエクセル？俺が生きていることを」

エクセル「嘘だ……！？お前は……俺が……！！」

殺した。俺はライを殺したはずなのに

ライ「そんなことは気にしなくていい。キミたちには我々の世界に招待しよう、その前に生け贄として」

ライが上昇したヴァンデビルがエドを抱えていた

エド「執務…官…すみま…せん」

エクセル「エド…！？生け贄って、まさか…！」

ライ「ああ…こうするんだ」

ライがエドの首筋に手を置くと

バキッ！！

エドの首がいとも簡単飛んだ。返り血が顔にかかった

捕まっていた何人かは目を背けた。他の何人かはライを倒そうとヴァンデビルを振り払おうとしていた

だが、近くにいたアルザスやアリスに切っ先を向けていた

エクセル「エド……………」

俺は首が無くなったエドの胴体を見た。頬からかかった返り血が落ちる

仲間が殺されたのに、不思議と悲しみが沸き上がって来なかった。だが、逆に沸き上がってくるのは心の底から来る怒りのみだった

エクセル「ライ…お前——！！」

エクセルの魔力が爆発しヴァンデビルは消し飛び、魔力の渦は空へ柱になって放出された。

それが日食と月の中心で六王星の陣を描くと、その中心が開いた。

ライ「さあ、行こうか運命の選択者エクセルよ。失われた美しい都へ」

光が俺達を包んだ。

全員が悲鳴を上げた。ある者は主の名前や友達、娘の名前を叫んだり、かばったりしていた。

フェイト「エクセルッ！！」

ヴァンデビルを振り払ったフェイトがこちらに飛んできて、手を伸ばした。

エクセル「……フェイト」

虚ろな目でフェイトを見つ、自然と手を伸ばした。

だが、光の純度は増し

次に来たのは引っ張られる感覚だった。フェイトは上へ引っ張られる

フェイト「エクセル……ッ！！」



俺の体も上へ引っ張られる。俺の意識は、そこで途切れた

## 第10話 転移（前書き）

暗い所は大嫌いだ。

いつも俺の邪魔をする。俺が光を照らしても明るくなるのは照らした一帯だけ

暗い所なんか大嫌い

それは闇だから。大切な者たちを容赦なく取り込む嫌な闇

そして、大事な記憶から何まで全てを持っていく。もしこんな闇から俺を救ってくれるのなら、俺はその人に感謝するの？

エクセル「するわけないか……」

周りを見回しても闇、闇、闇……

俺は負けたんだ。俺が殺した相手に……

エクセル「俺の全てを持っていけ。俺はもつ……どうでもいい……」

## 第10話 転移

気が付くと、そこは見知らぬ天井だった。

珍しい作りだな。全部煉瓦じゃないか……

????「あつ……！」

まだ意識が薄いせえか、周りがぼやけて見えた。

木製のドアが開いて、誰かが近寄ってきた。

????「……よかった」

最初は何と言っているかはわからないが、どうやら助けられたようだ。

????「でも、まだ動いちゃダメだよ」

女の子の声だ。最初はわからなかったけど、今なら良く聞き取れる。そこでまた俺は眠った

次は気分が良く、すぐ起き上がった。

エクセル「ここは………」

周りは煉瓦と石で作られた古い部屋だった。ベッドも古い、それに  
――

????「スー…スー……」

ベッドの角で水色の髪をした少女が小さな寝音を立てながら寝てい  
た。

エクセル「誰…?」

俺の一言で少女は目が覚めた。片目をこすり、まだ眠そうな顔でこ  
ちらを見た

????「あっ…おはよう…起きたんだね。」

少女が立ち上がった。

????「私はリリヤ。お兄さんは?」

リリヤと名乗った少女は、ロープをはおっていて水色の髪をひとつ  
に結び目は薄いオレンジ色、身長は俺の胸元くらいで年齢は15、  
16歳で胸もそこそこ…じゃなくて、顔はなんて言うんだろ…俺に  
似てる

エクセル「俺はエクセル…あれ?」

名前だけ覚えてる。でも他のことは覚えてない、どういうことだ…?

リリヤ「エクセルさんか」(笑)「あっ、これ…あなたの服ね。」

服？えっ……まさか……

俺は自分を見下ろすと、何も着ていなかった。

しばらくしてから、俺は真っ黒な質のいい制服を着た。

リリヤ「カッコいい服ですね。後はこんな珍しい物が……」

それは管理局のIDカードだった。

時空管理局 特務六課？なんたる、すごく大事なことなような……

エクセル「ここって何処なんだ？」

リリヤ「ここはユーティっていう村、エクセルさんは何か憶えてらっしゃいます？」

村：なんだ。

エクセル「いや、何にも憶えてない。ただ、ここは知らない何処かっつてことくらい」

リリヤが椅子から立ち上がって、ドアを開けた

リリヤ「じゃあ来て、村を案内するから（笑）」

リリヤに引っ張られ、俺は外に連れ出された。

外に出ると、すぐ青空が見えた。とても透き通った青い空だった

エクセル「空…綺麗だ」

リリヤに村を案内させてもらった。小さな村だから、全員が知り合  
いみたいなものらしい

女性「あら、リリヤちゃん。おはよう」

男性「リリヤちゃん、美味しいリンゴが入ったから後で取りに着て  
おくれよ！」

人とすれ違う度に、リリヤは挨拶を交わしている。

リリヤ「ねえねえ、エクセルお兄さん。村長が会いたいって言うて  
るけど、どうする？」

エクセル「……会わせてくれ」

リリヤが案内したのは村で一番大きい家だった。中に入ってみると、  
村長と他にも何人かの村人がいた

村長「単刀直入に言わせてもらおうと、アンタには今日中に村から出  
てってもらいたいのだ。」

老人の村長からいきなり出ていけと言われて、俺は正直驚いてしま  
った。

リリヤ「村長！なにを言ってるんですか！？」

それに反発したりリリヤ。

村長「キミが昨夜、流れ星から落ちて来なかったら…こんなことは言わないんだが」

俺が流れ星から落ちて来た？

村人（男）「おかげで、それを見た警備隊がこの村に向かってるんだ」

リリヤ「そんな……」

村人（女）「だから、今日中には出てってもらいたいの。」

俺が口を開こうとすると、リリヤが返した。

リリヤ「だったら…追い返せばいいだけの話じゃない!!」

リリヤの言い方にそこにいた村人が騒ぎはじめた。リリヤに怒鳴る者もいれば、しかる者も

村長「まあ待て皆の衆、我々が騒ぎだしたら本人も困るじゃろう。

エクセルとやら、一刻後また来てくれないか」

追い出されてしまった。まったくをもつて全てが強引で謎だ

エクセル「この世界ってどうなってるんだ？」

リリヤ「今、世の中は戦時中なんです。3つの国が戦を始めて、全国の国境が村を監視するようになったんです。それから毎日のように警備隊が村から食糧や人を少しずつ持っていくようになって」

リリヤの説明であらかた理解できた。

今は戦争中で、3つの国が争っている。分かりやすくいえばこんな所か

でも何だろう。こんな世界に俺は住んでたのか？

リリヤ「お兄さんは昨夜、流れ星から落ちて来たんです。落ちてきたって言うっても、流れ星自体が近くに落ちて私が行ったらお兄さんが倒れてた訳でー」

エクセル「そうなのか。そういうえさ……」

リリヤの家に戻った俺は、1つ気になったことがあった

リリヤ「はい…？」

エクセル「リリヤのご家族はどうしたんだ？」

リリヤ「私の家族はここから南に50キロ行った村に住んでいます。両親に祖母が一人…あっ！決して家出とかじゃなく…その／＼／／／」

リリヤが赤くなって、両手の人差し指をいじくりだした。

エクセル「無理に話さなくてもいいよ。」



リリヤ「はいく／＼／＼／」

照れてるのかわからないが、リリヤが子犬が飼い主にすぎるような顔だった

すると、家のドアが勢いよく開いた。

少年「リリヤさん！警備隊です！！警備隊の奴らが来ました！！」

息を切らせながら、少年が言った

少年「しかも、今回は女の人たちを連れていくのが目的のようです  
！！」

リリヤが立ち上がった。

リリヤ「アイツらッ！！」

リリヤは部屋の片隅にあった黒い革の手袋を持って、少年と一緒に走っていった

エクセル「なんなんだよ……」

俺も立ち上がって、後を追うことにした。

リリヤ「アンタたち待ちなさいよ！！」

村の中心で、馬車の荷台に若い女性たちを連れ込んでいる兵士たちにリリヤは叫んだ。

兵士の数は4人程度だった。

兵士A「またお前か！いい加減にー！ー」

リリヤ「するのはそっちょよ！！」

リリヤが黒い手袋を手に通し、兵士に掛けた

エクセル「待てッ！」

俺が言っても遅く、リリヤの右ストレートが一人の兵士の腹に直撃した

兵士A「げふっ！！」

兵士の一人がぶっ飛んだ。

兵士B「てめえっ！！」

他の兵士たちが腰にさしていた剣を抜き取った。それを見た村人が悲鳴にも似た声を上げていた

リリヤ「アンタたち相手に“魔術”を使うまでもないわ！」

魔術……？

聞き慣れない単語に耳を傾けた。

何だろう……この違和感……前に俺が使ってた？……のは魔法だった

はず

兵士C「ぬかせーッ!!」

剣を振り上げ、兵士がリリヤに斬り掛かる。空を切る音がした

カシャン!!

ガラス繊維を割ったような音がし、剣を避わしたりリリヤの鮮やかな裏拳が剣を叩き折ったのだ。なんという拳打だと感心しながら、兵士をまた一人容易く打ち倒した。

すると、一人の兵士が馬車へ向かっていた

リリヤは気付いてなかった。このまま気付かなかつたら、捕まった女性や少女たちが連れ去られると考えると、俺の体は自然に動いた。人込みを割って、馬車にちょうど乗った男を見て

エクセル「逃がさないッ!!」

馬車に飛び乗った

兵士D「んだてめえは!？」

剣を向けるより速く、俺の拳が男を殴り飛ばした。

その後兵士たちは逃げ、女の人たちは何とか連れて行かれずに済み、俺は軽く安堵した。

リリヤ「お兄さん…!!」

振り返るとリリヤが手を軽く上げた。俺は彼女の手へ自分の手を向ける

パンツ！

リリヤ「やったね」

お互いの手を叩いた。

エクセル「ああ、リリヤって見た目によらず強いんだな。」

リリヤ「ああ〜ひど〜い！！」

二人で笑った。兄妹のように笑いあった

そして、村長の家にいた人たちがやってきて

村人（男）「なんて事をしてくれたんだ！」

感謝されるかと思っていただけと逆に怒られてしまった。まあ、助けた女性陣には感謝されたけど

村人（男）「あいつら、きっとよそ者のキミを捕まえに来るぞ」

リリヤ「ちょっとちょっと、いきなり話が飛びすぎてますよ！？」

村人（男）「リリヤちゃんも知ってるだろう！警備隊が大量に持つていく時を邪魔した結果の末路を！！」

リリヤ「それは……」

動揺を隠せないリリヤの表情が暗くなった。過去に、何かあったんだろうか？

エクセル「……わかりました。そこまで言っんなら、この村から出ていきます」

俺はリリヤたちから背を向けて、荷物を取りにリリヤの家へ向かった。

家に着くと、さっそく荷物をまとめようと思ったが自分がなにを持っていたのかわからなかった

リリヤ「あの……お兄さん」

リリヤが戻ってきた。

エクセル「リリヤ……」

俺は振り返ることが出来なかった。自分が乱入しなければ、彼女が悲しなまれずに済んだ気がした

リリヤ「ごめんなさい……私があんな……」

リリヤの声が震えていた。泣いているのかわからない。けど、彼女が悪いわけではない。

エクセル「いいんだ、キミが悪いわけじゃない。俺が勝手にやったことだ」

リリヤ「……以前、私の兄が…あなたと同じことをしたんです。」

俺は黙った。黙っていても、リリヤは俺の横に立ってを語っていた  
リリヤ「同じように警備隊の邪魔をして数日後…警備隊の隊長たちが兄を連れていったんです。」

彼女は後ろから俺の服を掴んだ。

リリヤ「そしたら……兄の公開処刑が…この村で、私の目の前で！兄が殺されたんです！！」

リリヤの叫びが家に響いた。リリヤは泣き崩れた

エクセル「その兄と…俺を重ねたのか」

俺の問いかけにリリヤが泣きながら頷いた。

エクセル「だったら……尚更、ここにいるわけには」

リリヤ「……ダメ」

エクセル「俺がいたら、キミや村のみんなまで迷惑する。」

リリヤ「兄さん……お願い…一緒にいて」

リリヤがエクセルに抱きついた。

エクセル「……リリヤ」

俺は、そんな彼女を優しく抱きしめる。

ズキンッ！

俺はいきなり、頭痛に襲われた。

エクセル「…ッ！」

立ち眩みとまではいかなかったが、リリヤの顔が誰かの顔と重なった。

……誰だ。キミは…誰だ

その夜、落ち着いたリリヤのベットから俺はこっそり抜け出した。

エクセル「ゴメンなりリリヤ…」

眠っていたリリヤに笑いかけた。勝手に食料と地図をバックパックにしまう、家の中には武器になりそうものはなかった

けど、家に不似合いな物が1つだけあった。腕に装着するような機械だった

なんだかこれは、自分の私物に感じた。それを左腕に装着するそして、フード付きのマントをはおって家を出ていく

エクセル「この地図、隣の村か街までの距離しかないじゃないか」

俺は地図をバツクバツクにしまつて、坂道を登つて行つた。

その一時間後

村の入り口の近くで、村人の一人が酔つぱらいながら地平線を見ていた

地平線の先は砂漠、何か変化があれば直ぐにわかる。だけど、酔っているせえか考えがうまくまとまらない。そんな時だった、地平線の彼方で無数の光がこちらに向かつていることに気付いたのはだんだん近づいて来る。そう確信した村人は一気に酔いが冷めてしまった

村人「けつ、警備隊だー！ーッ！ー！警備隊が来たぞー！ー！ー！ー！」

馬に跨つた騎士。警備隊の隊長は、部下に命令を下した

隊長「野郎共！ー！もうあの村に関わるのはもう我慢出来ねえ、村を燃やして潰せえ！ー！」

兵士「おおおおー！ー！ー！ー！ッ！ー！ー！」

兵士たちの怒号が響いた。その数はざつと50、小さな村を潰すにはピッタリの人数だ。村まで残り150メートルくらいまで来たところで、弓矢を持った兵士たちが火矢を弓につがえた。

ヒュッ！ー！

矢が空を切つた音がした。無数の火矢が村を襲つた



騒ぎで起きたリリヤは、自分の隣にエクセルがないことに気づいた。家の中を探したら食料や彼の持っていた物が無くなっていった

リリヤ「……村が!!」

村の家々から火が上がっていた、そして悲鳴まで聞こえてきた。

リリヤは直ぐ様、服を着替えた。

リリヤ「兄さんのバカ……なんで行っちゃったの……」

リリヤが着替えたのは、チャイナドレスに似た格闘服。足に格闘技専用のブーツを履き腕と膝は露出していて、所々に防備用の金属がついている。髪をツインテールに結び直し、リリヤは首から金色の水晶が付いたアクセサリをかける

リリヤ「我が拳に……強靱の力を……」

リリヤの両腕が緑に輝いた。

村人たちは悲鳴を上げて逃げ回っていた。武器で反撃している人もいるが、やられるのは時間の問題だった。

兵士A「殺せ殺せーッ!!」

兵士が剣を掲げて、他の兵士たちに言い放っていた。すると、家の死角で女性が数人で子供を庇いながら隠れていたのを何人かの兵士が見つけてきた

子供「ママーッ！！」

子供と親を引き離し、一人一人殺していこうとしていた。

母親「お願いします！！子供だけはお助けを！！」

母親の嘆きに、兵士たちは嘲笑い剣を振り上げた。

兵士B「なら、てめえから死ねーッ！！」

リリヤ「ハアアアーッ！！」

家の屋根を薦って、剣を振り上げた兵士に上から飛び蹴りを食らわした。勢いがあつたため、兵士は地面を数回跳ねて燃えた家の中へ飛んでいった。

兵士C「出やがったな！！」

兵士E「やつちまえ！！」

数人の兵士が一斉に、リリヤへ斬り掛かる。だがリリヤは手に力を込めて

リリヤ「邪魔ッ！！」

リリヤが拳を突き付けるように振るった。手からは大きな空気の塊のような物が放たれ、兵士たちは吹き飛んでそれぞれ壁に激突したり、火に吞まれた

リリヤ「さあ、速く逃げて!!」

エクセル「村が燃えてる……か……」

エクセルがいたのは、村からかなり離れ、村が一望できる崖の上だった

エクセル「助けに行きたいが、俺が行ったって……」

無意味という言葉しか出てこない。

怖いとか、逃げるとかじゃなくて、俺は一騎当千の武人でも達人でもなく一人の弱い人間だ

じゃあ何故、記憶を失っているの？

誰かが問いかけてくる。

誰かわからない、その問いかけも理由がわからない、もうどうでもよかった。

どうでもいいから、記憶を失ったの？違うでしょ。あなたは弱い人間じゃない……私が愛した一人の男性で魔導士でしょ、エクセル……

誰かがそう言ってくれた一人の女性が言った。優しく愛した女性だったあいつと、一緒に戦ってきた愛しい仲間たち

エクセル「俺は逃げてたんだな、目の前のことから……」

そうだ……俺は一人の人間なんだよな、そして俺は一人じゃない

エクセル「そう…一人じゃないよ、フエイト……………もう一度、みんなと再会するために」

ここが別世界でも、みんな同じ事を考えるさ

エクセル「そしてリリヤ…一人にしてゴメンな。今行くから…」

俺は崖から飛び降りた。

リリヤ「…ッ!!」

拳に籠もった魔術と魔力が弱まって来た。こんな長時間大勢相手は、生まれてはじめてだから無理もないけれど、そろそろ限界…かな。

パサリとツインテールに結んでいた髪の毛の紐が切れ、リリヤは片膝をつく。生き残った村人を助けた後、警備隊のほとんどを相手にしているのだ。

隊長「お前にはかなりてこずらされてきたが、それも今日で終わるだ。」

兵士たちがリリヤを取り囲んだ。

隊長「奴隷のように調教してやる。俺たちにお前の喘ぎ声を聞かせる!!ヒヒヒッ!!」

隊長につられて、兵士たちもがリリヤを見て嘲笑った。そして兵士たちがリリヤに近づいて、手を伸ばした。

???「俺にも聞かせてほしいな…お前たちの断末魔の叫びを」

隊長「ああん？」

空を切る音がした。弧を描いて、リリヤの近くにいた兵士たちが横に吹き飛んでいった。

残った兵士や隊長たちは、誰の仕業かを確かめるために辺りを見渡した。

すると、思いもよらない所から声が響いた。と兵士たちは思った

エクセル「俺の妹に手を出したらどうなるか……教えてやるうか？」

声は兵士たちの上空。60メートル辺りでエクセルは浮いていた

隊長「とっ、飛んでいるだど!？」

隊長の発言に、エクセルは思った。どうやらこの世界では飛ぶのが珍しいんだなと

リリヤ「……お兄さん」

リリヤがこちらを見ていた。話し掛けたい所だけど、それは後にしよう

エクセル「ライトランサー……」

無数の光の刃がエクセルの周りに出現したのにも、兵士たちやリリヤも含めて驚いていた。

エクセル「フアランクスシフト!!」

エクセルが手を掲げると、無数のランサーが一斉に降り注いだ。兵士たちはどうしようも出来ず、ただ食らうしかなかった。

隊長「こんな……バカな」

隊長の頭から兜が落ちる。目の前の惨状にどうすることも出来なかった

エクセル「人々を苦しめ、天津さえ一人の少女の兄の命を奪った罪は免れない……覚悟しろ」

目の前に降りてきたエクセルに突き付けられた槍を見た隊長は

隊長「覚悟だど!? 笑わせるな、覚悟するのは貴様の方だ!! 国境とはいえ、警備隊を壊滅させたことが国にバレたら生き残った住人たちもただでは済まない……終わりなんだよ、お前たちは」

隊長が嘲笑った。

エクセル「バレたらヤバイか……ならバレないようにするだけだ」

隊長「えっ……」

すっとんきよな隊長の声。直ぐにそれが断末魔に変わるとも知らずに

その2日後

生き残った住人たちは、村から離れようとしていた。行き先は森を

越えた地域にある町で、そこは安全平和地域に指定されていて、これからエクセルが向かうのとは真逆であった。

エクセル「世話になったな。」

荷物が入ったバックを馬に乗せる。後ろにはリリヤを含めた村人たちが出発しようとしていた

リリヤ「あの…私が妹さんと瓜二つで、同名の名前って話は」

エクセル「本当だ。俺の知ってるリリヤは、気が弱い子だった…けど、それとは逆にキミは強い子だ」

リリヤの髪をポニーテールにしてあげて、わかったことを簡潔にまとめてみた。この世界は3つの国があり、魔術文化が進んでいて、3つの国にそれぞれ固有魔術が定着していること、飛行高度に限りがあること

そして、死んだはずの妹に瓜二つで同名の名前を持つ女の子。もしかしたら、とんでもない所へ来てしまったかもしれない

リリヤ「兄さん…／／／／／」

リリヤが制服の裾を握ってきた。

エクセル「サヨナラは言わない。また会えるよ、リリヤ（笑）」

村長が地図を渡しに来てくれた。最初に見たより新しかった

村長「噂によると、あなたが見つかった日から2日前くらいに、似

たような境遇の人が国境を越えた先にある町にいるそうだと。」

エクセル「国境……ここからだ、その町までは？」

村長「馬ですから……2日といった所です。あつ、これは資金です有効にお使いください」

村長が渡したのは、俺たちが使っていたものとは違いって金、銀、銅の金貨が目一杯入った頑丈な袋だった。これぐらいなら、穴が空くこと心配はなさそうだと。

エクセル「お心遣い感謝します。」

リリヤ「兄さん、これ私が預かってた兄さんの私物。」

リリヤが懐から取り出したのは、探してもなかったデバイスのブランド・ティータだった。待機状態だから、首からかければなんともなる。

エクセル「じゃあ行きます。リリヤ、村長、それに村の人たちに感謝します」

一礼し、馬に乗ろうとするとリリヤが腕を掴み、リリヤは無理矢理に俺を自分の方へ向けさせた。

チュツ！

柔らかいリリヤの唇が重なった。直ぐに離れたリリヤは赤くなりながら微笑んだ



リリヤ「みんな、兄さんにも感謝してますよ。……神のご加護を  
／／／／／／」

そう言われた俺は、馬に跨った。手綱を持って再度、リリヤを見た

エクセル「ありがとう。また会おう」

そう言うと、手綱を叩いた。馬が鳴きその足を動かし、走りだした

エクセル「待ってるよ、みんな。」

こうして、新しい旅立ちと物語の幕が上がった。

これは最悪のはじまりか、それとも破滅への序章かはまだ、誰にも  
わからない

第11話 失われた友情の誓い（前書き）

あれから馬を走らせては途中で休み、夜になつては野宿に。それを一回してもう一回だから、明日には着く

エクセル「野宿なんて……慣れないとダメだな。」

焚き火の用意をして、薪に火をつける。

パチパチと音をたてながら、あつという間に火が強くなった。

エクセル「よし………」

夕食は食べたから、後は寝るだけなんだけど  
しばらくしたら、また馬を走らせないといけない

エクセル「この世界には魔法とは真逆の文化が進んでる。ベルカ戦争みたいな時代だな……みんな、無事かな」

少しすると、眠気が襲ってきた。荷物を近くに置いて、しばしの眠りに入った

## 第11話 失われた友情の誓い

チュンチュン！

エクセル「んあっ……ヤバイ。朝まで眠っちまったか」

朝だから、7時間は寝たのか。そろそろ行かないと

焚き火の後に土を軽くかけて、木に結んでいた手綱を持って馬へ跨る。

エクセル「はっ…！」

手綱を叩き、道へ出る

しばらく馬を走らせると、大きな町が見えてきた。

エクセル「あれか……」

やっぱりこの世界は古い建物なんだなと町の入り口に来て思った。馬からバックを取りマントを羽織る、馬を預け所に渡し町に入る

この町には、大きな闘技場があった。町の人や旅の人たちが見られ

るくらい大きかった

エクセル「さて、情報を集めるか……」

俺は賑やかな町の中を歩みはじめ、情報が集まりそうな場所へ向かう。まずは公園が適切だな

公園に来て、適当に話を聞いてみた。

だが、誰も知らないと言っていた。

エクセル「ハア……まったく、誰も知らないとは」

ベンチに腰かけて、公園で遊んでいる子供たちを見ていると

女性「また試合を見に行くの？」

男性「しょうがないだろ、あの子が出る試合は見逃せないんだ！」

ベンチの近くで、夫婦であるか知らないけど何かについて話していた。

女性「でもまた同じ対戦相手でしょ？」

男性「あの女の子も凄いぞー！“両目の色が違う”の女の子同士がやるのが楽しいんだ」

俺はその話を聞いて飛び起きた。直ぐ様立ち上がって、話を聞くこ

とにした

エクセル「すみません！その話、詳しく聞かせてください」

公園にいた男性に連れられ、闘技場（吹き抜け建築）に来た。

どうやら、この試合というのは“賭け試合”らしい。入り口で赤か青の紙を渡され二人の内、勝った側に多く賭けた人には金のメダル（金の金貨）が10枚をプレゼントされる

また、見るだけでも許されている

すると突然、闘技場全体から歓声が上がった。

審判「お待ちせ致しました！！ただいまより試合を開始します。まずは赤コーナーはチャンピオンの、ヴィヴィオーーツ！！！」

俺は耳を疑った。選手入り口からはバリアジャケットを装着し、腕から手までに魔術の装飾品をつけていたヴィヴィオが出てきた。

審判「続きまして、青コーナーはこれで三回目の挑戦者の……アインハルトオーーツ！！！」

またしても歓声が上がった。逆方向の入り口からは、バリアジャケットを装着したアインハルトが出てきた

エクセル「ヴィヴィオ…アインハルト……」

どうして二人が……

アインハルト「ヴィヴィオさん…今日こそ、話を聞かせてもらいます」

アインハルトが構えた。いつもの霸王流の構え

ヴィヴィオ「何度来ても同じです。今のあなたでは私には勝てません……」

ヴィヴィオも構えた。だが、彼女の構え方はストライクアーツではなく、別のものだった。

エクセル「あの構え方は……」

見たこともない構えた。審判は片手を上げた

審判「はじめー！ーッ……」

審判が言い放った瞬間、二人が同時に動いた。アインハルトは飛び跳ね

アインハルト「空破弾ッ……」

アインハルトが放った風圧がヴィヴィオのいた所をえぐる

ヴィヴィオ「ーーーーー」

何かを呟いたヴィヴィオの腕の装飾品から虹色の刃が生え出た。

アインハルト「ヴィヴィオさん、あなたは何故こんな・・・!!」

ヴィヴィオ「答えるつもりはありません……」

ヴィヴィオとアインハルトの接近戦は観客を盛り上げた。やれやれと声を上げて楽しんでいる

エクセル「こんな……こんな試合のどこが」

震えた声で俺は拳を握り締めた。

アインハルト「ハアッ!!」

アインハルトのバリアジャケットが被れていく。

ヴィヴィオはアインハルトの拳打を軽々と受け流していく。アインハルトは苛立ちながらも、さらに拳打を繰り返していく。

ヴィヴィオ「まだまだ……クラウド、あなたは弱い。だからーーーー」

拳打の隙をつき、ヴィヴィオが踏み込んだ。

アインハルト「ッ!?!」

ヴィヴィオ「聖王 フェザー」

ヴィヴィオは両腕の虹色の刃を振るった。その速さは目にも止まらぬ速さだった

アインハルトは両腕で顔と胸は防ぐも、他の所の防御までは出来ない。

アインハルト「……………」

ドサツ！

アインハルトはそこに倒れた。

審判「勝負あり…！！」

試合の後、闘技場から放り出されたアインハルト

震えながら立ち上がるアインハルト。大人モードがその場で解け、小さな体に戻った

アインハルト「…………ツ！」

ティオ「にゃ！にゃー！！」

アインハルト「大丈夫ですよ…帰しましょう」

体の痛みを耐えて、ティオを肩に乗せてふらふらと歩き始めた。



エクセルはその後をつけた。

アインハルトが入っていったのは、なんと宿だった。部屋は五階、アインハルトは部屋に入っていく

エクセルは扉の前に立ち、中の音を聞いた。

アインハルト「戻りました」

アインハルトが誰かに言った。部屋に他の誰かがいるようだ。

よく聞こえない為、ドアに耳を傾けた。

ん…？声が聞こえなくなった？

すると突然—————

バンツ！！

エクセル「のわっ！？」

いきなりドアが開いた。寄りかかっていた為、部屋の中へ倒れる形となった。おまけに頭をおもいつきり床に打ち付けた

エクセル「痛え……ん？」

俺が頭を上げると

アインハルト「エクセル…さん？」

アインハルトが身構えたまま、こちらを見つめていた。

リオ「エクセルさんだ！！」

コロナ「良かった〜！」

部屋の中には、リオとコロナがいた。先ほどアインハルトが誰かに言っていたのはこの二人なのだ

部屋の中で一息ついたエクセル

エクセル「3人とも別々の時間帯に飛ばされたのか。」

話を聞くと、アインハルトは噂で聞いた日だから3日ほど前に。リオとコロナはその一時間後と二時間後、3人が合流したのはそれから三時間くらいだったらしい

リオ「ヴィヴィオも探したんですけど、見つからなくて…」

コロナ「それで、しょうがなく歩いてたらこの町に」

なるほど……………

アインハルト「お金は親切な人たちに貰ったのですが、その後……強制的に試合に参加させられて」

無理矢理に参加させられて、その相手がヴィヴィオでそのヴィヴィオはチャンピオンと呼ばれていたわけか……

エクセル「ヴィヴィオは…なんというか、変わったな」

試合を見ている限り、ヴィヴィオの強さ、性格などが全て一変しているのはまる分かりだった。

コロナ「私も驚きました。一年生の時から一緒でしたけど、あんなヴィヴィオははじめてです。」

一年生の頃から一緒のコロナは、ヴィヴィオの性格も理解している。

アインハルト「……すみません。少し、お手洗いに」

アインハルトが部屋から急いで出ていく。ティオは追おうとするが扉に憚れる

リオ「アインハルトさん…この所無茶ばかりしてるんです。」

リオが紅茶の入ったポットを持ち、カップにいれてくれた。コロナがティオを肩に乗せる

リオ「こっそり見に行ったら、屋上でこっそり練習してたり……オリヴィエ、オリヴィエって寝言まで」

コロナ「私も聞きました、その時のアインハルトさん…凄い泣いてました。」

エクセルは額に手を当てた。

エクセル「ちょっとヴィヴィオの様子を見てくる。夜までには戻っ

てくるから」

あてはないけど、ヴィヴィオが心配でしようがない。

何かがヴィヴィオを苦しめているなら、それはそれで助ける理由は出来る。けど逆だったら

ちょっと嫌な予想を振り払って、俺は宿から出ていく

その数時間後、聞き込みに時間が掛かって夜になってしまった。

エクセル「情報を纏めるとー」

エクセルは、しばし背後を見て誰もいなさそうな角を曲がる。その後をフードをかぶった小さな体が角を曲がった

????「見失った？」

角を曲がると、小さな体はエクセルを見失ったと思いきやさらに進んでいく。

すると、誰かに引つ張られ小さな体は壁に押しつけられる。

エクセル「つけてくるのは関心しないな、アインハルト」

????「!?!」

フードの隙間から、アインハルトの顔が覗いた。少し目が赤くなっていた

少し前まで泣いていたのがわかった。

フードを取り、アインハルトは顔を上げた

アインハルト「気になって……すみません」

エクセル「戻れとは言わない。心配なのはお互い様だ」

目的地に着いた。アインハルトはその屋敷に目を奪われた

アインハルト「町長の屋敷だったのですか……でも、どうやって情報

アインハルトが不思議そうに、こちらを見つめてきた

エクセル「色々な…俺の独特の調査だ。聞き込み、町長に恨みをか  
つてる人たちの盗み聞きとか」

エクセルはマントについていたフードをかぶる

エクセル「忍びこむからフードで顔を隠せ」

アインハルト「はい……」

アインハルトはフードをかぶって顔を見られないように隠した。

エクセル「ちょっと揺れるから我慢しろよ……」

エクセルはアインハルトの腰の辺りに手を回す

アインハルト「はっ…はい／／／／／」

エクセルに腰へ手を回されて、赤くなるアインハルト。大の大人、しかも男が思春期同然の少女の腰に手を回すのはいささか問題があった

エクセルが空を飛び、屋敷の屋根に降り立つ。忍び足で屋根を降り、屋敷へ侵入する。砂漠にありそうな建築であった為に、侵入するのはたやすかった

エクセルは扉に張り付き、部屋の中を覗いた。中には誰もいなかった

エクセル「よし……」

部屋に入り、また外を見渡す。部屋は多くて、見張りらしき兵士もいる

エクセル「さて、どうしたものか」

アインハルト「とりあえず、ヴィヴィオさんを探し……」

その時、俺はおかしな声を聞いた

聞こえてきたのは部屋の奥からだった。しかし、奥には何も無い

エクセル「ん……？」

エクセルは壁に耳を当てた。

パシィ……

壁の中から音が聞こえてきた。

中…ということは、隠し部屋か？

アインハルト「エクセルさん…きっとこれです」

隣にいたアインハルトが指差して言った。アインハルトが指差したのは石の壁の一角だった

良く見れば、その一角だけ形が違う。

アインハルト「これが仕掛けのものかと」

エクセル「そう思いたいな…」

俺は壁に手を触れ、優しく押した。すると、壁が押し込まれ音が聞こえてきた壁が約二、三人が入れるくらいに開いた。

エクセル「でかしたぞ。」

扉の中へ入ると、自動的に扉が閉じた

中は下に降りる螺旋階段になっていた。

階段を降りていく。すると、音と紛れて叫び声が聞こえてきた

町長「このたわけ者め！あの女は次は殺せと言ったであろう！！」

隠し部屋は、なんと牢屋だった。いくつもの牢屋がありその一つ一つに女性や少女たちがいた。しかも、みんな格闘家で美人揃いの人達だった

そして、町長が今相手をしているのが

ヴィヴィオ「すみ…ません…：…次こそは」

鎖に繋がれたヴィヴィオだった。服装は奴隷のような服装で目は虚ろだった

体中に痣ができていた

町長「次こそは次こそはと…これで何回めだ！！」

町長が持っていた鞭で、ヴィヴィオを打つ。打たれたヴィヴィオは悲鳴を上げて、打たれた部分を抑えた

町長「困っていた所を助けてやった恩を忘れおって！この恩知らずめが！！おまけに、おまけにー！ーッ！！」

町長は何回も鞭を打った

ヴィヴィオ「止めてくださいご主人様！！あの時のことは謝罪しますから！！」

町長「貴様がチャンピオンであった我が娘を殺しおったからに、私は殺したい気持ちをお我慢して貴様をチャンピオンの座へ居座ってら



れるのだ！！私に忠誠心の言葉を言ってみろ！！」

ヴィヴィオ「私はッ！私はご主人様の奴隷としてッ…一生忠誠を誓いますー…ッ！！」

アインハルト「ヴィヴィオさんが…あんな…」

アインハルトは怯えながら後退り、耳を塞いだ。

聞きたくない、聞きたくない！ヴィヴィオさんのあんな言葉なんて、聞きたくない！！

耳を塞いでも、ヴィヴィオの悲鳴は聞こえてきた。アインハルトは聞こえてくる友達の悲鳴に耐えきれずに

アインハルト「いやああああー…！！！！」

アインハルトの叫びが部屋中に響いた。町長は鞭を打つのを止めて

町長「誰だ！！」

町長がこちらに走ってきた。太っていたのに町長の走りは、速かった。

エクセル「マズい！！アインハルト、逃げー…」

俺は隣にいたアインハルトを見た。あんなヴィヴィオを見てかなり

のショック状態に陥っていたのだ。体は震え、目を見開き、震え怯えた声を上げていた

町長「侵入者めッ!!」

町長が階段の前まで来ていた。

俺は隣のアインハルトを抱き上げ、螺旋階段を全速力で上がって行った。螺旋階段の入り口を初めて召喚した戦斧で吹き飛ばし、外まで出た

町長「侵入者だ!! 衛兵ーーーーッ!!」

町長が叫んだ。中庭に出ると、複数の衛兵に取り囲まれた。

エクセル「ーーーーッ!!」

声を出さずに、戦斧を振り回して近づかせないようにする。

衛兵「構えーーーーッ!!」

屋根で弓を構えた衛兵がいた。それを見て直ぐ、戦斧を屋根に投げた。屋根にいた衛兵の隙をつき、俺は勢い付けて空へ舞い上がった

なんというか……アインハルトがここまで取り乱すとは想定外だったな

宿の近くに降り立つエクセル。周囲を確認しながら、宿に入っていく。入り口が食堂なので、どうしても俺たちに目が向けられてくる

エクセル「ちょっと倒れてしまいましたね」

そう言つて階段を駆け上がるエクセル。

部屋に入って、ベットへアインハルトを寝かす。

エクセル「二人は…風呂かな」

アインハルトのマントと自分のマントを近くに置く。

眠っているアインハルトへ毛布をかけて、近くにあつた椅子に座る

エクセル「ヴィヴィオはこの町に来て、町長に助けられて試合に強制参加…アインハルトと同じ手口だけど、ヴィヴィオが町長の娘を殺したつてのは」

状況を整理していると、アインハルトが身動きした。

アインハルト「オリヴィエ…私は…僕は…」

寝言を呟いたアインハルト。ティオがアインハルトの頬に前足をこすり付ける。しばらくすると、アインハルトが起き上がった。

瞳から涙が溢れていた。

アインハルト「ここは…」

エクセル「宿の部屋だ」

アインハルトがこちらを向いた。目元が真っ赤になっていた

アインハルト「すみませんでした。私が大声を上げたせいで……」

エクセル「いいよ、気にしなくて……夢でも見てたか？」

微笑みかけながら、アインハルトの頭を優しく撫で回すエクセル。

アインハルトは頷いた。

アインハルト「霸王の記憶の中で、彼の思いに触れました。」

アインハルトは語った。

記憶の中で、霸王クラウスのオリヴィエに対する思いに触れたということ

アインハルト「私は愚かです……ヴィヴィオさんを守ると、友達を守ると約束しておきながら、私は彼女を助けられませんでした。これでは、クラウスと同じなんです……オリヴィエを守れない心残りと同じ！私はわかるんです、自分の今の気持ちが……クラウスと同じだって……！」

アインハルトがエクセルの胸に抱きつき、彼の胸元で泣きはじめた。

エクセル「なら……今の彼女に……ヴィヴィオの中に眠るオリヴィエ陛下へ勝つために……強くなろう。キミの中に眠るクラウス陛下と一緒に」

泣きながら頷いて返事をするアインハルト

アインハルト「……はい／＼／＼／＼」

その後、リオとコロナが部屋へ入ってきて抱き合っていたところを見られて、からかわれた。

―屋上―

シュツ！シュツ！

宿の屋上で一人、アインハルトは鍛練をしていた。

あのヴィヴィオさんの技、スピード…記憶の中にあつたオリヴィエの強さそのものだった。なら、闘っていた時のヴィヴィオさんはオリヴィエの人格へ転移しているとすれば、クラウドと私の思いを拳に込めた一撃を打てば……………

アインハルト「ヴィヴィオさん……2日後、再戦しましょう」

その時が私たちの絆を本当の始まりにするために、長きにわたる戦いを終わらせるために

私と、愛機アステーションが必ず・・・助け出します

第12話 受け継がれた思いを越えて（前書き）

町長の家の地下

手首を鎖で繋がれたヴィヴィオは、夢を見ていた

それは受け継がれたオリヴィエの記憶だった

オリヴィエ「ねえ、クラウド」

王宮の庭で、満開になった花々が並ぶ一角があった。そこには、まだ聖王と呼ばれずにいたオリヴィエと霸王と呼ばれていなかったクラウドの姿があった。

クラウド「はい、なんですか？」

花の前で、膝を折って花を見つめているオリヴィエ。その顔はどこか悲しい表情だった

オリヴィエ「私たち…あと少しでお別れなんですよね。」

クラウド「……はい」

オリヴィエ「……覚えてる？ 私たちがはじめて出会った頃、お互い口も聞こうとしなかったわね」

クラウドは苦笑した

クラウド「ええ、確か最初に話したのはオリヴィエを暗殺者から守った時でしたよね」

オリヴィエも苦笑した。

オリヴィエ「ええ、確かに……あの時はクラウドも手慣れた暗殺者に手間取ってましたよね」

クラウド「お恥ずかしい……／＼／＼／＼」

オリヴィエ「あの時は嬉しかったわ。“バカで何も考えない”人が部屋へ入ってきて、ベットへ忍び寄った暗殺者を捕まえようとしたらてこずって、私の一撃と一緒に吹っ飛んだのよね」

クラウド「うっ……」

オリヴィエ「でも、嬉しかったことは本当よ。頼もしいわよ、あなたの行動力は……」

笑いながらオリヴィエは立ち上がる。

クラウド「私もあなたの意外な行動に驚かされるばかりです。」



ほとんどが困らされる事ばかりだったけどつと心の中で呟く。

オリヴィエ「ねえ、クラウド………2人でここから逃げちゃおうかしら」

クラウド「なっ!?なにを言っているのですか!」

オリヴィエ「冗談。言ってみたかったのよ」

オリヴィエがクスクス笑う。

場面が変わり、夜の自室

オリヴィエ「バカね、私って……クラウドにこの思いを伝えたら意味がないのに。」

オリヴィエは、部屋にあった1つの小さな箱を開けた。中にはクラウドからプレゼントされた1つの首飾りがあった。それを首からかけて鏡を覗いた

オリヴィエ「……クラウドらしいわ。」

オリヴィエは涙を流し始めた。

## 第12話 受け継がれた思いを越えて

そこでヴィヴィオは目を覚ました。

ヴィヴィオ「……………認めたく……………ない。……………クラウド……………アインハルトさん……………助けて……………」

また眠りに入った。

アインハルト「ふっ……………!」

朝、朝日が昇る前の時間帯。アインハルトは鍛練を続けていた

アインハルト「これで……………一万回!」

腕が痛い。あれから腕を振り回し続けていて腕が痺れていた

アインハルト「どうやって……………オリヴィエの技に勝てるのです……………クラウド」

朝日が昇って、アインハルトの体を照らした。

試合まで、後1日

エクセル「じゃあ、町長の娘はワガママ娘だったの？」

朝食の時、近くにいた宿で働く町人の女の子に話を聞いた。

女の子「そうよ。出店で欲しい物があつたら売り物を全部お金を払わないで持っていったり、試合で負けた相手を嘲笑ったり…とにかく一杯よ」

エクセルは顎に手を当てた。

エクセル「うん」

女の子「あつ、そうそう…飲みに来た人達が言ってたんだけど、あの人が今のチャンピオンにやられる直前に苦しそうな動作してたみたいよ」

エクセル「?…苦しそうにって?」

彼女の話では、町長の娘は病気とかは一切縁がないはずなのに、ヴィイオがトドメをさす瞬間に彼女は心臓を抑えたらしい

もしかして、娘の死は仕組まれたものだったのか？

女の子「良くはわからないけどね。それよりお兄さん、連れっ子たちは元気がないね？」

女の子は俺の後ろを指差した。アインハルト、リオ、コロナたちが騒がしい食堂で静かに朝食を取っていた

エクセル「えつと……鍛練してたからかな。疲れてるんだよ」

俺は立ち上がる。3人の所へ行く

エクセル「ちよつと情報収集に行くってくるから、リオとコロナはアインハルトを手伝ってやってくれ。無茶して明日の試合に参加出来なかつたら最悪だろ？」

3人「はい」

ー町 市場ー

エクセル「とは言ったものの……」

手掛かりは少ないか……

市場を歩きながら、思索していると

町人（男）「それ本当か……？」

市場の外れで男2人がコソコソなにかを話しているのを見掛けた。

エクセルはその近くにあつたベンチに腰掛けた

町人（女）「ええ…町長の娘が死んだ理由を掴んだって連絡が。これ…その人がいる場所の店の住所。待ち合わせ時間は夕方、日が落ちる時間帯」

女性が男性に紙きれを渡した。

町人（男）「わかった。夕方だな、任せてくれ」

町長（女）「頑張って町長を捕まえましょう。娘たちの為に…」

女性はそのまま去って行った。紙きれを受け取った男性は小さなベルトバックに紙きれをしまつて歩きだした

エクセル「いい事聞いた……」

エクセルは立ち上がり、その男性を付ける。男性は人混みの中を紛れていく

逃がさないよつと……

距離を一気に詰め、男性のバックへ手を伸ばす。バックの隙間へ手を入れ、紙きれをそつと抜き取る。人混みを外れて裏路地に入っていく

エクセル「この町には、町長を恨む人達は数多くいるみたいだな」

男性から盗んだ紙きれを開き、待ち合わせ場所の地図が示されていた。

エクセル「まだ時間はある…聞き込みを続けよう」

その頃、アインハルト達は屋上で特訓をしていた。

アインハルト「これで300通り……」

息を切らせながら、大人モードのアインハルトは型を決める。

あれからヴィヴィオの防御を抜く技を3人で考えていた。ヴィヴィオの防御はより高度になっていて一撃で倒さなければならぬ型を組み合わせて使う技なのだが、何百通りとある技の組み合わせは過酷であった。

リオ「この組み合わせもダメツと……」

アインハルト「ハア、ハア、ハア……技なくして、彼女には勝てません。次を……」

アインハルトが再び構える。大人モードであるリオもまた構える

待っていて下さいヴィヴィオさん……この技と一緒に、あなたを助けてみせます!!

夜になって、エクセルは待ち合わせ場所である酒屋に来ていた。あれから色々なことがわかった、あの町長になってから試合に負けた女性や少女、男性や少年たちを含め旅人が次々に行方不明となっていた。

その理由は、ヴィヴィオとアインハルトが強制的に参加させられたような手口を使う人達を尋問したところ、町長に雇われて絶対勝利者である自分の娘と闘わせて、敗北者を奴隷として集めて色々な所へ運んでいたらしい

アインハルトが捕まらなかったのは、ヴィヴィオが動けないまでに倒さなかったからだ。

エクセル「えつと……この席か」

決められた席に腰掛け、情報提供者を待っていた。

店員「ご注文は？」

エクセル「このワインを2人分……」

適当にワインを頼み、周囲に気を配った。

こんな制服姿の俺がいても不思議がらない奴が数人いるってことは、似たような奴らを見たことがあるのか？

ワインが置かれ疑問に思っていると、目の前の同じ席に白装束でフードをかぶった男が座った。俺だけに見えるように、フードを深くかぶっていた

エクセル「あなたかな？」

????「そつだ……」

男がワインを見た。

「???」「よくこのワインが好きだとわかったな」

エクセル「感ですよ、ただの…。」

本当は適当に頼んだなんて言えないので、彼には言わないでおく。

彼は情報屋らしく、様々な情報を持っていた。お互いのグラスにワインを注ぐ

情報屋「町長の娘の死のことだが…あれは今のチャンピオンの譲りやんが殺したんじゃないかねえ、あれは町長の策略だったんだ」

情報屋はワインを一口、口に含み飲む

エクセル「どういった策略なんだ…?」

情報屋「……………毒だ」

なるほど……………

情報屋「彼女は、秘密の地下室を見たんだ…君ならわかるはずだ。

それで町長は娘の行動力が怖くなったんだ。もし、奴隷売買が町や国の人間にバレたら町長はこの町の支配者でいられなくなるからな  
」

エクセル「ふふっ…悪党らしい考えだな。なら、ちよつと悪党退治に協力してほしい」

俺はワインを注ぐ。情報屋は満足そうにグラスを持つ



情報屋「面白そうだな…キミが本当の相手じゃないから特別だ…」

おっと、バレてたか？

エクセル「察しがいいな。じゃあこの店にいる連中はキミの仲間なのかな？」

俺の一言で酒屋全体が静まりかえった。男と女も含め、全員が俺を見てきた

エクセル「当たりだったかな？」

俺は立ち上がり、辺りをぐるっと一回りする。みんなが30〜50代の男性と女性たちがほとんどだった

エクセル「俺の推測からして……みんな、町長に自分子どもを奪われた夫婦たち？それとも兄弟や姉妹や、孫だったりするのかな？」

また一回り見渡す。全員が凶星のようだ

エクセル「もし、救いたいなら……俺が協力する。俺にも目的だけである」

町人（男）「それはなんだ？」

中年の男が一步前に出て言った。

エクセル「現チャンピオンの彼女を救いたい。バラバラになった仲間一人だから助けて、親友の娘だから助けて……それだけだ」

ざわめきが始まった。賛成するかしないかの話し合いのようだ

情報屋「……………協力したとして、逆にアンタは何を得る？」

エクセル「……………仲間だ」

俺は笑った。

アインハルト「ハア、ハア、ハア……！！」

膝をついてしまったアインハルト。コロナとリオは水を汲みに行ってもらっている

アインハルト「ダメッ……………全然出来上がらない……………」

何度やっても、何度やっても同じ繰り返し。技の完成まで後一歩手前なのに、どうしてもそこで止まってしまう。アインハルトは構えた

そして、技を行っていく

断空拳に始まって、中段からの右拳廻打、上段からの繰り返し蹴り（断空を応用した攻撃）、そして中段からの左拳廻打。最後に決め手となるアンチエインナックルへ繋がる技がどうしても見つからない

アインハルト「霸王流……断空破」

貯めて打ち出す断空破は、一瞬の隙をつかれたら技自体が効かなく

なる

アインハルト「やっぱりダメ……うつん、私は諦めない。ヴィヴィオさんの為にも……」

心を落ち着かせて、相手の動きを見極める……風と一つに……風と心を、風と体を一つに……

その時だった。

あれ？……腕から、何かが……

自分の腕から異様なものが出ているのに気づいた。

アインハルト「これは……！？」

それはアインハルトにとって、どういった意味があるのか

ー次の日ー

試合直前、ヴィヴィオは町長と話していた。

町長「今日こそ、あの女を始末しろよ！失敗したら、お前をチャンピオンの座から下ろし、奴隷として扱ってやる。」

ヴィヴィオ「はい……ご主人様」

町長が出ていくと、ヴィヴィオは壁にもたれかかった。

ヴィヴィオ「今日で…アインハルトさんと……クラウドともお別れ。今の私って、どっちが本当の人格なのかしら……」

ヴィヴィオ？

それともオリヴィエ？

口調もわからなくなってきた。今日が終われば私は売り飛ばされる。

ママたちとも、一生会えなくなる

ヴィヴィオ「もう…どうでもいい」

ヴィヴィオは立ち上がり、出口から出ていった。

審判がヴィヴィオを紹介し、次にアインハルトを紹介した。アインハルトはヴィヴィオの前まで歩み寄り

アインハルト「ヴィヴィオさん…そして聖王オリヴィエ。今日が最後です…お互いに、もうあのような悲しみを残さないようにしまし  
よう。」

アインハルトの瞳の中にクラウドの気配を感じ取ったヴィヴィオ。  
オリヴィエの人格が訴えている、闘うなど…

ヴィヴィオ「私もですアインハルトさん……クラウド。本当に…今  
まで、ありがとう……」

お互いに離れ、構えた。

審判が2人を見て、手を振り下ろした。

ヴィヴィオ「聖王……」

アインハルト「霸王流……」

スドーーーーーン!!!!

2人の魔力が爆発し、軽い衝撃波が客席を襲った。

町長「素晴らしいぞ！我が奴隷よ！！さあ、その美しい魔力色で奴を殺せ！！」

町長席で高笑いしながら、ヴィヴィオの魔力光に魅了された。2人の死闘は、全客達を興奮させた。

ヴィヴィオ「聖王 エレキッ……！！」

魔力を帯びた上段回し蹴りを繰り返して、アインハルトはそれを旋衝波で弾く。弾かれたヴィヴィオのカポエラがアインハルトを吹き飛ばす

ザアアアアア……！！

地面を転がり、その勢いで立ち上がり再び構える

アインハルト「ヴィヴィオさん……そろそろ、お互いの技の繰り出ししましょう。最強の技を……」

ヴィヴィオ「あなたが望むのならば……」

構えを解いたヴィヴィオ。散らばった魔力を右腕に収束させていく  
アインハルト「ーーーーー」

凶悪な力を感じる……ヴィヴィオさんとオリヴィエの全力の一撃。  
それを受けとめる技量は今の自分にはない。なら、私とクラウスも  
自分の最強の一撃をッ……!!

ヴィヴィオ（オリヴィエ）「聖王 奥義ーーーー」

右腕に収束した魔力が虹色の渦を巻く。アインハルトは目を閉じ、  
スーッと息を吐き今に走りだすような構えをする

アインハルト「ーーーー」

2人が同時に駆けた。

ヴィヴィオ（オリヴィエ）「レジェンドオブアヴァロン!!」

ヴィヴィオが先に仕掛けた。虹色の魔力光が4つに拡散しアインハ  
ルトに襲い掛かった。エクセリオンバスター並の威力はあるこの射  
撃に耐えることは出来ない

ズドドドド……ン!!!!!!

爆煙が上がり、ヴィヴィオが爆煙の中から飛び退いてきた。

ヴィヴィオ（オリヴィエ）「さよなら……」

ヴィヴィオが爆煙から背を向け、歩きだした。だが、直ぐ事態は一変した

アインハルト「彷徨う揺りかごの王…それは壁を意味する方舟。愛する人を守るう…それは愛の誓い。」

爆煙がゆっくり晴れていく。

アインハルト「愛罪の果実…甘い香りを放つように…交差する気持ち…伝えられない言葉を今、あの人に……………」

爆煙が完璧に晴れた。

ヴィヴィオ（オリヴィエ）「!？」

アインハルト（クラウド）「オリヴィエ……………私は—————」

アインハルトはヴィヴィオが放ったレジェンドオブアヴァロンを両手両足で宙に浮いた形で受けとめていた。これには、ヴィヴィオを含め、観客全員を黙らせた。

ヴィヴィオ（オリヴィエ）「そんな……………あり得ない!!!」

その時、ヴィヴィオは見た。アインハルトの体中を緑色の風が包み込み、鎧、防具、両腕に二枚刃の武器を形作っていた。

アインハルト（クラウド）「私が辿り着いた最強の果て…新たな境地…絶対防護を誇る“風の守護域”」

受けとめていた虹色の魔力の塊が、両腕両足に取り巻いた。着地し

たアインハルトは、ヴィヴィオに近づいていく

アインハルト（クラウドス）「あなたを失って、武に全てを投げうった私の完全無欠の技。それをあなたにお見せします」

ヴィヴィオは後退り、簡単な構えをとった。それも泣きながらだ

ヴィヴィオ（オリヴィエ）「クラウドス…」

アインハルト（クラウドス）「オリヴィエ、私の全てを…受けとめてください！！」

アインハルトの魔力光が輝き、ヴィヴィオを硬直させた。

アインハルト（クラウドス）「霸王流奥義…」

アインハルトがヴィヴィオへ仕掛けた。虹色の魔力が巻かれた両腕が輝いた

アインハルト（クラウドス）「一戦繚乱ッ！！」

霸王流の断空を使う全ての技を一気に決める奥義。

風の守護を身につけたクラウドスが、終わった戦いの後に花の束を捧げ、美しい花が咲き乱れる意味を込めた絶対無敵の技。

その一つ一つが、ヴィヴィオに打ち込まれていく。その体は打ち込まれていく内に宙へ浮き、その瞬間、最後に足から力を練り上げ、風の守護を拳に移動させ完全の断空を決めた。その一撃に思いを込めて



アインハルト（クラウド）「断・空・拳……！！！」

練り上げた力が竜巻のようになりヴィヴィオを貫いた。

ヴィヴィオ（オリヴィエ）「クラ……ウ……ス……」

ぼろぼろになったヴィヴィオが地面を跳ね、その場に倒れた。アインハルトはヴィヴィオを起こし、抱き締めた

アインハルト（クラウド）「やっと……あなたを掴むことが出来ました。そしてオリヴィエ……もう離しません、私（僕）はあなたを愛しています、初めて出会ったときから……」

ヴィヴィオは目を見開き、そつと目を閉じ涙を流した。

ヴィヴィオ（オリヴィエ）「あり……がとう……クラウド……」

2人の体から、魂と言えるような魔力が消えた。

それを町長席で見ていた町長は、拳から血が出るほどに握りしめていた。

町長「お・の・れッ！ たかがガキの分際でよくも私の気持ちを裏切りおつたな……！」

町長は席を立ち、側近たちに怒鳴りながら指示を出した。

柵から鎧兜を付け武装した大勢の兵士たちがアインハルトと抱えたヴィヴィオを取り囲んだ

アインハルト「……………ッ!」

既に全力を出してしまつて、戦う力もないアインハルトは絶体絶命の状態だつた

町長「やれえ!!そのチャンピオンもろとも始末しろ!!」

くっ、テイオの回復は間に合わない

町長が言う放つと、兵士たちが2人の距離を詰めていく。その時――

???「絶招 炎雷炮!!」

客席から誰かが飛び出し、アインハルトの後方にいた兵士たちの心に物凄い勢いで突撃した。

ズドーーーーーン!!

兵士たちの絶叫と爆煙が上がつた。爆煙の中で戦う音が聞こえ、一人の兵士が爆煙の中から出てきた。

兵士A「がはっ!」

???「アインハルトさん、こっちです!!」

爆煙が晴れ、飛び出してきた人物の姿が確認できた。大人モードのリオだつた

アインハルト「リオ…さん?」

きよとんとしているアインハルト。その後ろから兵士がアインハルトへ剣を振り下ろした

だが、その直後に兵士は宙を飛んだ。巨大な拳によって

兵士C「ゴッ、ゴーレムだーッ!!」

アインハルトは後ろから聞こえてきた兵士の発言で振り向いた。

コロナ「風ぎ払って、ゴライアス!!」

コロナが乗ったゴーレムの『ゴライアス』だった。ゴライアスが平手打ちのように兵士たちを風ぎ払っていく

アインハルト「コロナさんまで…」

突然現れたゴーレムに、観客は騒ぎ出し闘技場から逃げ出していく。その混乱に乗じて、町長が観客に紛れ逃げていく所をアインハルトは目撃した

アインハルト「あっ…!!」

アインハルトは立ち上がるつもりとするが、力が入らずその場から動けなかった。

リオ「コロナ、作戦変更! 2人を守るよ!!」

コロナ「うんッ!!」

増援としてきた兵士たちにリオが突っ込んでいった。ゴライアスの巨大な拳が反対側にいた兵士たちを吹き飛ばす。

そして、逃げた町長はというと

闘技場から出ると、民主の一団に取り囲まれていた。

町長「なんだ、お前たちは!?!」

エクセル「アンタに捕らえられた人達の家族だ……」

集団を割って入ってきたエクセルが町長を見つめた。

エクセル「それに、もうお前は逃げられない。この町の保安部隊もアンタに家族を捕られて、アンタを捕まえたい一心でこの集団を許した。今頃、屋敷の地下から助けだしている頃だよ町長……いや、元奴隷商人さん」

町長「ぐぬぬぬッ!! 正体が知られたからには仕方がない! だが、そう簡単に捕まったりはしない!!」

町長は懐から魔術の力がこもった水晶を出して地面に叩きつけた。水晶が割れ、地面から大きな人型の骸骨が現れエクセルへ拳を振り上げた。

エクセル「そんな骨のオモチャなんかにな……」

エクセルは大きな大剣を召喚し、振りかぶる

エクセル「俺が負けるかーッ!!」

地を蹴り、骸骨の頭から大剣を上から振り下ろす。両断された骨が町長の横に倒れる

町長「はっ、あはは…」

町長は目を回し、その場に倒れた。

その直ぐ後、地下から救助された人達は、家族の所へ送られた。

闘技場にいた兵士たちは、半分以上が町長に従っていたわけではなかったらしく、彼らもまた家族を人質にされていたらしい。

どこまでも汚い町長は、保安部隊が連れて行きこの町に平和という二文字が並んだ。俺たちは、旅立つ直前に協力してくれた人達から馬車と食料、お礼金を受け取った。

エクセル「皆さん、こんなにまで助けていただき、感謝します」

エクセルは市民の団体にお辞儀をした。

市民A（男性）「こちらもアンタ等の協力があったこそ、あの町長を倒すことができたんだ。」

保安官「これは感謝の気持ちなんだ、わかってくれ」

エクセルは情報屋の方に向き直った

情報屋「キミの仲間らしい人達がこの先、炎の魔術が盛んな国で見たって情報がある。ここからだ、二、三日で着く距離だ」

保安官「というと、アルフィードに向かうのか。」

エクセル「アルフィード？どういった国なんだ」

炎の魔術が盛んな国“アルフィード”三国の中で炎を根に発展した国らしい。そう保安官が教えてくれた

保安官「今、三国の小競り合いが続いて国境も厳しい警備がしかれている。今から向かうアルフィードは、そんなに厳しくはない。ただ、街中は真夏みたいな感じだから、コートは着ない方がいい」

エクセル「そうか……炎……」

エクセルはあの場にいた中で、最も炎を使う2人組を思い浮かべた

エクセル「承知しました。では、自分たちはこれで」

馬車に乗って手綱を持った。

エクセル「それはそうと、あの闘技場のチャンピオン……誰が決めるんです？」

市民B「確かにそうだな。よし、じゃあ明日から大会でも開こうや！！！」

その言葉に集団が賛成した。エクセルは皆に聞こえるように

エクセル「皆さんに神のご加護を……！！！」

手綱を叩くと、馬車に繋がれた4匹（内2匹は小さい）の馬が進み出した。スピードは20〜30kmくらい、そんなに揺れないから安心だ

エクセル「リオ、コロナ……」

中にいたリオとコロナがこちらを向いた。薄いガラス張りだから、聞こえると思う

リオ「2人はまだ眠ってますよ。幸せそうに」

町長が捕まった後、ヴィヴィオとアインハルトは気を失って治療魔術を施してもらって、ヴィヴィオの痣や打撲傷は消えアインハルトはたまっていた疲労で眠っているのだ

コロナ「2人が離れなかったので、横に寝かしたんですが……」

俺は手綱を持ちながら、中を覗いた。すると、奇妙な光景を目にした

エクセル「…!？」

オリヴィエ「スッー…スッー…」

クラウド「スッー…スッー」

エクセルはヴィヴィオとアインハルトが別人に見えた。それは聖王オリヴィエと霸王クラウドの姿だった  
2人が抱き合っているように見えた

エクセルは目を擦って、もう一度見た。

ヴィヴィオ「スッ…スッ…」

アインハルト「スッ…スッ…」

2人が普通に眠っていた。

エクセル「幻…か。そんなわけないよな」

エクセルは手綱を持ったまま、空を見上げた。

もし、生きていた時にオリヴィエとクラウドが結ばれていたら今の2人はどうなっていたのかとついつい想像してしまった

エクセル「2人はどんな夢を見てるんだろう。きっと幸せな夢なんだろうけど……」



第12話 受け継がれた思いを越えて（後書き）

オリヴィエ「クラウス…」

クラウス「オリヴィエ…」

夢の中で2人は幸せそうな笑みを浮かべていた。

この2人は、今一番幸せな時なのだ。夢が終わってもヴィヴィオと  
アインハルトが離れない限り、2人の幸せは終わることはない



気のせいだろうか？

エクセル「……ん？」

エクセルは地平線の先で何かが光ったことに気付いた。

エクセル「おゝい……そろそろ着くかもしれないから、バリアジャケットを各自装着しとけ」

ようやく……ようやくだ。国の入り口まで来たエクセルたち、周りを城壁で囲み

その辺りだけが砂漠が進んでおらず、オアシスや森林が所々にあつた

馬車を降りた少女4人は

リオ「涼しい」

バリアジャケットを装着したりリオはその場でクルクルと回った。

バリアジャケットをただ服装という形で装着しているだけだから、大人モードではない。もちろん、ヴィヴィオやアインハルトもまた同じ

ヴィヴィオ「うーん……私だけ浮いてます？」

一応、ヴィヴィオは髪もサイドアップ状態ではあるけど、ジャケットが少しだけ不似合いだ

アインハルト「大丈夫ですよヴィヴィオさん。浮いてなんかいませんから」

ヴィヴィオ「アインハルトさん…／＼／＼」

照れているヴィヴィオの横からコロナがこちらに話し掛けた

コロナ「これからどうするんですか？」

俺はバリアジャケットを装着した。

エクセル「そうだな…中に入ったらまずは宿を探して、情報収集だな。行くぞ…」

荷物を持って城門の中を進むためにと警備兵が一人一人を荷物チエツクをするのだ。

警備兵「この子たちは誰だ？」

エクセル「自分の娘とその友達ですよ」

エクセルはヴィヴィオの頭に手を置く。

警備兵「そうか。今日の祭には近くの村からの客が子どもを連れてくるからちゃんとチエツクしないといかんだ、戦時中だからな…  
・もう通っていいぞ」

エクセル「どうも…」

通った後、ヴィヴィオはエクセルに

ヴィヴィオ「あの…エクセルさん。さっき娘って」

エクセル「ああ…なのはに聞かれてたら怒られるか」

ヴィヴィオ「いえ、そうではなくて……」

ヴィヴィオは素直に「嬉しかった」と言えなかった。父という存在がちょっとうらやましいヴィヴィオにとってそんなこと言ったら、フェイトかなのはにどう言われるかと思ったからだ。

宿に着き、俺だけが聞き込みに出かけた。他の4人を祭に出かけさせてだ

城下町だけあって広い。中央はパレードがあつて人込み…情報をもらつとすれば、また酒屋か？

エクセル「いやいや、酒屋はやめよう……」

考えごとをしながら、歩いて10分。適当にすれ違った親子に話を聞いた

親「炎を使う女騎士と使い魔の2人組？炎つていつても、この国は炎の魔術が基本だから2人組って言われてもな」

エクセル「そうですか…すみません、失礼しました」

歩き出そうとすると、子供が服を掴んだ

子供「僕知ってるよ！その人たち」

エクセル「……本当？」

子供「うん。だってその2人、城に入っていくのを見たもん！ピンの髪の毛の人にちっちゃな使い魔さん！」

ビンゴ「……間違いない。でも、城だって……？」

エクセル「って……言われて城まで来たわいいけど」

俺は城を見た。壁が高くて飛び越えるのは不可能だ。となると、町人に化けていくしかないか

思案していると、城の門の辺りに人だかりができていた。

エクセル「なんだ………？」

気になって行ってみると、門がゆっくり開いた。中からは真っ赤な色の短髪、前髪をオールバックにした青年がマントを翻し、門をくぐってきた

町人A「フェルコ陛下……！！」

町人B「陛下……!!」

みんなが陛下って呼ぶってことは、あれがこの国の王か

フェルコ「やあ、民の諸君おはよう!このフェルコ・ベーカー、今日の良き天候は…守護神“フェニックス”と君ら民の熱意のおかげだ!近頃は、大した戦がなく兵や民たちは平穏な暮らしが出来たら今日の祭は開けた。本格的な戦が始まるうとも、我らが炎の勢いを止めることはできん、アルクイードに!!」

王が拳を空へ突き上げた。王に引かれて全員がアルクイードと叫んだ

フェルコ「さあ、民たちよ!パレードの開始だあーッ!!」

ドトーン!!

その瞬間、城から七色の花火が4つ打ち上げられた。花火は七色に輝き、祭のスタートを飾った

フェルコ「さあ、我が妃よ。共に祭を楽しもうではないか」

フェルコは背後から来た王妃らしき人物に手を差し出した。

????「はい……」

ピンクの髪を束ね、かきあげて赤い留め具でとめて膝まで露出していた派手なドレスを着ている王妃の顔が見えた

エクセル「……あれ?」

王妃の顔を見ると、誰かに似ていた気がした。友人で、あの類の服を着た所なんて見たこともない女性に

エクセル「いや……気のせいだよな。さすがに彼女なわけないし……」

王と王妃を乗せた馬は民や騎士団たちに囲まれる中、町中に消えていった

エクセル「さて……城は無理そうだし、俺も祭にでも行くか」

ため息をしながら、エクセルは人込みに紛れていった。

その頃、ヴィヴィオ達は

リオとコロナは屋台で買ったアルクイード特製“七色アイスクリーム”と書かれた紙に包まれたアイスクリームを食べていた。暑いのに溶けなくて冷たくて美味しいと評判なお店のメニューをそのまま出した屋台だ

リオ「美味しい〜」

リオが幸せそうな顔でアイスクリームを食べていた

コロナ「この世界にアイスクリームがあるなんて意外だったな〜」

口の周りにアイスクリームがちょこつと付けたコロナは辺りを見た。

リオ「あれ…ヴィヴィオとアインハルトさんは？」



辺りを見回すとヴィヴィオとアインハルトがいないことに気付くり  
才。隣でコロナが指差した

コロナ「あそこに行つたみたいだったけど……」

コロナが指差した先には“王立案 女子格闘武道大会”と書かれて  
いた

壇上には大人モードのアインハルトが筋肉体質の女の人と格闘して  
いた。その相手との結果はというと

司会「なんと！？アインハルト選手、優勝候補の彼女を糸も簡単  
に粉碎！細い腕だけに凄いパワーだ。その強さ一体どこからくるの  
だー！！？」

司会者が言うと、アインハルトは頬を少し赤らめた。壇上の下では  
ヴィヴィオがノリノリで応援していた

リオ「懲りないな」

苦笑するリオとコロナも、立ち上りヴィヴィオの近くで応援するこ  
とにした

それから、ヴィヴィオたちと合流したエクセルは、アインハルトが  
大会で優勝した記念に城のパーティーに招待されたと聞き、エスコ  
ートをするついでに一緒に行くことにした。なおヴィヴィオたちは  
宿で留守番という形で

城に入ると、アインハルト（大人モード）は城の人たちが「ドレス

が用意してあります」と言われ、着替えてくると、エメラルドグリーン  
の髪を綺麗に下ろし、髪に合ったドレスを着てやってきた。エ  
クセルは一瞬だけその綺麗さに魅入られてしまった。それに比べて  
自分は執務官のバリアジャケットと、つい見比べてしまった

エクセル「行こうか、アインハルト」

白い手袋をした手を差し出した。照れているアインハルトがその手  
を握るのに数秒かった

ホールに入ると、色々な人たちがいた。貴族みたいな人たちや騎士  
みたいな人やら色々だ  
全員が手にワインが入ったグラスを持っていた

俺とアインハルトにもグラスが渡された。

エクセル「飲めるか…？」

アインハルト「……大丈夫です。頑張ります」

身体強化とはいえ酒が入ると大変なのだが…

すると、流れていた音楽の演奏が止んだ。

王座に座っていたフェルコがワインが入ったグラスを持って立ち上がった。その後ろで王妃もグラスを持って立ち上がった。

フェルコ「今日は何事もない1日であった。だが、この先は戦いの毎日になるかもしれん……諸君らには、これまで以上に努力と根性を見せてもらいたい……ではこの国の守護神であるフェニックスとアルクイードに、乾杯だ……」

俺とアインハルトは一番前にいたため、フェルコが目を閉じているのが見えた。周りも静かに目を閉じた

アインハルトも空気を読み、目を閉じた。

エクセル「……………」

ファッ！

横から変な音が聞こえた。他の人たちは気付いてない、気付いたのは俺だけだった。人々の間を抜け緑の仮面をつけた人物が無音でフェルコに走って行った

???「フェルコ王、覚悟ッ！！」

その叫びと共に、周りが一斉に目を開けた。何が起きたのかと確かめるために

仮面をつけた人物がフェルコへ飛び掛かろうとする前に、後ろにいた王妃とエクセルが素早く反応した。

エクセル「このッ…!!」

エクセルが後ろから仮面の人物を押さえ込むために飛び掛かかり床へ叩きつけた、そのままの勢いで仮面を剥ぎ取りそいつの顔を見た。

???「離せッ…!!」

驚いたことに、仮面をつけていたのは20代前半くらいの女性だったのだ。

王妃「陛下に刃を向けるなど、いい覚悟だな」

女性の顔に王妃は、剣を突き付けた。すると、エクセルは王妃の声に聞き覚えがあり、顔を上げた

よく見れば、突き付けた剣にも覚えがあった。それは自分の知る中で唯一、その炎の魔剣を使う人物の物だった。エクセルは王妃の顔を見た

エクセル「シッ、シグナム!？」

王妃は、エクセルの顔を見て驚いた。そして凝視した

シグナム「エクセル…なのか」

場所を移動し、王妃の寝室にやってきた。

エクセル「シグナム、無事で良かった」

こちらに背を向けていたシグナムは、拳を強く握り締めた

シグナム「無事で良かった……だと？それが、ひと月の間誰にも会えなかった私に対して言う言葉か！？」

シグナムがドレスを翻して、エクセルの胸ぐらを掴んだ。

エクセル「シグナム、落ち着けッ！」

胸ぐらを掴んだシグナムの握力が強まった。

シグナム「このひと月で私の全てが変わった！主とも出会えず、仲間の一にも出会えずだ！！答える、このひと月の間、どこでなにをしていたッ！！」

バンッ！！

その時、部屋のドアが勢いよく開いた。二人がドアの方を見ると、ヴィヴィオたち4人と

アギト「落ち着けてシグナム！！」

何やらわけもわからない防具を着用したアギト（大）が言った。

シグナム「止めるなアギト、私はこの男を殴らねば気が済まん！」

アギト「だから人の話を聞けっの！ヴィヴィオやエクセルたちは

私たちとは違う時間帯に飛ばされてきたんだよ!！」

シグナムの胸ぐらを掴んだ手の握力が緩んだ。

シグナム「違う時間帯だと……」

エクセル「俺がこの世界に来たのは、1週間とちょっとだ。ヴィヴィオやアインハルトたちも同じなんだ、わかってくれ!！」

シグナムが手を離し、エクセルから離れた。

シグナム「……すまない、取り乱してしまった」

エクセル「いや…俺こそ謝るべきだ」

俺はシグナムへ頭を下げる。シグナムが再びこちらへ振り返った、目が真っ赤になっていた

シグナム「お前が謝るべきでは……」

フェルコ「いいや!そうしなければ私が困るのだ!！」

廊下の方から、男の声が聞こえてきた。振り返るとドアの近くにいたアギトが床に片膝をつけていた

アギト「ほら、お前たちも!！」

アギトが無理やり、ヴィヴィオたちに片膝をつかせた。

廊下から部屋に入ってきたのは、王であるフェルコであった。

フェルコ「我が王妃であるシグナムを泣かせたのだ。本来ならば厳しい罰を与えたいが、貴様が彼女の友であるがゆえに謝罪だけで済ませておるのだ。」

シグナム「わが君、彼は既に私に対して謝罪はしています。ですから――」

フェルコ「いや、私に頭を下げなければお前には伝わらないのだ。」

シグナムが説得しようとするが、彼はそれを聞こうとしなかった。そんなシグナムを見るのが嫌になったエクセルは、その場で土下座をした

フェルコ「ほう、面白いことをするな…知らないのだな、たわけ者めが！衛兵、こいつを牢へ連れて行け！！」

エクセル「！？…何故です！私は頭を下げたのに」

いきなりの対応に困惑するエクセル。衛兵がエクセルを拘束し引張って行く

フェルコ「ならば教えてやろう！貴様のそのやり方はな、この三国では“挑戦”を意味しているのだ。」

シグナム「フェルコ！彼は知らなかったのだ、許しても――」

フェルコ「ならば、1つ聞こうではないか。この国の王は誰だ？」

シグナム「――」

フェルコ「この私だぞシグナム。私が決めた法律に違反する者はただでは済まされないことは良く知っておろう？」

フェルコとエクセルを拘束した衛兵たちが部屋から出ていった。

エクセル「心配するなシグナム。俺は大丈夫だから」

エクセルからの念話にシグナムは反応できなかった

アギト「シグナム、私はヴィヴィオたちを送ってくるから」

アギトは立ち尽くしていたシグナムに言うとドアを閉めて、ヴィヴィオを城から連れ出した。

シグナム「私は……愚かだ！」

一人残ったシグナムは、そう呟いた

―翌日―

あの後、牢屋に入れられた俺はただ天井を見上げていた。

持っていた物は全て持って行かれた。デバイスや小道具も含めてだ

エクセル「ハア……」



ため息をつく、隣の牢屋にいた人が声を掛けてきた。

「???」あなたも災難ですね。王を殺そうとした私を捕まえたのに、王の怒りを買っちゃうなんて…」

エクセル「まったくだよな、殺し屋さんよ」

隣にいたのは、昨晚俺が捕まえた暗殺者だ

「???」そんな呼び方、やめてくれます」

エクセル「じゃあ何て呼べばいいのかな……」

「???」私はシエリル・スターレン。あなたは？」

エクセル「エクセル・アーシュライトだ。1つ聞いていいか？何で王を殺そうとしたんだ」

隣にいたシエリルは、短いピンクの髪をくるくるといじくる。

シエリル「……憎かったから」

エクセル「憎かったからと言って、それだけで殺そうなんて思わないだろ」

シエリルが口籠もったのがわかった。

シエリル「うっ、うるさい。なんだって良いでしょ……」

シグナム「ずいぶん仲間が良くなったようだな」

軋む音と一緒に入り口の方からシグナムの声が聞こえた。

格好は昨夜と似たような派手なドレス。フェルコ王の趣味なのか？

エクセル「意外と俺達は野放しなんだな…」

俺が入っている牢の前で薄く笑うシグナム。

シグナム「彼は昨夜から機嫌が悪くてな、おかげで解放の願いも聞いてもらえん。」

エクセル「はははっ、悪いなシグナム。それはそうと、挑戦ってなんなんだ？」

シグナム「あれはな王に一騎打ちを申し込んだのと同じ意味なのだ」

挑戦が一騎打ちと同じだって？  
いくらなんでも無理があるな

エクセル「一騎打ちって…王とか？」

シグナム「いや…城の中で戦いに優れた騎士を選び出す。一騎打ちは今から2日後だ」

シグナムはそう言い残すと、入り口の方へ歩き出した

ということ、シグナムもその中に含まれるか。彼女とは闘いたくはない…あたらないことを祈るか

でも、本当に彼女はこれでいいのか？

エクセル「シグナム、お前はこれでいいのか？」

シグナムは立ち止まり

シグナム「なに……？」

エクセル「この国にひと月も居るのは、シグナム自身の意志か？」

シグナム「……おかしな質問をするな」

エクセル「だってそうだろう、この変な世界に飛ばされてきて家族であり、主であるはやても探さず、この国に居座っている。それも王妃の座について……」

シグナム「……………」

シグナムが黙った。

エクセル「お前は本当に俺の知っているシグナムか……」

しばらくの沈黙が続き、そしてシグナムが笑いだした

シグナム「フフフフ……なら私もお前に問うとしよう」

キインと俺の牢の扉が開いた。どうやら、シグナムが鍵で開けたようだ

シグナム「このひと月で私の中の何かが変わったのは話したな。仲

間を捜す気力も失せ、アギトと砂漠で途方に暮れていた時：戦の帰り途中だったフェルコに助けられた。彼は、主はやて以上に私を好いてくれた、大切にしてくれた。そして愛してくれたのだ」

シエリル「!!!?!」

シグナムが愛剣のレヴァンティンを引き抜き、バリアジャケットを装着し牢に入ってきた。

エクセル「それはフェルコの本当の気持ちと言えるのか。偽善の愛し方なんて、いくらでも出来る。あいつはお前を利用していると考えないのか!!」

ヴォーン!!

エクセル「……ッ!?!」

首筋の近くを強烈な火花が走った。炎を帯びたレヴァンティンが突き付けられたのだ。それと一緒に殺気が牢全体を包んだ

穏やかだったシグナムの顔が、鬼の形相とも言える状態に変わっていた。

シグナム「今の発言を撤回しろ……」

小さな声だが、それだけでも今の彼女は恐ろしかった。

エクセル「シグ…ナム……っ……断る……」

そう言うと、レヴァンティンの炎の勢いが増した。

シグナム「その発言、私を敵に回すことになるぞ……」

今のシグナムならその可能性は十分にあり得る。

今言ったことを撤回すれば、彼女は許してはくれるみたいだが…断つて、最悪の場合シグナムと戦う可能性が大きくなる。

だけど…俺は仲間である彼女を深く傷つけてしまった

シグナムの心境をもう少し確かめるために今は……

エクセル「構わない…今のシグナムが俺を許さないなら、戦いで…決着をつける！」

シグナム「ッ！！」

シグナムが一瞬だけ怯んだ。だが、すぐに元に戻りレヴァンティンを鞘に納めバリアジャケットが消えた。

シグナム「貴様には失望した。お前の挑戦は受けよう…だが、私は殺す気でいかせてもらう」

そう言うと、シグナムは牢から出てそのままの勢いで地下牢から出ていった

シェリル「ちょっと待ちなさいよ！王に会わせなさい、今すぐに……ッ……」

牢屋の柵を握って、出口に向かってギャーギャー叫ぶシェリル。

エクセル「うるさいぞシェリル……」

シエリル「なによ、そっちこそ黙りーーーー」

ズドーーーーーン！

突如として、シエリルとエクセルの牢を繋ぐ壁の一部がドアのサイズに切り取られた。

エクセル「これで少しはすっきりしたな」

シエリルは目をしばたかせた。エクセルの手首についているはずの手枷がすっかり外されていた。

シエリル「いつ、一体どうやって」

エクセル「これが…？」

エクセルが手枷を持ち上げた。シエリルの手枷を見て、近づき手枷へ手を伸ばした。すると、エクセルの手から小さな鍵が出現した

カシャ！

鍵穴に鍵を差し込み、手枷を外した。

シエリル「それって…投影魔術」

エクセル「これが魔術…？」

シエリル「ええ、そのやり方といい動作といい魔術に繋がりがあある。それも禁じられた魔術を使うなんて」

エクセル「まあ、今そんなこと気にしたら余計に混乱するからさ…」

壁をくぐり抜け、自分の牢へ戻りベッドへ寝転ぶ

―王室―

フェルコ「奴と戦いたいだと…？」

王自身にシグナムは直接申し出た。

シグナム「奴とは以前から決着を付けたかった。だからー」

私を選んでくださいとシグナムは強く言った。

フェルコ「ふむっ……良かろう許可するでしょう」

シグナム「ありがとうございます。では、私は戦いに備えるために鍛練を始めます」

そう言つてシグナムは王室から出ていった

フェルコ「ふう……」

ため息をつくつと、今度は執事らしき老人が入ってきた。

執事「フェルコ様、少しよろしいでしょうか」

フェルコ「ああ、どうした爺。話なら短く頼む」

執事「はい。フェルコ様を殺そうとした者のことで、いくつか思い出したことが」

フェルコ「あの女のことか、申せ……」

執事「はい。あの者は以前、この城でメイドをしていました」

頷くフェルコ。

執事「覚えておられませんか？フェルコ様が大怪我をなさった時がありました、ずっと看病していたのがあの者でございますが」

フェルコ「ん……？俺が大怪我をしたのは11の時……看病してくれたのは同じ年の女………おお、思い出した。確かにあの時の女だ……だが、何故あの者が私を殺そうなどと」

執事「それはあなた様が、彼女に婚姻の誓いの約束を破ったからでは……？」

フェルコ「は……？俺があの者と婚姻の誓いを？バカなことを言うな、俺がそんなことをするはずがないだろう」

執事「なら、直接本人に確かめたらいかがですかかな？」



## 第14話 灼熱の魔神

―牢屋 深夜―

翌日にシグナムとの戦いが控えてるため、エクセルは物静かにふけていた。ドアの形で空いた壁の奥、早く言えば隣の牢でシェリルはベッドで膝を抱えながら眠っていた。そんな牢屋につづく道を一人の男が歩いていた

エクセル「……………」

足音から、見回りじゃないと気づいたエクセルはベッドから起き上がった

エクセル「誰だ……………」

???「お前が生きているのは運命の導きなのかな…?」

聞き覚えのあるその声にエクセルはベッドから飛び起き身構えた。

エクセル「アルザス…ッ!!」

エクセルのいた牢の前にあのアルザスが立った。仮面をつけこの国の騎士の格好をしていた

アルザス「いい様だな。運命の選択者が…」

アルザスがエクセルを見て嘲笑った。

エクセル「お前たちのせいで、俺たちはこの訳もわからない世界に飛ばされ、仲間たちとは離ればなれになりその内の一人と死合うはめになった。」

アルザス「シグナムと死合うだと？ふっ、これは良いことを聞いた。お前が彼女とやり合う方が俺にとっては好都合だ」

アルザスが何かを企んでいるような表情で笑った

エクセル「なにが目的だ。他の仲間には出してないだろうな……」

アルザス「両方とも答えるつもりはない。知りたかったら明日を楽しみにしているがいいさ……この国とシグナムの命、どちらを選んでも運命の分かれ道だ。せえせえ頑張るがいいさ」

笑いながら、アルザスは霧のように消えた。

エクセル「待て…ッ!!」

柵から手を伸ばすが、アルザスは既に消えていた

エクセル「なにが……なにが運命の分かれ道だ!!」

エクセルは壁を殴った。生々しい鈍い音がした

フェルコ「なにを一人でぶつぶつ呟いている」

そこへ今度はフェルコが現れた。

フェルコ「おや…?どうやって手枷を外したのかな？」

フェルコがエクセルの手首を見て疑問に思った。エクセルはシェリルと同じように証明してみせた

フェルコ「禁断の魔術の使い手か……これは意外だな、シグナムの仲間であるならば貴様も魔法が使えるのであるう。なぜ魔術を使う」

エクセル「この力が魔術かも知れないとわかったのはつい先日……と魔法だと思ってた。それより何の用ですか」

エクセルが言うとフェルコは何かを思い出したように

フェルコ「そうだった。俺が用があるのはその女だ」

フェルコがシェリルを指さした。まだぐっすり眠っている

フェルコ「起こさなくていい。お前にしばし確認してもらいたいことがある」

エクセル「確認……？」

フェルコ「あの女、名はなんと名乗った？」

エクセル「シェリル……ですが」

フェルコ「ふむ、ではその女……腕かどこかに紋章か何かないか？」

紋章？と考えながら、起こさないように腕を見る

エクセル「これですか？」

フェルコはその紋章を見て脂汗が出てきた。

フェルコ「……………これはマズい」

エクセル「この紋章がなにか？」

フェルコ「それは俺との……………婚約の証だ」

ー10年程前ー

11歳のフェルコは訓練中に大怪我をおい、一年かけての治療とリハビリをすることとなった。

そんなフェルコを思う一人の可憐な少女がいた。

その少女の名前は、シェリル

メイドとして城に入ったのは1ヶ月と少しばかりしか経っていないそんなシェリルがメイドとして城に入ったのは一つの理由があった。

それは時をさかのぼること2ヶ月半前、街の裏道で倒れていたシェリル。壁にもたれかかり、水も飲めず、食べ物を買う金もなく、もはや飢え死にを待つシェリルに手を差し伸べたのは一人の少年だった。

た。少年はシエリルに食べ物と水を与えて、1ヶ月分の金を与えた。やがてシエリルは、その少年が王子のフェルコだと知り、お礼と感謝を言うために見習いメイドとして、城に入った。

だが、フェルコと立ち会うのはそう簡単なことではなかった。

入ったばかりのシエリルが王子の側で仕事をするとしても、それが出来るのは世話役と上位のメイドだけだった。シエリルは王子に会いたい一心で、必死に仕事をこなしていた。怒られることや誉められることはあっても下位のメイドから昇格することはなかった。そんな時に起こったのが訓練中の事故だった。

ちょうど近くにいたシエリルがフェルコに応急措置を施したおかげで、彼は一命を取り留めた。それがシエリルにとってチャンスに変わった。

メイド長からシエリルにフェルコのリハビリを担当するように命じられたのだ。

やっとお礼が言えると思ったシエリルだったが、そのフェルコ本人がシエリルのことを一切覚えていなかった。

人が良すぎるフェルコは、いくつもの人を助けておりシエリルを憶えていないというのは少しだけ合点がいった。

それでも、シエリルは自分の時のように今度は自分が彼を助けたいと決め、フェルコのリハビリを手伝った。

そして一年、リハビリが終了し同い年だった二人は12歳になった。そして突然、フェルコからシエリルを世話役として引き抜いていった。

驚くもつかの間、夜になってフェルコは二人だけで街へ行こうと言いだした。いくら王子でも世話役のメイドと一緒に街へ出るなんて考えられないのだ。

結局、止めることができずに城を抜け出した

シエリル「あの……どこへ？」

フェルコ「いい所だよ」

夜の街を進み、外れにあった天文台へとやってきた。フェルコが空を指差し、シエリルは目を奪われた。

それは空一面に輝く星の数々だった。

フェルコ「綺麗だろ？俺のお気に入り場所さ。まだ誰にも見せたことがないんだ」

シエリル「……何故、私なんかに」

フェルコ「お前に……見せたかったから。その…謝りと礼を含めて」

その発言と行動に、シエリルは顔を赤くした。フェルコはシエリルの頭を撫でたのだ

フェルコ「ゴメンな…シエリル」

シエリルは泣き顔になった

シエリル「王子……お戯れが過ぎます／＼／＼／＼」

フェルコ「ふざけてなんてない。俺を助けてくれて、手伝ってくれてありがとう」

そのまま、シエリルを優しく抱き締めた。その時間がとても長く感じた

そして二人の楽しい時が過ぎ、二人が17歳になったころ、事件は起こってしまった。

朝、いつものようにシエリルはフェルコの部屋へ訪れた。世話役として、フェルコの身の回りを掃除整頓などをいつものように行っていた。12歳の時とは比較にならないまでに綺麗になっていた。ピククの美しい髪は城の中では彼女一人だけだった

そこへ、食事を済ませたフェルコが戻ってきた。

シエリル「あっ、フェルコ様」

作業を中断し、フェルコへ振り返った。

フェルコ「良い…仕事を続けよ」

はいと返事をして、作業を再開する。

フェルコ「もうすぐ、俺は王位を継ぐ。そしたら、お前とは話せなくなってしまう」

シエリルの手が止まる。

シェリル「仕方がないことでございます。フェルコ様はこの国の王になることは決められたこと」

手に持った雑巾をバケツにつけ水を絞る。

フェルコ「だが、お前と話せなくなるのは――」

シェリル「いいですよ、フェルコ様」

フェルコ「なっ……」

シェリル「私はフェルコ様の近くにいるだけで幸せでございますから」

にっこりと笑うシェリルは、背を向けて掃除へ戻ろうとする。

フェルコ「……そうだ、いい考えがある。シェリル、俺の妻になってくれないか――」

ガタンッ！

シェリルはその言葉に驚いて、壁に頭をぶつけてしまった。

シェリル「つつつツ、妻ででですかああ――!!?!?」

焦って言葉が詰まり、舌を嚙んでしまった。

フェルコ「そうだ！そうすれば離れることはない――」

フェルコがシェリルの手を握り締めてしまい、シェリルの体温と脈



動が速まった。

シェリル「あの、その、それってつまり…私を好きということ…ですか？／＼／＼／＼／」

赤くなつたシェリルに気付いて手をぱつと離れた。

フェルコ「あつ、いや…その、好きということではなくて、友として…だ」

シェリル「……………そうですか。友として…ですか」

シェリルは掃除をやめて、バケツを持ち部屋を出て行ってしまった。

フェルコ「………またやってしまった」

廊下を悲しい顔で歩いているシェリル

シェリル「専属メイドの私と王になるフェルコ様では位が違い過ぎる……それにフェルコ様は、私を……」

シェリルは胸元を掴んだ。

その翌日の夜、専属メイドの個室部屋

フェルコはシエリルに謝りに行った。

フェルコ「許してくれとは言わない。けど、シエリル…俺にはお前が必要なんだ」

フェルコに廊下の壁に押し付けられたシエリルは

シエリル「私はメイドです。メイドの私が妻になつてはフェルコ様は」

フェルコ「シエリル…お前はもうメイド以上のことをしている。俺の命を救ってくれたじゃないか…それにー」

シエリル「もうやめてください!!」

シエリルが怒鳴った。泣き声で悲しく泣いた顔で

シエリル「私はあなた様が好きです!心から愛しています!!でも、妻になつたらフェルコ様を悲しませてしまいます、人望が高く名誉あふれたフェルコ様の妻が…私のような者では、だからー」

すると、シエリルの唇が塞がれた。フェルコの唇によって

唇を離したフェルコは、シエリルの髪を撫でた

フェルコ「落ち着いたか?」

ポカーンとしたシエリルはコクリと頷いた。

フェルコ「それがどうした。シエリルが俺の妻になって、反対する奴は説得すればいい。この国を思う奴は大勢いる……だが、2人なら、俺とシエリルなら」

フェルコの手がシエリルの頬に触れた。

シエリル「……………フェルコ様／＼／＼／」

フェルコ「ついて来てくれるか死ぬまで……？」

シエリル「はい…フェルコ様／＼／＼／」

そして2つの影が重なった。

そして、そのまま2人は城を抜け出しあの星空の天文台へ向かった

天文台に着くと、2人は星空を見ながら笑った。

フェルコ「シエリル…腕を出してくれ」

シエリル「?…はい」

袖を捲り、腕をフェルコへ向ける。するとフェルコは、腕に手を当て何かを唱えた

すると炎がシエリルの腕に巻き付いた。熱くはない、火傷もしない。これは浄めの炎に似ていた

炎が消えるとシェリルの腕には王の紋章が刻まれていた。

シェリル「これは…?」

フェルコ「婚姻の誓い…その証だ。この紋章を持つ者がこの国の王の妻、つまり王妃の証だ…ただし一生に一度だけだ」

シェリルは嬉しいそうにその証を見つめた。

城に戻った2人を王の親衛隊が包囲した。

フェルコ「なんだ貴様ら!!」

シェリルを庇うフェルコ。親衛隊の間を割って入ってきたのは、フェルコの父にして現アルクイードの王だ

王「そこまでだフェルコ」

フェルコ「父上!?これは一体どういうことです!!」

王「黙れ!理由はお前の後ろにいる女だ!!」

シェリルが息を飲んだ。

兵士がシェリルとフェルコを引き剥がした。

シエリル「フェルコ様ッ！！」

フェルコ「シエリルッ！！」

手を伸ばしたシエリルの手を取ろうとするフェルコだが、その手は空を切った

フェルコを地面に叩きつける兵士、逆にシエリルを王の前に膝まつかせる兵士

王「この戯け者め、我が息子を誑かしおって！！」

王はシエリルに平手打ちした。シエリルの頬がかなり赤くなるほどだ

フェルコ「やめろ！！」

王「黙れ！！」

王がシエリルの髪を掴んだ。

シエリル「うっ…！！」

フェルコ「シエリル…！！」

フェルコが地面で兵士の手から逃れようとした。

シエリル「フェルコ様…」

捲れたシエリルの腕を王は見た。

王「貴様、何故この紋章を！？さては…」

シエリル「そうです。私はフェルコ様と婚姻の誓いを…交わしました」

それが王の怒りに触れた。

その結果、シエリルは地下牢に閉じ込められフェルコは監禁扱いとなった

二週間という時間が過ぎ、シエリルは死刑とは別に国外追放となった。フェルコは見送ることも出来ず、自分のせいだと悲しむしかなかった。

砂漠を彷徨うシエリル、彼女が向かう先はいざ知らず、それでもシエリルは砂漠を進み続けた

シエリル「フェルコ様……いつか絶対、私はあなたの元へ戻って参ります。性格は変わってしまうかもしれませんが、強くなって愛しきあなたの元へ必ず戻ってきます」

泣きたい気持ちを心の奥へしまい込んで、彼女は砂漠の彼方へ消えていった

そして時は現代の1ヶ月前

追放されたシエリルが辿り着いたのは武道が盛んな町だった。そこでシエリルは数年住み、格闘から剣術、馬術から魔術全てを身につけた

月に一度行われる大会では、彼女は絶対上位に残っていた。その厳しい暮らしから性格はいつの間にか、以前とは正反対になり、大の男ですら恐がる女性へと成長した。

そんな彼女でも、愛しきフェルコのことを忘れたことはなかった。戦争が起き、紋章を見て思い出すたびに悲しみが込み上げてきた涙をこらえ、会いたいという感情を押し殺しの繰り返しだった。

ある日、アルクイードで祭が開かれると聞いた。

今なら、フェルコは王になっている。会ってこの腕の紋章を見せればあの時の誓いが果たせる

その事を思うと、シエリルは馬を走らせ急いでアルクイードへと向かった。

祭の前日についたシエリルは、どう会おうか考えていた。そして考えたのは舞踏会に忍び込んで、彼と踊って驚かせようと考えた。この祭には何度も参加したからパレードには絶対、王は参加することとは知っていた

祭の日になり、城の前でシエリルは民たちの中に紛れていた

シエリル「まだかな…」

門が開かないから、周囲を見て時間をつぶした。すると、目の前をおかしな格好をした男性が通り過ぎた  
けど普通の騎士でもなさそうだし、なんか不思議な力を感じる

そんなことを思っていると、門が開いた

民から歓声が上がる。門から成長し王となったフェルコが出てきた。  
フェルコ様：立派になりました

歓喜な気持ちで裏切るようにフェルコが手を引く女性を目にしシエリルは驚きを隠せなかった。そしてその女性を王妃と呼ぶフェルコにも驚いた

しまい混んでいた悲しみが一気に吐き出された。裏道でシエリルは泣いた、悲しみに絶えきれずシエリルは泣き続けた。

シエリル「私を裏切るなんて……」

悲しみの後、自分に残されたのは彼に対する恨みだけだった。この私を裏切った彼に対する恨みが一気に沸き上がってきた。怒りに我を忘れてしまっていた

考えもしないうちにシエリルは城へと入って行った

舞踏会が始まり乾杯の言葉を言うためにフェルコをはじめ、全員が目を閉じた。

それをチャンスと取り、無音で人ごみから出てフェルコへ走りだし忍ばせた武器を取り出した

シエリル「フェルコ王覚悟ー！ーッ！！」

飛び掛かるうとしたシエリルを後ろから誰かが床へ押さえ付けた。  
見てみる、あの不思議な格好の男だった

そこへ剣の刃が向けられ、シエリルはやっと我に帰った。



「牢屋」

シエリル「フェルコ様・・・」

フェルコと口にした彼女を彼は見つめた

フェルコは黙っていた口を動かした。

フェルコ「とにかく、その女に伝えておけ……“すまなかった”と」

フェルコはシエリルをチラ見し、牢から出て行ってしまった。

エクセル「これが、誓いの証か……」

フェルコ王が何故黙ったのか知らないけど……彼やシエリルも悲しい人生だったんだろうな。

エクセル「仕方ない……一肌脱ぐとするか」

シグナムは訓練場で鍛練を続けていた。レヴァンティンを振るった  
びに、汗がシグナムの肌から離れ地面に落ちる。

シグナム「ハアッ…！」

横へ一閃。空を斬り、膝を地面につけた

シグナム「ハア、ハア、ハア、ハア……」

汗を拭うシグナム

????「面白いな……」

シグナム「!？」

シグナムは振り返った。そこには、アルザスが立っていた。

シグナム「貴様…！」

レヴァンティンをアルザスに向けた。アルザスは両手を上げ

アルザス「待て待て、争うつもりはない」

シグナムへ歩みつつ、シグナムの周りを回る

シグナム「なに…？」

アルザス「迷っているようだな、シグナム」

シグナムを上から見下ろすアルザス。

シグナム「私が…迷っているだど？」

アルザス「そうだ。あの男を口では殺すつもりで言ったようだが、本心は違っただろ」

シグナム「……黙れッ」

レヴァンティンの切っ先をアルザスの顔へ向け立ち上がった

アルザス「凶星だな……」

レヴァンティンを持った手が震える。

アルザス「主を失って、何かにすがりたかったのか？それとも気で狂ったか」

シグナム「ッ！！」

言葉に嫌気がさし、レヴァンティンに炎が灯る

アルザス「なあ、シグナム…俺と手を組んで仲間にならないか？」

シグナム「なんだと……」

こいつと手を組むだと……？

アルザス「今のお前の表情は格別だなシグナム。憎しみと悲しみで歪んでいる俺はそんなお前がいとおいしいよ」

シグナム「……………お前の望みはなんだ」

シグナムはレヴァンティンを下ろした。するとアルザスは横からシグナムの腰に手を回し片方の手でシグナムの頬を撫でた

アルザス「エクセルを殺せ…」

そうシグナムの耳元で囁いた。シグナムは振り返った

シグナム「…承知した」

2人の影が一つになった。

試合の日

牢からエクセルは出た。いや、兵士によって連れ出されたと言っている  
いい

何故手枷がないのか兵士は不思議に思っていたが、時間がなかったので連れて行くこととした

シエリルは反対側を向きながら、ベッドで横になっていた。

エクセルはシエリルの牢の前で立ち止まり

エクセル「シエリル、王がお前に謝ってたぞ」

シエリル「そう……」

エクセル「“すまなかった”と言ってな……お前も彼に言わなきゃ

ならないことあるだろう、“懐”にあるから……」

そう言い残すと、エクセルは牢から出ていった。

シエリル「……懐、ね」

シエリルは胸元へ手を入れると、一つの鍵を取り出す。

シエリル「……フェルコ様が私に謝る……か。私も、素直にならなきゃね」

城下にある闘技場で試合は行われることになった。

ここには、守護神である不死鳥フェニックスを祭っている。一年に一回、この場所で人々は祈りを捧げる祭も開いている

今、この場所で最悪の戦いが始まるとも知らず知らず見に来る観客は幸せなのかもしれない

観客席ではヴィヴィオたちも見に来ていた。

ヴィヴィオ「ねえ、アギト……シグナムさんは本当に説得できなかつたの？」

アギト「ダメだった……というか、様子がおかしかった。なんか笑ってたし」

そうこうしていると歓声と共にエクセルが出てきた。

エクセル「装備は返してもらったけど、デバイスはさすがに無理だったか」

というところ“投影”っていう魔術みたいな力を使うしかないか

すると、今度はシグナムが出てきた。いつもの表情でいつものバリ  
アジャケット、アルザスが手を加えたような感じはしない。審判が  
離れ合図と共に試合は開始した

シグナム「殺す…」

エクセル「殺すか…やってみるよ」

そうエクセルが言うと、目の前にいたシグナムが消えた

シグナム「……紫電」

背後からシグナムの声が聞こえた

エクセル「ッ!!」

シグナム「一閃ッ…!!」

ズドーン!!

爆発により砂が舞った。観客席にいたアギトは

アギト「なんだよこれ…シグナムの魔力が桁違い過ぎる!!?」

アギトは固唾を飲んで、爆発が起きた所を見た

アギト「シグナムの奴…なに考えてんだ」

煙が晴れると、シールドでシグナムのレヴァンティンを防いでいる  
エクセルがいた

エクセル「くっ……!!」

片手に刀鎌を召喚し、シグナムへ振るう。シグナムはそれを避け、  
距離を一旦離す

シグナム「そうだ…こうでなければ、殺す意味がない」

シグナムが歩いて向かってくる

エクセル「これはさすがにマズいな……」

刀鎌が消え、丈が少しだけ短い双剣を召喚する。

シグナム「そんな物で、私は倒れない」

カードリッジを一個使いレヴァンティンに炎を着火する

エクセル「勝てるなんて思わない。俺はシグナムとは戦いたくはない」

今度はこちらが仕掛けた。剣技はシグナムとの経験上、一度も勝つたことはない…もしかしたら、この戦いで俺はシグナムを倒すかもしれないけど逆に今の彼女が俺に対する感情をどうにか出来ればこの戦いは終わる

そのチャンスが来るまで、今は――

カシャンッ！キンッ、キンッ！

剣同士がぶつかり合う音は観客をより興奮させた

シグナム「ハアアアアア……！！！」

連結刃のレヴァンティンを振るうシグナム。その攻撃はこちらの剣を砕いた

エクセル「ぐっ……！！！」

シグナムの攻撃は激しさを増す。この状況で相応しい武器は…鎌

エクセル「やっぱり十八番は捨てられないってことか」

そして再び刀鎌を召喚する。

シグナム「……まだ開始してから10分も経っていない。もう嫌になったか、私と戦うのは…」

エクセル「最初から嫌に決まってるだろ…大切な仲間と戦う理由は俺にはない」

シグナム「いや…私にはある。少なくとも、私はお前を殺すのが目的だ…王のためにもな」

エクセル「本当にそれは…お前の目的か」

構えを低くし、シグナムへ斬り掛かる。



エクセル「シグナムは本当は寂しいんだろ、1ヶ月もここにいて誰にも会えなくて寂しかったんだろ？」

シグナムの反応が若干遅くなった。そこへおもいつきり鎌を振るうレヴァンティンを弾き、シグナムの首筋へ切っ先を向けた

エクセル「シグナム：俺は思えば、酷いことを言ってしまった。謝って許してもらおうなんて思っていない：シグナムを悲しませたのは俺自身だから。」

シグナム「貴様がどれだけ謝った所で：私が溜め込んできた悲しみと怒りの根は深い、消し去ったところでまた生まれてくる。お前を殺すという感情も」

エクセル「悲しみは何も生まない。今のシグナムを動かしてるのは王の為だけじゃない：自分自身の弱みだ」

シグナムはなにも答えなかった。

これだけじゃ、さすがにシグナムはわかってくれないだろ

エクセル「シグナム、俺と：俺たちと一緒にいこう。」

シグナムへ手を差し出す

またしばらくの沈黙

すると、シグナムは

シグナム「ーーーーーふっ」

下を向いていたシグナムが顔を上げた

エクセル「シグナム…!？」

シグナムの顔は狂った人と同じような表情になった

シグナム「笑わせてくれる。そんなだから…貴様は仲間を失うのだ…」

ヒュッ!

エクセル「…!?!？」

シャツ!

背中から右肩を何かが掠めた。俺は肩を押さえた、なにしろ掠めただけで血が滲み出るほどのものが掠めたのだ

そしてあり得ないことが起きた。

シグナムの右腕を黒い何かが浸食し始めていた。その現象は一度だけ目にしたことがあった

ある奴に憑依されると、姿が異様に変わる。それを目にしたのは、ドゥーエと戦った時、そう今シグナムを浸食しているのは

エクセル「ヴァン…デビル!!」

ヴァンデビルの浸食が腕から体へと伸びる

シグナム「感じる…力を感じる！全てをコワスムテキノチカラダ！」

既に声まで変わってしまった。体のほとんどを黒く染めたシグナムは高らかに嗤っていた

いつの間にシグナムはヴァンデビルにとり憑かれたんだ…いや、むしろ誰かに憑依させられたのか

エクセル「あいつめ、これが目的だったのか…」

シグナムが右腕を振るった。浸食された腕からカマイタチに似た黒い刃が周りへ無数に放たれた

エクセル「ツ！？」

咄嗟にフィールドを張った。刃は俺だけではなく観客にまで及んだ

何が起こったのか理解できない観客はやつと状況を把握し、身を屈めたが時は既に遅かった。観客の何人かは切り裂かれ、恐怖で悲鳴を上げ逃げ出す人々

シグナム「イカシテカエサン！！」

嗤ったシグナムの体が宙を飛んだ。民たちを殺すために

エクセル「シグナムツ！！」

フィールドを解除しても、既に民へ襲い掛かるうとしていた。

アギト「うおらああああー！！！！！！」

アギトの放った炎弾がシグナムを空中で弾いた。

シグナム「又ウツ！！」

空中で体制を整える。

シグナム「キサマモワタシヲウラギルカキカ！！」

シグナムの黒く染まった目がアギトを見据えた。

アギト「はっ、裏切るだ！？それはこっちのセリフだぞシグナム！！」

両手に大きな炎弾を出現させる。

アギト「少しは頭を冷ましやがれ！！」

炎弾を放った。

シグナム「バカガ！！」

シグナムは右腕で炎弾を斬ってアギトへ急接近した

アギト「なるおツ！！」

シグナムが右腕を振り下ろそうとするが横からきた虹色の球体と仕掛けてきた影により闘技場の中央に弾かれた。

アギトの近くに、大人モードのヴィヴィオとアインハルトが降りた。

シグナム「キサマラアーーー!!」

シグナムへの浸食がさらに進んだ。

シグナム「グアアアツ…オオオオ…!!!」

エクセル「やめろシグナム!!それ以上浸食されたらーーー」

アルザス「もう遅い……」

シグナムの前にアルザスが現れる。

アルザス「彼女の心は完全に闇に浸食された。もはや後戻りはできない……さあ、シグナム」

シグナムが静まり返り上半身が力を失ったように前へ倒れた。そして、ムクリと上体を起こす

体全てが黒く染まり、片目はオレンジへ髪は血の赤のように変色し腕には突起した刃が備えられていた。

アルザス「これを使え、やり方はわかるはずだ」

アルザスが黒いボールみたいな物を渡した。ボールには赤い細工が入っていた

シグナムは黙々とアルザスの前に出た。

アルザス「遊びは終わりだ…シグナム」

シグナム「はい……」

シグナムは目を閉じて持っていたボールを額に近付けた。

シグナム「古より火の国を護りし、不死の鳥“アルバイン”よ……私に、その力を……！」

球体から赤い魔力の渦が発生し、シグナムを飲み込んだ

シグナム「“召喚”」

渦の中でシグナムはそう呟いた。

赤い渦が広がり、中から巨大な鳥獣人が姿を現した。赤い巨体、炎の翼、人を思わせる顔。その顔はシグナムに似ていた

不死の鳥アルバイン

かつては人であったアルバインという女騎士が、不死鳥と呼ばれる鳥を食し鳥獣人へと変わり、炎の“魔法”を使い一国を守護する神へとなった。やがて、その名前はフェニックスへと改名され王が変わることに、アルバインという名前は忘れ去られていった

とある予言者が、やがて不死鳥を使役する騎士が現れると王に伝えていたが、それすら忘れ去られていた

エクセル「シグナムが召喚を……するなんて……！」

俺はつい後退ってしまった。

アルバインの肩に乗ったアルザスはエクセルを見て高笑いした。

アルザス「こんな事は想定外だろう！！シグナムがこのアルクイー  
ドを守護する炎の魔神の適格者だとは！！」

エクセル「くっ…アルザスめ！！」

なら、俺も召喚を！！

俺は体中の魔力を収束させるが、違和感を感じた

エクセル「！？…召喚できない！！」

何故だ。今まで簡単に出来たのに…

アルザス「出来ないだろうな…お前の召喚はあの剣があるからこそ  
出来ること」

エクセル「ブランドティータのことか！？」

アルザス「そうだ…今のお前は雑魚当然だ」

アルバインが拳を上げた。

エクセル「ちっ…！！」

エクセルは後ろに飛び退き観客席まで下がった。

エクセル「撤退する！アギト、牽制しろ！！」

アギト「おうッ！！」

アギトが片手から大きな炎を放った。それは砂塵を巻き上げるためだった

アルザス「逃げたか…まあ、いい。」

闘技場に無数の兵士たちがやってきた。

アルザス「しばらくは兵士で遊ぶとしようか、シグナム…」

アルバインが雄叫びを上げた。

城の中に住民たちを引き入れることを指示したフェルコ。將軍と軍師や他の官人たちを集めた

將軍「現在、敵は兵士たちと抗戦…民たちを全員城へ入れるには、あと一刻は掛かります。」

フェルコ「くっ…まさか彼女があのようなことになるとは…元に戻す手はないのか…！」



フェルコが机を叩いた。

軍師「現在、神官たちが守護神降臨術を行っています…ですが、それも間に合うかどうかは」

そこへ、部屋のドアを無理矢理蹴破ってエクセルが入ってきた

エクセル「守護神降臨なんて意味はない。あれ自体がこの国の守護神なんだ」

將軍「なっ、なんだ貴様!!」

フェルコ「待て……」

剣を抜こうとした將軍をフェルコは止め、エクセルまで歩いていく

フェルコ「それは本当か…?」

エクセル「はい…自分たちの敵がそう言っていました」

フェルコはエクセルの目を見た。偽りがない眼差しだと感じフェルコは

フェルコ「わかった。では、彼女を救う手はあるか？」

エクセル「あります。ですが、その前に…シグナムへ対する本心を聞いておきたい…なぜシグナムを愛した」

途中から言葉の態度が変わった。將軍たち「無礼な!!」と言ったがそれを無視した

フェルコ「……遊び心だった。砂漠でシグナムを助けた時、美しかった彼女を見て失った大切な者と重なった。私は王になり、その大切な者の名前と姿を忘れてしまっていた……だからシグナムを愛した。偽りの愛でな」

エクセル「……ッ！！」

エクセルは怒りを覚え、おもいつきりフェルコを殴った。フェルコは床に倒れた

それには將軍たちは動揺し、兵士たちがエクセルに槍を向け取り囲んだ。

フェルコ「よせ……彼に罪はない。悪いのは、私だ」

フェルコが立ち上がり、口を拭った

エクセル「だったら、彼女にも言うことがあるんじゃないか……」

エクセルが扉の方へ振り返った。そこにはシエリルが立っていた

フェルコ「シエリル……」

名前を呼ぶと、官人たちが激しく動揺した先代の時から仕えている者は彼女の事は知っている。あのシエリルなのかと呟きながら

シエリル「フェルコ様……」

シエリルがフェルコへ歩み寄って行き

パシンッ！

シエリルがフェルコに平手打ちした。その音が室内に響いた

フェルコ「……ふん。これで許してくれとは言えないな」

シエリル「……本当なら、もっと打ちたいです。ですが、先ほど聞いたあなたの言葉でその気がなくなりました」

フェルコ「…変わったな、シエリル。我が愛しき者よ」

二人は見合い、そして抱き合った

フェルコ「すまなかった…本当にすまなかった」

シエリルの頭を撫でながら、彼女へ謝罪する

シエリル「いいんです。やっと会えたのですから…こつやって抱き合えたのですから」

シエリルは泣いていた。

しばらくの間、二人は抱き合った後

フェルコ「皆の者、彼女は婚姻の証を持つ者だ。故に、シグナムとの縁を切り彼女を王妃として迎える。文句のある者は前に出よ、今ここで俺が裁きを下す!!」

全員が押し黙った。そして片膝をつき、シエリルへ敬意を証した。

シエリル「將軍…」

將軍「はっ…！」

將軍が立ち上がった。フェルコはシエリルを見た

シエリル「兵士たちを引き上げさせ、民たちの避難を最優先に手を貸すように直ぐ指示を」

將軍「はっ…！」

將軍は走ってその場から走り去った。

シエリル「軍師殿、神官たちをここへ。あの敵に対する策を説明します」

軍師「承知しました…！」

軍師も部屋から走り去った。

シエリル「フェルコ様、彼の持っていた剣を返してあげて下さい」

フェルコ「承知した…」

フェルコは首からかけていたアクセサリーをエクセルに投げた

エクセル「あなたが持ってたんですか」

受け取ったエクセルはブランドティータを待機状態から解除した。

そして神官たちがやってきた。

シエリル「エクセルはあれと戦ってもらいます。」

エクセル「まあ、最初からそのつもりだ」

シエリル「神官たちは、城全体を結界を張って城を守り、フェルコ様はあれを倒した後にそのシグナムという人の説得を…そして、戦いの場所は“空”です」

煙が上がっている街中をアルバインがゆっくり進んでいる。

アギト「エクセル、こいつも連れて行ってやってくれ」

アギトが待機状態のレヴァンティンを差し出す。

エクセル「レヴァンティンか…わかった。こいつはシグナムの相棒だもんな」

俺はアギトからレヴァンティンを受け取る

アギト「あたしもな…本当はあたしも行きたいけど、市民の避難を手伝わなきゃならない…シグナムを助けてやってくれ!!」

アギトが俺の顔を見て言った。俺はアギトの頭に手を乗せ、少しだけ撫でる

エクセル「ああ、そしてアギトとシグナムと皆で他の仲間を探しに行こう」

アギトは少しだけ照れた表情で親指を立てた

エクセルは無人になった街中を走っていった。目の前にはアルバインが待ち受けていた

エクセルは走りながら召喚詠唱を行った。

エクセル「世界を守りし英雄よ、永遠の正義の名の元に我に力を…  
…“召喚”!!」

俺の体が輝いた。光に包まれ、人の姿をした巨体が現れた。背中  
の翼をはためかせ、アルバインを掴んだ

アルバインの肩にアルザスは既にいなかった。

エクセル「この…意外に重い!!」

一度離れ、懐の剣を抜いた。

エクセル「シグナム…望み通り、勝負だ!!」



エクセル『!?!?』

レヴァンティンの発した光がアルバインの槍を弾いた。そしてその光が、まるで鎖のようにアルバインを拘束した

エクセルは持つていたレヴァンティンを見た。輝いたレヴァンティンの光がジャステイスエターナルの手にそれを形作っていた

それは真つ白に輝き続ける弓だ。

白く輝く美しい弓、それは闇さえも退くかもしれないほどの輝きだ

エクセル『レヴァンティン…!』

レヴァンティンが待機状態から弓へと変わった。

エクセル『引けっというのか』

前方にいるアルバインが光の鎖をほごうともがいている。やるなら今しかない

エクセル『レヴァンティン……お前の相棒はともわからず屋だけど、とても優しい奴でとても綺麗で正直言っつて惚れ惚れする奴だよ……そんな奴を敵に奪われたくない。だから一緒に救おう』

俺は弓になったレヴァンティンの弦を持って引き絞った

ジャステイスエターナルの持った弓に炎が纏った矢が現れそれをつがえ弦と一緒に引き絞った。

エクセル『シグナムの中に蠢く闇よ……消え失せろ!!!!!!!!!!!!!!ファ



ントムフェニックスッ!!」

引き絞った弦を離した。放たれた矢が火の鳥に変わりアルバインの胴体に突き刺さり、その巨体を燃やした

燃える炎の中でシグナムの叫び声が聞こえた。アルバインの巨体が弾け飛び、浸食されたシグナムが炎に焼かれていた

消えたジャステイスターナルからエクセルがシグナムの元へ飛んでいく。

シグナム「エクセル…コロス…!!」

シグナムがこちらへ手を伸ばした。

エクセル「…もうよせ、死ぬぞ」

シグナム「シンデモカナワイ…オマエヲ」

エクセル「そんなこと言うな。はやてが悲しむぞ…」

シグナムの体から炎が消え焦げた手がエクセルの首へ伸びる

シグナム「アル…ジ…ハヤテは……カンケイナイ」

そんな姿が耐えられなくなったエクセルはシグナムをそつと抱き締めた。

エクセル「…お前は優しい奴だ。俺はそんなお前に何度も助けてもらった…今度は俺が助けてやる番だ。シグナム…優しいお前が、大

好きだ」

シグナム「!?!」

パシヤアン!!

シグナムの体からとり憑いていた虫型とも言えるヴァンデビルが弾かれガラスのように粉々に砕け散った。

シグナム「私は…一体……」

エクセル「ヴァンデビルに弱みに付け込まれて、とり憑いたんだ。

シグナム「無事でよかった」

ギュッとシグナムを抱き締めるエクセル。シグナムは照れ隠しなのか、笑いながら抱き返してきた

アルザス「ちつ…シグナムは失敗か…まあいさ。アルバインを覚醒させたシグナム…そして次の目的地の水の国にも適格な人物はいる。またそれが奪われたとしてもこの失われた世界を闇に染める道は絶えない。エクセル・アーシュライト…お前がいる限りな」

一人の騎士はそう言い残し、闇に消えた

その2日後、シグナムが目を覚ましたのは城のベッドだった。

近くには誰もいない。ベッドの脇に用意されていたのは自分のバリ  
アジャケットだった

不思議に思うのもつかの間、バリアジャケットに身を包んで部屋を  
出るとエクセルとアギトがそこにいた。

エクセルからはレヴァンティンを返してもらって、アギトから説教  
というか愚痴とも言えるような事の連続。そして何より驚いたのは  
フェルコに婚約者がいたこと、彼が頭を下げられたこちらは戸惑い  
エクセルへ助けってくれと言っても聞いてもらえず、まともに話が出  
来たのは5分後だった。彼の婚約者…いや、既に王妃とも言える彼  
女とは意外に話を通じ合った

そして、私は守護神を使役してしまったことでこの国での存在はな  
くなり、急いで国を出ると言われた

まあ、私がした罪は重いのだ。

城の出口ではヴィヴィオやアギトたちが大きな馬車に荷物を運び込  
んでいた

フェルコとシエリルが見送りにまで来ていた

フェルコ「シグナム…」

シグナム「なんですか？」

フェルコ「困った時があつたら直ぐに知らせてくれ。私たちが手をかす」

シグナム「ありがたい、だが私としてはあなたを戦場には呼びたくはない…戦に火に油を注ぎかねない」

シグナムが平然と笑っている

フェルコ「手厳しいな、シグナムは」

シェリル「でも、本当に困った時は言つてね。」

シグナム「ふっ…そうしよう。そちらもあまりラブラブなことをし過ぎると、遠くからでも矢を放ちかねん」

シグナムがエクセルの隣に座った。

エクセル「では、出来たらまた会いましょう」

エクセルは手綱を持ちパシンと鳴らすと、馬が進み始めた。門を出るとシグナムは最後に1ヶ月間暮らした国を見てから座った

シグナム「そういえばエクセル…」

エクセル「ん…」



## 第15話 鉄騎の涙、紅に染まる

アルクイードから出て2日、国境で国王の許可状を見せて通り抜け、水の国 スプライトへ向かった。

その翌日には海が見えてきた。

エクセル「海か……」

シグナム「海を見るのは久方ぶりだな」

隣に座っていたシグナムが言った。よく考えれば、ずっと砂漠続きだったもんな

エクセル「それにしても……」

俺は背後の馬車に振り返った。中にいる5人がやけに静かだった

エクセル「シグナム、ちょっと交代だ……」

シグナムに馬車の手綱を渡し、馬車に乗り移った。

エクセル「なんだ…みんな寝てるのか。仕方ないか、まだ日が上がる少し前だもんな……」

馬車の中に入り、全員を見た。ヴィヴィオはクリスと一緒に眠ってるし、リオは若干よだれ出してるし、コロナは顔を見せまいとフードをかぶってる。

アギト「んあゝ…なんだエクセルか……」

物音で目が覚めたのか、アギトが起き上がった。

エクセル「悪いなアギト、夜明け前なのに……」

アギト「平気…あたしより寝起き悪い奴が、いるから」

大きな口を開けて、アギトは欠伸した

エクセル「そうか……」

最後に一番奥にいたアインハルトを見た。  
横になって、赤くなりながら眠っていた

エクセル「アインハルト、やけに顔が赤いな……」

アギト「なんだよエクセル、アインハルトが気になってるのか？中  
学生に手を出すのは犯罪だぞ」

ニシシと笑うアギト

エクセル「出さない出さない。それに今のはただ単に顔が赤いって  
思っただけだ」

日が昇り、海の近くで食料の中にあつたパンと卵をアギトの炎でちよつとだけ焼き、朝食とした。

海を眺めながらの朝食は意外と快適だった。海風が涼しく、暑さを忘れさせてくれる

ヴィヴィオ「アインハルトさん、顔が赤いですけど平気ですか？」

俺は海からアインハルトの方へ向いた。確かにアインハルトの顔が先ほどより赤くなっていた

エクセル「風邪にでもなつたか？昨日まで砂漠だったから気候が変わつて体調が悪くなつたら直ぐー」

アインハルト「大丈夫…です。私は大丈夫…夫…です／＼／＼／＼／＼」

アインハルトの息が荒かった。ふらふらと立ち上がり、馬車の方へゆっくり歩いていく

シグナム「無理はするなアインハルト。これからスプライトの国境へ向かうのだからゆっくり休まねば」

隣に立つたシグナムがアインハルトを見た

アインハルト「わかつて……ま……ま……」



すると突然、アインハルトが前のめりに体勢を崩した

テイオ「にゃ、にゃあー!？」

アインハルトと肩に乗っていたテイオをシグナムが受け止めた。アインハルトの息遣いは激しく荒くなり、顔だけではなく腕なども赤くなっていた

シグナム「エクセル!!」

シグナムが叫び、全員が振り返った。ヴィヴィオは素早く反応し、アインハルトへ駆け寄り声を掛けた

アギト「顔が赤い…おまけに熱が40・8弱、並の熱じゃない。」

アギトがアインハルトの額に手を当て、熱を測る

シグナム「エクセル、しばし向こうを向いている」

俺は海の方へ向く。背後ではシグナムとアギトたちが話していた

ヴィヴィオ「アインハルトさんは平気なんですか!？」

シグナム「落ち着けヴィヴィオ。こうなったのは恐らく原因がある、頭を膝に乗せる」

すると、服がずれる音がした。

アギト「胸から上は傷と腫れはなし、シグナム」

シグナム「足から膝も同じだ…となると」

エクセルは頬を赤く染めて背後で行われていることを想像してしま  
った。

制服…脱がして、るんだよな…胸や膝を見てるんだな…アインハ  
ルトの体を

いかがわしい想像が始まる前にアギトが声を上げた

アギト「あつた！腹、へその少し下辺りに赤青い腫れ、さそりの毒  
かもしれない！！」

そう言つてアギトはアインハルトの服を整え、リオとコロナが馬の  
一頭を引っ張ってきた

シグナム「エクセル、一足早くスプライトへ向かえ。」

シグナムが馬の頭を撫でる

エクセル「わかった。けど、アインハルトはどう運ぶ？」

シグナム「抱えるしかあるまい…」

シグナムがロープを持ち、俺の胸元にアインハルトを抱き抱えるよ  
うに縛った。ティオが俺の右肩に乗る

どうもアインハルトの身体が大きいせいかな違和感を感じるけど、気  
にしている場合ではなかった。

俺は馬にまたがり、アインハルトの頭を軽く撫でた

シグナム「こちらは後から追う。海沿いを駆ければ、スプライトの国境に着くはず。許可状を見せてアインハルトを医師に観てもらおうのだ」

ヴィヴィオ「エクセルさん、アインハルトさんをお願いします！」

エクセル「ああ、わかった！！」

手綱を叩き、俺は海に沿って馬を走らせた。

エクセル「アインハルト、頑張れよ！直ぐに着くからな！！」

ティオ「にゃー！！！」

ティオも主の身を心配しながら鳴いていた

一時間すると、国境の監視所が見えてきた。門の下に來ると、許可状の申請を言われて申請を出した

エクセル「この子が凄い熱なんだ！！急いで医師に見せないと！！」

監視兵「……………わかった！では、馬から降りてこちらへ」

俺は馬から降りて、兵の後をついていく

すると、海の近くに水色の馬がいた。額には角があった

監視兵「このユニコーンに乗れば、一刻もしないうちに着く。気を  
つけるよ」

こんなにスプライトの兵は優しいのかと思いつつながら、俺はユニコーンにまたがり手綱を叩いた。

すると、ユニコーンが海の上に飛んだ

エクセル「うわっ!?!」

落ちると思ったが、ユニコーンは海に落ちるのではなく、海を走っていた

エクセル「海を走るユニコーン…凄いだ」

本当に一時間もしないうちにスプライトへ着いた。

スプライトは海の上に浮かんだ都市型の国だったのだ。

陸へは橋と船で渡るといふ考え

ユニコーンは一直線に城壁まで走り、橋にある預け所で降りてユニコーンをその場の人に預けた

ロープを外し、アインハルトを一度降ろした。

顔を見ると、汗だけで呼吸が荒く真っ青だった

エクセル「誰か！医者を呼んでくれ！！この子が危ないんだ！！」

俺の叫びに街の人々が集まってきた。何人かがアインハルトを見ると

街人A「おい、先生を呼んで来い！！この子本当にヤバいぞ！！」

男の人が女の人に言った。すると別の女性が噴水の水で濡らした布でアインハルトの額に乗せた

????「皆さん退いてくださーい！！」

人だかりの奥から女性の声が聞こえた

人の間を割って、一人の女性が入ってきた

????「わっ、私が医者です！！」

隣にいた男性に聞くと本当に彼女は医者だった

????「患者さんは!？」

女性がアインハルトを見ると、直ぐ駆け寄り熱を計り原因を聞くとアインハルトを急いで病院へ運ぶと言って彼女はそのまま走って行った。これがまた足が速くて見失う所だった

―病院―

アインハルトを運び込んで、彼女に言われてベッドに寝かせて治療を始めた

彼女の話では、アインハルトの熱は砂漠で最も毒素の強いさそりのものらしい。体中から体力と水分を奪い、熱中症に見せ掛けるから判断しにくいらしい

ギリギリで間に合ったおかげで生死に関わらずに済んだ。

エクセル「良かった」

俺は脱力感を感じ、椅子に座った。

???「1日安静にしていれば、彼女は安心よ」

助けてくれた女性の医師が水の入ったコップを渡してきた。

エクセル「ありがとうございます。申し遅れました、自分はエクセル…エクセル・アーシュライトです」

???「私はリリイ、リリイ・シャーマン。この街の医師です」

リリイは若干少女のような顔立ちをしているが、年齢は二十歳らしい水色のセミロング、身長は俺とそんなに変わらない、目は栗色。小さな眼鏡をかけていても可愛いらしい女性だ

エクセル「すみません、自分は泊まる所を見つけなければならぬので、また後で来ます」

リリイ「あっ、出来ればここに泊まるのはいかがですか？私の家で

もありますし、患者たちの世話もありますし何より同居人は二人だけなので大勢でも大歓迎です！」

なっ、なんだろ…：やたらと泊める気ある言い方だな

エクセル「えっと、俺だけじゃなくて、後4人いるんだけど…：同居人がいるなら」

リリイ「大丈夫です！同居人も変わった人たちなので気が合いますよきつとー！」

リリイがづいづい近寄ってきて、正論に似た言葉を並べてくる。

リリイ「それに言ったじゃないですか、大勢は大歓迎ってー！お手伝いはしてもらいますけど、食事は私が作りますし代金も取りませんから、ねっ、ねっ、いかがですか！？」

エクセル「はっ、はあ…：そこまで言うなら」

リリイ「やった〜！！！」

負けた。彼女のキラキラした目を見ると、なんか…：こっ…：断れきれないというか。おまけに今気付いたんだが、彼女の前髪にラインと似た癖毛があったし

???「リリイさん、回診のお時間ですけど準備万端ですか？」

そこへ小さい女の子がやってきた。だが、俺はその顔に毎度同じく度肝を抜いた。

「???? あれ…?」

彼女も俺に気付いたようだ。

エクセル「リッ、リイン…!!?」

リイン「エクセル…さん？」

リインは目をぱちくりさせ、こちらへ近づいて来てジッと見てきた

リイン「本当に…エクセルさんですか？」

エクセル「ああ、リイン…無事で良かった」

片手を上げて挨拶すると、リインは涙目でぶるぶる震え

リイン「エクセルさあ…ん!!」

ガバツ！ドスンッ！

リインが抱きついてきて、俺は尻餅をついた

リイン「えぐっ！えぐっ！会えて、会えて、えぐっ！良かったです  
く!!」

リインが泣きながら、俺へ嬉しさを表した

エクセル「よしよし、リインも無事で良かった」

俺はリインの頭を撫でた。



リイン「撫でないでほしいです」

エクセル「いや、だって泣いてるから」

俺とリインは立ち上がった。

リリイ「ええっと、二人は…親子？」

エクセル「ちっ、違うよ。俺とリインは仲間、友達だよ」

リリイ「ああ！リインちゃんやヴィータちゃんが言ってた仲間って  
いうのは」

エクセル「はっ？…はぁー！？ちよっつと待った！リイン、  
ヴィータも一緒なのか！？」

ヴィータの名前を聞いて驚くエクセル

リイン「はいです。ヴィータちゃんは今買い物に行っているです」

リインとヴィータ、アギトとシグナム…確かあの時、ヴィータとシ  
グナムはユニゾンしていなかったはずこれは偶然なのか……という  
ことは、はやてとリインフォースは一緒の可能性はあるか。

エクセル「そうか。俺の他にシグナムやアギト、ヴィヴィオとそこ  
に横になってるアインハルトとリオとコロナが一緒だ」

リイン「アギトたちも一緒ですか、良かったのです」

人数を数えたリリイは両手を合わせた

リリイ「わお、私を含めたら10人 これは夕食を豪華にしなきゃ  
とまだ昼前にはしゃいでいるリリイ

リイン「あつ、リリイさん回診を…」

リリイ「はあ〜い エクセルさんは戻って来るまで、その子の面倒  
をみていてくださいね」

リリイはそう言うと、リインと一緒に病室から出ていった。

エクセル「……マイペースというか、なんというか……俺ってもし  
かしたら女の子に好かれる方なのか？」

と考えていると

アインハルト「んっ…ん〜」

アインハルトの瞼が動くのが見えた。そしてゆっくりと目を開ける

アインハルト「……ここは」

エクセル「水の国 スプライトの病院だ」

横になりながらアインハルトがこちらを向いた。

アインハルト「エクセルさん…ということはあれから皆さんと急い  
で…ここへ？」

エクセル「いや、俺がお前を体に縛って連れて来たからヴィヴィオたちは後…二時間ちよつと掛かるな」

俺の説明にアインハルトは目をぱちくりさせ、寝返りをうつって顔を背けた。

エクセル「アインハルト…？」

アインハルト「男の人に優しくされて抱かれるのは二度目…それも同じ人、エクセルさんに…」

ぶつぶつと小言で何かを呟いていた。

エクセル「え〜と…先生から今日1日は安静にしているだそうです。だから無理して動くなよ？」

アインハルトの頭を軽く撫でた。

アインハルト「…はい／＼／＼／」

しばらくするとラインが一人だけで戻ってきた。

ライン「あっ、アインハルト…目は覚めたですね。じゃあちよつと体温チェックです」

アインハルト「はい…」

ラインがアインハルトの頭に手を当てる。

エクセル「なあ、それだけで体温ってわかるのか？」

ライン「はい。この世界には体温計がないみたいなので、ちょっと工夫すると体温チェックは簡単なのです。私とアギト限定ですが…」

ライン「それに私とアギトの特性は全部体温チェックにはぴったりなんです」

エクセル「そりゃ火と水と氷だもんな…」

頭から手を離れたラインは持っていた紙に体温を書く。

ライン「私とヴィータちゃんがここに来たのは1ヶ月ちょっとですが…この世界には何か特別な力が働いている感じがします。」

エクセル「特別な力…？」

廊下を歩きながら俺は首を傾げた

ライン「例えば私たちとは違いこの世界では、魔法ではなく魔術が發展しています。時代もそうです…この世界は、まるでベルカ時代をモチーフにした感じの物が数多くありました。国同士の争いはもとより、武器や戦術なども」

ベルカ時代を…モチーフ？

どういうことだ…今までそんな物を見たことはない

ラインが言うには俺たちの世界の物をモチーフした物があった…だとすれば…もしかしたらこの世界は……

ズキンッ！

エクセル「ッ!？」

俺は突然、頭痛に襲われた。前にも経験した頭痛と同じだ…何か重要なことを思いだそうとすると、必ず頭痛が襲う。

ライン「どうしました…？」

ラインが心配しながらこちらを見てきた。

エクセル「大丈夫…ちょっと立ち眩みだ。気にするな…」

医師室に入るまで、俺はずっと頭痛のことを考えてた

何か重要なことを考えると必ず頭痛がする……アルザスたちが言うように、ひよっとしたら俺はこの先に起きる重要なことを知っているのではないかとついつい考えてしまう

????「……あつ、ライン！回診終わったのか…って!？」

医師室の前に髪を下ろした少女が立っていた。少女が俺を見て驚き、後退りして髪を気にしはじめた。俺はその少女の顔を見て

エクセル「えっ……まさか、ヴィータ？」

???「ツ!!!／／／／／／」

エクセル「だよな……ヴィータだよな？」

少女、ヴィータは真っ赤になりながら

ヴィータ「うっ、うっ、うるせえ〜!!!／／／／／／」

ヴィータの素早いアッパーを食らって、俺は天井に頭をぶつけ意識を失った

リン「ヴィータちゃん、やり過ぎですよ〜」

ヴィータ「エクセルに……この髪形を見られなくなかったん……だよ／／／／／／」

リン「でも、以前ヴィータちゃんはその髪形でエクセルさんをぶりーーー」

ヴィータ「わっーわっーわっー!!!／／／／／／」

リンが言おうとしたことをヴィータは誤魔化すように叫んだ

その日の夕方になりかけた頃、シグナムたちがやってきた。

リリィ「いらっしや〜い」

リリィが出迎え、病院内にある彼女の住まいへと向かった。

そんなに狭くもなく、一軒家に負けないほどの広さだった。

シグナム「数日間、世話になります」

シグナムがリリイにお辞儀をする。逆にリリイは目を輝かせながら、シグナムを見上げていた

リリイとシグナムの身長差は、頭の半分程度なのだ

リリイ「いえいえ、人数が増えると楽しいですから」

ちなみにリインとアギトはというと

アギト「無事でなによりだぜ」

リイン「そつちこそ、無事で何よりです」

お互いに顔を背けていた二人は笑いながら向き直り、互いに手を叩いた。

ヴィータ「シグナム…」

ヴィータがシグナムへ近づいていく

シグナム「ヴィータ…」

二人は少しだけ見合い

ヴィータ「少し見ない内に弱くなってないよな？」

シグナム「無論だ。これでも毎日鍛練はしている」

その後、夕食をリインとアギトに頼みエクセルとヴィータとシグナムは外に出ていた

ヴィータ「じゃあ、全員はやてを見てないのか…」

エクセル「なのはやフェイトもだ…まだ見つかってないのは10人以上、残り一つの国で後何人見つかるか…」

シグナム「主にはリインフォースがいる。できれば、シャマルやザフィーラも一緒にいてほしい」

はやて達を覗いて残りの人物から考えて、3人ずつ揃ってほしい

なのはとスバル、ティアナ  
フェイトとエリオにキャロ  
そして、ソラとドゥーエ

エクセル「問題なのは、この世界にヴァンデビルがいるということだ」

元々、この世界に飛ばしたのはヴァンデビルを従わせるライなわけだが、アルザス以外に接触したことはない

ヴィータ「ヴァンデビル…あの化け物野郎共がいるのか。」

ヴィータが拳を握り締めた。

エクセル「ヴィータ、あまり抱え込むと…」



ヴィータ「エクセルだけには言われたくはねえな…」

エクセル「へっ…?」

シグナム「確かに、寝ながらテストロッサの名前を呟く奴に心配されるのはいささか感に触る」

こちらを睨むヴィータとため息をつくシグナム

まあ、俺だってフェイトのことは心配だ。ただ、寝ながら呟いてる所まで聞くってのは

リリイ「はあ〜い！会議終わったかな〜?」

窓からリリイが話し掛けてきた。

ヴィータ「話がまとまらないから一旦終了だな」

ヴィータの言うことに頷く俺とシグナム

リリイ「じゃあ夕食が出来たから来てね〜」

そう言つて、リリイは窓から中へ引つ込んだ。

エクセル「あれ…確か、料理は私がするって言った気が…」

―食堂―

テーブルには、スープやらサラダやら豪華なメニューが一人分ずつ置かれていた。

エプロンをつけたアギトとリインが前に立ち

リイン「夕食はアギトと私との自信作の野菜スープと！」

アギト「リリイ先生特製、栄養満天の卵と野菜を使った料理だ！」

一同「おお〜！」

椅子に座っていた一同が声を上げた。

リリイ「えへへ 結局、リインちゃんとアギトちゃんに手伝ってもらっちゃったけど、スープ以外は手作りだから、みんな食べてね」

3人も席に座り

リリイ「それじゃあ…」

全員が手を合わせた。

一同「いただきます！」

そう言うと、夕食は始まった。

ヴィヴィオ「おっ、美味しい〜！」

リオ「うん！本当に美味しい！！！」

リリイの料理を食べてのみんなの感想に、本人は照れながら食べていた。

リリイ「こんなに喜んでもらえるなんて、リリイ嬉しいな」

エクセル「みんな砂漠続きの中で、ちゃんとした料理も食べられなかったので」

リリイ「アインハルトちゃんの体を気遣ったの料理もあるけど、良かった」

リリイはゆっくりと食べるアインハルトを見て笑っていた

食事が終わり、全員（アインハルト以外）が片付けをはじめ終わった後に子供一同はリリイの指示でベッドがある場所へ、シグナムとアギトは病院内の見回りをリインとエクセル、ヴィータは回診を行った。

リイン「おじいさん、具合はどうですか？」

お爺「ああ〜大丈夫じゃよ。」

ヴィータ「じいちゃんはまだまだ長く生きられるよ。今度面白い遊びがあるから教えてやるからさ」

俺は老人に楽しく話し掛けるヴィータに廊下で笑ってしまった。

その後、個室の3つを見回って廊下を歩きながらリインはボードを

チェックしていた

リン「えっと、全員異常なし。包帯等の変えもOK…はい、問題なしです」

エクセル「それにしても、ヴィータのああいう顔を見るのは初めてだったな」

俺は隣にいたヴィータを見た。両手を頭の後ろに回していた

ヴィータ「ほっとけ。あたしは、ああいう人達と話すのは大好きなんだよ。」

俺とヴィータの後ろにいたリンが反応した。

リン「ヴィータちゃんは海鳴に住んでた時もお年寄りの人達と仲良しで、毎日ゲートボールと一緒にやってきました」

エクセル「へえ、ヴィータも可愛い所があるんだな」

そう言うと、ヴィータが両手を下ろし止まった。

ヴィータ「なんだよ。まるで、あたしが可愛くないみたいじゃないかよ」

エクセル「いや、そういう事じゃなくて」

ヴィータ「そうじゃなくても、エクセルから見てもあたしは野蛮な奴か!？」

ヴィータが前に出て、手を胸に当てた

ヴィータ「確かにあたしは野蛮な所があるかもしれねえけど、れっきとした女だ!!」

エクセル「悪かったって、ちょっと言い過ぎた。」

ヴィータに謝るが、それでも許してくれそうになかった。

ヴィータ「……お前は毎回毎回、そうやって人を見下しやがって」

ヴィータの肩がぶるぶると震え出す

リン「ヴィータちゃん、落ち着くですよ!」

ヴィータ「うるせえ、エクセルがそういう態度を取るならこっちはだつて考えがある!!」

ヴィータはそう言うと、廊下の窓を開けて外に飛び出した。

エクセル「ヴィータ!？」

リン「ヴィータちゃん!!」

まただ…俺はまた仲間を傷つけることをしてしまった

街に飛び出した私は無我夢中で走っていた。

人にぶつかっても、見向きもせずただ走っていた

そして、気がつけば街の外れにある泉に来ていた。泉には子供の小さなユニコーンやリインサイズくらいで少女の姿をした水の精霊がいた

私は息を切らせながら、泉の近くに腰を下ろした。茂みの匂いが鼻を刺激し呼吸を落ち着かせていく

ヴィータ「エクセルの馬鹿野郎…あたしがどんな気持ちだったと思っ  
てやがる…はやてよりずっと、会いたいと…どれほどー  
ー」

ズキッ

胸が苦しい…締め付けるように苦しい…これって何だよ。ちっとも楽になりやがらねえ…

ヴィータ「あたしが…あたしがエクセルを好きだったのか？…バカ、あいつにはテストアロツサが…フェイトがいるじゃねえか。今さら言っても意味なんか」

気付けば、心配してくれたのか精霊やユニコーンが近寄ってきた。

ヴィータ「なんだ…心配してくれてんのか」

妖精の頬を撫でると、微笑みながら周りを飛んでいる。

ヴィータ「こうして見ると、リインやアギト以外に小さな奴を見るのは初めてだな」

ユニコーン（小）「キュウウウ……」

おまけにユニコーンなんて、ベルカにもいなかったし珍しい生き物なんだよな……

ヴィータは目を閉じ、見てきた物を思い返した。

“あなた達は道具！世界を滅ぼすただの道具なのよ！！”

脳裏に最悪な人物の言葉を思い出した。

ヴィータ「……嫌な奴を思い出しちゃった。」

あたしが立ち上がると、妖精が手を掴んできた。

ヴィータ「ん……どうした？」

優しく聞くと、妖精たちが手を引っ張ってくる。“来い”と言っているのがわかった

着いていくと、石造りの建物の中へ案内してくれた

ヴィータ「なんだ……ここ？」

妖精とユニコーンが建物の奥に飛んでいき、着いていくと部屋の中  
央に石造りの土台に青い水晶が置かれていた。

妖精たちがその周りで飛んで回っていた

ヴィータ「なんだ…これ？」

あたしはそれを手に取って、色々と眺めた。

ヴィータ「なんか、とてつもねえ魔力を感じるけど…」

ヴィータはグラーフアイゼンを取り出し、背後へ振り返って構えた。

ヴィータ「そろそろ出て来いよ。いるのはわかってんだ」

すると、柱の陰から仮面を付けた漆黒の騎士が出てきた。驚いたのか、妖精とユニコーンが奥の柱に隠れた

???「気配を消しても悟られるか…流石だな鉄槌の騎士よ」

ヴィータ「てめえ、アルザス…」

仮面の騎士は薄く笑って

アルザス「単刀直入に言おう。その水晶を…神器を渡せ」

ヴィータ「神器…？」

あたしは手に持っていた水晶を見た。

アルザス「それはお前には相応しくない代物だ」

ヴィータ「相応しくない？じゃあ誰だったら相応しいってんだ」



アルザス「答える気はない。さあ、渡せ」

ヴィータ「……イヤだね。欲しかったら……無理矢理奪ってみたらどうだ」

水晶を懐にしまい、グラーフアイゼンを構えた

アルザス「ふっ……そうか、なら無理矢理奪うとしよう」

そして、二人の戦闘が始まり場所が外へと移りアルザスの剣がヴィータの首を捕らえた。

ヴィータ「なっ……!?!」

アルザス「これで四回目……四回死んだな」

ヴィータ「ふっ、ふざけやがって……!!」

こいつの動き……剣捌き……みたことがあるのに思い出せねえ!!

あたしはアルザスの懐を狙ってグラーフアイゼンを振るった。

キンッ!!

ヴィータはグラーフアイゼンのドリルがアルザスの懐を捕らえたと  
思った。

だが、アルザスのもう片方の手がグラーフアイゼンのドリルを素手  
で受け止めたのだ

ヴィータ「素手で……!?」

アルザス「鉄槌の騎士がこの程度か……敵すら砕けない」

敵を砕けない……あたしは、鉄槌の騎士だ。砕けないものなんて……

アルザス「自分の迷いを砕けないお前は……騎士以下の女だ」

ヴィータ「ッ!？」

アルザスは一瞬の間隙についてヴィータの懐から手を突っ込み、水晶  
を取り出す。

アルザス「頂いていくぞ……」

剣を消し、ヴィータに背を向けてアルザスは歩き出した

ヴィータは震え、ゆっくりとグラーフアイゼンを振り上げ

ヴィータ「あたしに砕けないものがある?……ふっざけんなー

ーッ!!!!」

アルザスめがけて振り下ろす。だがその攻撃を予知していたかのよ  
うにアルザスは避ける。ヴィータはさらに、アルザスへグラーフア

イゼンを振り続ける

ヴィータ「あたしに碎けないものはない！！この世のどこにも碎けないものなんてない！！敵だって打ち抜ける、闇の書の騎士だった頃だって人を碎きながらー！ー！ー」

グラーフアイゼンが空を切り続ける。そしてようやくアルザスを捉えたが

アルザス「自分は人殺し・・・か？」

グラーフアイゼンのドリルがアルザスへ後数センチという所で、あたしは手を止めてしまった。人殺しという単語が頭を駆け巡った

アルザス「人殺しが普通だと平然と送ってきた日々、最後の主になってから自分は変わった…確かにそうかもしれないが考えてみる。今の今まで、自分は何人の命を奪ってきた。何人の魔力や命を平然と奪ってきた？そして、罪悪感生まれなかったのかな？」

ヴィータの手が激しく震え始めた。怯えた表情をしながら、ヴィータは後退りはじめた

アルザス「やはり、お前には恐怖というものがない。ちょうどいい、その感覚をとくと味わってもらおうとするか」

後退るヴィータへアルザスは歩き始める。

ヴィータ「あっ…ああー！！」

後退るあたしに生々しい何かが当たった。

あたしは振り返った。

そしてあたしは目を見開いた。あいつがいた…ずっと迷惑をかけてきた初代リインフォース…あいつが…助けに来てくれたのか

ヴィータ「リインフォース…助けてくれ。あいつを…あいつを倒してくれ!!」

リインフォースに縋るヴィータ。そのリインフォースの手がヴィータの両肩に触れた。

そして、信じられないことを言われた。

リインフォース「…断る」

ヴィータ「え……………?」

啞然とするヴィータをリインフォースは動けないように拘束した。首がしまつてうまく声が出ない

ヴィータ「なっ……………んで……………」

リインフォースの表情はいつもと変わらない。ただの普通の表情だった

アルザス「良くやった、リインフォース」

リインフォース「はい、アルザス様」

ヴィータ「アル…ザス…お前……………リイン…フォースに何を……………」

アルザスがヴィータの前へ立ち、リインフォースの頬をなぞった。

アルザス「簡単なことだ。我らの中に、リインフォースの元主がいるのだ。リインフォースの思念パターンとこちらの化け物の一体を取り憑かせ、同調させることで、リインフォースは“人形”のように操れる。」

そんな…リインフォースがそう簡単に操れるわけが

アルザス「そうそう、主のはやてをうまく利用させてもらったよ。リインフォースの目の前でたぷり苦しませたら、意外と簡単に堕ちた…その後、はやてを廃人のように街へ捨てたがな」

捨てた…だと。はやてを…はやてを…

ヴィータ「はや…てを……ゴミ扱いに…するんじゃない」

リインフォースの拘束した腕から、ヴィータはグラーフアイゼンを持った手だけを引き抜きアルザスへ振るった

グラーフアイゼンが、アルザスの顔を捉え仮面を剥ぎ取った。

金属の音をたてながら仮面が地面を転がり、アルザスの顔が月の光で照らされ、そしてあたしの視界が赤いノイズのように“染まった”。

アルザス「鉄槌の騎士ヴィータよ…過去の罪に怯えながら、一生苦しみ続ける」

アルザスの声が聞こえた。

あたしは奴の顔を見て驚くとかそれどころではなくなっていた  
恐怖という感覚があたしの体を襲っていた。色々なものが駆け巡っ  
た。今までの罪悪感、人の苦しみが一気に貫いた。視界が死者の顔  
が次第に染まってい

グイータ「いつ、嫌だッ！！来るな、来るなッ！！？」

リインフォースから解放されたのか、体が地面を転がった。

理性が保てない

神経がおかしくなる

頭がイカれてしまう

イヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだ  
イヤだイヤだ

ノイズの音が頭を走る。白目になった・・・涙とも言つほどの血が  
流れ始める

グイータ「もう嫌だ…やめてよ…あたし…もう戦わないから…やめ  
て…お願いします…もうーーーーー」

既に、グイータの理性と性格は崩壊した。

グイータが地面に倒れ、精神が崩壊したのを確認したアルザスは仮  
面を拾った

アルザス「まだこの顔は見られたくないんでね…ワザと近づいて仮  
面が取れるようにしたんだ。暗示をかけると同じ原理でな」

そう言うとアルザスは仮面を付け、持っていた水晶を見た。

アルザス「スプライトの大聖霊、エクレアの神器…リインフォース、これはお前の物だ。」

アルザスは水晶をリインフォースに手渡した。

アルザス「さて、厄介な奴らが来る前に退くとしよう」

ヴィータが病院に運び込まれたのは朝方、散歩していた老人の報告からだった。

リインの診療によると、外傷はそれほどではなかったが精神に多大なダメージをおっているそうだ

エクセル「原因がわからないか…」

リイン「ええ、精神攻撃にしては行き過ぎています。それに――  
――」

ヴィータ「んっ…んっ」

ヴィータの瞼が動いた。瞼を擦りながら、ゆっくり起き上がった

リン「ヴィータちゃん!？」

リンがヴィータへ駆け寄った

ヴィータ「リン…?あれ…あたしは……」

エクセル「大丈夫か…?」

俺がヴィータの前に立つ。だが、ヴィータは俺の顔を見た瞬間

ヴィータ「やめてっ…!!」

エクセル「はっ…?」

ヴィータが突然ガクガク怯えだし、泣きながら謝り続けていた

ヴィータ「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!!!!!」

エクセル「ヴィ…ヴィータ……?」

この時、俺は理解した。

もう鉄槌の騎士だった少女はもう死んだのだと



—??—

どこかの平地で、とある軍団に1人の女性が挑もうとしていた。

軍団は人間ではなく、人の形をした“悪魔”だった。

???「敵1万、いつもより少ないね。」

???「一発で終わると予想します」

相棒の戦斧がそう言った。

???「そうだね…行こうか、バルディッシュ…」

バルディッシュ《イエツサー》

その女性の名前はフェイト。

体から彼女の体質以上のものがバチバチと音を立てながら、左腕を上げた

フェイト「雷弾セット…」

フェイトの左手に雷が収束し、所々で火花が散っていた。フェイトへ軍団が一行になって突進してきた

フェイト「ライティングガン…」

フェイトは雷の球体を空へ投げ、バルディッシュを突き上げた。

フェイト「ファイヤツ!!」

球体が爆発し、無数の雷が一行で来る軍団に落ちた。“悪魔”たちからは悲鳴にも似た絶叫が聞こえ、軍団を消滅させた

シューウウウウウ……！！

焦げ臭いが辺りを支配した。フェイトは生き残りがいないか確認すると、一体だけ生き残っていた。

フェイト「あつ……生き残りがいた。ダメだな、一発のはずが二発になっちゃった」

フェイトは生き残っていた一体に近づいていく

その一体はフェイトを見て後退り、持っていた槍を突いた

だが、もう遅かった

ザシュツ……

バルディツシュザンバーの刃がその頭から体を両断した

黄色の刃に化け物の血に似た液体がつき、フェイトの頬にも跳ねた

フェイト「……こちらライトニング1、敵一団殲滅……これより帰還します」

???? 了解、お疲れさまフェイトちゃん。ご飯の準備もうすぐ出来るから急いで帰ってきてね

通信画面に映った女性はフェイトに微笑んだ

フェイト「うん、なのは（笑）」

微笑み返したフェイト。通信画面が消え、フェイトは両断した化け

物を見た

フェイト「……………」

頬についた液体を拭い、足元を見た。化け物の手がフェイトの足を掴んでいた

フェイト「勝手に私の肌に触れないで……」

掴んでいた手を払い、その手を踏んだ。何度も何度も、形が変わるほどまで踏みつけた。そしてフェイトは歩み始める

フェイト「早く……私を見つけて、エクセル……早く見つけて、私を……」

早く見つけて私を……でないと戻れなくなるから

## 第15話 鉄騎の涙、紅に染まる（後書き）

「?????」

アルザスとリインフォースはどこかの城の門をくぐり、城内へ入っていく

アルザス「相変わらず気に入らない城だ。」

人がいない城、ただ山の上にたっている忘れ去られた城、いるのはメセサリウスと血に飢えた化け物だけ

玉座の間に入って、最初に見たのはメセサリウスのメンバーであるメルフィス。何かを見ている

アルザス「メルフィス、どうかしたのか」

メルフィスがこちらへ振り返って

メルフィス「私はこの城…好きではありません」

アルザス「少しは我慢という事をしろ。」

そう言われたメルフィスはアルザスの後ろに立ったリインフォースを睨んだ。

メルフィス「嫌な女……」

小さく呟いたメルフィスは、そのまま玉座の間から早足で出ていっ

た。

アリス「あはははッ！！感情がまるわかりだね〜あの子…」

アルザスの背後からメセサリウスのメンバーのアリスが言った。

玉座に座りながら、こちらを見ていた。

アリス「あんたもいい加減応えてあげたらどうなの〜」

扇子をくるくると指先で回しながら言った

アルザス「ふんっ…今の俺に彼女に伝えてやれん」

アリス「アンタの過去と顔…あの子知っちゃったからね〜」

アルザスは不機嫌そうにアリスを見た

アリス「でも私は…そんなアンタの仮面を取った時の顔は、好みだ  
けどね〜」

アリスはアルザスの前に飛び、アルザスの頬をゆっくり撫でた。

アルザス「口の聞き方には気をつけるアリス。」

アリスは頬を撫でるのをやめ、アルザスから一歩下がった。

アルザス「お前がこの世に残っていられるのは誰のおかげだと思っ  
ている。」

アリス「はいはい…わかりましたよ。あの騎士たちを全員消すまで、消えたくないしね」

アリスもまた玉座の間から出ていった

それからしばらくして、メルフィスは一つの地下牢の前に立った。

中には、両手両足を鎖で縛られ、宙吊りにされた青年がいた

メルフィス「そろそろあなたの力が必要になってきたわ。」

傷ついた青年は顔を上げた。

メルフィス「今から言う奴を潰してきなさい…狂戦士」

## 第16話 アンリミテッドスカイ

―国境―

結局、ヴィータはあの状態から立ち直ることが出来ず、俺の顔を見ると震えが止まらず、子供のように謝り続けるばかり

ヴィヴィオとリンたちが何とか支えてはいるが、あれじゃいつ追いつまれるかわかったもんじゃない

国境を超えて一時間、手綱をシグナムに変わり俺は快晴の空を見上げた

今回は森林という道だから暑くはないし寒くもない、倒れることもない普通の気温だ

この先、風と土が交ざる国がある。そこならきっと、他の仲間がいるそう信じるしかなかった

シグナム「シャマルなら、ヴィータの状態がなんとかなると思うが・・・」

エクセル「シャマルなら…か」

少し不機嫌な顔をしていたシグナム。

コロナ「あの〜…」

馬車の屋根にいたコロナが急に話し掛けてきた



エクセル「どうした…？」

コロナ「その…こんな時になんなんですが、今向かってる国はゴレムとかが基本的な国なんですよね？」

エクセル「らしいな…」

俺も屋根に上がり、コロナと向き合った。

エクセル「コロナのゴレム創生とは違って、1人1人が色々なゴレムを形作ってる。リリイさんが言ったからには間違いないよ」

説明を聞いたコロナは目を輝かせた。

コロナ「色々なゴレム…ゴライアスと勝負したらどっちが勝つかな〜ブランゼル」

自分のデバイスに話し掛けるコロナ。

エクセル「あの〜もしも？…コロナさん？…ダメだこりゃ」

自分の世界に入ってしまったコロナを見ているとシグナムが突然、手綱を引っ張った

馬たちはゆっくり足を止めた

シグナム「—————」

シグナムは立ち上がり、レヴァンティンを取り出した。

エクセル「どうした？」

シグナムの隣に降りる

シグナム「……聞こえないか？」

エクセル「……？」

シグナムは馬車から降り、地面に手を置く

シグナム「この先で何かが起こっている。……騎馬戦のよう  
だ、歩く奴らもいるな……数は多い」

エクセル「……凄いな、シグナム」

俺はしばし啞然としながら、シグナムを見た。

シグナム「あまり褒めるな……どうする、迂回するか？」

エクセル「状況を見ないと何とも言えないな。偵察に出るしかー  
ー」

その時、道の両脇の林から何かが踊り出た。

????「掛かれーッ!!」

黒い服を着た男の怒号と共に、林の中から同じ格好をした奴らが  
大勢出てきた。手には剣やら槍やらと武器を持っていた。

シグナム『どうやら……盗賊のようだな』

エクセル『盗賊でこの数が…？ちょっと多すぎはしないか？』

念話でシグナムと喋っていると

お頭「要求は一つだけだ！身ぐるみ全部置いてけ！！」

盗賊たちが馬車を包囲し、槍を俺とシグナムへ向けた

シグナム「だそうだが…？」

シグナムがこちらを見た。

エクセル「ーーーーーしょうがないな。」

『アギト、閃光弾を頼むよ』

エクセルとシグナムが馬車から降りると…同時にーーーーー

屋根の入り口から、まばゆい閃光が走った。

強い光を浴び盗賊たちは自分の目をかばった。

シグナム「レヴァンティンッ！！」

シグナムの叫び声と一緒に、お頭は自分の仲間の叫び声を聞いた

お頭「なっ…なんだ！？」

光が収まり、お頭はゆっくり腕をどけ目を疑った。そこには、手慣れた自分の手下たちが地面に転がっているからだ

エクセル「まだやるか…？」

エクセルがお頭の顔にブランド・ティータの切っ先を向けていたからだ。お頭は後退りし

お頭「おっ、覚えてるー！ー！ー！！！」

お頭は尻尾巻いて逃げ出した。

エクセルはブランド・ティータを鞘に納めたため息をつき、馬車の屋根に座った。突然周りから怒号のような声が聞こえた

シグナムはバリアジャケットを装着したまま、手綱を持った。

シグナム「このまま突っ切る、何かに掴まっている！！！」

シグナムが手綱を思い切り叩いた。全馬が前脚を上げ、一気に加速した

馬車の中では全員が物に掴まり、衝撃を耐えていた。

森林を抜けて、崖道を走っていると左側の荒野に黒い煙が見えた。

エクセル「あれは……………」

シグナム「黒煙…戦か。だが、ただの戦じゃないみたいだ」

立ちながら手綱を持っていたシグナムは前方を見据えた。前方には弓を構えた先程と同じ盗賊たちがいた。彼らはこちらに気づき、急

いで弓を構えた

エクセル「おっと……!!！」

シグナム「突っ切る!!！」

弓が放たれた。屋根に出てきたアギトが、両手を構えた

アギト「火炎弾ッ!!！」

アギトの両手から火炎弾が放たれ、弓を燃やしていく。だが、数が多すぎて全ては燃え尽きない

エクセル「まだだ……!!！」

リイン「今度はリインが行くです!!！」

アギトに変わり、リインが屋根に出て蒼天の書を開き片手を前に突き出した

リイン「バルムンクッ!!！」

蒼白い魔力の矢が放たれ、弓を相殺していく。

馬車は弓を持った盗賊たちの真ん中を突っ切った

馬車の行く先行く先は戦いの中だった。どこかの騎士たちと盗賊たちが戦っていた

エクセル「……ッ!？」

その時、俺は見た。戦っている騎士の中で見知った人物がいたことに

エクセル「シグナム、止めるッ!!」

シグナム「止まるわけにいかん!!」

確かにそうだ。今の速度は70キロに近い速さだ  
今止まれば、横転するのは明らかだ

エクセル「リイン、行くぞッ!!」

リイン「ふえっ…!!?」

俺はリインを肩に乗せ、馬車から飛び降りた

地面に着地して直ぐ、盗賊の1人が斬り掛かってきた。

エクセル「邪魔だッ・・・!!」

ブランド・ティータを鞘に納めたまま、盗賊のみぞおちを突き首を  
殴打した。地面に伏した盗賊を無視し、通ってきた道を走っていく

リイン「なんで戻るんですか!？」

肩から頭に移動し、へばりついたリインは辺りを見渡した。襲って  
来ないように見えているからである

エクセル「さつき、見知った奴を見た。あれは――」

あれは確かに知っている顔だ。だけど、信じたくなかった

あいつが、あんなことをするはずがない

見掛けた場所に来たときには、もう戦いは終わっていた。

ライン「いないですね…」

騎士たちが引き上げていく中、エクセルとラインはあいつを探していた

エクセル「いるはずなんだがな…」

死ぬはずはないし、生きていたら見かけるはずなんだが

騎士「誰か来てくれ！死体に埋もれてる！！」

少し離れた場所に騎士が手を振りながら叫んでいた。

エクセル「行ってみよう」

集まった騎士たちが死体の山の前で不思議な光景を目にした

死体が積み重なった中で、一つだけ手が動いていた。

騎士たちが死体をどけているが、その前に窒息してしまう

エクセル「引っ張りましょう」

俺が言うと騎士たちは即行動を起こした。俺に構っている暇がないのか、誰もこちらに対して何も不思議に思わなかった

騎士「引っ張れー！ーッ！！」

腕を引っ張り、腕の主を死体の中から引っ張りだした。腕の主は俺の探していた人物だった

騎士「心配かけやがって！」

騎士たちの中にはそいつを心配する奴や、死体の山を見ていた奴もいた。

???「すみません。集中しすぎてしまいました」

白と黒を基準としたバリアジャケットに相棒の銃剣。俺の知っている中で、信頼し指導してやりたい人物

エクセル「ソラ……」

俺はそいつの、自分の部下の名前を呼んだ。

ソラ「えっ……」

ソラがこちらを見て目を見開いた。

ソラ「エクセル…さん？」

ソラの周りにいた騎士たちがこちらを見た。



騎士「ソラ、知り合いか？」

ソラ「ええ、自分の上司…です」

ソラから詳しく話を聞くと、飛ばされてきたのは3ヶ月前に1人だけ飛ばされて、俺達が目指していた国の騎士団長に助けられたらしい。

エクセル「ドゥーエは…一緒じゃないのか」

ソラ「はい。飛ばされる直前、近くにいたのに一緒ではないなんて驚きました。」

ソラはやっぱり、ドゥーエを心配しているのか…って俺も人のことは言えないな

騎士団長「全軍、引き上げるぞ…！」

年配の騎士団長が全軍に指示を出した。ソラは馬にまたがり、エクセルの隣に並んだ

リイン「ソラさん、私達も一緒に良いですか？」

エクセルの頭で蒼天の書を開いていたリインがソラへ話掛けた。

ソラ「……騎士団長に聞いてみます」

馬を走らせて騎士団長の所まで行き俺達のことを説明する。

数分して、ソラが戻って来た。

ソラ「構わないそうです。」

リイン「了解です　じゃあシグナム達に知らせて、私達は一足先に向かうです」

エクセルはソラが連れてきた馬にまたがり、手綱を持った。リインはエクセルの肩に乗って蒼天の書にシグナム宛の手紙を書き、飛ばした

飛ばした紙は鳥へと変わり、夕日の彼方に飛んで行った。

エクセル「リイン、いつまで乗ってるんだ？」

リイン「エクセルさんの髪の上と肩はリインにとって、はやてちゃんのに良いクッションなのですよ」

エクセル「人をクッション扱いするな……」

リインは頬を含まらせ、馬に跨る体制で人間サイズへ変わった。

風と土、2つの魔術が発展した国　フィリアス。天空に城があるという珍しい国、地上に城下街で城に上がる船がある

シグナム達と合流し、一緒に国の城下へと入った。城下ではゴーレムが門番と建築などで働いていた。馬車から降り門番のガーディアンゴーレムを見上げるコロナは目を輝かせていた。

コロナ「ガーディアンゴーレム、カッコいいです！」

アギト「あんなデカイのどうやって操ってた!？」

コロナ「きつと凄い人たちなんですよ！」

テンションが高いコロナとアギトを見たヴィヴィオたちは

ヴィヴィオ「ゴーレム見てる時のコロナって」

リオ「目が輝いてるし」

アインハルト「なんだか…怖いです」

ゴーレム創生を得意とするコロナにとって、こういう所は勉強になり何より新しいゴーレム創生を完成させる後押しにもなるのだ。逆にそれを練習相手にされるヴィヴィオたちはどう思うことやら

ヴィータ「……………」

シグナムの手を握りながらヴィータは周りをチラチラと見渡す。

シグナム「ヴィータ、そんなに周りを気にしたら怪しまれるぞ」

馬から降りたソラとエクセルが前を進む中、ヴィータは人込みでも怯えていた。

ヴィータ「だって…よ」

鉄槌の騎士をここまで追い込むとは…アルザスは一体なにをしたというのだ

シグナムはそう思いながら、エクセルたちを追っていた。

ゴンドラに似た船に乗って、上空の城へと飛んでいく

エクセル「この技術力は意外と進んでいるな」

ソラ「そうですね。自分たちの世界は当たり前でも、この世界では…」

ゴンドラ…飛ぶ船があるのは、この国だけか。宇宙から見たらこの世界の広さがわかるんだけどな

ソラ「…着きました」

ゴンドラが城の発着口に入っていく。他にいた騎士たちが素早く降

りて、出入口へと進んでいき俺たちが一番最後に降りていき出入口へ歩いていくと

ソラ「あっ、高度の関係で風が強いですから気を付けてください」

とソラの言われたことに気をつけながら、出入口から外へ出ると

突風が吹き荒れ、体が少しだけ飛ばされそうになった。

エクセル「おっと……」

ソラ「慣れればそうでもないですが、この国の守護聖霊は城に初めて入る人たちには注意をはかっているらしくて」

シグナム「なるほど…ならば納得がいくな」

ソラ「驚かないんですか？」

シグナム「守護聖霊や守護神クラスは私も使役したのでな。そこま  
で驚かんさ」

シグナムは懐から赤紫の球体を出した

ソラ「守護神………」

ソラが球体を見てポツリと呟いた。俺はソラへ声をかけた

エクセル「ソラ…?」

ソラ「あっ…すみませんでした。では、部屋へ案内した後に陛下の

所へ案内します。」

ソラがすたすと歩いていくのを俺はしばし見送った。

エクセル「……………」

部屋に案内し、ヴィヴィオたちを残し俺とシグナムだけが王の元へ案内された。

―玉座の間―

玉座の間には、俺とシグナムの他に騎士団長と部下らしき4人が一緒だった。

シグナム「礼儀は心得ているか？」

エクセル「なんとか…」

お互いにバリアジャケットという形で王に会うわけだから、ちゃんとした礼儀でなければならぬ

近衛兵「陛下、ご入来ッ!!」

近衛兵の1人が王の入室を告げると、騎士団長と部下の兵士、シグナムが片膝をついた。

エクセル「やばっ…」

俺も慌てて片膝をついた。

王が入室し、王座へ腰かける。

まず王は騎士団長に戦いの報告を聞き、騎士団長がそれを報告する。

王の顔は未だ見れないが、声音からして男だとわかる。フェルコといい、この王といい声音が似すぎないか…?

???「ソラ、その者たちか?お前の仲間というのは…?」

ソラ「はっ…この二人だけではありませんが、共にいた者たちの代表として来ていただいています」

ソラが顔を上げて報告する。

???「二人とも、表を上げよ。」

俺とシグナムは顔を上げ王を見た。

ロングヘアの蒼髪、セレブを感じとらせる顔立ち。翡翠の瞳に自分が吸い込まれそうになった

???「後回しにして悪かったな。私はこの国の王、ケイ・F・フ

エルナンデだ…そなたら名は…？」

シグナム「私はヴォルケンリッターの1人、烈火の将シグナムです」

シグナムが顔の近くで拳と手のひらを合わせた。

エクセル「エクセル・アーシユライトです」

俺もシグナムに同じような動作をした。

フェルナンデ「烈火…シグナムとやら、そなた火を使うのか？」

シグナム「火と言っても自分の武器に炎熱効果を追加するだけです」

フェルナンデ「ふっふっふっ、面白いことを言う。だが、烈火の将よ……」

フェルナンデがシグナムを見つめる。シグナムは火を使う騎士、戦時中の今のこの国では

フェルナンデ「後1日早かったら、その首をとっていた所だ」

1日…早かったら…？」

俺とシグナムは見合った。

フェルナンデ「知らぬはず。先日、各国の王達との和平が締結した後数刻すればほどで各王達がここへ来る…」

エクセル「……そうですか。ならば我々は下がっていた方がいいで



すね」

フェルナンデ「いや、君たち二人には会場警備をしてもらいたい」

それから数時間して、各王たちが城へやってきた。中にはフェルコがこちらを見て、にやけるなどしてきてくれた

ー発着口ー

ヴィータ「何であたしがここにいなきゃならないんだよ……」

ヴィータは椅子に座っていた。

ヴィータ「おまけにもう戦えないのによ……」

ヴィータは椅子に座りながら辺りを見ている  
子供のように足をぶらつかせる

ヴィータ「おまけに……」

少し離れた場所にエクセルが立っていた。発着口から空を見上げていた

ヴィータ「あんな怖い奴と一緒にだなんて……」

ぶらつかせていた足を止めて、膝を抱える

でも何で、あたしはあいつを見ると怖くなるんだ…思い出せない

シグナム『会談が始まる。各員、警戒しろ……』

シグナムから念話が送られて来た。

エクセル「ヴィータ…」

ヴィータ「……なに？」

エクセルの方へは振り向かず、ただ声を聞くだけの状態のヴィータ

エクセル「いつまで口をきかない気だ…」

ヴィータ「………」

エクセル「そんなに俺が怖いのか…？」

ヴィータ「………」

エクセル「ヴィータ、俺はな…」

一向に喋らないヴィータにエクセルは近寄りつと歩き出す。  
その時……

ゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！

地面が激しく揺れた。

エクセル「なんだ……！？」

揺れは続いた。縦横に立てなくなるぐらいまでに

エクセル『シグナム！シグナム！！』

シグナムに念話を送るがノイズが走っていて通じなかった。

エクセル『ソラ！！そちらの状況は！？』

今度はソラに念話を送った。

揺れは未だに揺れ続け、俺は地面に膝をつき、ヴィータも同じようにしていた。

ソラ『こちらと同じです！！地震が止まりません！！』

エクセル『バカ、空中で地震が起こるわけが……』

ソラ『もしかしたら神殿に……』

ノイズが走り、ソラの念話が途切れた。

エクセル「空中で地震が起こるわけがない……このタイミングでこんな事ができる奴がいるとしたら……」

「????」察しが良すぎると、早死にしますよ」

隣にあった船の屋根に金髪の女性が降り立った。

エクセル「お前は…メルフィス!!」

俺はメルフィスを見て、腰にあるブランド・ティータに手をかけた。

メルフィス「覚えてもらって光栄だけど、そろそろあなたには消えてもらっわ。あの方の為に————」

メルフィスが片手を上げると、醜い人型の怪物が地面から現れた。

エクセル「くっ…!!」

揺れのせいで、うまく立てない!?

メルフィス「やりなさい…」

メルフィスが指示を下すと、怪物は剣を抜きこちらへ飛び掛かった。こちらと違って相手は空中だ、揺れを感じないのだ

俺は目を閉じた。

終わりか………すまない、フェイト

ピシッ…

その瞬間、床が抜けた

全体が砕けヴィータと俺は床の下へと落ちていった。

メルフィス「逃した……追いなさい」

エクセルとヴィータを追うために、怪物たちは抜けた床へ降りていった

メルフィスが城への入り口から中庭へ出ると、そこには宿敵とも言える二人がいた

周りは先ほどのような怪物が無数に城の騎士たちと戦っていた

メルフィス「お久しぶりね……まさか生きているなんて思わなかった」

アインハルト「どんな手を使っても私たちを離すことは不可能です」

ヴィヴィオ「その通り！ここでそれを証明してあげるよ！！」

メルフィス「……望むところです」

エクセル「ああ……また違う道だ」

床が抜けて、落ちてみればおかしな迷路に迷い込んだ俺とヴィータ。何故かここには揺れがない

エクセル「おまけにヴィータを背負った状態だし……」

落ちた衝撃でヴィータは気を失うわ、未だに起きないわで、もし襲われたら大変だな…おまけにこの迷路は

エクセル「えつと…ここは左かな」

まるでダンジョンを抜けるゲームみたいに、一つ間違えば

シャキン…!

両方の壁から刃が生えた。

うまく戻って、逆の道へ入る

エクセル「罠だらけだ…」

ヴィータ「ん…?」

エクセル「起きたか…?」

ヴィータ「わわっ!?!お前なにやって!?!????」

いつもより違う反応のヴィータは背中から離れようとしていた。

エクセル「暴れるなって…それより、平気になったのか?」

ヴィータ「…少しはノノノノノ」

迷路を歩きながら、俺とヴィータは喋り続けた。

ヴィータ「お前は人を殺したことがあるか?」

エクセル「なんだよ、いきなり……」

ヴィータ「あたしは数えきれないほどの人を過去に殺した。その時の罪悪感が今になって襲ってくるんだ……」

エクセル「……それは、何か原因があるんじゃないか？」

かなり前の罪悪感が襲ってくるのは何がきっかけなのかはわかっている。ヴァンデビルを倒すにつれ、生々しい感触がまるで人を殺しているようで、ヴィータや……多分、俺や他の奴もその感触が忘れられなくなって快楽を覚えるようになる。それは快樂殺人者と同じケースだ

ヴィータ「あたしは人を叩き潰す感触が忘れられないんだ。楽しくて、気持ちよかったんだ。だから……」

エクセル「だから戦いたくなくなった……か？」

背中ヴィータが頷いたのがわかった。

エクセル「だからといって、何で俺の顔を見て怖がるんだ？」

そこで俺は一番の疑問点を聞いてみた。

ヴィータ「それは……わからない」

エクセル「なんだそりゃ……」

角を曲がると、何かの入り口が見えてきた。

エクセル「なんだ…？」

ヴィータ「扉…！」

エクセル「ということは…出口か？」

扉に近づき、手をかけようとする

シャアアア…！！

後ろの迷路から奇声が聞こえてきた

エクセル「奴らが来たか…！」

俺はヴィータを降ろし、扉を開けた

ヴィータ「どうするんだ…？」

奇声がどんどん近づいてきた。

エクセル「中に入ってる…！」

ヴィータ「でも…！」

エクセル「戦えないお前がいても邪魔なだけだ…早く入ってる」

ヴィータは頷き、扉の中に入っていく。そして扉を閉める直前にエクセルに振り返り



ヴィータ「気をつけて、エクセル…」

いつもの口調でない発言に心を震わせた。

こんな状態の彼女は、絶対守らなくちゃな………命にかえても

迷路から先程の怪物たちが剣を持ってやってきた。

エクセル「さて、ちょっとした準備運動に付き合ってもらおうか…  
!?!」

槍を召喚し、構えるエクセル

扉の中で、ヴィータは外の音を黙って聞いていた。

金属がぶつかり合う音が全然止まなかった。

ヴィータ「聞きたくない音……ん？」

ヴィータは部屋の奥にあった建物を見た。洞窟みたいな場所に不似  
合いな建物だった

ヴィータ「なんだ…？」

何かに体が引かれる……？

あたしはその建物に引かれるように、歩きだした。

―神殿―

構造からして、神殿というのがわかる。

長い階段が上がっていくと、扉が少しだけ開いていた。

ヴィータ「開いてる…？」

???'「やっと見つけた」

中から聞き覚えのある声が聞こえてきた

この声って……

恐る恐るあたしは中を覗いてみた。そして中には――

ヴィータ「……えっ!!？」

中には信じられない光景が広がっていた。

体がバラバラになった騎士と神官たち、そして騎士団長を踏みつけている人物にあたしは目を疑った。

騎士団長「貴様ツ…二週間……預かった恩を忘れおって…!!」

騎士団長を踏みつけているのは、まさかのあいつだった。

????「黙れ……」

銃剣を騎士団長の頭にあて、躊躇なく引き金を引いた。

ドンッ!!

ドサッ……………

ヴィータ「ひっ……!!」

そいつはこちらに振り返った

????「見られたからには、来てもらっぞ……………」

そいつは一瞬にして、あたしに間合いを詰めた

ヴィータ「なんで……………」

その頃、扉の外では……

未だにエクセルと怪物たちとの戦闘は続いていた。

エクセル「いつものヴァンデビルと動きが違う…弄ばれてるみたいだ」

怪物たちは剣を構えた。さっきから毎回毎回うんざりする構えだ

まるで学習してるみたいだ。こんな奴らが知性を持ったら――

その瞬間だった。

天井に穴が開き、そこから激しい雷光が走った。

ズドーーーーーン!!!

眩しい光に俺は目を反らした。

次に目にしたのは、奴らが灰になった姿だった。

俺は穴が空いた天井を見上げた。そこには誰もいない、灰に目を下ろすとそこにあっただのは一発のカートリッジだった

俺はそれを拾い、刻まれていたナンバーを見た

エクセル「これは……バルディッシュの専用カートリッジ？」

じゃあ今のは……

エクセル「フェイト……」

もし……彼女ならなぜ顔を見せない

「神殿」

俺は神殿のある部屋へ入る。

エクセル「あれは……」

俺は神殿へ歩きだすと同時に、銃声が響いた

弾丸は俺の一步前の地面に打ち込まれていた

????「ちっ……」

神殿の方で誰かが舌打ちした。

エクセル「誰だッ……!!」

俺は懐のブランド・ティータに手をかけた。神殿の方から誰かが歩いてきた

階段を降り、顔が見えた。

エクセル「なっ……!?!」

銃剣を使う人物、これを使う奴なんか一人しかいない。

ソラ「本当なら、あなたは戦いに紛れて殺したかったですけど……  
予定変更ですね」

エクセル「ソラ、どういっつもりだ…!!」

ソラ「どういっつもり?…俺はメルフィス様に従っているだけのこと、あなたに指図する筋合いはない」

エクセル「なんだと…!!」

メルフィスに従ってるだと、ソラがあいつらに…?

ソラ「あなたを殺すために二週間、わざわざこの国に紛れ込み、いた」と見せかけ、倒れたふりをしてそして、ようやく…あなたを殺すときが来た。何か言い残すことは?」

ソラは銃剣、ニルヴァーナを俺に向けた。

エクセル「自信たっぷりだな。一つだけ聞く…: ヴィータは、ヴィータはどうした?」

ソラ「彼女なら神殿の中だ…やたらと怯えてたんで、殺すところだったよ」

ソラは楽しむように笑った

エクセル「そうか…:」

俺はブランド・ティータを引き抜いた。

エクセル「俺を殺せるものなら、殺してみる。お前程度の力じゃ俺は倒せないだろうがな」

ソラはニルヴァーナを双剣へ変化させ、構えた。

ソラ「確かに…ですが俺の力を甘くみないことです」

ソラからとてつもなく激しい殺気を感じた。

バーサーカーの力を解放したか…：バーサーカーの能力は未知数だ。  
油断は出来ない…下手したら一発でやられる

ソラ「行くぞ…」

ソラが動いた。瞬足ともいえる速さでこちらへ接近してくる

エクセル「ッ!?うおおおおッーーー!!」

ソラ「ハアアアアア…!!」

刃がぶつかる。その衝撃で足元がひび割れた

互いに攻め合い、火花を散らしどちらも攻撃の手を緩めない。ソラの防御はこちらの攻撃をいとも簡単防ぐ

エクセル「くっ…!!」

俺はニルヴァーナの剣撃を弾いた。

思ったより剣撃が重いッ!!これがバーサーカーなのか!?

ソラ「どうしたどうした!?戦いはまだまだこれからだぞ!!」

エクセル「うるさい…!!」

一旦ソラから離れ、ブランド・ティータを鞘に納めた。

エクセル「…!!」

召喚するのはじめての武器だが、やるしかない!!

神殿の中で床に倒れていたヴィータは目を覚ました。

ヴィータ「あれ…?」

バリアジャケットのまま立ち上がり、入り口の方を見た。外から金属がぶつかり合う音がした

ヴィータ「そうだ…ソラに頭を、殴られて…」

ヴィータは入り口に手をかけて、外を見た

外ではエクセルとソラが戦闘をしていた。しかも、エクセルが押されていた

ヴィータ「なにやって…えっ?あれって」

エクセルが持っていた武器にヴィータは目を疑い、懐を探った。

ヴィータ「ある…でもなんで」

もう一度二人の方を見た。確かにエクセルは持っていた…ヴィータ



の相棒であるグラーフアイゼンを

ソラ「使う武器を間違えたな！！あの女が使うポンコツがなんの役に立つ！！」

エクセル「ポンコツだと？違うな・・・この武器はあいつの大切な相棒だ！！」

エクセルはギガントフォーム状態のグラーフアイゼンでソラの足元を狙った。しかし、ソラの動きは速く捉えることができない

エクセル「それに彼女は強い！！どんな状態に陥ろうと絶対に諦めない心の持ち主だ！！紅の騎士は…ヴィータは俺の仲間だ、彼女を知りもせずに侮辱するなら俺は誰であろうと許さない！！それが・・・俺が守ると決めた彼女に対する思いだ！！」

その言葉にヴィータは顔を赤らめ、涙を流した

ソラ「戯れ言を…！！」

ソラは片方のニルヴァーナを銃に変化させ、一発だけ強力な魔力弾を放った

エクセルはそれをグラーフアイゼンを使って弾こうとするが、強力な弾丸で神殿まで吹き飛ばされてしまった

ダアアアーン！！

エクセル「ぐうっ！！」

扉を破き、ヴィータの隣に倒れたエクセル

ヴィータ「エクセルッ…!!」

ヴィータが俺の肩を擦った。俺はふらふらと立ち上がり

エクセル「ヴィータ…逃げろ、今のお前じゃ…」

破けた扉の向こうからソラが歩いて来ていた

ヴィータ「バカッ!!あたしは逃げない、逃げることなんて出来るか!!大好きなお前を残して逃げるなんて…守護騎士失格なんだよ  
!!!」

ヴィータは泣きながらエクセルの胸ぐらを掴んだ。

その言い方にヴィータの生きた感情を感じ取った。

今の彼女は、鉄槌の騎士に戻る一歩手前まで来ていた

ヴィータ「だから…お前を!お前を残していくなんて…出来るかあ  
!!!!!!!」

ピシッ……………

ヴィータの額から赤黒い魔法陣が弾け飛んだ

エクセル「そうか…暗示の…」

ソラ「話は済んだかな…?」

ソラが扉を跨ぎ、銃口を向けてきた。

ヴィータは立ち上がり、ソラの方へ振り返った。

ヴィータ「おい……お前さっき、あたしとアイゼンのことを侮辱してたよな？」

結ばれていない髪が扉の方から来る風で揺れる

ソラ「確かにしたよ、だけど……もうお喋りは飽きた。二人まとめて消し飛ばす」

銃口がソラの魔力光で輝き、収束していく

ヴィータ「そんなで………」

ソラ「インヴェジブルソニック!!」

ソラは引き金を引き、ニルヴァーナから大きな砲撃が放たれた。

ヴィータ「あたしを侮辱すんじゃないやねえ……千年早いんだよ、このクソガキがあああー……!!」

キンッ!!

ヴィータのシールドが砲撃を受け止めた

エクセル「ッ……!!」

ヴィータ「エクセル、そこで見ていろ……あたしの戦いを!!」

グラーファイゼンを出し、構える。

ヴィータ「行くぞアイゼン、久々に暴れるぞ」

ソラ「雑魚が……」

神殿の外へ出ていき、二人の戦闘が始まった。

ヴィータ「アイゼンッ!!」

グラーファイゼン《ギガントフォーム》

グラーファイゼンがギガントフォームに変わり、鉄球の誘導弾を打つ

ソラ「そのような手など……!!」

鉄球を切り裂き、ヴィータへ接近するソラ。

ヴィータ「甘いんだよッ!!」

ヴィータは接近してくるソラにアイゼンを槍のように打ち続ける。

ソラ「なにッ……!？」

いくつか回避したものの、ソラは完全にヴィータの攻撃を食らっていた

ヴィータ「燃える……燃えるぜ……この感覚だ。この感覚なんだよ……あ  
たしが戦う時に一番楽しいのは!!」

酔いしれるな…認めるよ…自分が今この感覚を味わいたいと思う」とを…快樂に似たこの感覚を…！！

ソラは弾け飛び、地面に倒れた。

ヴィータはアイゼンを担いだ。

ソラはゆらゆらと立ち上がり

ヴィータ「まだやるか…？」

ソラ「ふっふっふっ…！まだやることはある…」

ソラは懐からオレンジの球体を出す。

ソラ「これが…俺の力になる…！！」

ヴィータは鼻で笑った。

ヴィータ「そんな脅しは通用しねえよ…！！」

ソラ「ならば見るがいい…」

神殿にいたエクセルがヴィータへ近づいていく

エクセル「あれは…まさか…」

ソラ「古より地を守りし守護神グラールゼルよ…我に力を！“転身”  
！！」

ソラの足元に白銀に輝く陣が現れ、その体の背後に巨大な石で出来た人型のガーディアンが出現し、ソラを取り込んだ。そしてソラを取り込んだガーディアンは姿形を変化させていく、体は白銀の騎士甲冑に包まれ、両手にはニルヴァーナに似た銃剣を手にし、ガーディアンのはずなのに不似合いなマントを身に付けている。

キンツ…！

ソラに似た顔になったガーディアンの目に光が灯った。

エクセル「この国の守護神…ソラが使役するだど！？」

ヴィータの横でブランド・ティータを構えるエクセル

ヴィータ「上等だ、あたしはこういう奴と戦いたかったんだ。」

笑いながらグラーフアイゼンを構えるヴィータ

エクセル「でも流石にここはマズい。地上に出よう…！！」

ガーディアン グラーゼルが持っていた銃剣を向けてきた。

エクセル「行け…！」

俺とヴィータは入り口へ飛んだ。グラーゼルの反応が遅かったおかげで俺とヴィータは入り口から出て天井に開いた穴から外へ脱出した

外へ出ると、城が徐々に高度が落ちていくのがわかった。

エクセル「ソラが守護神を召喚したのが影響しているのか!？」

城が落ちるのは城下町から離れている森林、けどそのまま落ちても被害は出る

シグナム「こちらシグナム、城にいる敵は全滅した。王たちと城にいる者たちも脱出を急いでいるが、メルフィスとリインフォースに行く手をはまばれている!！」

シグナムの念話が聞こえた。

リインフォースがいる?やっぱりヴィータの話通りか

ヴィータ「シグナム!！」

シグナム「ヴィータ?平気なのか?」

ヴィータ「当たり前だ!それよりリインフォースは洗脳されてる可能性がある、あたしがそっちに行くまで!」

エクセル「ッ!?!ヴィータ、来るぞ!！」

空いた穴から虫の翼のような羽根を生やしたグラールゼルが上がってきた。

ヴィータ「とにかく、リインフォースは傷つけるな!あいつもあたしらの家族なんだからな!！」

ヴィータは念話を切り、グラールファイゼンを構えた。

エクセル「俺が戦う、ヴィータは下がってる……」

ヴィータ「ふざけんな！あたしはお前や皆を守る守護騎士だ、ここ  
で引いたら騎士の名がすたるー！！」

ヴィータが俺の前でグラーフアイゼンを構えた。

エクセル「…わかった。けど、足を引つ張るなよー！！」

ヴィータ「それはこっちのセリフだー！！」

ヴィータがグラールゼルへ突っ込んでいった

エクセル「“召喚”ー！！」

ジャステイスエターナルを召喚し、グラールゼルへ突っ込んでいった。

その頃、メルフィスたちと戦っていたヴィヴィオたちはー！ー！ー！

ヴィヴィオ「リボルバースパイクツー！！」

ヴィヴィオの技がメルフィスの防御を弾いた。

コロナ「ゴライアス、ロケットパンチー！！」

コロナのゴライアスから腕が飛び、メルフィスを吹き飛ばした。

メルフィス「くっ…！！」

空中で体勢を直したメルフィスだが



リオ「炎龍、雷龍ツ・・・行けーッ！！」

リオが生み出した2つの龍がメルフィスを狙い放たれた。

メルフィス「獄王流 鬼！！」

メルフィスの両手に紫の巨大な炎が現れ、それを龍へ投げる

アインハルト「霸王流 旋衝波ツ！！」

ゴライアスを足場にし龍を飛び越えたアインハルトは、紫の炎を掴みメルフィスへ投げ返した

メルフィス「そのような手など！！」

炎を避け、地面に着地するメルフィス。

アインハルト「あの武器は使わないのですか」

メルフィス「使う余裕はないみたいだしね」

アインハルトの隣に立ったヴィヴィオは

ヴィヴィオ「なら、一気にッ！！」

メルフィス「でも、新しい奥の手を使わせてもらいます…」

メルフィスは懐から紫色の何かのカードを取り出す。

メルフィス「私が契約した地獄の王は、どんな相手だろうと負けはしない恐怖の魔神“ギガノス”あなた達をこのギガノスで叩き潰す！！！」

リオ「そんな脅しに私たちは屈しないよ！！」

メルフィス「ならば見るがいい。出でよ、ギガノス…“転身”！！」

カードが煌めき、刻まれていた紋章がメルフィスの体へ移る。

メルフィス「おおおおッーーーーー！！！！」

メルフィスの体が紫の光に包まれ、光がなくなるとそこには角が生えた巨体があった。キメラのような体に黒く染まった目

アインハルト「なっ…」

ヴィヴィオ「本当に…」

ヴィヴィオ達が後退った。

メルフィスノギガノス「死ねえーーーーー！！！！」

ギガノスが長い腕を振り下ろした。

3人はそれを横に避けるが、爪が鞭のように変わり3人を襲った。

3人は叫び声を上げ、地面に倒れた

コロナ「みんな…ッ！！！！」

ゴライアスが3人を助けようとするが

メルフェイスノギガノス「仲間を心配する余裕はないわよ…!!」

ギガノスはゴライアスの胸へ突進し、硬いゴライアスの体に穴を空けた。

コロナ「ゴライアス!!」

ゴライアスはギガノスの胴体を掴むが、ギガノスの鞭のような指が掴んでいた手を砕きゴライアスの体を砕いた。

コロナ「あぁっ…!!」

コロナは泣き声でゴライアスから落ちた。

コロナ「まだ…!!」

コロナはさらなるゴーレムを創生しようとするが

メルフェイスノギガノス「遅い…ッ!!」

ギガノスの鞭がコロナを弾き飛ばした

コロナ「うっ…!!」

壁におもいつきり叩きつけ、その場に倒れた

ヴィータ「うおおおおお！！！！」

グラーフアイゼンをグラールゼルの肩に叩きつける。

ギイイイイ……！！！！

グラーフアイゼンのドリルが悲鳴を上げていた。

ヴィータ「くそ硬えー！！！！」

グラールゼルの波動破に弾かれ、城の入り口まで吹き飛ばされてしまった。

体勢を整え、カートリッジを装填する。

ヴィータ「にやろーどうやったら奴をー！！！！」

ヴィータは横に飛んだ。立っていた場所にダガーが突き刺さっていた

ヴィータ「お前……」

リインフォース「第二対象、確認…捕獲します」

ヴィータ「あたしを捕獲するのか？やれるもんならやってみろ！！」

グラーフアイゼンを構えるヴィータだが、この後に予想外のことに気づいた。

ヴィータ「…その前にシグナムはどうした！？」

リインフォースは横を指差した。そこには壁に叩きつけられたシグナムとアギトだった。だが、リインの姿はなかった

ヴィータ「てっ…てめえー!!」

ヴィータはグラーフアイゼンを振り上げリインフォースへ仕掛けた。

リインフォース「舞い上がれ…」

リインフォースの手前でヴィータは足元から沸き上がった水に上へ弾かれた。

ヴィータ「なっ!?!」

水…!?!?

リインフォース「貫け…」

リインフォースはヴィータへ指先を向けると無数の水の矢が放たれた。

ヴィータ「なにッ…!?!」

シールドが間に合わず、グラーフアイゼンで防ぐ。しかし無数の水の矢がアイゼンを削っていく

ヴィータ「ぐっ…!!」

リインフォース「拘束する…」

リインフォースが片手を上げると

リイン「させません!!」

リインフォースの後ろから現れたリインがダガーを放つが、リインフォースは最初からわかっていたかのようにダガーをシールドで防いだ

リイン「リインフォース！目を覚ましてください！！リインたちがわからないんですか！？はやてちゃんや守護騎士のみんなのこともー！ー」

リインフォース「お前など知らない。雑魚は引っ込んでいろ」

リイン「リインは雑魚じゃありません!!」

ヴィータ「リイン!!」

地面に着地したヴィータはアイゼンを下げた。

ヴィータ「もういいリインフォースは完璧に奴らに操られてる。はやてを忘れてるんだ……それにあたしのことも、シグナムたちのことも忘れてんだ……だからこいつは倒すしかー！ー」

リイン「違います!!」

ヴィータ「!？」

リイン「リインにはわかります。リインフォースは操られていても、

ラインにとっては大切なお姉さんであって、家族なんです！！倒すなんて…そんなのラインが絶対認めません！！」

ラインの絶叫が辺りに響きわたった。

ヴィータ「……そうだったな、ラインフォースは大切な家族だもんな…倒すんじゃないかって救うんだもんな」

大きな風が吹き荒れた。

ライン「ヴィータちゃん……」

グラーフアイゼンをラインフォースに向けるヴィータ

ヴィータ「おいラインフォース、お前…はやてのこと知らないって言ったような口調だったけどよ…主を忘れるよような騎士はな、騎士じゃねえんだ。主を思ってこそその騎士なんだ！今からお前をぶつとばして、そのいかれた洗脳を解いてやるから齒を喰いしばってる」

ラインがヴィータの隣に降りる。

ラインフォース「やられる私ではない。雑魚は消し、お前は捕獲する」

ヴィータ「上等だ…てめえが隠し持つてる物を出せ、お互い本気で行こうじゃねえか」

ヴィータにそう言われると、ラインフォースは懐から青い球体を取り出す。それはスプライトでヴィータが触れたものだった

リインフォース「我が力の結晶を見せる。」

球体が輝き出す。

リインフォース「海を統べる大聖霊エクレアよ…我に力を“転身”  
！！」

球体が光だし、リインフォースの足元から水が沸き上がりリインフォースを包み込んだ

そして水はやがて大きくなり、巨大な体へと変わった。

ユニコーンの角を生やし、水色の人型の体に騎士甲冑。顔はリインフォースに似て髪が生える

リイン「リインフォース…！！」

ヴィータ「怯えてるんじゃない、ユニゾンだ！！」

リイン「はっ、はいです！！」

ユニゾンするあたしとリインだが、相手は巨体で水を使うからあたしとは相性が合わない

ヴィータ「なら…手に入れてやるまでだ……」

あたしはエクセルたちみたいに召喚みたいな力はない……けど、手にいれなきゃみんなを守れなくなる。

なら、この願いを聞き届けてくれ……みんなを守るために



そしてユニゾンしたヴィータの周りに竜巻のように風が吹き荒れた。

ヴィータ「あたしに…守る力を…！」

ヴィータの前にエメラルドグリーンの球体が現れ、ヴィータは片手でそれを掴む

ユニゾンしたリインも感じた。温かい気持ちとヴィータの願い…それがリインに感じ取れるほどだった。

ヴィータちゃん…リインもその思いに答えるです

ヴィータ「行くぞ…リイン…！」

リイン《はいです…！》

リインフォースが轉身したエクレアが先程のような水の矢を放ってきた。だが、竜巻が渦巻く中に水は通らない

ヴィータ/リイン「天空の風を統べる大いなる風神スヴィアよ、私に力を…“召喚”…！」

風がユニゾンしたヴィータを包み込んだ。

緑色の巨体と騎士甲冑、そして風が作り出したハンマー、ヴィータの顔に似た顔

戦女神とも言えるその巨人は、ヴィータにピッタリだった

ヴィータ/スヴィア「行くぞリインフォース、一発勝負だ…！」

二体の巨体が構えた。しばらく見合い、そして

ヴィータ／スヴィア「うおおおお!!」

ラインフォース／エクレア「ハアアアアアア!!」

二体の巨体がぶつかり、通り過ぎた

ラインフォース／エクレア「バカ…な…」

ラーゼフォンの体半分が大きくえぐられた

ライン／スヴィア「勝負…あります」

エクレアとスヴィアが消え、ラインフォースが地面に倒れた。

ユニゾンが解けたヴィータとラインはラインフォースに振り返った

エクセル「ヴィータ…!!」

上からエクセルの声が聞こえた。

ヴィータ「エクセル!? お前、ソラとの戦闘は」

エクセルがヴィータの前に降りた。

エクセル「それがな……」

???「良かった。無事だねヴィータちゃん」

ヴィータとラインの背後から聞き覚えのある声が聞こえた。ヴィータとラインは振り返ってその人物を見た

ヴィータ、リイン「なのは(さん)ッ!？」

なのは「お久しぶりヴィータちゃん」

いつものような接し方にヴィータは

ヴィータ「本当になのはか!?!少し痩せたんじゃないか!?!」

なのは「まあ…ね」

そして、ヴィータはリインフォースを見た。そこに立っていたのは

ヴィータ「はっ、はやてー!ー!」

ヴィータはグラーフアイゼンをほおり、主であり大好きなはやての元へ走りだし飛び付いた。

はやて「ヴィータ…よく頑張ったな」

ヴィータの頭を撫でるはやて。

メルフィスを退けたスバル、エリオ、ティアナと合流したエクセルたち

シグナムに肩を貸すフェイトとザフィーラやヴィヴィオたちに治療を施すキャロとシャマル

散り散りになっていた六課メンバーは今、合流した

## 第16話 アンリミテッドスカイ（後書き）

「?????」

アルザス「ソラの傀儡であやつの暗殺など二度と考えるな」

アルザスは手に持っていた木の人形を潰した。

エクセルと戦ったのはソラに似せた傀儡だった

だが、傀儡とはいえソラに似せたことで2つあった神器の内ひとつは手に入れたことは評価するところだ

メルフィス「申し訳ございませんアルザス様……」

アルザス「だが、他のメンバーの合流で計画の時間が短縮できた。主が向こうに行っている間、事を進ませねばならない」

メルフィス「はい……承知しました」

アルザスは窓の外を見た。城は落ちなかったもののリインフォースを取られたのは痛手だった。こここの城の空には雲が晴れることはないこの空は嫌いなのだ

アルザス「ついにここまで……次の戦いで……あいつらは真実を知るだろう。この世の始まりのきっかけを……そしてこの戦いの意味を  
「……………」

アルザスは仮面を取り、再び空を見上げ不適に笑った

## 第17話 覚醒

他のメンバーと再会して、既に2日が経っていた。

フィリアスの城は地上へと接地させるで、城の改装を始めていた。元々この城は地上にあった城を数百年前に浮かせて天空の城という肩書きを当時の王が欲しかっただけだったということらしい。

そして、今この城では重要な会議の最中だった

六課部隊長のはやてとシグナム、ヴィータ、フェイト、なのは、エクセルのメンバーと各国の王たちだ。

エクセルが一度も話したことがなかったスプライトの王、アポロ・シェンリーバは水色のロングヘアで翠の瞳、他の二人より優しくフェルコたちと同じ年らしい

フェルコ「あの怪物たちが君らの敵か…うすうす察してはいたがまさか本当だったとは」

はやて「あの怪物たち、ヴァンデビルたちを倒すために各王たちの力を借りたいんです」

フェルナンデ「しかし、君らといいあの化け物共は何者だ？」

六課側が黙り込んだ。

アポロ「おまけに守護神や大聖霊クラスを使役する者などそうはいない。どんな魔術を使った？」

はやて「私たちは……この世界の人間ではありません。この世界の技術より遙かに進んだ魔法文化世界からやってきました」

はやては色々説明尽くした。時空管理局やその他もろもろだ

フェルコ「魔法を使うことは知っていたが、まさか別世界とは」

アポロ「信じられないが目の前にいる以上、信じるしかないぞ。フェルナンデ……」

フェルナンデ「ふんっ。ではもう一つ聞こうか……この世界では魔法は魔術より優れたる力だ。だが、禁忌の力ゆえに現代に使える者はいない……問題は君らの中で一人だけ、私としては気に食わないことがある」

フェルナンデの視線がはやてからエクセルへと移った。

フェルナンデ「お前が禁じられた魔術を平気に使っているということだ」

全員が目がエクセルに向けられた。シグナムたちは知っているがフェイトたちは知らないのだ

エクセル「自分もそう言われるまでこの力が魔術だとは知りもしませんでした。魔法だとばかり思っていましたから……」

フェルコ「フェルナンデ、禁忌とは言ってもそれはただの“掟”の中の種類ではないのか」

掟：そんなの始めて知ったぞ？

フェルナンデ「黙れフェルコ。掟の中には過去の産物に触れるなどしつかりと記されている。」

椅子に座ったままフェルナンデはフェルコを睨んだ。

うわぁ…怒ってるな〜

はやて「あのフェルナンデ様…話が見えないのですが」

フェルナンデがエクセルを睨み続けていた。

アポロ「彼は怒ると周りが見えなくなるのでな。代わりに私が説明しよう」

アポロ王が立ち上がり、どこから出したのかホワイトボードみたいな物に何かを書き始めた。

アポロ「この三ヶ国を含め、世界は掟によって魔術のルールが決められている。その中で禁じられたものは例えば、君らが使っている魔法だ…」

王が言うにはこの世界の魔法は五大魔法といい、五つの魔法が存在している。

その中で代表的なのが異次元から獣を呼び出す召喚魔法（各国の守護神召喚はこれに含まれているらしい）。

アポロ「次は死者を蘇らせる死者蘇生魔術だ。この魔術は最悪の類だ」

なのは「最悪…というのは？」

フェルコ「想像してみる。墓場に眠る腐った死体がい上がる様を…」

ヴィータ「昔に見たゾンビ映画みたいだな…」

ヴィータがボソツと呟いた。

アポロ「次は彼が使っている投影魔術、魔術の中で投影は神が使用された類というらしいが実際本当なのかわからないな。」

フェイトがチラツとエクセルを見た。エクセルは未だに睨まれていた。それからアポロ王から色々な説明を受けて、これからの対策を練った。

なのはの話によると、この国を抜けた先にある荒野にヴァンデビルが武装した軍団がひと月すると、大量に押し寄せてくるらしい

なのは達はそれを知り“半年”の間に国へ進行しようとする軍団を食い止めていたらしい。

フェルコ「ここから先、いつ軍団がやってくるかもわからん。早急に討伐した方がよかるう」

フェルナンデ「相手は化け物共だ。無闇に出陣すれば国が襲われかねんぞ」



アポロ「そうだな、各国の民をどつしたものが」

王たちは苦難していた。俺たち全員は見合い、その場にはやてとシグナムを残し、しばし席を外すことにした

―城内 中庭―

エクセル「フェイト……」

俺とフェイトは中庭で二人きりだった。フェイトは背中を向けていて俺はその背中を見つめていた

再会してから口を聞こうとしてもくれなかったな……

フェイト「……………」

エクセル「いつまで口を聞かないつもりだ……？」

フェイトは背中を向けたままだった。

フェイト「……………ゴメン、エクセルと再会して嬉しいはずなのに嬉しくなれない……………この半年で私、おかしくなっちゃったから……」

エクセル「戦いの……………いや、俺がいなかったからか？」

フェイト「……………」

その質問にフェイトは答えようとしなかった。

エクセル「……フェイト」

フェイトに近づき、肩に触れようとした時

ズキンツ……！！

いきなり頭痛が襲った。

エクセル「……ッ……！」

フェイトが振り返った。

フェイト「エクセル……？」

いつもより激しい頭痛だった。膝を降り、地面に片手をついた

フェイト「エクセル、どうしたの……！」

エクセル「何か……頭の中に……ぐっ……！」

頭の中でフラッシュバックのように場面がよぎった。この世界に来るまでに遡り、そして半年前から訓練校時代の場面で頭痛が止まった。

エクセル「ハア……ハア……ハア……」

汗が頬から落ちた。フェイトが噴水でハンカチを濡らしてきて俺へ渡して来た

フェイト「大丈夫…？」

エクセル「ああ…すまない…どんなことがあってもフェイトは変わらないよ。その優しさとか…」

俺はフェイトを膝立ちの状態で抱き締めた。

フェイト「エクセル…」

エクセル「久しぶりに感じるよ。キミの温もりを…」

フェイト「…エクセル、ありがとう」

フェイトが笑った。久しぶりに見る笑顔に俺は心の底から安心した

「…？…？」

城の一室でアルザスは天井の紋章を見つめていた。紋章がいくつも変化していく

アルザス「……………」

部屋にメルフィスが入ってきた。

メルフィス「アルザス様、我が方に新しく盗賊が五千、魔術士たちが120人が加わりました」

アルザス「……くだらない」

メルフィス「は……？」

アルザス「何故、主は人間を迎えいれろと命令したのか……本当にくだらない命令だ」

メルフィス「アルザス様……一つお聞きしたいことが」

メルフィスがアルザスの隣に立った。

アルザス「……言ってみろ」

メルフィス「アルザス様は……何故、主に仕えることを選んだのですか？」

アルザス「愚問だな。だが、一つだけある……主には救ってもらった恩がある。俺を……あの地獄から救ってもらった」

メルフィス「そうですか……」

アルザスは左手を見た。手が微かに震えていた

アルザス「メルフィス、狂戦士の調教は任せた。俺はしばし出てくる」

メルフィス「わかりました。どちらへ……？」

アルザスはマントを翻し

アルザス「そろそろ、あいつは全てを思い出すだろう…だから、覚醒前に決着をつけてくる」

「城門」

シグナム「では、主…行って参ります」

馬に跨ったシグナムがはやてにお辞儀をした。

はやて「うん、気をつけてなシグナム」

フェルコ「気にするでないぞ八神。我がついているのだ」

シグナムの隣で、同じく馬に跨ったフェルコが言った

方針が決まった。六課メンバーを組み込んだ三国の同盟は軍団を集めるためにフェルコとアポロ王は一度、国に戻ることにした。

フェルコの護衛として、シグナムが付きアポロ王には正気に戻ったリインフォースと万が一の為にザフィーラがついた。

出発した王たちを見送った俺たちは国境付近で陣をはっていた。

フェルナンデの行動は速かった。軍を静かに移動させ国境でいつでも出陣できるようにしていた

エクセル「ゴホッ…ゴホッ…」

誰もいない天幕の中でエクセルは口を押さえて咳をしていた。そして、押さえていた手のひらには血が微妙についていた。

エクセル「いつまで、誤魔化せるかな……」

フェイトと話が出来た後、俺は少しだけ血を吐いた。理由はわからなかったがそれを隠すことにした。

エクセル「……ぐっ!!」

また頭痛が襲った。

まったく…なんなんだ…この頭痛は、また同じ記憶たどりじゃなくて、ボケているけど、武器を見ているのがわかるが…どういふことだ、初めて見る物なのに懐かしさを感じる

すると天幕の外から

エリオ「エクセルさん、なのはさんが呼んでいます」

エリオが呼んでいた。

エクセル「わかった。直ぐ行く…」

見張り台で、バリアジャケットを装着したのは立っていた

なのは「あっ…来たね」

エクセル「どうしたんだ…？」

なのは「うん。エクセルさんと話がしたくて」

なのはが笑った。

俺は隣に立ち、地平線を見つめた。

エクセル「そっちは半年、俺は二週間ほど…こんなに間が空くとはな」

なのは「うん…ミッド、どうなってるのかな」

エクセル「わからない…ミッドに戻る方法も考えないとな…」

しばらく雑談をして、俺は天幕へ戻ろうとした。

なのは「ーーーーーエクセルくんッ!!」

なのはがレイジングハートを構え、トリガーに指をかけた。

エクセル「どうした?...ッ!？」

なのはは地平線より現れた奴に狙いを定めた。その相手とは

アルザス「出てきてくれないか、エクセル・アーシュライト……」

エクセル「あいつ……俺を呼んでる」

アルザス「一対一で勝負しよう。決着をつけようじゃないか」

見張り台を降り、国境の入り口から出てアルザスへ近づいて行く

アルザス「ずいぶんと素直じゃないか。てっきり二人で来るかと思  
つたよ……」

アルザスは鼻で笑った。

入り口には他のメンバー達が身構えていた

入り口から俺とアルザスの距離は200メートルちょっと、フェイ



トとエリオくらいならいつでも助けに対応してくれる

エクセル「なんなら、呼んでやるよ……」

アルザス「女の手を借りるのか？無様だな貴様は…クククッ」

嘲笑いながらアルザスは剣を出現させる

エクセル「……一つ聞こう。お前は、本当にお前は何者だ…」

俺はブランド・ティータを引き抜く。

エクセル「俺と同じ能力を持つお前は……」

アルザス「答えるつもりはない。気になるのなら、自分の胸に聞いてみる……一体、ここに来るまでいくつ誓ってきた？自分の命にかえてだと……二人で助ける？どうして戦いたいのだだと？……笑わせるな！！」

アルザスが向かってきた。

互いの剣がぶつかり戦いが始まった

一方、入り口付近で戦いを見ていたメンバーは

ヴィータ「エクセルのやつ、なんで誘わなかったんだ…」

ヴィータがグラーフアイゼンを握り締めた。

なのは「きつと、迷惑かけたくなかったんだよ…」

ヴィータ「でも、あいつには恨みがある。」

はやて「落ち着くんやヴィータ、それはみんな同じ気持ちだから」

フェイトはエクセルとアルザスの戦いをジッと見つめていた。

二人の剣閃が次第に激しくなっていく

フェイト「……あのアルザスの剣捌き、私……見覚えがある」

エリオ「僕にもわかります。あの独特の捌き方、それに戦い方も覚えがあります……けど、信じたくありません」

フェイト『エリオ、もし私に何かあっても……みんなをお願い。もちろんエクセルも……』

エリオ「えっ……」

フェイトがバルディッシュをライオットブレードに変換させ、走りだした。

なのは「フェイトちゃん!？」

エクセル「ハアアアッ……!！」

アルザス「ちいっ……!！」

アルザスの出現させた鎌が砕け散った。

アルザスは新たに双剣を出現させ、俺の剣撃を防御し逆に剣撃を繰り出してきた。

エクセル「お前には迷いがある!!」

ブランド・テータで双剣を砕いた。

アルザス「なにッ…!？」

アルザスは俺の剣撃を避けて一度後退した。

エクセル「お前は俺を殺そうという目的がある。だが、それはいくらかでもチャンスはあった…だがお前はそうしなかった。」

アルザス「ああ…確かにな。俺はそうしなかったよ……」

エクセル「その理由は彼女が…フェイトが近くにいなかったからか…?」

アルザス「ふっ…どうだろうな。」

アルザスは刀鎌を出現させた。

アルザス「お前に問おう。もし自分が愛されている者に裏切られたら…復讐するか?」

エクセル「そんな事はしない…俺はお前とは違う。お前のように悪



エクセル「いや、大丈夫だ」

アルザスがゆらゆらと立ち上がった。

フェイトはライオットブレードを構え、エクセルはブランド・テイ  
ータともう片手に短剣を構えた

アルザス「ふっ…まるで…あの時と同じだな…お前が…俺を裏切  
った時と」

フェイト「私は誰も裏切つてはいない。」

アルザス「そうだろうな…裏切つたのは…もう一人のお前だしな」

エクセル「もう一人の…フェイト？一体どういう…」

キーンッ…！！

エクセル「ぐっ…また!？」

また頭痛に襲われた。両手から武器を落とし頭を抱えた。まるで、  
その一言で鍵が解かれたように

アルザス「始まったか…」

フェイト「彼に何をした!？」

フェイトはエクセルが苦しんでいるのがアルザスだと思い、アルザ  
スへプラズマランサーを放った。

アルザスは体を前後左右に動かし、それを避けた

エクセル「ぐうううツ!!」

頭の中に様々な映像が流れ込んできた。

いや、甦ってきた…

場所はミッドで全てを包み込む炎、仲間を焼き灰にしていく  
前回、遺跡で見た映像とは違って現実感があった

なんだ…これは!?

さらに、炎の中で戦っている場面が映った。戦っているのは俺だ…  
そしてその相手は

フェイト!?なんで俺と戦ってるんだ…いやそれより、これは記憶  
なのか!?

さらに場所が変わり、今度はどこかの部屋みたいだった。

周りには何もなく、様々な映像が自分を囲んでいた。その中には、  
先ほどの場面も含め見えていて混乱するよう物ばかりだった。情報が  
流れてくる…膨大で受け止められない

もしかして…これは!?

その中で一つ理解できることがある。それを読み取ったとき頭の中  
でスイッチが入れ替わったような感覚に襲われ、全てを理解した。

エクセル「—————…そうか……そうだったのか…」

頭痛がおさまり俺は立ち上がり、地面に刺さったブランド・テイー  
タを引き抜きフェイトの前に立った。後ろから他のメンバー達が走  
ってきた

エクセル「わかったよアルザス。お前が今まで言っていた意味が…」  
アルザス「やつと思いたしたか、運命の選択者…いや、運命の管理  
者と言った方がいいか」

エクセル「どうとでも言え。全部思い出したよ…自分のこと…そし  
て、お前の正体も理解した」

フェイト「エクセル…？」

いつもとは違うエクセルの様子を後ろから見ていたフェイトと他の  
メンバーたち。

アルザスが再び鎌を出現させた。

フェイト「ッ！！」

フェイトはすかさずプラズマランサーを二発放った。

一発は鎌を破壊し、もう一発はアルザスがかけていた仮面に直撃し  
た。

アルザス「ぐっ…！！」

アルザスは顔を抑えた。

パリッ！

アルザスが付けていた仮面にヒビが入り、真っ二つに割れた。仮面が地面に落ちる

バイザーから仮面へと変わってから、初めてアルザスの顔があらわになった。黒い髪が白銀へと変わり、目の色が紅色へと変わった

そして、その素顔にエクセル以外の全員が驚愕した。

フェイト「うそ……そんなはずない……そんなはずが!!」

フェイトはアルザスの顔を見て否定するだけだった。

アルザス「これが真実だ……たった一つの、すべてを否定した俺の真実だ」

アルザスの素顔、それは優しさから否定、復讐という宿命へと変わったもう一人の自分“エクセル・アーシュライト”だった



第17話 覚醒（後書き）

たった一つの存在を信じるとしたら

自分はどうする

否定するか

いや、しないだろうな

それは絶対だ

それは信じるからだ

人という生き物は信じるということしかない

アルザス「ならば問おうではないか・・・信じるしかできないもの  
たちよ」

## 第18話 果てしないループ

アルザスの正体が自分自身だった…これは少しだけわかっていた。わかっていたはずなのに、それを忘れていた今の自分を許せない

アルザス「俺が存在する原因は、全てお前たちだ…」

アルザスはエクセル以外のメンバーを見た。

フェイト「なにを………」

まだアルザスがエクセルだということが受け入れられないフェイト。それはみんなも同じだった

アルザスはエクセルを見て

アルザス「記憶が戻らない方がまだ幸せだ。だが、お前は思い出したはずだ、自分の存在理由と目的が…！」

エクセル「……………」

アルザス「わかっているはずだ。イレギュラーである自分が、世界に、本当の歴史に影響を与えていることを…！」

アルザスがそう言った瞬間、その背後で空間が割れ無数の剣が出現した。

エクセル「わかっているさ、目的の為なら俺は手段を選ばない…！」

アルザス「そのあまい発言が…俺と同じ…破滅の道を進むという」とがわからないか!!」

アルザスが片手を上げて振り下ろす。そして背後にあった剣が全て放たれた

エクセルはフェイトを後ろへ突き飛ばした

フェイト「エクセルッ!!」

無数の剣の雨がエクセルへと降り注ぎ、その影響で砂ぼこりが舞い上がりエクセルが見えなくなった

はやて「ッ!!…なのはちゃん!!」

なのは「うんッ…!!」

なのはとはやてがデバイスを片手に舞い上がった。

フェイト「なのは、はやて!?!」

目の前で大事な人が襲われるのを助けられなかった二人は怒りに任せてアルザスへ向かった。それはフェイトも同じだったが、危険を察して動かなかった

はやて「お前がエクセルくんだったとしても許さない…!!」

なのは「エクセルくんの敵ッー!!」

なのはとはやてが砲撃魔法を放った。

アルザス「今のお前達など、相手にならん!!」

アルザスは銃剣を出現させ、砲撃魔法を放った。アルザスの放った砲撃は二人の砲撃を飲み込んで、二人へ直撃した

直撃し地面へ落ちたなのはとはやて

フェイト「なのは、はやて!!!」

アルザス「どうしたフェイト。来ないのか…ならば消えるがいい!!」

アルザスの背後にまたしても無数の剣が現れた

フェイト「くっ…!!」

足が震えた。

相手の正体がエクセルだとわかった途端に足が動かなくなってしまった

アルザス「むっ……命拾いしたな」

剣が消え、アルザスの足元から黒い龍型のヴァンデビルが現れそれに乗った

アルザス「フェイト・テストアツサ、そして六課の者たちよ。この地平線の先…“紅い川”の先で、俺たちメセサリウスは待つ。元の世界に戻りたかったら来るのだな…」

ヴァンデビルが飛翔し飛び去った

エクセル「逃げられたか……」

砂ぼこりの中から平然と現れたエクセルは、なのはとはやてに手を貸した

フェイト「……怪我……してない？」

エクセル「この通り……無傷だよ」

フェイト「そう……」

今、フェイトは嬉しさと混乱した気持ちがちや混ぜになっていた。

エクセル「フェイト、それに……みんなには説明しなきゃならないことが山ほどある」

なのは「そうだね。アルザスのことやエクセルくん自身のことも聞きたい」

はやて「隠しごとなんか私らには不要なはずだよ」

立ち上がったなのはがレイジングハートを拾い、はやては乱れた髪を片手で軽く直した。

エクセル「じゃあ、洗い浚い説明してやるっ……俺と……みんなとの、古くからの関係を」

場所を天幕へと移し、椅子に座りながら六課メンバーだけが集まっていた。またこの場にいないメンバーには、はやてとリインの2つの魔導書とリインフォースの慣性能力とアギトの通信能力を駆使して作った通信鳥でこの場の話画面表示で伝えている。

エクセル「じゃあ、何から話す？質問攻めでかまわない」

ティアナ「じゃあ私からいい？」

ティアナが立ち上がった。

ティアナ「エクセル、これは私個人的な質問なんだけど…今のあなたは、私の知ってるエクセルなの？それとも別人のエクセル？」

エクセル「別人てはいわないな、今の俺が本当の俺なんだ・・・まあ、本人であることには変わりはない」

キャラ「はいッ…!!」

次に手を上げて立ち上がったのはキャラだった

エクセル「キャラは何が聞きたい…？」

キャラ「はい。ずっと気になってたんですけど、エクセルさんやフイトさん達が使役してる神龍は本当に龍召喚なんですか…？」

その質問になのは達がこちらを凝視した。

エクセル「その質問は、後で答えるとしよう」

キャラが座り、次にヴィータが立った。

ヴィータ「次はあたしだ。質問の前に、エクセル……一発殴らせる」

ヴィータがエクセルの前に来た。

エクセル「何で殴る必要がある……」

ヴィータ「アルザスの野郎がお前だってわかった途端に、無性に殴りたくなった」

エクセル「わかった……」

俺はヴィータの前で膝立ちの状態になる。エクセルは目を閉じる

ヴィータ「行くぞ……」

次の瞬間、頬に強烈な衝撃と痛みが走った。

エクセル「ッ……」

ヴィータは殴った手を強く握っていた。

ヴィータ「今のはシグナムと……リインフォース、あたしの分だ……すまねえ」

シグナム《すまないなヴィータ。》

リインフォース《だが、少しやり過ぎだぞ》

ヴィータ「その分は謝ったんだ。いちいち言うなよ」

そんなヴィータを見たはやての表情が少しだけやわらいだ。

エクセルは再び椅子に座ってヴィータの方を見た

ヴィータ「質問だ。アルザスとお前は別人なのか…？」

エクセル「別人…とも言える。けど、あいつはもう自分自身の‘存在’を呪ってる…」

ヴィータ「返答の意味がいまいち理解できねえ」

そう言いながら、ヴィータは椅子に座った

アインハルト「では次に私が……エクセルさん。この世界に来てからあなたには救ってもらった恩が幾つかあります。その時のエクセルさんはとても優しい方でした……ですが、今のあなたから優しさが欠けています。むしろ今は殺気と不思議な気を感じさせます…… 答えてください、今のエクセルさんは……いえ、こう置き換えましょう。元々あなたは“人間”なんですか……」

アインハルトの質問は、エクセルの存在を否定するものだった。すると、はやてが立ち上がった

はやて「そやねアインハルト……まずは肝心な所を聞かなきゃならん



な……」

はやてがアインハルトの頭を優しく撫でた。

はやて「エクセルくん…私もアインハルトと同じ意見や。エクセルくん……あなたは本当に人間なんか？」

そこで今まで黙っていたフェイトが反論しようと立ち上がった。

フェイト「ちよつとはやーーー」

フェイトが言葉を言い終わる前にエクセルが質問に答えた。

エクセル「確かに、俺は人間じゃない…」

フェイト「?!?!?」

エクセル「アインハルト…その不思議な気を感じるといっのは多分俺の“存在”だ。きつと、シヨツクは大きくなるが仕方ない……そう、俺は人間じゃない…俺は時空管理局のある次元空間、そのさらに上の次元空間に住んでいた人間…いや、人間というけど、みんなからすれば数多の世界の神話と逸話…その名の如く、登場することもある超人精神体…はやく言うならば俺は、“天使”だ」

全員「ツ!!!?!?!?」

全員からは驚愕しか出て来なかった。当然でもある、天使だといきなり言われて驚かなかつたらそれこそ驚いてしまう。

なのは「天…使…?」

はやて「天使なんて…あつ、あり得へん」

フエイト「oooooooooooo」

エクセル「俺はな…人の運命を管理する場所で全てを見ていた。運命の管理者としてな」

エクセルは語った。

今まで運命の管理者ということを忘れていたことを、そして今回の全容を全て知っていたこと

エクセル「俺はこの時…特にキミたちをよく見ていた。キミたちが生きてきたこの時代を…正直うらやましかつた…笑いあつてたキミたちがooooooooooooだから俺は、キミたちの前に一度だけ姿を現した。自分の身勝手なゆえにイレギュラーな存在として」

その行為はエクセルにとって許されることではなかった。天使は決して人前には出てはならないという掟があつたからである

エクセルはただひたすら語り続けた。そこでエリオが手を上げた

エリオ「ちよつと待ってください。僕達がエクセルさんと出会つたのは一年半前ですけど、聞いた話ではエクセルさんはその前から管理局にいて、ミッド生まれの戸籍もあります。エクセルさんの発言には矛盾を感じすぎます」

ティアナ「確かにそうね。私はエクセルと何度も会つてたし…」

エクセルの発言に疑問を上げるメンバー達

エクセル「当然のことだ。俺がキミたちと初めて会ったのは、1万2000年ほど前だ。」

はやて「なっ、なんやて…!!」

なのは「どういふこと…!!?」

エクセル「……俺がキミたちと会って、元の場所へ戻ってからの話だ。そして、これが全ての始まりになってしまった」

―管理者の部屋―

エクセルは天使には不似合いの服装で戻ってきた。簡単に受け入れてくれた彼女たちが服などを選んでくれたのだ

エクセル「中々興味深い世界だったな。俺達とは大違いだ」

エクセルは真空状態の真っ黒な部屋で数え切れないほどの映像を一気に見渡した。

エクセル「今日も以上なしと……また会いに行くか。特に金髪の彼女、かなり話しやすかったからな」

エクセルはパッドを表示し、絵文字のようなボタンを押し始めた。  
だが――――

???「そこまでだ…」

空間が割れ、一人の男が無数の騎士たちを引き連れエクセルを取り  
囲んだ

エクセル「なっ…!？」

???「掟を破った者は処罰するのが規則だ。よって、死刑と処分  
する」

エクセル「待つてくれ判決の管理者!!俺は――――」

???「言い訳は無用だ…」

騎士たちがエクセルを取り押さえ、判決の管理者と呼ばれた男が持  
っていた金色の長刀を掲げた

エクセル「こんな…こんな判決が認められるかあ――――!!」

エクセルは自分を抑えていた騎士たちを渾身の力で振りほどいた。

???「なにッ…!？」

振りほどいた騎士たちが判決の管理者の前に大量に倒され大きな壁  
が出来た

エクセルはパッドを急いで叩き始めた。

エクセル「空間流失を開始、場所をランダムに設定!!」

????「貴様なにを…!?!」

すると、その部屋全体の空間が捻れ始めた。

エクセル「この空間を外に現出させてやる、お前達を道連れだ!!  
防衛システムをレベルAへ設定目標を人……」

????「貴様ツ……!!!!」

男が投げた長刀がパッドを砕き、エクセルの脇腹を裂いた。

エクセル「ぐっ……!!」

パッドが壊れ、部屋全体に危険メッセージが表示された。

エクセル「マズい……防衛システムの設定が……」

エクセルの意識が急速に失われていく。エクセルは新しいパッドを表示し、震えながら入力していく

エクセル「くそ……文字が……」

最後に実行を押し意識が途絶えた

空間が捻れ続け騎士や男を飲み込んでいく

「????」おのれー許しはせん、この怨みーーッ!!!!」

エクセル「そして…気が付けば、キミたちの世界で一緒に行動していた。」

ヴィータ「気が付けば…つーと、なんだ。記憶でも失ってたのか…？」

エクセル「違う…俺はこの体の持ち主、人間であるエクセル・アーシュライトの精神と溶け込みいつの間にか体を支配してしまったんだ」

スバル「体を…支配ってるで」

キャロ「幽霊が人に憑くみたいに自然と体に乗っ取ったってことじゃあ…」

エクセルはその通りと答えた。全員が黙り込んでしまった

フェイト「じゃあ……」

黙っていたフェイトが口を開いた。

フェイト「じゃあ…私の知ってる優しいエクセルと…天使のエクセ

ルは別人ってことに……」

エクセル「……………半分当たりだ」

なのは「ッ！！」

パンツ！！

なのはがエクセルの頬をビンタした。叩いたなのはは涙目の状態で怒っていた

エクセル「………なにも言わないでくれ。こうなった事情もある………それにこれは全員の命に関わるんだ」

なのはは何も言わず、背中を向けたフェイトを慰めた

はやて「聞かせてくれる……？」

エクセル「………それは突然起きた。

今でも嫌なくらい憶えている………さっき言った防衛システムが確認されたからだ。」

エクセル「きつと防衛システムの設定中にパッドが壊れたから、システムそのものが壊れて暴走を始めたんだ。元々システムは敵のエネルギーというエネルギーを見境なしに吸収するものが今では俺達の敵、ヴァンデビルとなってしまった。」

リインフォース《……やはりそうであったか。》

リイン「リインフォース……？」

リインフォースへずっと気になっていた。何故ヴァンデビルの行動がエネルギー…魔力を集めていたのか…最初は自分たちの力にしているのかと…思っていた…だが私は今わかった。あの城に全てがある」

エクセル「ご名答。ここでさっきの質問と一万年の時代を答えよう…まずはこの世界の成り立ちだ。一万年…いや、一万回のリープしてる世界を…これは俺の責任だ」

エクセルの語った説明は全員の想像を遥かに越えていた。一万回という世界のループ、これも想像を越えていたものだった

エクセル「リープの原因は二つある。一つは、俺という存在が歴史の歯車を狂わせ、'正当な歴史' からかけ離れてしまったこと…出会うべき者や戦うべき者と出会わない、存在しないこと。もう一つは俺が行った装置の流失から始まった。装置は、プレシア・テストロッサの手の内にあった。はやて、なのは、フェイト…半年前にプレシア・テストロッサを保護した時、場所が神殿だったのを覚えていると思う。」

はやて「うん。」

エクセル「あの神殿が運命を支配する装置があった場所だった。」

フェイト「母さんはどこでその装置の存在を知ったの…？」

フェイトがこちらを見てくる。

エクセル「それは本人に聞くのが一番だ。問題はそこじゃない、あ



の装置を動かすには特命の管理者権限が必要なんだ…例えば、このブランド・ティータだ」

俺はブランド・ティータを机の上に置いた。

エクセル「この剣は、運命の管理者が持つ剣であつて、知ってる奴はわかるだろうが人の運命をねじ曲げることも出来る。」

はやて「だからプレシアはそれを手に入れたかつたんやな……」

エクセル「後…この剣にはもう1つ、大切な役割があるんだ。」

エクセルはブランド・ティータを鞘から抜き、もう一度剣の方を机に置く。

エクセル「魂を裂く…そういう力がな」

ヴィータはブランド・ティータを持って、刀身を上から下へ見ていくと

ヴィータ「……………そう言うつてことは試したんだろ……自分で」

ブランド・ティータを置くヴィータ。

エクセル「その通り。察しがいいな」

ヴィータ「お前の言うことは大体察しがつくんだよ…バカ／＼／＼／＼」

何故か頬を赤くする。

エクセル「ヴィータの言った通り、俺は魂を半分切って別の存在に仕立てあげた。……正義の名の下に、敵を倒す神にな」

エクセルの説明に、はやてが立ち上がった。

それから説明を始めること10分。全員が驚愕することばかり言ってきた。

エクセル「神龍なんて誰がつけたかは知らないけど…ジャステイス  
エターナル、サンダーゴツデス、スターダスト、ナイトメア……俺  
が過去に君達3人の魂をほんの少しだけ斬って作った生命の塊、人  
知を越えた最強の力……なのに」

なのは「なのに……？」

エクセル「何も変わらなかった…誰一人生き残れなかった。イレギ  
ユラーの俺がついていながらな！」

もう一度、過去を振り返った。

……確かに俺たちの存在はイレギュラー

正当な歴史には存在してはならない

わかってるさ……

何度も何度も繰り返して、最後に残るのは自分だけだった。絶望し  
て、さんざん叫んだ後は自分の命も絶ってまた最初からやり直す。  
まるでゲーム機能のように繰り返してきた

エクセル「ああ…忘れてたよ。アルザスと俺はまったくの別人というわけでもなく、違った運命を背負った同じ自分なんだ。原因はわからない…だけど俺は……」

???「はぁーい、ちよつとお邪魔するわ!!」

突然、天幕の入り口から声が聞こえた。フードで顔を隠していたから顔が見えなかった

はやて「だっ、誰や!？」

???「私よ…わ・た・し!」

フードをとった。

ドゥーエ「お久しぶり〜」

それは行方知れずだった一人、ドゥーエであった

スバル「今までどこに!？」

ドゥーエ「私が来たのは1年前、その間……」

ドゥーエは持っていた荷物の中から地図を取り出した。

ドゥーエ「この国々の地図を作って情報を集めてたのね」

その地図には俺が持っていた地図より大きく、宇宙から見た大陸図のような感じだった。これを1年で完成させるのは相当のものだ

ドゥーエ「さっきの話は全部聞かせてもらってたわ…エクセル、私の質問に答えてくれるかしら」

エクセル「構わないよ」

ドゥーエ「じゃあまず私が地図から見て導き出した答えを聞いて…この世界は作り物。違うかしら……」

ドゥーエの話は外部にもれないように天幕の入り口を閉めた。

エクセル「……何でそう思う？」

ドゥーエ「誤魔化さないでほしいわね。この世界自体が作り物なの？違うの？」

エクセル「……そうだ。」

ドゥーエ「でもって…この世界の元はミッドチルダね…」

リインはハッと懐を探った。取り出したのは、スプライトにいた時に手に入れた可愛いペンダントだ

リイン「これ……」

リインはドゥーエにペンダントを渡した。ドゥーエはペンダントを眺めて、刻まれた文字を探した。

エクセル「この世界は、運命の流れを変える為に俺が作った。どうやったかは、多分説明を聞いても次元が違うから理解しようがない」

世界を作ることが出来るのは神だけだ。だが、それは完全な新世界  
天使が世界を作るには元となる世界を繋げる必要がある。だから魔  
法の真逆、魔術を基本とした鏡の世界とした。ミッドチルダの装飾  
品を似せたもの

だが、代償は大きかった。天使の力の半分以上を犠牲にして魔術の  
力を手にしてしまった。次元を越える能力も次元干渉も今では消失  
した機械でないと取り戻せない

ドゥーエ「天使であるあなたに聞きたいわ…敵のボスは何者？」

全員の視線がこちらを向いた。

エクセル「多分…いや…どう導いても、俺を捕まえようとした天使  
だろうな。いま思えば簡単なことだ」

一旦、会議は終了して各自休憩とした。全員が理解し難い内容で、  
シヨックはあっただろう  
はやてとリインは王との進軍会議に行った。

フェイトは一団から離れ、地平線を見ていた。

フェイト「私は…今までどっちを愛してきたんだろ。人間の彼か  
…天使の彼か」

フェイトは自分の胸を強く握り締めた。

フェイト「……ッ!!」

エクセル「……すまないな」

後ろから来たエクセルはフェイトの肩に手を置いた。

フェイト「謝らないで……」

エクセル「いや、謝らせてくれ。本当にすまなかった」

フェイト「……エクセル」

フェイトはこちらに振り返った。彼女は目元を赤くしながら泣いていた

エクセル「俺はこの長い年月の間、罪悪感に苦しみ続けた…キミ達と出会わなければ、こんな未来は来なかった。歴史を狂わせてしまったんだから」

フェイト「でも、私はあなたに出会えて良かったと思ってる。」

エクセル「なぜだ…?」

フェイトはそっとエクセルの胸にその身を寄せた。

フェイト「愛せる人が出来たから…きっとそれは、みんな同じ。人は色々な出会いがある…私となのはの出会い、はやてと守護騎士達の出会いも偶然じゃなくて、全部決められたものでも私は嬉しかっ

た。大切な思いが生まれて、守りたい家族たちも出来た。それに出会いすら叶わなかった人たちに出会いもした」

守りたい家族…か……

あれはいつだったかな。神に文句を言いに行つたんだっけ  
天使は神から生み出された。神とて人の形はしていた…俺は…天使の中でも上位存在、大天使でもあった…兄達を押し退けて神である父さんを殴つたっけ

本当は殴ることなんて出来ない。けど…そんなことが出来るのは家族と認められた者だけ…俺は守りたかつたんだよな、家族を………

エクセル「そういえばフェイト、これを見せたことなかったよな」

フェイト「…!？」

エクセルは服を脱ぎ始めた。いきなり脱ぎ始めるエクセルにフェイトは赤くなりながら背中を向けた。

エクセル「こつちを向いてみる」

フェイトはゆっくりこちらを向いた。

フェイト「…!？」

私はエクセルの背中を見た。白銀の翼が生えているのを、まるで隠していたかのように羽根が舞っていた。

エクセル「怖くないか…?」

フェイト「うん」

私はエクセルの翼に見惚れていた。  
綺麗だった…白銀の翼が自分の心を洗っていつてくれるように美しかった

フェイト「綺麗…／＼／＼／」

エクセル「これは俺である証だ。」

俺はフェイトを抱きしめ翼で背中を覆った

エクセル「過去、俺は何度か道を踏み外した。その代償として、この翼がある…自分が自分でいられるように」

フェイト「自分が自分でいられるように………」

フェイトは翼に手を触れた。

フェイト「柔らかいね…（笑）」

エクセル「これでも飛べるぞ。」

フェイトはクスリと笑って、顔を近づけて来た。

フェイト「エクセルはエクセルだよ。私が好きになったのは、どちらもつてことだね／＼／＼／」

エクセル「ただ記憶が戻っただけだよ」



俺はフェイトの頬に触れた。

フェイト「でも、ちょっと意地悪なエクセルが好きかも（笑）」

フェイトが言う意地悪って何だかよくわからないな

エクセル「フェイト…」

フェイト「…？」

エクセル「戦いが始まったら、きっと混戦になる。エリオやキャロたちとは離れるかもしれない…俺は終止符を打つ為にアルザスを…自分自身を殺すかもしれない…」

フェイトは俺の口に指を当てた。言葉が中断され、フェイトは真剣な顔で

フェイト「私がアルザスを倒す。」

エクセル「だけどアルザスは…」

翼を開き、フェイトは俺にまた背を向けた

フェイト「彼が言うように、もしかしたら私が彼をあんな風にしてしまったかもしれない。だから私は彼を救いたい……ううん、救わせて」

フェイトは空を見上げた。

エクセル「……フェイト」

俺はフェイトをただ見つめていた。

フェイト「だって、アルザスも私が愛した…もう一人のエクセルだから」

「????」

アルザス「やっとここまで来た……長い時をかけた因縁に終止符を打つ時が」

城の門の砦で、バイザーを付け空を見ていたアルザス。その下には魔物となった防衛システムであるヴァンデビルの兵団と雇われた無数の人間たち

アリス「やつとあの忌まわしい者達を消すときが来た！！ウズウズするねえ〜！！！」

アルザスの左隣に鎧を装着したアリスが扇子を片手に高らかに笑っていた

メルフィス「アルザス様、出陣の準備が完了しました」

騎士の甲冑を装着したメルフィスがアルザスに報告した

アリス「おやく？どうしたのだメルフィス。決戦だぞ？お前の宿敵たちを討つ時が来たのだぞ。もつと喜ばんか！」

メルフィス「宿敵を討つても浮かばれない人の気持ちもあります。」

何故か反論しないメルフィスはその場を去ろうとした。

アルザス「メルフィス、第一陣の指揮を取れ。」

メルフィスはアルザスに背を向けたまま頷いた。

アリス「ーーーーー」

城の地下牢にソラはずっと投獄されていた。

ソラ「くっ……そ……」

両腕と両足を鎖で繋がれていた。

ソラ「はやくッ……出ないと……」

すると、地下牢の階段を降りてくる音がした  
ソラが入った牢の前にメルフィスが止まった。

メルフィス「ここに入れられて三ヶ月……よく耐えるわね」

ソラはメルフィスを見た。体は既に背中まで達した髪、顔は少しだけやつれていた。

メルフィス「一つだけ聞きたいわ……あなたも……あいつと同じイレギ  
ユラーなのね」

ソラ「なん……の……こと……だ」

ソラには何のことかまったくわからなかった

メルフィス「私の記憶には狂戦士団なんて騎士団は存在していないし聞いたこともない。何度考えても調べても、結論は“存在”しない……つまりあなたは、この世に紛れ込んでそこに“存在”していると見せ掛けることができる存在。あなたは何者かしら……あの男と同じ存在？それともそれ以上かしら」

ソラ「俺は……」



## 第18話 果てしないループ（後書き）

### 次回予告

真実と戦うべき本当の理由を知ったエクセルと六課メンバー。アルザスを救うと決意したフェイト、次々に出陣する同盟連合軍は敵メセリウスの城へと進軍を開始した

一方、メルフィス率いるメセリウス軍の第一陣は堂々とエクセル達を待ち受けていた。戦場をかけるヴィヴィオとアインハルト、宿敵メルフィスを討つことが出来るのか？そして、ピンチの中ヴィヴィオの拳が唸る！！

### 次回、聖王の恐れ

友を守るため、救うために・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6860w/>

---

魔法少女リリカルなのは ANGEL'S OF DARKNESS

2011年11月29日00時00分発行